

Paul P. Harris
U.S.A.
1910 - 1912

Glenn C. Mead
U.S.A.
1912 - 1913

Russell F. Greiner
U.S.A.
1913 - 1914

Frank L. Mulholland
U.S.A.
1914 - 1915

ROTARY MOSAIC

by
Harold T. Thomas

A. Z. Baker
U.S.A.
1955 - 1956

Gian Paolo Lang
Italy
1956 - 1957

Charles G. Tennent
U.S.A.
1957 - 1958

Clifford A. Randall
U.S.A.
1958 - 1959

Harold T. Thomas
New Zealand
1959 - 1960

J. Edd McLaughlin
U.S.A.
1960 - 1961

Joseph A. Abey
U.S.A.
1961 - 1962

Nitish C. Laharry
India
1962 - 1963

Carl P. Miller
U.S.A.
1963 - 1964

Charles W. Pettengill
U.S.A.
1964 - 1965

C. P. H. Teenstra
Netherlands
1965 - 1966

Richard L. Evans
U.S.A.
1966 - 1967

Luther H. Hodges
U.S.A.
1967 - 1968

Kiyoshi Togasaki
Japan
1968 - 1969

James F. Conway
U.S.A.
1969 - 1970

William E. Walk, Jr.
U.S.A.
1970 - 1971

Ernst G. Breitholtz
Sweden
1971 - 1972

Roy D. Hickman
U.S.A.
1972 - 1973

William C. Carter
England
1973 - 1974

William R. Robbins
U.S.A.
1974 - 1975

ハロルド T. トーマス 著
松本兼二郎 訳

ロータリー・モザイク

ロータリー文庫運営委員会



著者 ハロルド T. トーマス

目次

序文	二
緒言	四
一九〇五—一九一〇年	一三
一九一〇—一九二〇年	四九
一九二〇—一九三〇年	六三
一九三〇—一九四〇年	一〇七
一九四〇—一九五〇年	一五一
一九五〇—一九六〇年	二四一
一九六〇—一九七〇年	二九三
一九七〇年代	三一七

序文

一九〇五年、四人の人が相寄ってロータリーを始めて以来、百五十を越える国々の、何千という地域社会にいる、幾千万の実業人と専門職業人とは、ロータリーの旗幟の下に、ロータリーの形態を整備し、ロータリーのために広範な、常に生成発展してやまないプログラムを確立するべく不断の協力を続けてきた。この目的のために、この人達はあらゆる種類の才能と関心を動員し、また広くあらゆる異質の文化と異質の展望を取り入れた。それによって成就された成果は一人ひとりのロータリアンが、それぞれ種々雑多な寄与貢献を捧げた結果としてでき上がっているのであるから、これを「ロータリーのモザイク」と呼ぶことは誠に当を得たものであろう。

ロータリーのモザイクのデザインは決して固定したパターンに従うものでもなければ、一つのパターンが反覆繰り返されるものでもないが、ただ一ついえることは、いかなる面から考えてもそのパターンは常に奉仕という一点に焦点が絞られているということである——人類全体の福祉増進を最終目的とする超我の奉仕に焦点が絞られているということである。

この本の緒言にも引用されているように、ロータリーの創始者ポール・ハリスは、ロータリーは一人の人間の靈感によって生まれたものでもなければ、何人かの人達の靈感によってできたものでもないと書いている。これは、ロータリーは合成物である——幾千万の献身的ロータリアンの無数の寄与付加によってでき上がったモザイク

——ということを強調する、別のいい方である。

七十年にわたるロータリーの発達と生長を通じて、ハロルド・トーマスほどこの運動に長年のかかわりを持ち、これに寄与貢献する機会を豊富に持った人は、ほとんど他に類例がない。彼は一九二三年にロータリアンとなった。自分のクラブにおいて、自分の地区において、自分の国において、そして国際ロータリーの世界的広域において、彼は一九五九—六〇年に国際ロータリー会長を勤めたことを含めてほとんどあらゆるロータリーの役職の下に活躍した。会長として彼は全ロータリアンに向かって、そのロータリー奉仕に生気を与え、これを自分自身のものとして、より友好的な世界をもたらしするために友情の架け橋を築けと示唆した。この呼びかけはロータリーのモザイク全体に計り知れない数多くの寄せ木の差し加えをもたらし、また既に始められていた多くのデザインやプログラムの拡大に寄与する結果ともなった。本書はその読者に複雑なモザイクを観察する機会を与えると共に、著者の観察眼——著者の眼識は彼がその形成に多大の貢献をした種々の設計や意匠の中によく現われているが——その著者の観察眼とその思考力を通して、このモザイクの持つ顕著な部分に鋭く焦点を合わせる機会を与えてくれるのである。そればかりではない。これらの自分自身の経験とその評価を他の人にも分ち与えることによって、ハロルド・トーマスは他の人々がそれぞれ、より友好的な世界をもたらしために友情の架け橋を築くように、彼等自身のロータリーの考え方を形成し、その実行を図るべき方途を示唆しているのである。

緒言

ロータリーの創始者ポール・ハリスは、一九三五年に出版された彼の著書『ロータリーの理想と友愛』（原書名『This Rotarian Age』）の第一章の中に次のように書いている。

「僅か三十年の短い期間にこのような進歩を遂げた運動というものは、徐々に勢力を集めた結果であつたに相違ないことは明白である。それは一人の人間、或いは何人かの人達の靈感によつたものではあり得ないのだ。」

それから四十年ばかり後になると、ロータリーについて書かれる本は、一人の人或いは何人かの人達の手によつて出来るものではないということが、さらに一層明白であるといわなければならない。それは世界中のロータリークラブの幾千万という現在および過去の会員達の集団的考え方と辛苦の努力によつて、徐々に形成された数多の資料の集積である。

これらの資料の大部分は国際ロータリーの記録保存庫の中に納められていて、どういふものがどういふ所を探せば見つかるかを心得ている数少ない幸運な人々のためにいつでも利用できるようになってゐる。また、これら資料の少なからざる部分は、私自身の記憶をも含む個人の記憶という、やや不確実な貯蔵所に貯蔵されている。

今私が企てようとしているのは、これらの豊富な資料の中から、あちらから拾いこ

ちからからき集めして、ある程度の一貫性をもって三つの話題を一つにまとめて伝え得るような材料を選び出すことである。即ち、一つはロータリー自体の進化の物語であり、一つはロータリーの方針とプログラムの進化の物語であり、残る一つはロータリアンの進化の物語である。

そして、誤解を招かないためにまず最初にしておくのは、包括的な或いは客観的なロータリーの歴史を書こうとしているのでもなければ、ロータリー特別の一面を語ろうとしているのでもないということである。そうではなくて私の書こうとしているのは、一人のロータリアンのみた、形成途上のロータリー史の若干面についてである。そしてその形成に力を貸した若干の人々についてである。

私の考えていることは、ロータリーはいかにして始まったかとかロータリーの正体は何かとか、とりわけその方針とプログラムはなぜ今のうちに決められているかということについて、もっと知りたいと思うロータリアン達に、ロータリーの概要といったようなものがもっと手近に利用できるようになっていくべきだということである。

私が五十年間もニュージーランド、オーストラランド・ロータリークラブの会員であったことは、私にとって非常なしあわせであった。この五十年の間私が時々特別有利な立場にあつてロータリーのあらゆる面における進化を観察することができたこと、そして特にロータリーの方針とプログラムの進化を観察することができたことは、それにも増して私の幸運であつた。

私の展望点は、ある時は外側から内側を観察する立場にあった。またある時は中心部にあって、クラブ、地区ないしは国際的活動等、あらゆる階層の責任ある地位から外側を観察する立場にあった。ロータリーおよびロータリアンの活動を、日毎にそれに焦点を合わせるばかりでなく、半世紀にわたってその止まるどころなき進化、発達、拡大および業績を俯瞰することは、稀有の恩典であり大変な満足であった。しかし、ここでもはつきりしておかなければならないのは、私の個人的経験と、これらの経験から学び得たことは、このロータリー・モザイクの総合デザインの中のほんの一部としてはめ込まれる断片に過ぎないということである。ロータリークラブ内部の企画の話であろうと、ロータリークラブ、地区、一国或いは一地域のロータリーの包括的歴史であろうと、はたまた国際ロータリーの全貌的歴史であろうと、すべてロータリーに関する物語は個人的努力に関する無数の物語の集積、即ち個々のロータリアンによって捧げられた奉仕の集積にほかならないのだ。

方針とプログラム、組織と手続き。これらはすべて重要である。まず第一にいやしくもロータリーが生き残るためには――栄えることはさて置き――これらのものは欠くことができない。これらのものは今日もなおロータリーの存続と安寧のために不可欠だ。そして、方針とプログラムとは魔法の杖を揮って呼び寄せられたものではない。哲学者、社会運動家、理論家、思想家、管理者等すべてが、健全な方針であり有益なプログラムだと信ずるものを作りそしてこれを堅持するために重要な役割をはた

しているのだ。しかしながら、彼等よりもっと重要であるとさえいえるのは、喜んでその分を尽くして、実際活動の分野においてこれらの方針とプログラムが正しいか間違っているかを実証する一般列伍の中のロータリアン達である。

ロータリー七十年の奉仕の物語は圧倒的に、ロータリークラブおよび個々のロータリアンのレベルにおける良き仕事と業績の物語である。方針決定者の役目は、羅針盤や海図や地図が船を航行させたためしはないということを重々承知の上で、道しるべを示し、コースを指示することである。そして、以下本書に記すところはロータリー生活におけるこの基本的事実を充分認識した上で書かれたものである。

ポール・ハリスはこうも書いている。

「この世界は常に変遷する。われわれは変遷する世界と共に変遷する用意がなければならぬ。ロータリーの物語は、幾度も幾度も書き変えられなければならないであろう。」

ゴールドデン・ジュビリー（金色祝賀）祝賀の一環として『奉仕の五十年』が出版されて以来既に十八年になる。この十八年間、ロータリーにとってもロータリアンにとっても、移り行く時の変遷に歩度を合わせることは容易なことではなかった。即ち、条件の変化に対応する必要、プログラムの発展、一部始終とその背景とを知っている古いロータリアンが次から次へと失われて行くこと、或いはそれと同じように次から次へと全世界の新しいクラブに新しい会員が入ってくる、等々の条件の下に時の移り

変りに歩調を合わせることは容易なことではない十八年間であった。創生時代の事を直接その眼で見、それについて親しく身をもって経験を積んだ人達は、もう多くは残っていない。それ故それらの物語はぜひとも語り継がなければならないのだ。

ロータリーが拡大され発展をした最近の十八年間に責任ある立場にあった者なら誰でも、ロータリーの物語が再び書きおろされなければならないことを認めるに相違ない。ロータリーの全貌を伝える全面的な歴史が書かれるべきであるかもしれない。或いは何人かの人々によっていくつかの別々の物語が書かれるべきであるかもしれない。しかしながら、少なくとも一つは、主として内部から見た方針とプログラムの進化の物語でなければならない――ばらばらの部分的物語でなくて、一貫性のある、一つにまとめられた全貌を示すものでなければならない。そして、他のいずれの事柄にも増して大切なことは、物語の目的が「なぜそう決められたか、なぜそうなったか」の理由といわれを明確にする点に置かれなければならないということである。

これが、私が本書を書かねばならぬと考えた理由であり、それを書くことと努力している理由である。本来ロータリーというものは各人にとって各様の意味を持つものである以上、私がいかに仲間のロータリアンに提供を仰いだ資料をたよりにして書いたとしても、所詮私の伝える物語は、私の知るところ、私の記憶するところ、そして私の理解するところを伝えることにならざるを得ないのである。

他の誰が書いたとしても私が書くと同じようには書かないであろう。私の書いてい

るところに全面的に同感する人は誰もないであろう。私の書いていることに共感しない人の方が正しい箇所もあるであろう。また私の方が正しい箇所もあるであろう。本来ロータリーというものはそういうものであるべきなのだ。それは正に多様性である。しかしそれは調和と一致を探し求める多様性なのだ。

そうだとすれば、以下本書に述べる所の大部分は私の声であり、私の理解するロータリーにほかならないのだ。同時にそこには、私の耳に入り私の理解した他の人々の声のこだまもまた多く含まれていよう。そしてまた時には、私の耳に入り私が理解し、さらに元をただせば私もその成り立ちに参与している、「集団」の声も含まれていることであろう。

ロータリーの道を往く旅路は常に個々の経験である。従ってそれを伝える記述は本来「単数一人称的」物語の型になるべきものである。しかしながら、読者は安心して頂きたい。著者は国際ロータリー会長を勤めた六十四人の中の一人に過ぎず、また種々雑多な立場や責任の下にかぞえきれないほどのいろいろな道で、ロータリーのために奉仕した幾千万の人々の中の一人に過ぎないことを決して忘れるはしない。著者の意図するところは、著者個人の物語を書くことと、無数の多くの他の人達の書いたもの、語った所を寄せ集めてロータリーのモザイクを組み立てることとの間に平衡点を求めようとするにある。著者はこれら数知れぬ多くの人達一人ひとりに対して、衷心から感謝を捧げる。そして、さらに本著が書かれなければならないと考え、そして今本書

の出版と頒布を目論んでいる一群の友人達に対して、特別の感謝の言葉を捧げる。

ハロルド・T・トーマス

訳者のことば

私はこの本を読む機会を与えられたことを、ロータリアンの一人として心から感謝している。そして、その機会を与えてくれた畏友東ヶ崎潔君に心から感謝しているのである。

読み始めるとすぐ私の脳裡に浮んだことは、この本をわが国のロータリアンにもぜひ読ませたいということであった。読み進むにつれて私のこの願望は、ますます押さえ切れなくなった。それほど私はこの本から深い感銘を受けたのである。

著者がその緒言の中でいっているように、この本は、一つにはロータリー自体の進化の物語であり、一つにはロータリーの方針とプログラムの進化の物語であり、そして、残る一つには、ロータリアンの進化の物語である。

この本は一面、著者の見たロータリー進化の歴史であり、一面、著者が信ずるロータリーの正体の叙述である。

私が最も心を打たれ、日本のロータリアン各位にもぜひ伝えなければならぬと思ったのは、この本の中に一貫して流れる著者の考え方である。即ち、「中枢にいます、列伍の末端にいますと問わず、すべてのロータリアンは、永遠に続くロータリー・モザイクの造成にみんな一役も二役も持っている」という考え方である。

これは、かつて国際ロータリーの会長を勤め、その前後五十余年にわたってロータ

リーの中枢にあって方針とプログラムの決定について枢要な地位を占め、多大の影響
力を持っていた人の、驚くべき謙虚な言葉である。勿論この本の中にはロータリーの
優れた指導者達の献身的奉仕についても見事に描写されている。しかしながら、それ
と同時に、ロータリーの進化と躍進はこれらの優れた指導者達の力のみによってもた
らされたものではないことが至るところに示されている。このことに触れたポール・
ハリスの言葉も、本文の中にもジョージ・ミーンズの序文の中にも引用されている。

即ち、「ロータリーは一人の人間の靈感によって生まれたものでもなければ何人かの
人達の靈感によってできたものでもない。ロータリアンすべての参加によって始めて
できたものである」というのである。われわれすべてのロータリアンは、この著者の
言葉を文字通り受けとめて、すべてのロータリアンに与えられている機会と、可能性
と、期待とをはっきり認識すべきである。そして、これを実践に移すべきである。そ
れは決して不遜でもなければ、僭越でもない。それどころか、これこそロータリーの
期待に応える唯一の道であり、ロータリーの奉仕の理想を推進すべき使命を達成する
唯一の道である。察するに、著者がこの本を著わすに至った動機的一端にも、そのよ
うな読者に対する期待があったに相違ないと私は思うのである。

この翻訳書の読者各位がここに思いを致されて一念発起されるならば訳者の本懐こ
れに過ぎるものはない。

一九〇五—一九一〇年

ロータリークラブ第一号の最初の劇的業績は、伝統的な、そして世紀の交替期においても依然として厳存していた考え方からすれば、過去においては勿論のこと将来も夢想だに及ばないと考えられていた「ビジネスと友情の間のギャップ」に橋渡しをしたことであつた。

一つの構想が適時に、適所で、
最適の人の頭に浮んだ

生命を持ち、生長をし、そして常に変遷するロータリーのような組織においては、何人も不当に過去にこだわるべきではない。ロータリーが正しく理解される時、それは一つの勢力もしくは一つの運動として認識される。或いは一つの勢力であり同時に一つの運動であるといった方がより適切であろう。運動は前進しなければならぬ。ロータリーの全プログラムは、その細目でなく総体的考え方の関する限り、今日の情勢に対処すると共に、われわれがかくなるであろうと予見する明日の情勢に対処すべく設計されている。さりながら、もしわれわれが今どのような地点に立っているか、そしてどこから出発してここに到達したかを知るならば、われわれが今後どこに向かつて進もうとしているか、そしてなぜそこへ向かつて進もうとしているかを知ることが、より容易となる筈である。

もしロータリーに対するわれわれの理解が完璧であることを望むならば、われわれはロータリーの物語を立体的に観察することができなければならない。一九〇五年米国シカゴにおけるロータリークラブ第一号の出現は、この出来事が発生した当時の環境を背景としてこれを観察し理解しなければならない。

実業人と専門職業人の間により深い友誼と親睦を培うために、新規の組織を作ろうとする提案がもし今日提起されたとしたら、それは単なるうたかたの興味をそそるに過ぎないであろう。それは、その多くがロータリーにその範をとったか或いはロータリーの影響を強く受けている現在の同種類の組織にさらに一つを加えるに過ぎないであろう。その場合と一九〇五年当時の実業界の情勢とのちがいは、黒と白のちがいはどではないとしても、濃い灰色と白との間のちがいはどの相違がある。

世紀の変り目頃のシカゴにおける実業界の情勢の冷酷さについてポール・ハリスは次のように書いている。「超我の奉仕という標語はたわごととしか考えられなかっただろう。自己保全こそ第一だという方が受け入れられたであろう」。私自身そこにいてわが眼で確かめることはできなかったが、その必要もなかった。というのは、私は一九〇五年に最初のロータリークラブがシカゴで誕生する以前、既にニュージーランドで使用人として賃金を貰って働いていた。そして、古くから口の端にいい慣らされていた「商売に情けは無用だ」とか「商売と友情は両立しない」とか「商売は商売だ」といったような諺語は昨日のことにようによく覚えている。これらの諺や、そのほかいろいろ類似の諺は常日頃人々の口の端にのびた。これらの諺は当時の一般の考え方と古くから当時まで伝えられていた伝統を示す典型的なものであった。友愛と商売の間には当然の溝が介在し、この溝は未だかつて橋渡しされたこともなければ将来も橋渡しすることはできないものだということは、当時広く一般に受け入れられた信念

であつた。

新しい考え方が、最も時宜になつた時に、最も適切な場所で、最も当を得た人によつて着想されたということは実に幸運な廻り合わせであつた。着想があつても、これを確實に把握することなく、直ちに実行に移されることがなければ、夢想の世界に消え去って行きやすいものなのだ。ポール・ハリスの考えは、その溝は橋渡しをしなければならぬし、またそれは可能だということであつた。そして彼は直ちに具体的に着手しようと決心した。彼は実業人と専門職業人との世界に友愛の結びつきを作ろうと企てた。彼は三人の親友に、もし一人ひとりの人間が友愛を築く機会をもっと多く持つことができたならば——特にその新しい友人が自分と異なつた職業の人であつたならば——人生はそれらの人達すべてにとつてより良い人生となるであろうと説いた。ポールの三人の友人は、皆これに共感を示した。この四人の人達が会員の中核体となり、かくして最初のロータリークラブは発足した。

ポール・ハリスが間違つていなかったことは直ちに明らかになつた。一見不可能と思へたことが成就された。シカゴ市において、組織された実業人と専門職業人の一団の間には、友愛と親睦と相互扶助の渾然一体となつたエッセンスともいうべきものが見られた。この新しいクラブは、四人の創始者達の最も樂觀的な期待をも越えて繁栄し膨張して行つた。

恐らくこの一団の人々は皆既に入会以前から、通常の人間は誰でも友達が必要だと

いうことと、親睦と善意と信頼との環境の下に最もよく働き、もっともよく遊び、最もよく人生を生きるものだということを知っていたのかもしれない。この人達はただ、一旦先鞭がつけられさえすればこの同じ原理は誰でも一般普通の商売に従事する普通の人間にも通用するのだということを覚らなかったに過ぎない。そしてこのような見落しもまた伝統的な溝の小さな一面に過ぎない。シカゴにおいてこの溝に架け橋をしたロータリーの驚嘆すべき成功は、他の地方における実業界に一つの模範を示した。かくして、より親しみやすい、より友好的の世界のために友愛の架け橋を築くことは爾来ロータリーにおけるわれわれの使命となったのである。

その始め

「最初のロータリー会合は典型的な事務室で催された。——それはあまり照明の良くない、机が一つ、椅子が三つ四つ、隅の方にコート掛けが一つ、それに絵が一、二枚と工作図面が一つ壁に掲げられた小さな部屋だった。」

「それは鉦山技師、ガス・ローアの事務所だった。そしてガスが一人の訪問客——ハイラム・ショーレーという裁縫師を迎え入れたばかりの時だった。ハイラムは堅型の椅子の一つに腰をおろして、ガスと話し始めた。——最初は通例の何げない話で始まったが、まもなく彼等の話は友人の弁護士が数カ月も前から始終論じていた構想の

ことに移って行った。その弁護士の名はボール・ハリスといったが、彼は一つの新しい種類のクラブの構想を持っていた。ガスとハイラムはもう二人の訪問客——石炭商のシルベスター・シールとほかでもないボール・ハリスその人——を待っていたから、今晚もまたその問題を論じ合おうというのであった。」

「やがてその二人が部屋に入ってきた。二人は、今イタリア料理店ですばらしい食事をしてきたところだと言った。彼等は一ツ二ツ面白い経験談を交わしたあと、ボールが新しいクラブの構想を発表した。彼は、もし一群の実業家達が定期的に会合してお互いに知り合うことができたなら大変よいだろうと説明した。かくして一九〇五年二月二十三日にロータリーが誕生したのであった。」

「ボール・ハリスの達者な頭脳と寂寥の心から一つの構想が生まれていた——その構想は彼をとりまく三人の人達の想像を刺戟した。最も偉大な理念——天才の片鱗——だと考えられたこの構想は、この人達に多大の刺戟を与え、この二月の一夜、既に小さな夢を胸に描かせたほどであった。とはいえ、このシカゴの、みすばらしい事務室の中で動き出したこの構想が他日世界中の人々の心を捉えようとは、この人達が夢想だにしないことだった。」

これはあらゆるロータリーの文献を通じて最もよく知られている話の一つである。この話は、多少の枝葉の相違はあっても、繰り返し繰り返し語り草となった話である。前述の話は『奉仕の冒険』と題する書物から引用したものである。

ロータリーが、はたしてこの第一回の会合で生まれたのか、それともその時にはただロータリーの構想が考えられたに過ぎなかったのか、それは各人の見るところにまかせざるはかはない。しかしながら、この人達の最初の構想のきっかけとなった実業界の挺子でも動かせない陋習については誰一人これを否む者はあり得ない。全世界を通じて、ロータリーのような運動が起らなければならない必要性には痛切なものがあつた。そして、このような運動の必要性は、特にその頃（一九〇五年頃）、その場所（シカゴ）においてとりわけ痛切に待望されるべきものであつたと思われる。

シカゴの食肉取引で行なわれていた誠に恐るべき慣行の実態を描いたアブトン・シンクレアの著書『ジャングル』が出版されたのは一九〇六年であつた。この本が出版された結果もたらされた最も顕著な結果は、食肉業界の肅正を目指して全米いたる所に発布された法令の洪水であつた。アブトン・シンクレアは、人々の心に訴えるつもりで著わした著書が、人々の胃袋に痛撃を与える結果となつたことを嘆いた。彼は最初のロータリアンの一群、即ちできたばかりのシカゴ・ロータリークラブの会員達が、彼と同じように考えてそれに対処する対策を練つていようとは知る由もなかつた。あのロータリー第一回の会合がガス・ロアーの事務所で開かれていた時、アブトン・シンクレアは彼の著書の原稿にペンを走らせていたであろうことは充分に考えられることである。

この頃のことをボール・ハリスは次のように書いている。

「アメリカにおけるフロンティア時代の無法、無秩序は、異常の現象として描かれてきた。しかしながら、実はそれは、いわば揮発性の物質を無差別に混ぜ合わせた当然の結果だったのだ。強い、そして負けじ魂の、種々雑多な人種的特質と伝統を持つ人々が、個人的利得という唯一の共通の衝動に駆られて集まる時、彼等が平穩無事に共存するなどということは思いもよらないことなのだった。」

「かくてシカゴは二十世紀の始めに至るまで、いわゆる開拓都市の特徴の多くを持ち続けていた。……シカゴに見られた諸悪は他の都市でも見られた。全般的にいつて、商業道徳は地に墜ちていた。……悪意と不信の深刻さは破壊的であるとさえいつて、いほどであった。競争相手を陥れることは、賞められたこととは考えられなかったかもしれないが、不法なこととは考えられなかった。「買手の保護は買手自身が考えればよい」という言い草には、さらに「競争相手はくたばれ」とつけ加えられて然るべしであった。……」

「ある意味ではシカゴの危機ともいえるべき時が十九世紀の終り、第一回世界博覧会に続いて起った不況時代にやってきた。」

ポール・ハリスの言葉はさらに続いて、恐るべき生存競争の死闘を詳細に描写している。

「原始時代に逆戻りしたようなこの頃、それまでは当時の実態からすれば相当立派だと考えられる水準を維持していた実業人達は、そのたしなみをかなぐり捨てて、て

んやわんやの奪い合いに仲間入りをしたのであった。……」

「全世界に喧伝されたシカゴにおける悪業の数々に対して、その反面、広く伝えられず従って知られざる多くの善業もあったのだ。犯罪と腐敗情落とシカゴの実体との関係は、あたかも川面の波立ち騒ぎと川の流れ自体との関係のようなものであった。本流は少しも妨げられることなく流れ続けているのであった。」

「ロータリーはその発祥の地シカゴを恥じる必要は毛頭ないのだ。——ロータリーのような運動が誕生するのに二十世紀の始めほど適切な時期はなかったし、また、これを育生し、これに進むべき方向を示すのに、雄々しく、精力的で、逆説的なシカゴに勝る適切な環境はなかったのだ。」

変貌（形態の変化）

ロータリーは一九〇五年二月二十三日に生まれたといわれている。しかし、私の感じでは、ロータリーの構想がその日、その場所において生まれたという方が実際にかなっていると思う。私はまた、その時実際にどんなことが話され、どんなことが行なわれたかということを知るのは、ロータリーと、ロータリーの発達およびその業績のすばらしい物語を充分に理解する上に最も肝要なことの一つだと確信している。

たしかにその胚種——最初の考え方は、ポール・ハリスと三人の友人、シルベスタ

ー・シール、ハイラム・ショレーおよびガス・ロアーが話し合った最初の会合で生を受けたのに違いない。しかし、われわれの知るロータリーというものが形を整えるまでには、胚芽の生成に相当長い期間があったのだ。

論争の点——もしそれが論争と呼ばれるべきものならば——は、一九五二年に私が実際に経験した一つの出来事によって私の頭に刻みつけられたのであった。それはカリフォルニア州、ロンドンデイル・ロータリークラブの認証状授与式の時であった。後に国際ロータリーの会長になったカール・ミラーが時の地区ガバナーとして司会していた。私は第一副会長として認証状を授与することになっていた。

私は私が好んで用いるテーマ、「最初のロータリークラブの結成をもたらしした理念」、即ち、それまでは常に職業と友誼の間に横たわっていた両者の間の溝に橋渡しをする理念、当時は到底橋渡しをすることできない越え難きものと考えられていた溝に橋渡しをするという理念、について話をしていった。私の話の基調は、原始ロータリーの基本においても、また今日の高度に組織化されたロータリーの基本においても、共に友誼が最も基本的な重要性を持つものだというにあった。

話は淡々と進んでいたかに思えた一瞬、誰かがはつきりと力をこめて「くだらない！」と叫んだ。私は話を中断していった。「この式が終ったら、今発言した人と話したい」と。カール・ミラーが協から私に教えてくれた。

「今のはハリー・ラッグルスです」。

ハリー・ラッグルスは最初のロータリークラブの最初の四人の会員に続いて、最初に入会した会員で、第五番目のロータリアンとして知られている。ポール・ハリスはハリーについて次のように書いている。「彼はビジネスの慣行に関する限り、あらゆる条件を充たして余すところがない。信頼できるし、時間は厳守するし、まっ正直だ。不正直などということは彼にとって考えも及ばないことだ。……友情に厚いこと彼の右に出る者はない。ロータリーの仲間といっしょにいる時彼の喜びは溢れこぼれるほどだ。クラブのプログラムに歌を取り入れたのは彼だった。ロータリーの友情にひたる幸福を表現するには、彼にとってこれしかなかったのだ。われらのハリーは実に稀に見る人物であった。」

典型的な「会合後」のロータリアンの集いで行なわれた討議においても、ハリーはポール・ハリスが記したような資質をすべてさらけ出した。私のスピーチの間に不意に発言したことも何ら他意なかったことがこの討議の間に明らかになった——そして私もまた彼の発言によって気を悪くするようなことを明らかにすることができた。

ハリーの論点は、一九〇五年に彼がロータリーに加わった時彼の頭にあったのは、メンバーは皆各自の、そして同時に他の各会員の、ビジネスの利益を増進することを誓っているのだということ、従って彼は他のメンバーと同様に他の会員の利益増進にとめると同時に自分自身にも財政上の利益がもたらされるということであった。口

ロータリーというものがそのような性格のものであった以上、彼はその通り口にすべきだと考えたまでであった。

私は、初期のロータリーについてのハーリーの体験による知識と経験とに対して脱帽するのによぶさかでなかったことは申すまでもない。しかしながら、私は私自身の確信を固執して譲らなかつた——ハーリーが彼の信念を固執したと同じように。私はハーリーにこう言った。「私は適当な機会だと思った時には、しばしば次のことを強調した。即ち、『ビジネスの世界に友誼の組織を作ろう』というポール・ハリスの理念は実に称賛すべきものであったとはいえ、他の多くのビジネスおよび専門職業人の組織と同様に、自分の利益というものが圧倒的な要因であった。それは啓発された利己であったかもしれないが、利己は利己である。親睦と友誼の増進という点に結びつけて考えてみても、最初のロータリークラブは所詮自己中心であった。目標は内側に向かっていった。しかし、それは長くは続かなかつた。この独特の組織の中に潜在していた他の異質の胚種が、やがて頭をもたげてきたのである。」

私は、ポール・ハリスが彼の著書『ロータリーの理想と友愛』（原書名『This Rotarian Age』）の中で、「一九〇六年の終り頃になると、ルネッサンスの響の音が聞こえ始めるようになった」と書いていることをハーリー・ラッグルスに指摘することができた。ちょっと考えると、創始されてからまだ二年目という運動に関連してルネッサンスという言葉を使うのは少しおかしいと思えるかもしれない。しかし、それは明ら

かに初期のロータリアン達が物質的相互利益を追うという理念は、それ自体充分ではあり得ないことをいち早く悟ったことを意味するに過ぎないのだ。いずれにせよ、ボールの意味する所は、文脈から考えれば充分に明らかである。ボールはクラブ会員相互の物質的利益云々という考え方が姿を消し始め、全般的のサービスという、より広範な考え方、会員以外の一般に対する思いやりと力添えの考え方がこれに取って替り始めた時代について言ったのである。そして、この理念の採用こそ、まずロータリーの存続を確保し、その後の驚異的生長と拡大を確定的にしたものであった。

ハリーと私とは、問題は強調の置きどころの問題であるということとで合意することができた。二人はまた、同席の他の人達はそれぞれその思うところに従って考え方をきめればよいということでも一致した。

私の胸中では、もし仮にロータリーがその最初のコースを辿り続けていたとしたら、ロータリーは必ずや萎えしぼみ、ロータリーをこの世にもたらした世代の人々と共に枯死したであろう、いや、恐らくそれよりもっと早く滅びたであろう、ということに疑いを持ったことはなかった。

ハリー・ラッグルスとの私の討論は幸運な経験であった。それによって私の考えは明らかにされ、確認された。いや、それだけではない。それによって、一九〇五年第一回の会合が行なわれた時にロータリーが誕生したというのは、あたかも毛虫が卵から孵った時に蝶々が生まれたというのと同じだという確信が持てるようになった。そ

して、それは蛹さなぎから蝶の成虫が出現するまでの全生育期間とその過程を無視することになるのだ。

このような出現は生誕ではない。それは変態の全過程の極点にほかならない。ロータリーについても同様である。

方針とプログラムへの試験的移行

ロータリーが打ち建てられている基本原理が不易であることは自明の理である。しかし、もしわれわれが調和を保とうとするならば、古いロータリアン達は常にロータリーの組織、その方針、そしてそのプログラムは過去半世紀以上にわたって年々変遷し続けてきたことを、常に想起しなければならない。われわれはまた、今日のロータリアンの少なくとも三分の二、恐らく七五パーセントは会員歴十年以下のロータリアンであろうということも忘れてはならない。

これらの新しいロータリアンは、ほとんどすべての場合ビジネスや専門職業の経営や管理に責任を持つことに慣れている人達であって、この人達はその職掌柄、ロータリーにおける高度に有能な円滑に機能する管理機関が、あらゆる部門でそれぞれその与えられた職分機能を立派にはたしていることを認める。

組織、方針、プログラム或いは手続きについてひっきりなしに提起される幾百千の

質問に対する回答は、どこを探せばよいかを知ってさえいけば、印刷物の中に探し出すことができる。もしもまた探し出すのに難渋するような場合は、手助けをしてくれる経験豊富な元役員がいたる所にいる。

このような態勢は、数知れぬ多くのロータリアン達の、六十余年にわたる苦心の労作の結果である。その過程は複雑であったが、常に休みとどまることなく続けられた。それは「常に進歩的であり、時には革命的」でさえあった。数多の前進があったし、若干の後退もあった。数知れぬ決定が行なわれ、これらは多くの場合確認されたが、ある時は修正され、時には取り消されることもあった。しかしながら動向は堅実に前進であった。

五十年の私のロータリー生活の大部分にわたって、私はその動きの大部分を知ることができた。しかしながら、最近の十年間と、最初の十年間、次の十年間、或いは第三番目の十年間等との間の相違がいかに大きなものであるかを私が充分に納得するためには、一つの雄弁な記述の力に俟たねばならなかった。また、最近の十年間にロータリアンとなった人達がロータリーの実態を把握することは、もしロータリーの進化の物語を聞かなかったとしたら、不可能ではないにしても、極めて困難であることを私が認識することができたのもこの記述のおかげであった。それは単にポール・ハリスと彼の最初の構想についての物語だけではなくて、その構想から生まれた実際活動のプログラムであり、さらには今日に至るまで時の推移に応じ、条件、ニード（必要）、

機会等の変化に応じて適宜変貌し続けてきたそれらのプログラムである——そしてその実証はこのどのロータリークラブにおいても見ることができるのである。

ロータリーが生まれた最初の五年間における記録は、当時討議に携わった人々が幾許も経たないうちに、人間関係という重要分野において計り知れない可能性を持つ運動に、ほとんどいやがおうでも引き込まれざるを得なかったと語ったことを明らかに伝えている。種子は肥沃な土壌の上に落ちたのだった。組織された親睦と友愛の力という単純な構想の下に集まったひと握りの人達の中から、その中の誰一人思いも及ばなかった遙かに重要なものが生まれ出て、この人々の手によって育てられようとしていたのだ。彼等にとって差し当っての問題は、ロータリーはいかなる形態を取るべきかを決定することであった。

まずはっきりしてきたことは、ロータリーを観念的に考えることなしにこれを社会的有機体或いは組織体として論議することはできないということであった。観念的意味においてロータリーを正確に定義しようとすれば、ロータリアンの意見は十人十色であるといっても恐らく誇張ではあるまいと当時考えられていた。今日ならばこの考えは、さらに強いであろう。しかし観念的意味におけるロータリーは厳として存在しているのだ、考慮に入れないわけには行かない。それは組織、或いは方針、或いはプログラムが真剣に考えられる前から既に存在していたのだ。実にそれこそがロータリーがこの世に現われた理由だったのである。

幸いにして、第一目標は知り合いを広めること、そしてそれを通じて親睦と友愛を育成することではなければならぬという点は誰にも異存がなかった。これらのことがビジネスの世界に友愛の橋をかけることを可能ならしめた要素であった。

一見不可能と思えることが達成された。これは新しい経験であり先例のないことであった。実業人と専門職業人の一群が、種々雑多な仕事の毎日の勤めから週一回の中止みをとって、新しくできた、同じ心の友人達と共に親睦を楽しみ、共に興ずるのだ。両方向通行の橋はかけられた。そして初期のロータリアン達はこの業績の持つすばらしい潜在的価値を、それ自体充分なものであると考えた。この人達こそは、「大切なことはロータリーというものが常にロータリアンに対して『実践』を鼓舞激励することを旨とする『存在』であることだ」と主張し続けた後統ロータリアン達の先駆者であった。

この見解に対抗したのは、既に新しい社会制度が出現したのだから、この新制度は社会全般の利益のために活用することができるし、また活用すべきであると考えた人達であった。サービス・クラブという考えはロータリーの基本的考え方にその源を発したものである。

初期のこの当時のことをボール・ハリスは次のように書いている。「さかんに論議が行なわれた」そして「その中から二つの相反する考え方の流派ができてきた」。その後今日に至るまでの経過を振り返ってみると、幾つかの考え方の流派ができるように

なったといった方が、より正確であるようにも思える。そういったとしても誰も不思議には思わないであろう。同列の中から選び出された基本的問題の多くは、今日でも会議、討議、討論等の目的でロータリアンが集まる時、常に必ず持ち出されるところである。

なるほど「さかんに論議が行なわれた」であろう。しかし、その結果、今日われわれが感謝しなければならない多くの建設的な業績が生まれたのだ。必要性が緊急となるにつれて、一步一步決定が行なわれた。多くの変更が、まず秩序正しくといえる順序で、次から次へと行なわれた。そして、われわれは常にそれに気がついているとは限らないけれども、同じような過程が今日でもあらゆるレベルのロータリーの管理面で行なわれているのである。ロータリーにとってもロータリアンにとっても、これは誠に当然のことと思われる。決定が行なわれるのは、ほとんどいつでも、進化の全過程の中のある特定の段階において、差し迫っている或いは緊急な特定の問題を解決するために行なわれるのが常である——即ち、今後の進歩を妨げている問題とか、或いは既に確立されているロータリーの安寧をおびやかしている問題といったようなたぐいである。

ただ、大きな相違は、今日われわれの前には、われわれが指針とすべき七十年の活動の実績の記録があるということである。初期の開拓者達は海図のない海を航海していたのだ。彼等は進むにつれて海図を作っていたのである。

初期のロータリーとして最大の出来事は、会員相互の物質的共助という最初の考え方が新しい考え方によってとって代られたことである。それはクラブの会員以外の人達に対するサービスの考え方である。この考え方によってロータリー自体の驚異的発展が可能となり、あまつさえ、それは一連のサービス・クラブが設立される誘因となり、そしてこれらのサービス・クラブは今日の世界をより豊かにして全世界に貢献することとなったのである。

この構想は原則として受け入れられた。しかし實際活動への適用ということになると、たちまち諸々の疑問が起り、先に記した「互いに考え方の相容れない幾つかの流派」の発生をみるに至った。

まず第一に、ロータリーとして何事かを、なすべきものなのか、それとも、かくかくあるべきものなのかという問題である。次に何事かを、なすべきものだとする一派は、さらに二つの流派に分かれた。この二つのグループは、サービスは個々のロータリアンによって提供すべきものか、それとも団体としての企画と活動によってロータリークラブが提供すべきであるかという、古典的な論争に身をやつした。

これら二つのグループはそれぞれ、クラブ会員の職業の中におけるサービスである

べきか、それとも地域社会全体に対するサービスであるべきかについて、さらに二つに分かれた。

既往を振り返ってみることでできるわれわれにとっては、なんだってそんなことを議論するのだということはとても易いことだ。今日から見れば、彼等は皆一面正しく一面間違っていることが明らかである。なぜ、かくかくあるべしに従うと同時に、実践してはいけないのか？ なぜ個人サービスを行なうと共に団体としてのサービスをもしてはいけないのか？ なぜ社会奉仕をすると共に職業奉仕をしてはいけないのか？

会員の多様性ということは、最初のロータリークラブの礎石の一つであった。——勿論、その多様性が、ロータリーが今日のように生長し拡大して全世界を蔽うようになった時、どれほど複雑な多様性にまで進展するかは予見する由もなかったのだが……。同様に、ロータリーについての考え方にも同じような多様性の拡大が生じようということも予知する由もなかった筈である。多様性の重要さはロータリーの拡大につれて増大した。構成人員の多様性、考え方の多様性、活動の多様性、しかしそれらはいずれも皆共通の目的に統一された中での多様性である。

比較的近年のことだが、インド人のニティッシュ・ラハリーが国際ロータリーの会長になった。彼はその東洋哲学の深い造詣から、われわれは「内なる火をもやさなければならぬ」と強調した。多くの場合他の会長達はその個人的メッセージとして

何か特別の基調を示すのが例となっていた。テキサスから出たエド・マクロフリンは「あなたはロータリーだ」という、極めて単純な考え方を示した。日本の東ヶ崎潔は「参加せよ」とロータリアンに呼びかけた。イタリアのポール・ラングは「ロータリーを単純にする」ことが大切だと言いつつ、今私がこれを書いている時、英国ロンドンのウィリアム・C・（ビル）カーターは、今こそ「行動の時」とわれわれに呼びかけている。そして私自身在职の年には、私は「友情の橋を架けよ」と全世界のロータリアンに訴えた。

これら一握りの引用からも窺えるように、ロータリアンは原則において完全に一致しながらも、それらの原則を日常活動の実際に適用しようとする時、何を強調するかについては十人十色、その変差は際限なく広がるのである。さればこそ、ロータリーの開拓者達が、いわばゼロから出発して白紙の上にロータリーの辿るべきコースを描くのに苦心したことは、誠に当然だといわなければならない。

上述のような討論が行なわれている一方、ロータリアン達は決して手をこまぬいていた訳ではなかったということも、われわれは忘れてはならない。ポール・ハリスは『ロータリーの理想と友愛』の七五頁に、この点を明らかにしている。

「弁舌だけでロータリーのルネッサンスの目的を達成することができなかったことは明らかである。それには行動が必要だったのだ。否、それすら役には立たなかったかも知れない。」

「このような情勢の下にロータリー最初の公共奉仕が提供されたのだ。それはシカゴに幾つかの共同便所を作り、さらにその必要を広く呼びかける企画であった。数多いロータリーの企ての中で、この企てほど遠謀を含んだ企てを著者は知らない。ロータリーのこの最初の企てはシカゴ市にあった他の主なる市民団体のすべてが共鳴協力するところとなり、それに加えて市と郡の自治体政府をもその援助に乗り出させる結果となった。無関心や既得権などとの闘いが二年以上も続けられた挙句、ワシントン街とラサール街との北東端に最初の共同便所が建てられた。しかし、そのこと自体よりもっと大きな意義があったのは、これが先駆となって、その後全世界各地に数知れぬ多くの、似たようなサービスがロータリアンによって提供されるようになったという事実であった。それに比べれば意義の大きさは多少劣るかもしれないが、このこと以来ロータリークラブは、シカゴ市における価値ある存在として重要な市民団体の一つに格上げされ、以後市からたよりにされるようになった。YMCAの総主事は、『シカゴ・ロータリークラブは今やその存在意義を示した』と言ったが、当時の大多数の人々の感じを代表するものといえよう。」

クラブ・サービス、即ち知り合いを広め、親睦と友愛を増進する奉仕活動は、ごく自然な、たくまずして発達したものであった。その発端は最初のロータリークラブの第一回会合の時から始まったのだ。

社会奉仕は、その最初の特定の企画が成功したのを契機として、クラブ奉仕に続い

て発足した。しかし職業奉仕の支持者もまた積極的であった。ただしこの人達の当時の活動はもっぱら口頭のそれであった。この人達は、最大の機会は社会のビジネスおよび専門職業の部門に、より高い基準と理念をもたらし必要が緊急に迫っているところにあると主張した。彼等はこのロータリーとして努力を傾倒すべき恰好の分野があるとした。会員はクラシフィケーションの基盤の上に立っているし、そのクラシフィケーションは職業に基づいている。

これは正しい議論であった——軽く退けるには余りにも正しい議論であった。記録によれば彼等は、長い間の稔り多き討議のために材料を提供したのみか、燃料までも提供したのであった。

哲学者

ロータリーの物語を、その進化の過程の中の、ある特定の段階に焦点を合わせて考えようと、或いは進化の全過程を通じて展望しようと、若干の重要な要素はおのずと明らかになるものである。会員層の多様性の結果、幸いにもロータリーはその会員中に、人間活動のあらゆる分野における真に有能な人材を豊富に持っていたのだ——理想を追い続けた哲学者もいれば、靈感を与えた改革家もいれば、或いはまたあらゆるレベルの組織を建設することに貢献した熟練管理者もいたのだ。会員の中には、また、

これらの要素の中のあるもの、或いは全部に何物かを貢献した数多くの万能家もいたのであった。

これらのことはすべて疑いもないことだが、これらの人達の中の三人は、その三人だけで上述の資質のすべてを、適切な分量、適切な釣合で身につけていた。そして、神の摂理によるとしか思えないほど偶然に、この三人は、いい時にいい所にいたのである。この三人とは、哲学者ポール・P・ハリス、革新家アーサー・フレデリック・シエルドン、および管理者チェスリー・R・ベリーである。

ポール・ハリスの記念物はロータリーそのものである。チェス・ベリーの力によってロータリーは機能を發揮することができたのだし、シエルドンが方針とプログラム
の基調を準備した。

ある時私は豪州のある地区大会に国際ロータリー会長代理として出席していた。ア
ンガス・ミッチェルが彼の好んで選ぶ「ポール・ハリス」の題目で話をするこ
とになっていた。ところがアンガスに差支えができて出席することができなくなっ
たので、地区ガバナーは私に、アンガスに代って話をするように要請した。その時の私の話の
基調は要約すると次の通りであった。

「あなた方の中には——私は多くの方がそうであって欲しいと願うのだが——アン
ガス・ミッチェルがその友人ポール・ハリスを称賛するのを聞いた方があると思う。
しかし、ポール・ハリスがアンガスを称賛するのを聞いたのは、ここにいる中で多分

私一人であろうと思う。この二人は同じ鑄型の中に鑄造された二人である。この二人は同じ精神を持っている。この二人は同じ理念を共にし、ロータリーの正しさに對して同じ信念を持っている。」

「一九四四年に私がシカゴでボールといっしょにいた時、ボールは私に、『私の生きていくうちにアンガスを国際ロータリーの会長にしたいものだと言っている』と言った。不幸にしてボールはアンガスが会長になるまで生きていなかったが、少なくともボールはその心の中で、必ずそうなるに違いないと考えていたのだ。そして、みんな知っている通り、ボールは正しかった。」

「一九四八―四九年、アンガスはRI会長として次のように書いている。

『ボールは実に偉大な人であった。キリスト教の理念に對する打ち込みと献身、友情に對する無限の愛着——認識の鋭さと未来を予知する不思議な能力——これらが彼の現在の問題に對する真正な理解と相俟って彼を偉大にしたのだ。』」

「彼は友情の必要を感じてロータリー——その基本原理は友情である——を創設した。そして彼はその生涯を彼の理念をはぐくむために捧げ、その理念は全世界に広まって、人種、皮膚の色、信仰の別なく幾百千の人々に幸福と満足とをもたらした。そしてこれらの人々をして相互に愛情を持たしめ、今まで寛容と理解のなかった所にこれらの美德を植えた。」

「ロータリーの創始者は単純な人であったが偉大なる洞察力を持った人であった。

彼は普通の、愛すべき、楽しみの好きな、だがしかしバランスのとれた有能な人なつっこい人間であった。」

「ボールの最も偉大な点は、これらのありふれた、普通の人間の資質が、人々の間に、そして異国民相互の間に、驚異的成果をもたらし得ることを見抜き、そしてこれに無上の確信を持っていたことであるかもしれない。」

さらにこれに加えて私は言った。「ボール・ハリスの伝統は滅びることはない。われわれのつとめは、ただこれを保存するだけでなく、それに生命を持たせ続けることである。活力溢れる、力強いものとして守り続けなければならない。そうする限りロータリーはとこしえに安泰であろう。」

改革者

もしシェルドンがその功績にふさわしいほどに認められなかったら、それはボール・ハリスのせいではない。ボールはその著『ロータリーの理想と友愛』の中で次のように言っている。

「アーサー・フレデリック・シェルドンはミシガン州の生まれで、ミシガン大学を卒業した後シカゴに来て、予約出版書籍の販売をする会社に職を得た。」

「シェルドンがシカゴに来たのはこれまでシカゴのゼロアワー（危機）と称せられ

ていた時期であった。ビジネス取引の乱脈状態は深く彼の胸を打った。美德が報いられないものだと思えることは珍しくなかった。またビジネスにおける成功は情け容赦もない猪突と、もし必要なら不正直さえも辞さない態度がとれるか否かにかかっているとも思えた。シュルドンは物質的利得より廉恥心を尊ぶ人だったので、彼の雇主が彼に期待していたようなセールスマンのやり方には強く反発した。ある日彼の嫌悪はついに堪え難いまでに深まり、彼はお仕着せの衣服を手近な溝に投げ込んで、雇主に辞表を送ったのであった。」

「当時は買主の危険負担の原則が消費者に適用されていた。悪意と不信が競争相手に対するビジネスの姿勢を代表していた。そして使用人の福祉などはほとんど顧みられなかった。しかしながら、それには顕著な例外もあること、および最も正しい考えを持つ、心の豊かな若干のビジネス商社が最も成功していることにシュルドンは気がついたので、それらの成功を導いた素因を研究し始めた。その研究は彼をして以前の印象を覆すに至らしめ、結局は、恒久的成功に至る確実な道はただ一つしかなく、それは即ちサービスの道であるという結論に導いたのである。」

「一部の人々がおぼろげに気がついたことをシュルドンは明白に確認したのである。即ち、成功は決して飽くなく貪欲と利己主義によってもたらされるものではなくて、それは彼にとっては引力の法則と同様に自然で、疑う余地のない自然の法則であるサービスの法則の適用によってもたらされる当然の結果だということである。彼は

ビジネスの世界における福音伝道者となったのである——ドワイト・L・ムーディーが宗教の世界でそうであったように——。事実、この二人のシカゴの住人の間には多くの共通点があった。二人とも改革者の情熱と不屈の目的に燃えたのである。二人とも不正不義に刃向かう、特徴あるシカゴの反逆の旗手であった。二人とも眠っていた反抗勢力の眼を醒まさせた。」

「シェルドンの野望は無限であり、その信念は深遠であった。彼の考えは、或いは電気の閃光の如くひらめき、或いは緩慢な進化の過程を経てまとめられた。『最もよく奉仕する者は最も多く報いられる』は、一九〇八年のある晩彼がミネアポリスの床屋の椅子の上で組んでいたその長い足をほどこいてやおら立ち上がった時に、彼の頭の中に練り上げられていたのだった。そのほかの警句は長い間かかって、幾度も幾度も練り直してでき上がったものであった。口に誦された時これらの警句は一瞬のひらめきによって着想されたもののように思えるが、そうではない——これらはいずれも頭の中で生みの苦しみを経たものである。」

「『最もよく奉仕する者は最もよく報いられる』という警句は余りにも世俗的だとして多くの批判的となったし、また、シェルドンの頭に描いていたのは果して金銭的の報いであったかそれとも精神的報いであったかについても思わくの元になった。」

「著者（ポール・ハリス）は、シェルドン自身の関する限り彼は主として精神的報いと名づけらるべきものに関心を持っていたと考えるが、しかし彼の目的とするとこ

ろは、最大多数に最大の幸福をもたらすにあった。彼は最大多数は金銭的利益に関心を持つという事実を承知していたから、金銭的利益を求める人達こそ彼が呼びかけたいと望んだ人達であったのだ。」

「彼は利益という動機をぶちこわそうとしないで、むしろ彼にとってより実際的と思えること、即ちそれを純化し、制御してそれが社会全体の利益にもなり、奉仕した人自身にも利益になるようにしようとしたのであった。もし世間一般の利得を中心とする考え方が今後変わらないとすれば、彼もまた少なくとも利得を正当なものと考える方向にその努力を修正しなければなるまいと考えた。一部の人が財政的熱意と考えるものについては、あたかも熱が火から生ずる避け難い結果であると同じように、利得というものはサービスから生ずる避け難い結果であると主張した。火が大きければ熱も強くなる、同様にサービスが大きければ利得もまた増大する、というのだ。」

「ある牧師は、ニューヨーク州ロチェスターの集会でシエルドンを紹介する時、全く好意から出た間違いはあったが、次のような誤った紹介をした。即ち、『シエルドンの信条に従うことは、勿論財政的利益はもたらさないが、正しい事をしたという自覚からくる満足感によって充分に償われるとシエルドンは考えたのだ』と言った。しかし、これはシエルドンの信条ではなかった。シエルドンはこの誤った紹介が参加者に与えたであろう悪影響を払拭するために、与えられた時間の大部分を費やさねばならなかった。」

「シェルドンはサービスのもたらす精神的利益を忘れていた訳ではない、それは強く自覚していたのだ。しかし彼の頭にあったのは、人間の現実の、そして自然の利得に対する意欲を、人類に対するサービスの能う限り最高限度の理想と調和させることが彼自身に与えられた使命だということであった。彼がしばしば行なったスピーチはシカゴ・クラブの会員達に深い感銘を与え、彼の提唱した標語、『最もよく奉仕する者は最も多く報いられる』は結局ロータリーの標語となった。』

「ロータリーの標語は、ミネアポリスのロータリアンの寄与による『超我の奉仕』という数語に表わされる、より利他的考え方と標語としての榮譽を分かつことにはなつたけれども、ロータリーの進むべき方向を示す上に計り知れない値打ちがあった。』

「一九二一年のエジンバラ大会においてそのプログラム委員会は、シェルドンを、奉仕の理想についてアメリカで理解されているところを英国のロータリアンに紹介する最適者として選んだ。この要請は直ちに受諾されたが、彼のメッセージを聞いた人達は、そのスピーチは感動を与えるものであったという。』

「英語の話される所ならどこに行ってもシェルドンの流れを汲む人達がいる。著者（ポール・ハリス）は外国におけるロータリー指導者の中に数多くのシェルドン追随者がいるのに驚いている。この人達はロータリーの責任を果たすべき立派な資格を身につけている。』

変なことをいうようだが、著者（ハロルド・トーマス）もポール・ハリスが外国で

見つけて驚いたといった中の一人である。私は彼が一九三五年にニュージーランドを訪れた時に会っている。私自身の旅行中にも私は、シェルドンを改革者、教導者として賞讃を惜しまない幾多のシェルドン追隨者に会った。これらの人達の中には、一九四六―四七年度に国際ロータリーの会長を勤めたりチャード・C・(ディック)ヘドケもいる。ディックと話しをする時、彼と私とはいつでもロータリーに対するシェルドンの枢要な寄与についてはもっと多くの人に知られる必要があるということを、異口同音に語り合うのであった。

管理者

『ロータリー――奉仕の五十年』の中に、「ロータリーの永年幹事」という標題の下に、チェスリー・R・ペリーを描与した次のようなすばらしい小篇がある。

「一九〇八年、第五番目のロータリアンとして知られたハリー・ラッグルスはシカゴ・ロータリークラブに一人の新会員候補者を紹介した――この人は公共図書館に勤めている人で、同時にシカゴの夜間学校でも教えていた、企業心のある若者であった。彼は米西戦争の時米国陸軍士官としてキューバに行っていたが、同時に当時のシカゴ・タイムス・ヘラルドの戦時通信員をも兼ねていた。その若者の名はチェスリー・R・ペリーといった。」

「チェス」——その後彼はこう呼ばれるようになったのだが——は一九一〇年にできた「ロータリークラブ全国連合会」の結成に主たる役割を果たしたので、その第一回大会で代議員達は彼を司会者を選んだ。この大会の終了に先立って彼はこの新しい連合会の幹事に選挙されたのであった。」

「三十二年間の長きにわたって彼は歴代の国際ロータリー会長の傍らにあってこれを助けた。彼の公明正大さと反対意見を解決する技量、彼の細部にまで及ぶ記憶力とロータリーの諸問題に対する洞察力とは、彼の長期にわたるロータリーへのサービスを、かくまで抜群のものにした多くの価値ある特質の中のほんの一部でしかなかった。彼は一九四二年に七十歳をもって自ら進んで勇退したのであった。」

「ロータリーの創始者ポール・ハリスは、かつてこう言ったことがある。『もし私が真に国際ロータリーの設計者と呼ばれるに値するとしたら、チェスは、それと同様に真に、国際ロータリーの建設者と呼ばれるに値する』と。これはチェスに対してポール・ハリスの呈した最高の賛辞であった。』

「チェスの長い経歴を通じて——彼は多くの榮譽をもって報いられた多くのすばらしい機会に恵まれたが、その生涯を通じて最も劇的であったのは、シアトルの大会（一九五四年）において、五十四カ国の代表達が彼に「名誉事務総長」の称号を贈呈した時であつたらう。チェスは深い感激をもってこれに応えたが、その時彼は、この榮譽を彼に与えることをきめた決議は、彼自身を「単なる会員の一人」にしておくために

撤回して欲しいと申し入れた。それはいかにも彼らしいと、彼の多くの友人達を感じしめたのであった。」

チェスとの私のつき合いは、私が一九四四年、戦時中に開催されたシカゴの大会に出席した時に始まった。私がまだホテルの部屋で旅装を解き終らない時にチェスが電話をかけてきて、夕食後その土地のロータリアンの家で行なわれることになっていた。炉辺会合に連れて行きたいと誘ってくれた——これは誠に思いやりのある、友愛溢れることであって、名もない一介の次期地区ガバナーであり、チェスにとっても、またシカゴの町に対しても全くの未知の新参者であった私として深く感銘を受けたのであった。

当時ビジネスと専門職業人の間では、ニュージーランドはどちらかというと怪しからん「社会主義国家」と考えられていたのと、もう一つは、チェスと彼の友人達がぜひ私にも討議に参加して欲しいと言いつ張ったことから、討議は以外な方向に向かったのであった。私にとっては、その時の討議は忘れることのできないものとなった。しかしこのことについては、後の章で論ずる方が今ここで取り上げるよりもより適切であると思われるのでここでは触れない。

私が国際ロータリーの会長に就任した最初の日に、チェス・ペリーはシカゴ・ロータリークラブの会長ジョージ・シスラーを伴って私を訪ねて来た。この二人が訪ねて来たのは、単に私の就任を祝し、成功を祈るばかりではなく、この二人は、シカゴ・

ロータリークラブがとうとう区域を割譲して、市内に他の新クラブを作することを年内に承諾することになりそうだということを、確信をもって期待していることを私に知らせに来たのであった。

後日この二人は、この提案が、これまでこのような提案に反対し続けていた昔ながらの頑固者達によって葬り去られたのではなくて、クラブの新しい会員達の反対によって潰えたのであったことは、彼等にとって意外であり残念至極であったと話してくれた。

チェスのロータリーに対する考え方のひたむきさを示すもっと驚くべき例がある。それは一九六〇年、彼が亡くなる少し前に当時国際ロータリーの事務総長であったジョージ・ミーンズが私といっしょにチェスを訪ねた時のことである。

チェスは、ある特別アド・ホク委員会ができて、他の種々の事柄と共に、ロータリーの綱領（目的と目標）を書き改めて、四つの奉仕部門の一つのパラグラフの中に納めるようなものにすることを考慮していることを知っていた。チェスは私共二人に、自分はその提案に賛成であると言った。そして、二人がびっくりするのも委細構わずベッドから起き上がって、彼の考えが大体において同じ方向に向かっていることを、既に書き記しておいたものを探してきた。ジョージと私にとって、当時のチェスほど重い病床にあった人が、なおロータリーを将来ももっとも有力なものに仕上げる手段方法を考えていようななどとはほとんど信じ難いことであった。

それから僅か数日の後、ジョージと私とはチェスの葬儀に列したのであった。私共二人は、その葬儀の余りにも略式であることと、ほとんど気軽とも、陽気とさえも思われる雰囲気にいささか合点がいかなかったのだが、やがて牧師の説明によってチェスはその葬儀の集まりを日常一般のロータリーの集いの様式にできるだけ近いものにして欲しいと願ったのだということがわかった。チェス・ベリーとはそういう人であった。彼はその生涯をロータリーに捧げるだけでは満足しなかった。もっと先まで行きたかったのだ。

ボール・ハリス、アーサー・フレデリック・シェルドン、およびチェス・ベリーの物語は、ロータリーの始まりとその確立の物語の全部ではない。しかしながらこの三人の人達が、各自それぞれ貢献した寄与は、正に計り知れないものであったということは、何人も疑いを入れないところである。この三人に勝る甚大な貢献をしたものは、たとい如何なる三人の組み合わせとその協力による総合的貢献を仮想したとしても、私には考えることはできない。

一九一〇—一九二〇年

最初の十六クラブがロータリークラブ全国連合会を作った。ロータリーの概念は人気を博した。

目的と方向の意識

一九〇八年に、シカゴのロータリークラブ第一号に形取ったロータリークラブがカリフォルニア州サンフランシスコに結成された。そしてこれがロータリーの増設拡大の驚くべき物語の始まりとなった。

一九〇九年には第三番目のクラブがカリフォルニア州オークランドに結成された。

——このクラブは毎週例会を開く最初のクラブであった。そしてその次には、ニューヨーク市とボストンにクラブが結成されて、ロータリーは太平洋岸から大西洋岸に伸びていくことになった。ロータリーの観念は「人気を博した」のだ。十字軍精神はビジネスの世界に広まっていったのであった。

一九一〇年には、当時既に米国内に結成されていた十六のクラブがシカゴに集まって、ロータリークラブ全国連合会を作ることを含め、これがロータリーの組織、方針およびプログラムの開発、発展の発端となった。その時ポール・ハリスは会長に推され、この大会を司会したチェス・ベリーが幹事に選ばれた。またその時最初の定款細則が採択され、シカゴに本部が設けられることになった。

特別の重要性を持つ二つの貢献が討議の中から生まれた。シアトル・ロータリークラブは、ビジネスにおける「公正な取引」と「高い水準」の重要性に関するロータリ

一の考え方を明確にする目的をもって作られた「綱領宣言」を提案した。この綱領宣言はそれと同時に、この新しい組織に向かうべき方向と目的とについて積極的の意識を与えようとしたのであった。

重要な、二番目の貢献はアーサー・フレデリック・シェルドンによってもたらされた。即ち彼が「仲間のために最もよく奉仕する者は最も多く報いられる」という警句を用いた時である。その次の年、米国オレゴン州ポートランドの大会でもシェルドンは再びこの警句を用いたが、その時は少し表現が変わっていて、「最もよく奉仕する者は最も多く報いられる」となっていた。大会の代議員達はこの標語をすばらしいと考えたので、この大会で採択した「ロータリーの綱領宣言」にはこの標語が加えられた。

その同じ大会で、ミネアポリス・ロータリークラブのフランク・コリンズは「超我の奉仕」という警句を用いた。その後数年間にこの二つの警句はロータリーの非公式標語として認められるようになった。今日の形式の標語、即ち「超我の奉仕——最もよく奉仕する者は最も多く報いられる」という形は、一九五〇年にミシガン州デトロイトの大会で正式に採用されたものである。あらゆる点から考えて、ロータリーが創始されて以来まだ六年目というのに、ロータリーの開拓者達が、ほとんど現在に近い進化過程に到達していた洞察力というものは、実に驚くべきことであったといわなければならない。

初期の記録、特に最初の十数年間の大会記録を研究してみると、なぜロータリーが生まれそして存在しているか、なぜロータリーの組織ができたのか、なぜいろいろの手續きができたのか、なぜその政策、方針ができたのか、なぜプログラムが採択されたのか、なぜいろいろの制約があるのか、等々、クラブ・レベルであると、地区レベルであると、或いは国際レベルであるとを問わず、どんな討論会でも必ず持ち出されるその他あらゆる疑問を解きたいと願うロータリアンを裨益するところ極めて大なるものがあるであらう。

これらの問題およびこれに類する課題が、大会プログラムの主体をなすものであった。全面的にロータリーを説く演説があり、或いは「ロータリー教育」と「ロータリーの哲学」についての討論や円卓討議があった。勧告を含む委員会報告があり、大会場で全員によって徹底的に討論される決議案もあった。どの演説者もどの演説も皆、ロータリーの可能性を開発することは一にかかってロータリアン達、とりわけクラブの指導層の人達のロータリーについての知識およびそのロータリーに対する理解如何にあることを強調した。

一九一〇年の第一回大会以後のロータリーの拡大には実に眼をみはらしめるものがあった。この同じ時にはカナダのウイニペグにクラブができて、ロータリーは初めて国境を越えた。一九一一年には、さらに大西洋を越えて、アイルランドのダブリンおよび英国のロンドンにクラブができた。一九一二年には組織の名称がロータリークラ

ブ国際連合(仮訳)に変更された。しかしながら、クラブ・レベルにおけるロータリーの著しい特徴であった「個人的参加」という要素を地区大会や国際大会に持ち込むことは、大会初期十数年の間はまだ望み得ないものではなかった。みんながいっしょになり、みんなが共に楽しむという雰囲気の中で知り合いを広め、親睦の友情を培うために一人ひとりが皆、身をもって参加することは現実に行なわれていた。行業においても、討議においても、はたまた結論をまとめるについても、すべての個人個人の参加があった。そして、大会参加者の心に何よりも深く刻まれていたのは恐らく、次の年度に組織の最高役職につく人々を選ぶための個人的参加であつたろう。これらの事実はすべて大会記録に印刷されて残っている。数が増えるにつれて、これらのことは所詮移り変りは避け難いことが明らかにになった——人間である以上、われわれはできることなら、古き良きものを捨て去って新しい良きものに変えるというのではなくて、「両者の共存」が望ましいと思うのだが、組織そのものにも、諸手続きにも、数量の増加によって、やがては、ある程度の変更が加えられなければならないことは、避け難いことであつた。

最近数年間の状態では、国際大会出席の常連の多くは、特に再会を楽しみにしていた友人達とただ行きずりの短い会話を交わす機会しか持てずに帰ってきた、或いは場合によっては会う機会さえ持てずに帰ってきた経験を持っている。

これは現在の国際大会の批判ではない。ただロータリー生活についての現実の一つ

を示すに過ぎない。そして、今日よりもっと打ちとけた往時の会合の模様を記録で読むと、これらの状況の変化が必然的にもたらした組織と手続きの変化に反対する多くのベテラン・ロータリアンの態度が、私にも少しは分かるように思えるのである。

ベテラン達には、まだロータリーが「若く、陽気」だった頃の「一つの大きな家族の集い」であつた頃の記憶がまざまざと残っているのだ。この人達は、このような雰囲気の中には何か異なつた、無限に尊い何かがあつたと感じているのだ。そしてこれは失つてはならないと感じているのだ。勿論彼等は決して間違つてはいない。クラブの地区の、或いは国際的の活動においてロータリーが最高の姿である時、その典型的な要素といえる個人的参加という雰囲気は、可能な限りあらゆる努力を傾倒して保存すべきである。

最初に私がそれを聞いたのがいつだったか思い出せないが、かつて私は誰かが「ロータリーは真剣に考えよ。しかしあなた自身を真剣に考えてはいけない」というのを聞いたことがある。記録を見ると、この健全な勧告の言葉は最初からロータリー仲間の間に行きわたっていたに相違ないと思われる。行楽も歓喜もふんだんにあつたが、しかしロータリーは真剣に考えられていたことは疑いを入れない。

あらゆるレベルにおける指導者達は、近いと遠いことを問わずすべて将来の方針とプログラムを策定するために参画しているのだということを自覚していた。この人達は、理想としてのロータリーと実際活動の計画を持つ組織としてのロータリーとの間に調

和点を見出だそうとしていた。

創設の当初からロータリアン達を両分していたこれらの根本問題は十分に討議された。即ち、重要なのは在り方にあるのかそれとも行動にあるのか、行動は個人によるべきかそれとも団体として行なうべきか、ロータリーは「公共問題」と取り組むべきかそれとも「市民活動」に関心を持つべきか——そしてもしそうならどの程度まで、どのようにしてか、社会奉仕と職業奉仕といずれを優先すべきかそれともどちらか一つがそれだけで充分なのか、中央組織体との関係において各クラブは完全自治を認めらるべきかそれとも部分的自治しか与えられるべきでないのか、等々の根本問題である。

互いに相譲らない意見の相違が存在していたことは想像に難くない。最近ニュージーランドでは四地区の合同大会を開いてロータリーの五十年を祝った。その時本会議の一つは全時間を挙げて「ロータリーを再検討する」という課題の下に行なわれた全員参加の討論に費やされた。討論の間にこれらの同じ問題が期せずして表面にでてきた時、極めて聡明な、真剣な、そしてはっきりしたロータリアン達の中から正反対の両様の意見がでてきた。この討論を聞いていて私は、それらの発言者のうち何人が、かつて半世紀以上も前にまだ手のつけられていない素材の中から方針とプログラムが作り上げられようとしていた時、この人達と同様に聡明な、真剣な、そしてはっきりしたロータリアン達が、この人達と同じような両様の反対意見に分かれたということ

を理解したであろうかと訝かった。われわれは実際、別な人達が、状況の変化の結果、同じことを別の言葉で言うのを聞いていたのだ。これは結果として良いことであった。いかに長い間の経験がわれわれを導いてくれようとも、これらの問題は常に活発な論争点として残るであろう。そして、また生きたロータリーはこれを忘れてはならない。

急速に膨張する運動において
静止状態からスタートした方針とプログラムの計画

前述のような考えを頭に描きながら私は、一九一六年のシンシナチ大会と一九一七年のアトランタ大会の記録を読んだ。それは前述のような「相容れない両様の考え方を持つ二つの流派」が生じ始めてからおよそ十年ばかり後のことである。私はこれらの記録を一度通読した後、その中のある若干の部分を幾度も幾度も繰り返し読んで読んだ。私はそれらと同一ような資料からこれほど得る所が多かったのは実に久しぶりのことであった。以下これらの記録から引用する幾つかの抜萃は、この段階におけるロータリーの考え方の傾向を示している。これらの抜萃の中には国際ロータリーの初代から七代目までの会長によって話され或いは書かれたところからの引用が含まれている。

ポール・ハリス（初代会長）（注：初代だけが二期勤めている）。「換言すれば、私はロータリーの基本的目的はビジネスであると考えて。公民としての、或いは慈善的活動も決して阻止すべきではない、しかし第二義的考慮を払わなければならない——それは重要性を認めないからではなく、これらの必要を充たすための特別の組織が別にあるからである。」

グレン・C・ミード（第二代会長）。「私自身の考え方は、ロータリークラブは主として個々の会員の全般にわたる啓発のためにあるので、クラブとしての公共の事柄についての活動範囲は、断然限定されるべきものだと考える」。

ラッセル・グライナー（第三代会長）。「私はロータリークラブは皆多かれ少なかれ公共の事柄に関心を持つべきだと強く主張する者だが、しかし、市民全般によって取り上げられるべきような問題については、正式に公表すべきではないと考えざるを得ない。」

フランク・マルホランド（第四代会長）。「私は、政治学の範疇に属するものを除き、ロータリーはあらゆる市民の問題に関心を持つべきだと確信する。純然たる政治問題にはロータリーは手をつけるべきではない。ロータリーの目的は各個人の中に奉仕する能力を発達させるにある。……しかし、クラブの功績に帰すべきすばらしい活動もある。……私は、この両面から奉仕に参加する機会をロータリーのために保存する必要があると思う。」

アラン・D・アルバート（第五代会長）。「本大会に提起されたあらゆる問題の中で、次の問題ほどロータリーの将来にかかわる大きな問題はないと私には思える。即ち、クラブは公民活動にクラブとして参加すべきかそれとも各個人として参加すべきかの問題である。」

アーチ・C・克蘭プ（第六代会長）。「ロータリークラブの側にも、また、余にも多くの個人ロータリアンの側にも、ロータリーとその目的、その目標、その理想について、明らかに認識不足がある。現在の管理当局はこの問題に真剣に取り組んだ結果、啓蒙運動として何らかの手段を講ずることが最も肝要だと考えた。……この問題のすべては主としてクラブ会長の手にあるのだ。国際理事会がいかに努力しようとも、クラブ会長が有益な提案を実行しないならば、すべて徒労に帰するのだ。」

チェス・ベリー、事務総長。「ロータリーの偉大なる機能は、各個人を個人として、また広く社会一般の一員として、また各個人個人がそれぞれ所属する他の特別の組織の一員として、より良き奉仕ができるように訓練するにある。」

一般ロータリアンの考え方の典型的のものの一つとして、シカゴのDonald・C・カーターは次のように言った。「なぜクラブはクラブとして行動すべきでないかについて哲学委員会がわれわれに示す理由は、それはクラブを面倒に巻き込まからだというにある。私はこの決定に承服できない。そのような面倒に巻き込まれたクラブがあったら見せてもらいたい、そうしたら私は活動的なクラブをお目かけよう。人生と

はそういうものだ。それは面倒、苦勞を意味するものだ。勿論われわれは面倒の中に飛び込むことになるが、われわれは面倒の中に飛び込まなければならないのだ。それを避けていてはこの世の中で何一つ有用なことを行なうことはできないのだ。もし公民活動における一勢力になろうとするならば、われわれはロータリークラブとして実践しなければならない。実践を伴わない弁舌だけで偉大なロータリークラブを作ることとはできない。」

これに対してアラバマ州バーミンガムのH・T・フィリップスは言った。「私はシカゴのわが友とは考えを異にする。もしロータリーが組織として永續することを欲するならば、彼はその所論を変える必要があると私は思う。ロータリーは合衆国内のどの都市においても、その欲する目的を達成することができる。しかしそのためには、その目的達成の功を甘んじて他の組織体に譲る心構えがなければならない。」

レスリー・ビジョン（第七代会長）は、次期会長として行なったスピーチの中で、私がこの全論争に対する最も輝かしい貢献だと思った発言をしたのであった。その所論の核心は次の短い抜萃の中に見ることができる。

「ロータリーの第一の目標は、各個人をその日々の仕事に適切に関連させるにある。これがロータリーとして何よりもまず遂行しなければならない義務である。最初の考え方は漫然たるサーブスではなくて、特定のサーブスであった。しかし同時に、一方においてロータリークラブはその会員をしてそれぞれの日々の仕事にサーブスの理念

を体得するように教育しなければならないと共に、他方においては組織としてのロータリークラブの力を強めるためにそれとはちがう異質のサービスが必要だということを見逃がしてはならない。

「皆さんは、キップリングが『ジャングルの方則』の中で、このことを実に美しく表現しているのをご記憶であろう。即ち、『群れの力は狼である、そして狼の力は群れである』と。」

このレスリー・ビジョンのスピーチを聴いていた人達の中には、これが、それから半世紀の後に一般に国際ロータリーの基礎と考えられるようになった事柄を予言する結果となると予知した人は、恐らく誰一人としてなかったであろう。

こうした論争に続いて次から次に採択された大会決議は、いずれも教育の必要ということがロータリー生活における現実の姿の一つであることが確認されたことを示している。このことは他の如何なる人間生活の面についても、教育の必要がすべての進歩した地域社会において確認されているのと少しも異なる所はない。往時の開拓者達は正しかった。それは申すまでもない。そして今日同じ立場をとる人達も同様に正しいのだ。ロータリアン達の間に正しいロータリーの理解を深めることの必要性は、今日でもこの運動の最も切実な必要事の一つである。

一九一〇年には米国内に十六のロータリークラブがあり一八〇〇人の会員がいた。

一九二〇年になると、全世界十五カ国に合計七百五十のクラブができ、その会員総数

は五万六千人に達した。この十年間にはまた、通例ロータリーの哲学と呼ばれるものに、ロータリー拡大に劣らない顕著な変化がもたらされた。相互裨益と「ビジネスを動機とする」最初の考え方は、「すべての有益な職業の尊さ」、「高度の道徳的基準の勸奨」、有益な思いつきや情報の交換、知り合いと親睦の増進、および各ロータリアンの公共福祉と市町村開発とに対する関心を呼び起こすことなどに関連した諸目標によって取って代られるようになった。これらの五つは、後にロータリーの五つの目標として知られるようになった活動「綱領」の五項目となったのである。一九一五年には、これらに加えて「人類同胞と一般社会のために役立ちたい」という各会員の意欲を促進する「という、第六番目の項目が「クラブ綱領」に追加された。ロータリーの基本的特徴は次第に形を整えつつあった。そしてさらにめざましい進展がやがてもたらされようとしていた。

一九二〇—一九三〇年

ロータリーは国際ロータリーとなった。既に地域的に、そして国内的に形成された類型は、より広い範囲に適応されて、より仲の良い、より隣人愛に充ちた世界を招来するために友愛の橋をかけ渡すことになったのである。

重要な分岐点。国際奉仕がプログラムに加えられた。
職業奉仕が具体化した。

一九二一年には、アメリカ合衆国以外で行なわれる最初の国際大会が、スコットランドのエジンバラで開催された。そしてロータリーの綱領の不可欠な一部として国際親善と平和目標を採択することによって、国際奉仕の基礎となる考え方が認められたのであった。当時はそうと意識されなかったことは明白であるが、この決定はロータリーの歴史における一つの重要な転機となったのであった。一九二一年のこの国際大会に参加した者は、既に樹立されていたロータリーのプログラムに新たに追加されたこの国際奉仕が、後の世代のロータリアン達によって、ロータリーの数多い努力活動の分野の中でも最も実り多きものであり、ロータリーの実際活動プログラムの中の圧倒的な要素であると認められるようになるうとは、誰一人として予測できる者はなかった。しかし、この進化の過程のすべては以下十年毎の記述が進むにつれて順次明らかになるであらう。

一九二二年のロサンゼルス大会では、エジンバラでもたらされた前進が維持され、さらに前進が続けられた。国際親善と平和の目標は正式に国際ロータリーの六大目的の中に書き加えられた。組織の名称は再び変更されて国際ロータリーと改められた。

定款と細則は徹底的に書き改められ、この大会以後結成されるクラブはすべてこの改訂新定款細則を採用することを義務づけられることとなった。この同じ年に、職業奉仕についての方針が明確にされて、ロータリーの精神の進化発展に調和するものになった。

以下記すところは公式記録から抜萃したものである。

一九一四年のヒューストン大会においても、「ロータリーは一体何を目標として進んでいるのか」について活発な討論が展開された。そして、ロータリーの原理とその目的を研究するために特別委員会が任命され、ガイ・ガンデーカーというフィラデルフィアのロータリアンがこの委員会の委員長に任命された。この多才のロータリアンは教師、弁護士および新聞記者の経歴を持っていたが、ある時突如としてチェン・レストランの経営にたずさわることになった。彼は適応性に富んだ人だったので、その頭を直ちにビジネスの経営に向けて切り換えた——そして今はそれをロータリーの問題に振り向けることになったのである。ロータリアン、ガンデーカーがこの新しい委員会の委員長を勤めている間に彼は次の各項目の改善について四つのロータリー・パンフレットを作った。(1)一人一人の会員、(2)会員自身のビジネス、(3)会員の所属する業界、そして、(4)会員の属している都市、州、国、および社会。

この四つのパンフレットは『A Talking Knowledge of Rotary』(記者注『ロータリー通解』と題して日本語にも訳されている)と題する一冊の小冊子にまとめられた。かくし

て、初めてロータリーの原理と目的を明確に記述することに手がつけられ始めたのである。この小冊子の出版はまた、ロータリーに関する文献文庫の皮切りでもあった——それらの中にはビジネス一般に対する指針となり、挑戦となった多くの理念と理想が盛られていたのである。

一九二二年に米国コロンビア地区のワシントンで全米レストラン組合の大会が開催されたが、ロータリアン、ガンデーカーは同組合の要請を受けて、同大会の審議にかけるために、組合の守るべき戒律案を起草した。レストラン組合はこの原案を受け入れて、この新たに提案された遵守基準を採択した。この遵守基準はやがて多くの他の同業組合や専門職業人の団体もこれにならった、いわば雛形となったのであった。そしてそれはさらに米国だけでなく、他の国々においても同様であった。

百以上にものぼる遵守基準が書かれた——これらの大部分は国際ロータリーが作った雛形に基づいて書かれたのであったが、その国際ロータリーが作った遵守基準はまた、多くの点で一九二二年に全米レストラン連合会が採択した最初の遵守基準に形取ったものであった。

ロータリーの作った遵守基準は英国、豪州、およびニュージーランドのいろいろの同業組合に少なからざる影響を及ぼした。例えば、英国ではロータリーの影響が比較的最近に自動車業界に関連して現われ、自動車販売業者協会が「自動車販売業者の道德律」を發布するに至ったのであった。この場合は、その遵守基準はノッチン

ガム・ロータリークラブの元会長であり創立会員であったH・A・ベネットの起草に成るものだったが、起草に当ってベネットを助けた同業界の一人は、匿名で書いた原案の序文の中で、若干諧謔的の嫌いがあるが、次のように書いている――

「戒律の考えは国際ロータリーからきている。そして、もしもこの戒律の中に、どこどころ『アメリカ的』だと感じられる節々があるとすれば、それはこの国際ロータリーの戒律が、米国のガンデーカーという人が彼の関係している業界のために考案した同様の戒律に範を取ったものであるからである。――ちなみに、このガンデーカーの作った戒律は大変彼の所属する業界を裨益するところが多かったということである。私自身としては、言い廻しをもう少し英国的にした方が良かったようにも思うが、しかし、米国的感触があるのも悪くはあるまい。」

「ビジネスの原理を説いたロータリーの文献は、考えの進んだビジネス指導者達の考え方を反映していたので、世界中のクラブはこれらの原理をそのプログラムの中に強調して、クラブの会員達がこれを彼等のビジネスと専門職業関係に適用することを促した。職業奉仕の基本的要素の輪郭を描いた書物『奉仕こそわがつとめ』は一九四八年国際ロータリーによって出版されて、全世界にわたってロータリアンの共感を呼んだ。」

道徳律を成文化しようとした考えは、同業組合の目的と機能についてのビジネスの考え方に新時代をもたらす手初めであった。ロータリーの文献は修正されて情勢の変

化に適応させられた。手続要覧は今日ではビジネスと専門職業における正しいやり方の基準に言及しているが、しかし最初の道德律は今日でも中央事務局から手に入れることができるし、私の考えでは、この道德律は今でもなおロータリー教育の面に重要な役割を果たす任務を失っていないと思う。

世界中で、どのくらいの数の道德律なり正しい商法の基準が書かれそして採択されたか、或いはまたこれらの道德律や実践基準が、最初に国際ロータリーや全米レストラン協会が採択したものにどれほど似かよっていたかについては知る由もない。私の知っているニュージールランドにおける実情から察する限り、ロータリーにおけるこの特殊の考え方の発達からの好影響が広く全世界に及んだことは、私の心中にいささかの疑いもない。このことは、その中のどの一つを取ってみてもそのこと自体ロータリーの考え方とその発達を正当づけるに足る幾つかの最も主要な貢献の一つである。

私がニュージールランドの事情を調べたところでは、「戒律」や「基準」を持っている組織の多くでは、その戒律や基準の最初の考えがロータリーにその端を発しているのだということを知っていない。もしかつてはそれを知っていたとすれば、今ではすっかり忘れてしまっているといわざるを得ない。このことも私は確信をもって断言できる。しかしながら、ロータリーの歴史の中のあの重大時期の一部始終を知っている人達なら、今日ビジネスにたずさわる、進んだ考えの人々には当然のことと考えられている高度の協力と相互扶助は、最初のロータリーの道德律の与えた好影響に

よるものだということを識別することができると言える。ガイ・ガンデーカーとその同僚達が、道徳律の策定が最も緊急な時勢の要求であると断定した頃の情勢を記憶しているわれわれにとって、道徳律が辿った全発展経路は特別の意義を持つのである。

これにたずさわった人達にとって、それはすべて順風満帆の航行であつたなどとは、夢にも考えてはならない。このような「仰々しい」理想と原理の発表は当然当時の著名な知識人達の一部からあびせられる皮肉の的となり、また、自ら「抜け目のない」或いは「頑固者」をもつて任ずるビジネス界一部の人達の嘲笑の的となつたのは当然である。ジョージ・バーナード・ショウは、その典型的な意地悪さをもつて、「ロータリーはどこへ行くのだろうか？ ロータリーは昼食を食べに行くのさ」と言つた。H・L・メンケンとクラレンス・ダローもロータリーとロータリーの仕事に対してショウに劣らずあからさまに非難の言葉をあびせていた。そして、これらの人達ほど有名でない人達の中にも少なからざる同調者がいた。

しかし、最も大きな関心と呼んだ攻撃は、一九三〇年のノーベル文学賞受賞者、米国の小説家シンクレア・ルイスによつて行なわれたものだった。一九二二年にシンクレア・ルイスは小説『バビット』を出版したが、多くの評論家はこの小説は彼の書いた小説の中で最も重要なものであるのみならず、最も優れたものであると評した。この小説の主人公バビットは当時の「いわば典型的ともいふべきロータリアン」として描かれていた——そして、そのような人物としてルイスによつてかしくなく風刺さ

れた。そして「バビット」という名前は一般の通用語となり、この小説は当時の十年間に書かれた他のどの小説よりも多くの影響を世間一般の人々の意識の上にもたらしたかもしれない」ともいわれている。「かもしれない」どころか、あらゆる言葉で書かれたものの中で、この小説ほど当時のロータリーに不快感を与えたものはなかったということとは、疑いをいれない事実である。

幸いにして、ロータリーの関する限り、このことは事柄の重要度の少ない方の半面を示すに過ぎない。明白なそして重要な事実は、ロータリーはそれに打ち勝ったということである。しかも、上述の四人の文学界の巨星達は皆後に雑誌『ザ・ロータリアン』の寄稿者になったという事実が示すように、その勝利は圧倒的であった——このことは、正にロータリーの正しさを物語るあらゆる記録の中でも最も顕著なものの一つである。率直に言ってロータリーの旧来の原理と理想に関する新しい革新的解釈に対する抵抗は避け難いことを認めなければならない。今われわれが振り返って当時を外から眺めることができる立場で考えてみると、これらの抵抗は一時の様相であったと見ることができる。即ちロータリーの進化の全過程を通じてしばしば起る「成長のひずみ」の一つなのだ。しかし、その苦痛なくしては進化を完成することはできないのである。

ガイ・ガンデーカーの名が出ると、記憶が呼び起され、甦ってくる。一九五二年に私は数百人のロータリアンとその夫人達といっしょに、シカゴからニューヨーク州レ

イクブラシッドで開催される国際協議会に向かう特別列車に乗っていた。ガイ・ガンデーカーは私を見つけ出すと私にこう言った。「あなたは本会議で『職業奉仕』について話をする事になっているそうだが、もし話の原稿が今そこにあるなら、一度拝見させて頂きたいのだが……」。

ガイは私から原稿を受け取ると、代りにかつて一九二三—二四年に彼が国際ロータリー会長であった時に同じ題目の下に行なったスピーチのコピーを私に貸してくれた。それを読んだおかげで私は、職業奉仕に関するガイの考え方は、私のスピーチで取り上げるほとんどすべての主要問題に関して、既に三十年も前に現在の私の考えよりさらに進んだ考えを持っていたという驚くべき事実を協議会の諸君の前に打ち明けることができた。これは、ロータリーにあっては、原理は少しも変ることがないという事実を示す顕著な実例である。変化が起るのはただこれらの原理を現在の情勢と時代の必要に応ずるための実際の適用面だけである。

一九二二年に採択された改正定款・細則は国際ロータリーの会員クラブの管理を国または地方的単位で行なう場合の規定を定めている。一九一三—一四年度に、戦時中の旅行と通信の困難ということもあって、グレートブリテンおよびアイルランドにある八つのクラブの間でブリティッシュ・アソシエーション・オブ・ロータリークラブスという組織を結成した。この組織は一九一四年の国際大会の決議で承認され、一九二二年の国際大会で新しい定款・細則が可決されたことによって重ねて承認された。

一九二七年のオステンド大会は国または地方的単位による管理の規定を廃棄したが、特に別段の規定を設けて、グレートブリテンおよびアイルランドの連合体の存続を認めることになり、その規定は批准された。

同時に、後に「地域管理」として知られるようになった新しい規定が設けられた。

この規定は実施の日の目を見ないで、一九四八―四九年の国際ロータリー理事会は「地域管理」は拡大すべきものではないという意見を表明した。そして、実際問題として、この意思表示によってこの制度は自然消滅の道を辿ることになった。

不幸にして、グレートブリテンおよびアイルランドのクラブが国際ロータリーとの関係において、いかに運営さるべきかについての特別規定の成文が、余りにも明確を欠いていたために、両者の間に厄介な問題がその後にも持ち越されることになった。

ロータリーが次から次に新しい地域に拡がっていくにつれて、管理の機構とその技法はより複雑となり、それにつれてこの問題の困難性も倍加された。一九五七―五八年に、グレートブリテンおよびアイルランドのクラブが国際ロータリーに対して支払う人頭分担金の支払義務という基本問題について意見の相違が持ち上がった時、この問題について明確な分岐線を画することができたのであった。われわれの期待にたがわず、ロータリーとロータリアン達は、試練に堪えることを身をもって示したのである。良識と善意と誠意は究極において勝利を収めた。定款・細則は事態を明確にするように書き改められた。

ロータリーは成年に達した。決議二三―三四はロータリーの哲学、方針、およびプログラムの性格を決定した。

ロータリーの歴史を立体的に考察してみると、一九二三年にかの有名な決議二三―三四を採択した時にロータリーは成年に達したといえそうである。

この年セントルイスの大会で、時の米国大統領ハーディングはこう言った。

「仮に私の力で世界中のあらゆる津々浦々にロータリーを広めることができるとしたら、私は躊躇なくそうするであろう。それができたら、私は世界の前進を保証するだろう。」

決議二三―三四はあらゆる意味において、すばらしい労作であった。この決議の中には「一体なぜロータリーを必要とするのか？　そして、ロータリーの基本方針とプログラムはなぜかく定められているのか？」という疑問に対する回答が含まれている。ここでも、必要はその求むる人を生んだのであった。

一九三六―三七年度の国際ロータリー会長になる運命を背負っていたウィル・R・メーニアー・ジュニアがセントルイス大会の決議委員長であった。私は、この大会に参加したロータリアン達が言うのを聞いたことがある。「大会においてこの決議に関連する諸問題についての討議が行なわれている間も、ウィル・メーニアーは昼夜を分

かたず決議二三―三四と取り組んでこれを書き上げたのだ」と。その後私はウィルをロータリーにおける私の最も近い友人の一人に数える喜びを持つに至ったのだが、その交友を通じて知り得、観察し得たところから考えて、彼はこの人達の言ったようなことのまさしくできる人であり、しかもそれをやりながら心からこれを楽しむことのできる人であったということを少しも疑わない。

決議二三―三四が書きおろされて以来、既に五十年間にわたって、全世界における実際上の経験に基づく討議・討論が行なわれた。しかしながら、原理という観点からするロータリーの説明として、この決議の第一パラグラフをより良く書き改めることは、恐らくわれわれの中誰一人としてこれをよくする者はあるまいと思う。

「第一パラグラフ——根本問題として、ロータリーは、自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に常に起る争いを和解させようとする人生の哲学である。この哲学は奉仕即ち『超我の奉仕』の哲学であり、『最もよく奉仕する者、最も多く報いられる』という実践倫理の原理に基づいている。」

また、ロータリーの進化の過程においてその必要を充たし、そして世の変遷につれて変転する必要に適應することを目的として立案された方針とプログラムの声明である第四および第五パラグラフについても、これをより良いものに書き改めることは、第一パラグラフの場合と同様に困難であろう。

「第四バラグラフ——奉仕するものは活動しなければならないのであるから、ロータリーは単なる心の持ち方のみでなく、また、ロータリーの哲学も単に主観的なものではなくて、実際のな行動に移さなければならない。」

「それ故に、ロータリークラブの団体的活動は次の条件の下に推奨されている。各ロータリークラブはなるべく毎年異なったそしてその会計年度内に完了できるように主要な社会奉仕活動を各会計年度に提唱することが望ましい。この活動は地域社会が事実必要とすることに基づくものとしクラブ全会員の集团的協力を要請すべきである。これは、そのクラブ会員が地域社会における個人的社会奉仕活動を行なうよう奨励するクラブの継続したプログラムに加えられるべきである。」

「第五バラグラフ——個々のロータリー・クラブは、クラブにとって魅力のある、またその所属地域社会にも適した社会奉仕活動を選ぶに当って、絶対的な自主権を有している。しかし、如何なるクラブも、ロータリーの綱領を不明瞭にしたり、ロータリークラブが組織されている本来の目的を危うくするような社会奉仕活動を行なってはならない。また国際ロータリーは、一般的活動を研究し、標準化し、推進し、かつそれらについて有益な示唆を与えることはできるが、特定のクラブに対し、特定の社会奉仕活動を命令したり禁止したりすることは絶対にしてはならない。」

この決議の中に盛り込まれている方針とプログラムの適用について推奨されている技法の若干を要約すれば次の通りである。

実行の必要に迫られている仕事は何か？ 地域社会の公共施設の中にその仕事を手がけることのできる施設があるか？ もしあれば、それに協力し、それに力を貸せ。重複してやってはならない。また、もしそのような施設がなかったら、まず適切な企画をもって仕事をやり始めよ。やがてそれは独自の施設出現の口火となるであろう。

セントルイス大会の真に注目すべき成果とされている決議三四を別にしても、この大会にはロータリーの方針というものが醸成されつつあるという多くの他の証拠が見られたのである。そしてロータリーは地域社会生活において健全な影響力を持つものとして次第に世に認められるようになりつつあった。地域社会にロータリークラブができると、その地域社会はロータリアンの活動のおかげで以前よりも住み良い所になるということが既にいわれていた。ハーディング大統領はセントルイス大会のスピーチでこの点を明らかにしたのであった。

この大会では三十六の制定案が議せられた。その中のあるものは採択され、あるものは修正の上採択され、あるものは撤回されたものと見做され、あるものは否決され、そして一つの案は次の大会の審議に廻された。審議された案件の代表的なものは、人頭分担金の増額、少年奉仕に関する方針、米国における遵法強化に同調する件、出獄者更生に関する件、未成年者裁判所に協力する件、および身体障害児童協会に関する方針であった。

これらの案件に関する討議が進むにつれて、提案の大部分―前掲の案件のほかにか

らに多くの提案があった―は既に世界各地のクラブが手をつけている企画に基づいて提起されたものであることが明らかにになった。他のクラブからの報告は、齒の健康保持のための診療所、年少の人達のための公共遊園地、学生貸費基金、等々の活動を伝えた。

記録によると一九二三年の大会プログラムは二つのテーマを中心として編成されていた。一つはビジネスの方法であり、他は青少年奉仕である。詩人エドガー・ゲストを含む七人の講演者は青少年奉仕の種々異なった面について講演を行なった。また、六人の講演者がビジネスの方法について述べたが、その中の一人、後に一九三一―三二年度の国際ロータリー会長になった英国ロンドンのシドニー・W・パスカルは雇主―使用人関係について優れた見解を述べた。

二つのテーマ、即ち少年奉仕とビジネスの方法とは「いろいろの国際委員会の密接な協力によってプログラムを樹立する」という決議第一号の修正案が採択されたので一つにまとめられた。次に示すのはその修正前の原案である。

「国際ロータリーは、その第十四回年次大会において、来るべき年度のプログラムを策定するに当っては、ロータリーのビジネス・メソッド・ワークとして知られるものを、模範的慣行の道德律の全面的採用と雇主―使用人関係の改善の採用をも含めて、かかるプログラムの基本要件とすべきことを決議する。」そしてさらに、

「ロータリー教育委員会は、その総合的年度プログラムの前掲両面に關して各ロー

タリアンを教育するために全精力、全努力を傾倒しなければならないことを決議する。」そしてさらに、

「少年奉仕委員会は、少年が将来ロータリーの倫理と原理をその生涯の成功の基礎と心得るビジネスマンになるようにこれを育て上げるようなプログラムのためにもっぱらその精力と努力を傾倒しなければならないことを決議する。」そしてさらに、

「一九二四年の国際ロータリー大会のプログラムは前述の輪郭に沿って設定されなければならぬこと、従って同大会は第一義的にビジネス・メソッド大会であり、それに少年奉仕を、より良きビジネスマン、より良き市民を育て上げる要素として付随せしめる大会でなければならないことをここに決議する。」

この決議は、第三節に「ビジネスマン」とあるのを「市民」の語に改めるように修正された。そして最後の節では、「より良きビジネスマン、より良き市民」とあるのを「シチズンシップ」（訳者注『「市民道」とでも訳すべきか）に改めるように修正された。

決議そのものも、またこれに関する大会の決定も、入念に検討してみる価値がある。進化過程にあるロータリーの方針がその中に明らかに顕われているからである。地方的に見ても国家的に見ても、考え方は最も広い意味での「シチズンシップ」に捧げられていた。ロータリーの考え方は上昇線を辿っていた。そして、より高い水準に昇れば昇るほど視野は広くなっていった——国際協力の可能性が感知され、さらに進

んで育成されるほどまでに。

ロータリーの進むべき道を設計する人々は脳味噌を絞り、全霊を傾けた。勿論多くの論議が交わされたが、ロータリークラブとロータリアン達からも多大の有益な奉仕が提供された。

恐らくこれらのロータリアン達の大部分は、この重要な論争が理事会によって討議されていることすら知らなかったかもしれない。しかし、それは何も驚くには当らないことである。このようなことは、ロータリーでは日常のことだと常に考えられてきた。ロータリーは経験によってそれに慣れきっているのだ。ベンジャミン・フランクリンが言ったように、結局「良くやった」ことは「良く言った」ことに勝るのだ。

ロータリーが一九二三年に成人に達した分野がほかにも一つある。国際大会が国際協調を呼びかけてから三カ月も経たないうちに日本の東京と横浜の両市が地震と火災のため荒廃に帰した。次に示すのは公式記録からの抜萃である。

「日本の大地震（九月一日）がもたらした火災が鎮火するかしないうちに、数千ドルに上る義捐金が全世界各地のクラブから東京ロータリークラブに流れ込み始めた——そして、特別救済資金を調達した国際ロータリーからも。東京ロータリーは良識をもってこれらの義捐金を分配した。入院患者達のために市内の各病院に、東京と横浜の小・中学校に、東京孤児院の構内に家を失った孤児のための二階建の「ロータリー・ホーム」を建設するために。」

ロータリーの酵母は地域社会の中で、国家の中で、そして全世界の国家群の中で、作用していたのである。

モザイクの各片を形成する人々

もし一九二三年をロータリーが成年に達した年であったといえるならば、同じ確かさをもってそれは私自身の生涯にとっても最も重要な年であったといえる。私の場合それは私が成年に達した年であったというのではなくて、それは私がニュージールランドのオークランド・ロータリークラブの会員になった年なのである。そして、この書物の目的の一部は、一人のロータリアンの進化の物語を伝えるためでもあるのだから、ここで、このロータリー・モザイクのパターンの一部として私自身の経験から若干の断片を拾って述べるのも、あながち不当なことではあるまいと思う。これは、これから先、単数一人称が多少目立って記述の中に出てくるであろうことを意味する。しかしながら、これらの断片の中でまず最初に総合パターンの中にはめ込まれるのは“われわれ”という代名詞であって、“私”ではない。

ロータリーへの加入は私にとって新しい時代への門出であった。将来われわれにとって、あらゆる影響の中に最も大きな影響を与えるべく運命づけられていた新しい影響は、“われわれ”の家庭生活を含むわれわれの生涯のあらゆる面におよぼされるこ

とになった。ロータリアンとしての私の進化の物語は、もしも妻のメイの間断なき支持とがまん強い忍耐とがなかったとしたら、第一章を終らないうちに終末を告げたことであろう。過ぎ来し方を振り返ってみる時われわれはいつも口を揃えて語り合うのである、「われわれの家庭生活と、われわれのロータリーへの参加とが、別々の仕切りの中にあるなど考えることは到底できない」と。この両者はそれぞれそれ自体の重要性を持っている。しかし両者は互いに他にとってその重要な部分なのだ。

私がロータリーに入会を許された五十年の記念日に私は非常に感謝に満ちた人間であつたと言ふことができた。しかしわれわれの結婚五十年の記念日に私はメイに対して私の感謝の深さを言い表わそうとすることができなかった。メイもまた、長年にわたって、また全世界にわたって、ロータリーが彼女にもたらしてくれた親睦と友愛に對して、彼女の感謝を表わそうとすることができなかったことを私は知っている。しかし二人は、常に相共にわれわれの大きな幸運を認め合っているのだ。

ロータリーに加わるまでに私がどんな境遇の下に私の人生初期を過したかについて、少なくとも簡単に触れておかなければならない。この時代からの持越し、いわば作りつけの持越しが今でも、ロータリーを含む私の人生のあらゆる局面に関して私が考えをまとめる上に主要な役割をつとめている。われわれは皆幼少時代、青少年時代を過ぎて次第に大きくなっていくが、若い頃の経験、否幼少の頃の経験から、完全に離れ去ることはできない。私自身の場合も、かの持越しの影響と新たなロータリーの

影響とを調和させるためには、少なからざる順応が必要であつた。それについては筆を進めるにつれて明らかにされるであらう。

私の自叙伝、『すべては一生涯のうちに』は、ニュージーランド北端の最もへんぴな一地方で、開拓家族の一員として過した男の、幼年時代、少年時代、青年時代の記述から始まる。地球儀を見ればすぐわかることだが、ニュージーランド北端の最もへんぴな一地方ということは、つまり世界中で一番へんぴな所の一つということなのだ。その物語は私の世代のニュージーランド人にはなじみ深い物語なのだ。即ち、早寝、早起き、そして朝早くから働くということのだが、このような経験は、その経験が与えてくれる教訓を学びそれを活用しさえすれば人生のその後の段階に進んでから始めて、その真価がわかってくるような貴重な土台となるものなのだ。

次に第一次世界大戦従軍の簡単な記述が続くのだが、戦争というものものばかかしさと無益なことを身をもって味わった経験が、自分の国の市民として、また世界の市民として、そしてロータリアンとしての私の考え方を形作る上で主要な要素になっているのだから、物語はこのことに触れたのである。

「フランスとベルギーの西部戦線の泥濘の中で私の実戦参加の印象は私が災難に遭ったことによって消し難いものとなった。ガス爆弾による敵の攻撃は、ガスマスクの着用が堪え難いものとなるほど長く続いたが、この攻撃中に敵の爆弾は俄作りの便所の中に落ちて、これを恐るべきガス室むちうにしてしまった。私は夜明けの薄暗がりの中

でこの便所に入ったのだった。私は担架に載せられて前線の応急手当室に運ばれたが、そこで「ブルークロス・ガス。重症」という札を付けられた。便所の中で毒ガスを腹いっぱい吸っただけ！ それでこの始末だった。一九一八年の西部戦線における戦争はこんなものだった。」

「病院と回復期療養所で数カ月を過した後、私はニュージーランドに帰還する一隊の中に入れられて帰国の途中、大西洋のまんなかで休戦になったことを知った。戦争は終わったのだ。」

「一九一九年には、私は妻と、出征した留守中に生まれた幼い息子とがあった。資産はなし、頭の中には果して私は健康と体力を完全に回復することができるかどうかに大きな懸念があった。戦争とそれをもたらすあらゆるわざわいに対する、払拭し難い嫌悪は深く私の考えの中に根を張っており、そして私は、私を取り巻く経済上の悪条件から逃れ出ようとする不屈の決意を持っていたのであった。意志は既にあったのだ。今はただそれを遂げる道を探さなければならなかった。」

「軍籍を離れるに先立って既に私は微々たる家具店の支配人の職を手に入れていた——それは後にも先にもお目にかかったことがないほどちっぽけな店であった。その店の窓に掲げてあった「もみじ家具店」という名前が恐らくこの店の全装備の中で最も大きな、そして最も印象的なものだったろう——そしてその店の諸装備は最も非印象的なものであった。店の奥にあった小さな居間には薪を焚くストーブが構築されていた

が、それは保存を要する帳簿や記録を保管するための金庫代りに使われた。市の青果市場やその周辺で仕事をしている荷馬車屋が、毎日仕事の帰り道に立ち寄って、配達する家具はないかといって御用聞きをしてくれた。」

「発展は早かった。第二年目の終りには、共同経営の契約を結んだ。やがて私は財政上の保証と自立が、確立されたとはいえないまでも、手の届く所まで近づいていることを知った。形勢が一変したことは疑いなかった。私は生まれて始めて、境遇の支配から逃れ出ようともがいている生き物の域を脱して、境遇に対してある程度の支配力を揮う喜びと楽しみを経験したのであった。」

「何ら経営の経験を持たないで白紙から出発してビジネスを築こうとするには多くの困難が伴う。しかしそれは新しい世界に生きる楽しみの一つでもある。ここは機会に満ちた世界であって、これらの機会に当然付随する責任は心から喜んで受け入れられたのである。私は自分自身の選択に歓喜した。われわれの最初の住居はまもなく樹立された。それは単に新しい世界であるばかりではなかった。それは、より良い、より幸福な世界であった。」

私のロータリー発見

一九二一年、私にとって極めて大きな発見をした。私の取引をしている知人が、シ

エルドンのビジネス科学学校の学生としてビジネスマンと専門職業人の連中の仲間入りをしたと話した。彼は私にも興味があるのではなからうかと言った。正にその通り、私は大いに興味をそそられた。今考えると、この連中の仲間入りをしたことは、疑いもなく私の人生にとって全く新しい別個の興味を持つに至った始まりであった。それ以来、私はもはやそれまでと同じ人間ではなくなったのであった。

勿論私はそれまでも、幼い頃から正直は単に道義的に正しいばかりでなく、現実の問題としても最良の方策でもあると教えられていた。しかし、最も良く奉仕する者は最も多く報いられる”というシェルドンの理論は、この言葉の持つ多種多様の含蓄と共に、当時のビジネスの世界にとって全く新しい革命的なものであった。それは新しい考え方への全く新しい見通しを展開したのであった―あたかもよろい戸を閉めた窓があげ放たれて日の光がのぞめると同じように。

続いて最も重要な新発見がもう一つもたらされた。一九二三年五月に私は、当時第二年目を迎えていたオークランド・ロータリークラブ入会の誘いを受諾した。一九二一年四月に、国際ロータリー理事会は、米国オレゴン州ポートランドのエステス・スネデコー会長の指揮の下に、オーストラリアおよびニュージーランドにロータリークラブを設立するために、カナダのロータリアン二人を派遣した。ロールストン中佐はウェリントンにクラブを作ることに成功し、ジム・デイビッドソンはオークランドにクラブを作った功労者であった。

一九二一年には、オークランドは今日よりも遙かに小さな市であった。地域社会も小さかったので、会員の大部分はロータリーに入る前からお互いによく知っていた。会員の多くはオークランドのしっかりした家庭の出であった。いっしょに学校に通い、いっしょに育った人達が少なくなかった。

私自身の場合は全くこれとは異なっていた。私はオークランドでは新参者だった。私はロータリークラブの会員の中のほんの僅かの人達とはビジネスを通して知り合っていたがしかし、概して私はこれらの人達の中では、あまりなじみのない人間だった。

会員の中に二人か三人が私のぎこちなさを解消してやろうと、いろいろな気をくばってくれたのだったが、この人達には今でも感謝している。急にふくれあがった私の友達づきあいが私にとってどんな意味を持つかを知り得たのはもっぱらこの人達のおかげであった。しかしそれはまことに徐々にであった。それは私がいくらかでも積極的に努めることをしなかったためであらう。

シェルドンの哲学がロータリーの基本であると知ったのは嬉しい驚きであった。しかし、ロータリーを通して得られた親睦と新しい友情を私は結構楽しんだとはいえ、この面におけるロータリーへの私の関心は皮相なものであったことを白状しない訳にはいかない。私は、仕事が次第に大きくなっていくのにその基礎固めはまだこれからやっていかねばならぬ……という企業における、いわば「一人楽団」であった。仕

事は当然私の持てるすべてをそれに打ち込むことを必要とした。下世話にいうように、人はどこかで食事をしなければならぬといえ、私はクラブの会合に出席するために割かれる時間が惜しくてならなかった。

第二年目が終わらないうちに、私はクラブの会員として自分の役割を果たしていないこと、そして私は単に会費を納めるだけの会員であることに満足してはならないのだということに心をきめた。幸いに私は正しい道を選んで、私を会員に推薦してくれた、全ニュージールランドのロータリー界に「ハッチ」の愛称で知られているA・J・ハッチンソンに会いに行った。私は彼に私が退会の意図を固めるに至った事の次第を話した。

ハッチは私より年嵩であつたばかりでなく、私より賢明であつた。彼は、私が必要とするのは「ロータリーをより少なく」ではなくて「ロータリーをより多く」だと私に説いた。彼は金銭を得ようとして出発して、金銭の虜となつて終つた男の愚かさについて話した。

私は、そのような危険が他の人の場合に当てはまることをよく承知していたが、私自身が、よしんば潜在的にもせよ、そのような範疇に入ろうとは夢にも思わなかつたについては十分な理由があつた。以前私の友達は、私が仕事を始めた当初においてすら、金銭のために金銭的成功を追うことは、そのこと自体が圧倒的要素になりがちなということを私に教えた。それは初步的なことだろうか？ 彼にとってはそうだっ

た。しかし五十年前の私にはそうではなかった。

ハッチは当時わがクラブの名譽幹事だった。それで、会長に具申して私を受付兼親睦委員会の委員に加えてもらうようにしよう。そうすれば自然私にはより多くの會員に、より頻繁に会う機会ができるし、それは当然私がクラブ生活に融け込むのを促進することになるだろうと言った。彼のこの勧告に従ったことは、かなり長い、そしてやがて終点に迫りつこうとしている私の生涯を通じて私が行なった決定の中で、最も影響する所の大きい、最も宿命的な、そして最も賢明な決定であつたであらう。

オークランド・ロータリークラブは、その創立會員の中に、極めて優れた人々が含まれていて、これらの人々がクラブの礎石となつていたことは誠に幸いであつた。その中の二人、ジョージ・ファウルズ（後のサー・ジョージ）とチャールズ・ローズは、まもなくロータリーにおいて生まれながらの指導者として頭角を現わしたのであつた。この二人は、何人かの友達や同僚と共に、ロータリーがその初期において克服しなければならなかつたロータリーに対する疑惑と冷笑の壁のあなたを逸早くも見透したのであつた。彼等はロータリーの如き運動の将来性を見抜いたのだった。彼等はまた、ロータリーが栄えるためには少なくともロータリアン自身がロータリーを理解することが必須であることを見抜く慧眼を持っていた。

彼等は早くもロータリー教育委員会を創設して、一方において親睦と友愛の増進を図るとともに、他方においてはより良きビジネス慣行の確立に専念した。まずこれら

二つの、ロータリー活動の基礎となるべき特質をもって出発したことは賢明であった。それは自然であり、不可避のことであった。ビジネスの世界において、新しい考え方、新しい道徳律、そして新しい目的と方向づけ——これらのことを必要とするのは何もシカゴに限ったことではなかった。それは全世界共通の問題であった。

われわれが直面した問題はシカゴにおけるほど尖鋭ではなかったのは、ただオーグランドがシカゴに比べてより小さい地域社会であったからに過ぎないというのは正しい見方かもしれない。人間社会にあってもすべて物事が巨大であると、人の心に非個人的な傾向をもたらしがちなものである。そして非個人的傾向というものは、ロータリーとは裏腹のものである。しかし、われわれの問題はシカゴほど激しくはなかったということとは、全然問題がなかったということではない。

一九七四年にニュージーランドではビジネスのあり方が、非難の余地のない立派なものであるなどということを本気でいう者はいないであろう。他のあらゆる人間生活においてもそうであるように、ビジネスの世界においても改善を要することが多々ある。しかし、今日の標準から見ると、一九二〇年代のビジネス界の雰囲気は正に非難の的となるべきものだった。今日見られるような高度の協調と相互扶助に比べれば、当時のありさまは「万事自分のため、早い者勝ち」という状態であった。

昔から言い古された「買手はだまされないように気をつけろ」とか「商売になさけ容赦はない」というような諺は依然として人の口の端にのびた。このような考えは

単に人の口の端にのぼったばかりでなく、一部の人はこれを金科玉条の指針としたとさえいえるかもしれない。

被使用者として長年を過した者として私は、雇主と使用人の関係はもっぱら主人と召使の関係であったということが出来る。そして、もし当時の私の雇主達が私を召使と考えたとすれば、彼等はまたその競争相手を当然の敵だと考えるのが常であった。勿論例外はあった。どんなことにも例外はある。しかしわれわれが関心を持つのは、どんな状態の下にビジネスが取り行なわれたかということであり、当時の状態は、全般的にいつて、ビジネスはビジネスだということに尽きる。決議二三―三四は常に私のロータリーに関する当初の記憶と密接なつながりを持っている。それは、私が始めてオークランド・ロータリークラブに入会したのがたまたまセントルイス大会と時を同じくしたことに由る。しかし、ほかにもう一つ理由がある―そしてこの理由の方が遙かに重要なのだ。

わがチャーターメンバーの中で最も傑出していた人の一人、チャールズ・ローズはこの大会に出席した。そして、彼はまだロータリーに加わってから三年目であったにもかかわらず、人々に深い印象を与えた結果、彼はこの大会で国際ロータリーの理事に選ばれてニュージランドに帰ってきた。さらに彼のロータリーの大義に対する熱意の証左は、自分のクラブのロータリー教育委員会の委員長の任を引き受けたことにも示されている。

私の入会を推薦した人は、かねがね私に、ロータリアンはロータリーのために何かせよと求められれば必ず引き受けるということが既に一つの伝統になっていると教えてくれた。しかし、思いもよらずチャールズが私に決議二三―三四のコピーを渡して、彼が特にその目的のために計画していた特別会合において解説する準備をして欲しいと要請した時、私に受諾の決心をさせたのは、ただ私がシェルドンの教えを知っていたからであり、そしてその教えの故に、なんとかしてシェルドンの示す標準になうように努めたいと思ったからにほかならない。

この出来事が私にとっていかに重要なものであったかは、五十年後の今日、今これを書いている私の目の前に、その時の会合で話をする時に私が使った、タイプライターで打った原稿が置いてあることから推察して頂けると思う。このコピーはもうかなり古びて見える。いくらか黄色く、色あせている。私自身についても同じことがいえるかもしれない。しかしあの時のきびしい試練の記憶はちがう。それは今でもまざまざと記憶に残っている。

以下記すのは、その古い原稿の中の、私がアンダーラインした部分から抜萃したものである。

「この決議はロータリーの基本理念およびその目的と目標を要約したものである。それは非常な広範囲にわたっているので、各条項を詳細に論ずることは私のよくする所ではない。それはロータリーの全分野を包含するようにもくろまれたものであって

これを作り上げた人々は誠に顕著な大仕事を成し遂げたものだとは私は考える。ロータリーというものを、僅かこれほどの短い文章で、これほど完全に表現し説明することは極めて困難であろう。」

「中央事務局は全世界に散在するいろいろのクラブから寄せられるロータリーの知恵の交換所に過ぎないと自認するのと同じように、ロータリークラブも結局ロータリーアンの集会所であり、クラブ会員の持ち寄る知恵の交換所に過ぎない。要するにロータリーの義務と責任はロータリー個人の双肩にかかっているのである。この厳たる事実から逃れることはできないのだ。私の見るところでは、これがロータリーを正しく理解するための鍵なのだ。ロータリーとは各ロータリー個人によって行なわれたロータリーの仕事の集計に過ぎない。ロータリー個人がロータリーの仕事をいかによく遂行するかによって、ロータリーは栄えるか衰えるかが分かれるのだ。」

「然らば、ロータリー個人にとって、ロータリーの標準にかなうためにはどうすればよいのか？ それはただ、われわれが皆、ロータリーに入らずと以前から教えられていたことを忠実に守りさえすればよいのだ。黄金律（*Golden Rule*）を復唱することのできないロータリーアンはほとんどあるまい。キリスト教の信仰を持たないロータリーアンでも、その宗教上の信念の中に黄金律に似かよったものがあるであろう。われわれは皆与えるは受くるより幸いなりと教えられた。ロータリーはこれらのことを教えようとするものではないが、われわれがこれらのことを実践することを促そうとするのだ。」

「結局これがロータリーなのだ―即ち実践の黄金律なのだ。このような戒律は各個人がそれぞれその日常生活において自分の置かれてゐる環境と状態に応じて、その全能力を尽くすことによってのみ適用できるのである。」

それはきびしい試練ではあったが、「ロータリーの哲学」は本来単純なものであつて、この時に使つた原稿は、今日でも同じ目的のためにいかなるレベルのいかなるロータリーの会合においても使用し得るのだということを私がその当時知つてさえいたら、その試練の厳しさは遙かに軽減されたことであらう。事実、この原稿がこのように色あせているということはこの原稿がその後私の半生にわたるロータリー生活を通じてしばしば用いられたということを証拠立ててゐるのである。

一九一九年以前の私の生涯は困惑と挫折感に終始したのであつた。ビジネスから挙がる利益が増加し続けるにつれて、挫折感は若干の個人的成功感に代つた。しかし困惑は依然として払拭することはできなかった。いずれかといえば困惑はむしろ増加したのであつた。

五十年経つた今日になってみると、なぜそうなつたかがよくわかる。革命的な考えが広まっていたのだ。そして私はその中に巻き込まれていたのだ。シェルドンは利潤の意味に新たに幅広さを与えたのだ。ロータリーはこれに深さを加え、適用の道を準備しつゝあつたのである。しかしこれらの新しい考え方の諸方向が融合して、財政的成功を含みはするが同時にこれに取つて代る新しい、今までと異なつた刺戟、目

的と方向の新しい感覚を提供することができるようにするためには、さらに多くのことが明瞭にされなければならなかった。これが当時のありさまであった。しかしロータリーの酵母は発酵し始めていたのである。

〔註〕「何事でも人々からして欲しいと望むことは人々にもその通りにせよ」マタイ伝七―一二

急激な国際的膨張は複雑多岐な問題をもたらした。

一九二〇年から一九三〇年までの十年間はロータリーにおける活発な活動と急激な膨張の時期であった。一九二〇年には十五カ国に七五〇クラブと五万六千人の会員がいた。一九三〇年になると、六十三カ国に三千三百のクラブと十五万三千人の会員にまでふくれあがった。どの点から見ても誠に驚嘆すべき発展といわざるを得ない。

このような急激な生長は当然それとともに多種多様の問題をもたらしたことは自然の成り行きであった。基本的な決定をする必要が次から次に起った。そしてその都度決定が行なわれた。理事会と国際大会で行なわれた方針とプログラムに関する記録を見れば、有形無形のロータリーの考え方は、ロータリーの数量的膨張と立派に歩調を合わせて進んでいたことがわかる。そして、歴代の理事会と力を合わせて、チェス・ペリーが組織、手続き、機構および技法のいずれにおいても間然するところなからし

めたのであった。

多くの新しい問題の中で、最も複雑な、最も頻繁に起る問題は、言葉の問題であった。同じ英語を国語とする各国のロータリアンの間においてすら、公式文書や声明文の精神の解釈について常に困難が伴ったのであったが、これらの文書や声明文が他の国語に翻訳された場合には、その困難はさらに幾層倍にも増幅されるのであった。

勿論この問題は世界的の問題であって、逃れるすべはない。どこの国でも、或いはどの人種どの民族にあっても、意味論、即ち言葉の意味に関連する問題ははてしない誤解の因となり、時には悶着やいさかいのたねとなる。このことはとりわけ哲学の分野において然りである。そして、ロータリーは、抽象的の意味では、多くのロータリアンにとって『人生の哲学』と考えられている。ある人々は、いやそれは哲学ではない、人生のあり方であるという。またある人々は、これら二つの考えの間には何らの相違はないといい、そう信じている。他国の言葉を引合いに出すまでもなく、言葉の困難は明らかである。

一九四四年のシカゴ大会の時、ということとは決議二三―三四が書かれてから二十一年目になるのだが、私はウィル・メーニアーが次のように言うのを聞いたことがある。

「このロータリー運動の発展を阻むものとして、もう一つわれわれの言葉の扱い方の問題がある。言葉の扱い方はどっち道むずかしいものなのだ。諸君の中には意味論

というものに関して何か聞いたことのある人が多いと思う。ひょっとすると、スチュアート・チェイスの『言葉の暴虐』を読んだ人もあろう。少なくともあなた方は自分の考えを表わすために言葉の選択に苦勞した経験があると思う。」

「私は、シカゴ事務所で、英語では極めて単純なロータリーの四つの目標を、英語から他の国語に翻訳し、その国語からさらにもう一つの異なった国語に翻訳し、次にもう一つ異なった国語に翻訳する……といった具合に、幾つだったか知らないが、たくさんさんの異なった国語に次から次へと順送りに翻訳し、最後に再び元の英語に翻訳するという実験を試みた話を聞いたことがある。最初の英文と最後に英語に翻訳し戻された英文とを並べて見たところ、その二つの英文は互いに全く似ても似つかない異なったものだったというのだ。」

われわれは皆日常生活において同じ悩みを経験してよく知っている。オークランド・ロータリークラブで最近起った二つの出来事はこの点をよく説明していると思う。ニュージーランド航空の代表としてわれわれのクラブ会員の一人が、旅客を輸送しこれに食事を提供する共通の条件を取りきめる目的をもって I. A. T. A. によって開催された国際会議に出席した。三日間論議を交わしたけれども代議員達は「サンドイッチ」という言葉の定義について合意に達することができなかった。

ある代議員達にとっては、それはバターを塗った二枚の薄く切ったパンの間に、同じように薄く切ったきゅうりを挟んだものを意味した。ところが他の一部の代議員達

にとっては、それは厚く切ったローストビーフを、同じように厚く切ったパンまたはトーストの上に載せて、グレイビーにひたして蒸し焼きにして出す料理を意味した。さらにまたほかの人達にとっては、サンドイッチというのは、冷肉または冷たい鶏肉を、でっかい大皿に載せて、サラダ、ピクルス、バターを塗ったパン、それに「飾りつけ」を添えたものを意味した。その他、サンドイッチの意味は、人々にとって果てしもなく種々様々の異なるものを意味したのであった。経験豊富な旅行者ならこれらのものを皆食べたことがあるだろう。いやまだほかにも、サンドイッチという名の下に異なったものをいろいろ食べた経験があるかもしれない。

もう一つの出来事というのはオークランドのすばらしい港にまつわる話である。この港は世界で最も良い港の一つだということに異論はない筈だ。それはわれわれの誇りであり、悦びである。そして誰もわれわれが間違っていると言う者はない。そんな訳だから、東京ロータリークラブの週報が、クラブ会員の一人がオークランドを訪問した時、日本の建設業者が「クリーク」を横断してかけられた橋を広げる作業をしていると聞いて興味を惹かれたと言ったことを伝えるのを読んでわれわれの感じた義憤を想像して頂きたい。ロータリアン仲間の善意と寛容をこれほど踏みにじる言い草がまたとあろうか。

またこういうこともある。英国の伝統の大きい所—その中にニュージーランドも含まれるのだが—ではソリシターというのは世間から尊敬される法律専門の職業

である。私はしばしば考えるのだが、もしこの国（ニュージーランド）の人達が米国であつちこつちの事務所や事務所の集まっているビルディングの前などに目につくように掲げてある「ソリシターズお断り」（訳者注 米国ではソリシターとは注文取りや勧誘員のこと）の貼り札を見たらなんと思うだろうか。

既に一九二七年には国際ロータリー理事会は、ロータリーの文献を公式語である英語以外の言葉に翻訳する場合に従うべき手順の公式指針を決めるのが賢明だと考えている。記録は来る年も来る年もこの問題に対する関心が続いていたことを示している。一九五七年には内容の豊富な声明が手続要覧の中に盛り込まれた。その中の最初の二節がその趣旨を示している。

「一、ロータリーの目的を正確に理解することこそ、クラブ活動の基本である。」

「二、ロータリーの目的を英語から他の言葉への翻訳はその精神を表明すべきであつて、単なる文字通りの翻訳であつてはならず、このような翻訳をするに当つては、英語で表明された目的の正確な意味のほかに原文にない意味をつけ加えたり、原文にある意味を脱落したり、その他どんな方法によつても原文の正しい意味を変えてはならない。」

言葉というものは国際関係のあらゆる面においてもいわば作りつけの問題であつて切り離すことはできない。もしも道理をわきまえた人達が、良かれかしと思ひながらもお、「サンドイッチ」、「グリーク」、或いは「ソリシター」など日常用語の意味に

ついてさえ一致することが困難だとしたら、どうしてわれわれは、ロータリーにおいてわれわれにとって最も大切な、「無形のもの」の意味を表わす言葉を見つけることができるのか。

問題はある。しかしロータリーはこれらの問題を抱えながらなんとかやっていくことを立派にやりとげたのだ。好意あるまなざし、にこやかなほほえみはしばしば口にされたり書き表わされたりした言葉より雄弁であり得るのだ。これらのものこそロータリーにおける無形の宝なのだ。

一九二七年のオステンド大会については既に記した。その同じ年に、G B I（グレートブリテンおよびアイルランド）のクラブが作り上げた「目的計画」が国際ロータリーによって採用された。この計画の目的は、ロータリーの目的のより広い、より深い理解を増進し、ロータリークラブと国際ロータリーのためにその活動の広範な計画を作り、さらに四大委員会の仕事を統轄し調整するにある。これは組織と手続きの分野における一大前進であって、組織化の行き過ぎだとする若干の批判があったにもかかわらず、一九四八年にこれが廃止されるまで充分にその目的に沿ったのであった。

ロータリーが、そのすべてのレベルにおいて、組織、技術および技法に気をとられ、その結果実際活動の面におけるロータリーの目的が疎んじられるという危険はわれわれが常に直面するところである。われわれは絶えずこれに対して警戒を緩めてはならない。ビジネスの世界においてさえ、事務組織に関して「組織のための組織」の

弊に陥ることがあり得るのは周知の事実である。この弊はさらにひいては、ビジネスの上に良い結果を生み出すことに注がるべき努力が、実はビジネスを執り行なうために使われなくて組織を運営していくために使われることになるのである。

これらの問題に対する私の態度は、一九五九年のレイクブラシッドにおける国際協会の記録の中に明示されている。以下はその時、次年度のガバナーとなるべきガバナー・ノミニーに対して私の行なったアドレスからの抜萃である。

「グループ討論のリーダー達があらゆるレベルにおけるロータリーの管理に関する技術、技法および手続きについて、その概要を余すところなく諸君に話されるはずである。これらのことは、諸君がガバナーの任務につく準備のための大切な要素である。国際ロータリーのような一否、各ロータリークラブについてすら同じことがいえるのだが――いわば多くの小枝の集積である組織体の管理運営を、技術や技法や手続きなしでやっていくことは到底不可能なのである。もしそのような機構がなくてはならないものだとすれば、最上最善のそれを持ちたい。しかし忘れてならない大切なことは、機構というものは、それ自体が目的なのではなくて、目的を達するための手段に過ぎないのだということである。然らばその目的とは何か、申すまでもなくそれはより良きロータリー、より良きロータリアンである。

そして、そのアドレスはさらに続く。

「私は常にロータリーは複雑にしてはならないと考えていた。私は技術や技法や機

構に心を奪われることを極力排除する。しかし、もしロータリーを複雑化したくないならば、技術や技法や機構も、その目的に沿うように設計されなければならない。そして時々、この目的に照らして技術や技法や機構をオーバーホールすることが必要となってくるであろう。」

以上のような私の発言には、何ら独創的なものも、異常なものも含まれていない。ただ、ロータリー初期以来、歴代の理事会と大会が示した方針を、一般的な言葉で表明したに過ぎない。私がこの際これを記したのは、この中に含まれている問題は、その後も引き続いて今日に至るまで、世界中のロータリアンの心の中に一つの疑問符として残っているからである。

さらにもう一つ、長い討論が始まった。ロータリーと政治—如何にして、そしてどこに、一線を画すべきか。

ミネアポリス大会がロータリー財団の構想について何か手を打つべきであると決意したのは一九二八年のことであった。この構想は、一九一七年に当時ロータリークラブ国際連合会長であった故アーチ・克蘭プが、人類に対してロータリーが「教育面において何か大きな奉仕」をすることができるようにするために基本財産を設定する提案をして以来、国際大会の決定処理を待っていたのであった。

一九二八年に決定された立法規定は、ただその発端に過ぎなかった。一九一七年に播かれた種は発芽したのであったが、次の十年間に見られたものは試験的生育に過ぎなかった。この構想が実を結ぶまでにはさらに十年の歳月を要した。その物語はこの稿を進めるにつれて繰り上げられるであろう。

一九二三年に決議三四号が採択されたことによって、社会奉仕の分野における長い間の論議が終った。しかし、それに劣らぬ激しい論争の時代が新たに始まった。そしてこの論争は、ロータリーが真に国際的な組織としての規模を拡大したことによって、遙かにより広い分野にわたって行なわれたのであった。

“考え方において相拮抗する分派”があったにもかかわらず、ロータリーが存続してその独自の目的を達しようとするならば、ロータリーは非政治的組織であることが不可欠であろうという理解は、既に早くから彼等の間に確立されていた。

この方針が基本的に賢明であることに異論を唱える者はほとんどなかった。しかし、何が政治的であり何が政治的でないかを判別する分岐線を見出す問題は、本質的にそうなのではないかもしれないがある程度各人の見解による問題であるということとは、大多数の人々の一致するところであった。

ロシアも中国も、そしてその他の若干のより小さい国々も、ロータリークラブを設立する問題は政治的な問題だと考えている。そして、われわれが忘れてならないことは、幾つかの国々で共産政府或いは名称は異なっても他の全体主義政府が政権をとつ

た時は、ロータリークラブはたちどころに解散させられたという事実である。

しかし、それよりもわれわれがもっと関心を持っているのは、道理をわきまえたロータリアンはすべてそうでなければならぬのだがロータリーが栄えている、道理をわきまえた国々のクラブ会員達が、何が政治的であり何が政治的でないかを判別するのに迷うことがあるという事実である。

一九二九年に国際ロータリー理事会は、これについて明確な決定をする必要を認めた。国際ロータリーに対して米国の関税法を改正する件に関して合衆国議会に働きかける手を打ってもらいたいという懇請が、いろいろの方面から国際ロータリーに寄せられた。次に掲げるのは、それに関する理事会声明の抜萃である。

「国際ロータリーの国際関係が絶えず拡大されていくにつれて、多くの経済的な問題が起ってくるが、これらの問題は、利害を同じくする国々の国民であるかそれとも利害相反する国々の国民であるかによって、ロータリアンに与える影響は異なってくる。国際ロータリーは国家間の紛争や政治的紛争の種になっている事柄については一切干渉しない。」

クラブ定款第九条は長い間、「公共問題」という標題の下に次のように規定されていた。

「第一節―地域社会の全般的福祉は本クラブ会員にとっての関心事である。従ってこのような福祉に関連する公共問題は、クラブの各会員がその個人的意見をまとめる

上の啓発手段としてクラブの会合で、公正に、理論的に研究し、論議するがよい。しかしながら、本クラブは係争中の公共問題については一切意見を表明してはならない。」
「第二節―本クラブは公職に対する立候補者を応援したり推薦したりしてはならない。またクラブの会合においてこれらの立候補者の長所や短所を論議してはならない。」

定款細則の中で、あらゆるレベルの責任の地位にあるロータリアンが、この条文ほど熟知している条文はほかにはないであろう。概していえば、この条文はよくその目的を達したといえる。しかし、この問題が執拗に表面に顕われ続けたことは、極めて最近、一九七〇年のアトランタ大会において、この条文を修正する制定案が採用されたことを見ても明らかである。

標準クラブ定款第九条は、国際奉仕に関する国際ロータリーの確定方針と調和するように修正されたのである。元の条文の言葉づかいは依然としてそのまま残っている。しかし、標題が「公共問題」から「地域社会、国家および国際問題」に変更されたその標題の精神を反映するように条文が拡大されたのである。

ロータリーの考え方と方針の進化を、これほどよく示すものがほかにあるのか？

「公共問題」という、教区のほか者を思い出させるような低音から「地域社会、国家および国際問題」という、一つの世界の人類同胞という調子の高いものへの転移。しかし、一九二〇年代のロータリアン達が抛りどころとして邁進していた基礎が健全で

あったからこそ、それから五十年後にわれわれがその上部構造にさらにつけ加えることができるのだということを忘れてはならない。

ロータリーの方針のこの困難な段階における転換期は一九四〇年度中にきた。しかしそれはまたそれ自体が別の物語である。このことは後の章で取り上げる。

一九三〇—一九四〇年

逆境のるつぼの中でロータリーは成熟した。枢軸諸国によって支配された国々におけるクラブは解散を命ぜられた。

国内に対しても、国際関係においても、或いはロータリーのように国家的、国際的の義務を持っている組織にとっても、さらにはまた日常の業務と家庭生活に励む数千万の人間にとっても、一九三〇年から一九四〇年までの十年間は緊迫と心労の時であり、心の探索と魂の探索を要した時であり、根本的決定をしなければならない時でもあった。

全世界にわたって経済界、社会全般、そして政界の状態に痛烈な影響を与えた大不況の物語は、繰り返し繰り返し、いやになるほど聞かされているので今改めてここに繰り返す必要はあるまい。しかし、もしもロータリーの方針とプログラムの進化の物語を、私の理解するところに従って述べようとするならば、特にこれと関連のある若干の事柄の詳述を省く訳にはいかない。それはまさしくロータリーとロータリアンにとって重大な時であった。ロータリーに内在する潜在威力が多くの人々の前に明らかにされたのはこの緊迫と心労、この心の探索と魂の探索のお陰であった。私もまたそのお陰を蒙った一人であった。

不況は夜中に霜が降りるように、いつの間にかやってきた。突如としてわれわれは何もかもめちやくちやな世界に放り出されていたのだった。かつては、程度の差こそ

あれ、繁栄の中に人生を過していた人々、繁栄こそ社会の経済的社会的構造の永久の姿だと考えていた人々、これらの人々は一樣に財政的破滅の縁に立たされた。不況は眞の飢餓がどんなものか知らなかった幾千万の人々を現実に飢餓に陥れた。

一九三〇年代が始まったのは、民主主義の安泰を死守するために戦われそして勝利を勝ち取った第一次世界大戦の痛手から、世界中がまだ立ち直れずによりめいていた頃であった。そして、われわれが民主主義の安泰を確保することに失敗した世界に自由を保全するため、自由民主主義を信奉する人々によって戦われた第二次世界大戦の勃発によってこの年代は幕を閉じたのであった。

またこの年代が始まった時権力の座にあったのは資本主義の徹底的個人主義であった。そしてこの年代が終ろうとする頃ニュージーランドでは、世界で始めての福祉国家がしっかりと樹立されたのであった。そして、外觀も違い名称も違うが、同じ方向に向かっていることが明らかに判別できる傾向が他の国々にも見られた。

この大不況を生き抜いたことによって考え方の根本を修正した人達が世界中にどのくらいあるだろうかということは知る由もない。しかし、私がそのような人間の一人であったという事実は疑う余地がない。私の少年時代と壮年時代は、徹底的資本主義が権力の座を占めていて、徹底的個人主義が当然のことと考えられていた「何事も自分でやるほかない」という開拓者的雰囲気の中で過した。だから私の仕事日のすべては個人として何かこのような座に着きたいという方向に向けられていた。私は一九二

○年代の後半になってやっとこの望みを達することができた。私が占めることのできた座はちっぽけな取るに足らない座ではあったが、私はこのささやかな成功に少なからざる誇りを持っていたことを白状しなければならない。

私の誇りは依然としてそこにあった。自分自身の必要については常に「自分でやれ」主義をもって処することに對する生來の私の好みも依然としてそこにあった——そして、今後も常にそこにあつて欲しいと私は念じているが——。しかし、私ほど幸運でない人達の要求に關しては、私の厳しさは緩和された——大幅に緩和された。そしてこれは、一人のロータリアンの進化の一部分であると、私は敢えて考えたいのである。

以下は私の自叙伝からの抜萃である。

「自由企業の基礎の上に立つて運営された福祉国家の三十年にわたる實際の経験を經た後、そしてあらゆる討論会の機會に討論を闘わした三十年間の後、ニュージールランドは今なお平衡点を見出だそうと努めている。これに關する原理についての討議はもはや政党政治の領域を離れている。福祉国家は既に確立された。そして國民はそれを受け入れた。この事實は主要兩政党によつて是認されたのである。」

それから十年経つた今日、われわれは再び繰り返して言わなければならないのだが、資金を供給しなければならない自由企業と次第に増大する政府の支出を求めてやまない福祉國家の要求との間に、平衡点を見出だそうと今なお苦心しているのである。兩政党の政治家達が討論と闘争の材料を豊富に見出だすのはこの分野である。ロータリ

―としてはこちらまで、あとは彼等に任せなければならない。この論争に加わることは本書の目的とするところには無関係である。

これらの自由主義的傾向をもたらしした環境、条件および勢いは、他の地域では全く異なった方向に噴出した所もある。民主主義はヒットラーとムッソリーニによってまっこうから挑戦され、軽蔑的に嘲笑された。スターリンはもっと狡猾で、『民主主義』と『自由』の語を取り入れて、その意味を変えてしまった。

一九三〇年代が進むにつれて、独裁者達のはびこり、力の政治の騒ぎは激化した。第一次世界大戦の余波としてなおくすぶっていた国家主義の火を燃え上がらせるように巧みに設計されたプログラムの力と、軍事勢力の誇示によって彼等はその国民達の士氣と闘志を高めるために奇蹟を行なっているかにさえ見えた。

一九三四年にはヒットラーはドイツにおける最高権力者にのし上がった。『バターより大砲』の哲学は勝ち誇っていた。従って、言論、思想、および集会の自由、信仰の自由および迫害からの自由等、個人の自由のために戦うロータリーは当然彼等の攻撃目標であった。理論的にもまた実際面においても、ロータリーの立場を非政治的組織として維持する問題に新しい次元を加えたことが日ならずして明らかになった。

一九三七年にドイツ国内の四十二クラブが解散させられ、またダンチッヒ自由市の一クラブがナチ当局の圧力によって解散させられた時に、この問題はその頂点に達したのであった。次の年にはオーストリアの十一クラブとイタリアの三十四クラブが解

散させられた。冷酷な圧迫はさらに続いて、次の五年間には他の三十三カ国が枢軸国側のために侵略され或いはその勢力圏内に包み込まれて、ロータリーは総計四八四クラブ、一万六、七〇〇人の会員を一時的に失ったのであった。

アンガス・ミッチェル

一九三〇年代に責任ある地位にあってビジネスにたずさわっていた者は誰でも、国家的問題を最優先的に考えなければならない義務から逃れることはできなかった。しかしわれわれの多くにとっては、それは主として国家レベルにおいて起っている事柄の結果として、通常のビジネス遂行の上につけてくる日々の問題処理するだけのことであった。しかしそれらのことは結構われわれを多忙にした。しかしながら、私のロータリーに対する関心が深まるのを感じたのはこの段階においてであった。ロータリーが唱える原理を思い出させられるような事柄が浮びあがってくるのではない日は一日もなかった。この決定は果して善意とより良い友好を築くであろうか？ これは関係者すべてにとって公正であろうか？ これらは実際の人達と論じあう実際の問題に関連してぶつかなければならない実際の問題なのである。

私が討議や討論に参加したり或いはビジネスその他の折衝にたずさわったりする度に、反対派の内部や相反する分派相互の間に均衡感を保持する上にロータリーの果た

す重要な役割を次第に明確に感じるようになった。

ロータリーは、ロータリーとして何も不平のたねを持ったことはない。ロータリーは友好の精神と相互尊敬とあらゆる人間関係の面における善意とを支持した。ロータリーは討議に際して反対意見を理解するために良心的努力をする立場を取った。そして、それはこのようなやり方が、ビジネスにおいても可能であるばかりでなく、それはまた非常に望ましいことであり、実際になうことでもあるという考え方に基づいていた。

それから三十年経った今日になってみると、このことはロータリーの酵母が作用し始めていた単純な一例であったことが私にはよくわかるのである。そして、その酵母が作用し始めれば、さらにそれに続く作用が必然的に起るのである。一九三二年に私のクラブの会長は私に、例会でない特別のクラブ会合で職業奉仕の話をし、続いて職業奉仕についての討議のリーダーをつとめることを要請した。これは私にとって重要な機会であった。私は若干の不安と少なからざる恐怖心をもってこれに備えた。

その会合の予定されていた前日になると、私のこの重責は、いうなれば「執行猶予」を申し渡されたのであった。しかもこの執行猶予はその会合をかつて私が出席したいろいろの会合の中で最も私にとって重要な会合の一つにしたのであった。私のクラブの会長は私に電話をかけてきて、実は豪州の地区ガバナーが米国から帰国の途中オーランドに立ち寄って、このクラブの特別会合に出席したいと言っていると聞いた。

ついてはこの人を当日の主要スピーカーとして招待したいと思うが異存はあるまいかと私に尋ねて来た。

その会合で私はアンガス・ミッチェルに紹介された。かくして、アンガスに会ったことは私のロータリー生涯の一大転機となったのであった。これが彼と私の交友の始まりであった。それは一九六一年に彼が亡くなるまで続いた。

ロータリーは私にすばらしい交友を豊富に与えてくれた――私にとって遙かにその分に過ぎた良き友を、分に過ぎるほど豊富に。私の友人の多くはアンガスの知遇を得ており、アンガスもまたこれらの友人をよく知っていた。その私の友人は口を揃えて、友誼と友情の関する限り、アンガスの右に出る人はないと言った。

世界各地の演壇から私は、いやしくもロータリーにおいて最も重要とされる事柄について、ロータリーに多大な貢献をしたという点において、ポール・ハリスを除けばアンガス・ミッチェルの右に出る者はないと信ずると聴衆に語った。アンガスは精神的崇高さをすべてに優先する最も重要なものとして、すべての基本とすることは他の分野においてもそうであるが、とりわけロータリーにおいてはそうでなければならぬと考え、これを彼独特の静かなしきも毅然たる態度で固執したのであった。

一九三二年のあの初めての出会いのあと、私はアンガスを私の家に伴い、そこでロータリーについて語り合ったのであったが、二人の間のこのロータリー論議は、機会あるごとに、その後ほとんど三十年にわたって続けられたのであった。アンガスは米

国内でかなり多くの時をポール・ハリスと共に過したのであった。この二人は旅を共にし、アンガスはボールの家にも厄介になった。従ってこの二人がロータリーを語ったことは申すまでもないことで、アンガスが二人の会話について私に話して聞かせることはすべてロータリーの源泉から直接湧き出るロータリーであった。

ロータリーの酵母は既に私の脳裡において作用していたので、アンガスの温かい人柄と人を動かさずにはおかない熱意とは、私をして彼が既に辿りつつあった同じ道を辿らしめずにはおかなかった。私は深く深く動かされたのであった。とりわけ私が深く動かされたのは、アンガスが彼の保有していたその主たるビジネスの持ち分をその共同経営者に譲渡してしまつて、ロータリーのためにほとんど専念して活動できるようになったことであつた。

これは私にとって全く新しい手がかりであつた。このことはロータリーの重要さについて新しい問題を投げかけた。ロータリーというものが、ビジネスと専門職業の領域においてだけでなく、一国の市民或いは世界の市民としてのより広い面の生涯においても、何か新しい異なったものがロータリーの中にはあるということを発見した幸運なロータリアンの生涯にとって計り知れない価値を持っているということが、アンガスと話した後の私には明白に判つたし、今日ではさらにより明白になつたのである。これらのロータリアン達は、数限りない多くの点で一人ひとり皆他の人とは違ふであらう。しかしながら、人種、皮膚の色、信仰の別なく彼等は皆一様にロータリー

に対する信念を持っているのだ。

それから十四年経った一九四六年のことだった。オークランド・ロータリークラブの創立二十五周年記念式典の折に私はある大司教が、「私にとって自分の宗教の次にこの世の中で最大のものはロータリーである」と言うのを聞いたことがある。

ロータリーはどれほど重要なのか？ この疑問に答えることは容易ではあるまい。しかしそうだからといってこれを不問に付すわけにはいかない。遅かれ早かれ、また意識的にせよ無意識的にせよ、われわれは皆これに対する自分自身の答を見つけ出さなければならない。私自身の場合は、アンガス・ミッチェルと交わったことによってこの答の発見が早められた。ロータリーは私の優先順位では最高位を占めるものの中に入るようになり、私の人生を取り巻く環境の支配とその人生を生きる私自身の支配との間に最も望ましい均衡点を見出だそうと努めるにつれて、ロータリーの重要性は日増しに加わっていった。

今とってみると私には、時が経つにつれて、それ自体がこのような均衡点が間違はなくわれわれの手から逃げ去って行くようにさせるに充分なような変化がわれわれの内部に起るものだということがよくわかる。われわれの価値観にも、われわれの野望にも、われわれが必要とするものにも、そして他人に対するわれわれの責任にも変化が起るのだ。完全な均衡点というものは決して見つけ出せるものではないし、よしんば見つけ出してもそれを持続することはできない。それにできるだけ近づく唯一の

道は、均衡点を見つけ出そうと努め続けることである。そしてそのためにはロータリーはすばらしい助けとなるであろう。

一 国内の政治的緊張と国際間の政治的緊張は共にロータリーに反映された。

決議二三―三四は、一般に社会奉仕に関する、そしてその中でも特に公共問題に関する、個人ロータリアンおよびロータリークラブの役割を明確にすることに大いに役立ったのであった。「国際ロータリーは国家的或いは政治的論争の的になっている問題には一切干渉しない」ことを至上命令として謳った、一九二九年の国際ロータリー理事会の声明は、ロータリーというものがその如何なるレベルにおいても非政治的組織体であるというロータリーの立場を明確にするものと期待されていたかもしれない。しかしこの声明の解釈の相違から起る様々な異論の発生は、さらに補足声明を必要とするに至った。

一九三四年のデトロイト大会は、決議十六号を採択したが、これはより細目にわたる声明を発することによってこれらの困難を解決しようとする目的を持っていた。しかし意見の異なる各派の代表者間の論争の時代は終熄すべくもなかった。そしてこのような事態は容易に理解できるのである。

国家的にも國際的にも、個人的にも集團的にも、われわれは極度の政治的緊張に包まれていたのだ。ヒットラーは暴れまわっていた。彼の手先は逐次その数も増しその政治力も加えつつあった。大太平洋の広厖をもってしてもその怒号を静めるに足りなかった。しかし、ヒットラーは別として、大不況によってもたらされた飢餓、貧困、そして窮乏は、民主主義諸国のまともな人々の多くが伝統的政治哲学と政治制度の基礎と構造に内在する基本的弱点と認めていたものをさらに出したのであった。自由企業の資本主義制度の、伝統的な万人の認めるとりである北米合衆国においてさえも、この新しい考え方に対して不可侵ではなかった。

フランクリン・D・ルーズベルトやその擁護者或いはその政敵を弁護したり或いはこれを非難したりすることはこの書物の目的とは無縁であり、それを敢えて企てようとも思わない。われわれが関心を持っているのはただ、米国にも、他の国々と同じようにその影響を及ぼした全世界のいろいろの出来事と情勢の進展とがロータリーに与えた衝撃についてである。そこで、次に掲げるのは、私の知る限りこの種の事柄に関しては最も客観的な情報源である大英百科辞典の最新版からの引用である。

第四卷―八四二頁A。資本主義。「資本主義諸国の政治家とビジネスメンは第一次世界大戦によって醸し出された事態の変転を認めることに鈍感であった。その結果彼等は一九二〇年代にその方針を誤って戦前の常態に戻ろうと企てたのであった。主要資本主義諸国の中でも英国は両大戦の間の期間を通じて繁栄をもたらし得なかった顕

著な例であった。その他の資本主義諸国は一九二〇年代に短期間繁栄を楽しむことができたが、やがて一九三〇年代には資本主義体制をその根底から揺り動かす、かの大不況に見舞われる運命が待っていたのであった。レッセ・フェール（自由放任主義）は、米国におけるフランクリン・D・ルーズベルト大統領のニュー・ディールから壊滅的打撃を蒙った。……資本主義が第二次世界大戦後に示した著しい生命力は、資本主義の長期にわたる業績とその体制に内在する機能的働きについて、もっと綿密に研究する必要があることを物語っている。」

第十九卷六〇〇頁B。「フランクリン・デラノ・ルーズベルト（一八八二—一九四五）は合衆国第三十二代大統領として、ニュー・ディール時代および第二次世界大戦を通して、一九三三年三月から一九四五年四月に亡くなるまで勤めた。一九三〇年代の大不況を克服するために新しい国内政策を策定する原動力となったが、この国内政策はその後米国政府と米国経済との関係に本質的かつ永続的变化をもたらすことになった。」

第十九卷一六〇一頁C。「一九三二年の選挙運動においては不況だけが唯一の重大な係争点であった。」

第二〇卷一七五八頁B。「この四年間（一九三三—三六）にフランクリン・D・ルーズベルト政府は不況克服運動のために、その「ニュー・ディール」立法の中に、社会保障、住宅問題、一般大衆の権利および労務管理関係等の分野における社会主義政党

の綱領が直接要求する多くの項目を盛り込んだ。」

第十八巻―三九四頁D。「ニュー・デールには失業保険、老齡年金、寡婦と被扶養幼児に対する補助等の規定が含まれていたほか、盲人と心身障害者に対する特別規定も含まれていた。この制度の要点の概要は一九三五年の社会保障条令およびこれに關してその後行なわれた多くの修正規定の中に包含されていた。」

ニュージーランドにおいても最初の労働党内閣が選挙され、生産、分配および交換の手段の社会主義化の政策を標榜して一九三五年その座に着いた。国内においても国外においても新しい政治感覚が見られた。ロータリアン達も当然この中に巻き込まれた。ロータリーの中にもその反響が感じられたこともまた当然であった。

一九三六年には、わが地区ガバナ―、ニュージーランド、クライストチャーチのスタンレー・フォスターは、彼が憂うべき傾向と考えた事柄にクラブの注意を惹く必要があると考えた。彼はクラブに対して「政府に属する仕事については一切かわりあってはならない」と命令した。

この地区ガバナ―の処置はクラブの間に多くの論議や討論を呼び起す因となったので、彼はその年にオークランドで開催される地区大会において、これに關する討議を行なうことにした。以下はその時の討議からの抜萃である。

肯定論。ロータリアン、L・G・K・ステイブン、クライストチャーチ・クラブ

「この設問の背後にあるものは一体何だろうか？この討議によって見出そうとしているのは、ロータリーは行動か試行か、それとも理論と試行なのかということであり、理想だけなのかそれとも理想プラス実践なのかということである。教育だけが目的なのか、教育的であると同時に建設的でもあるのかということである。そして、次には、政治的或いは宗教的色彩を帯びると認められる問題に対するロータリーの態度はどうなのか？ である。」

「ニュージーランドにもその他の地域にも、ロータリーの一部には『政治抜き、宗教抜き』だという人々がいる。しかし、全ロータリーを通じて、いやしくも宗教と政治にかかわりのある事柄は悉く除外することは到底できない相談だという意見が決定である。……諸君の中でRIBIの機関誌『ロータリー・ホイール』を購読している人々は、過去六カ月にわたって展開された論争を少なからざる興味をもって読まれたであろう。オーストラリアにおいても昨年中この同じ問題が論議された。」

「われわれは、クラブとして、われわれの目的は実際的であるよりも理想的である——ときめてしまうには些かためらいがあるという極めて強い意見が全ロータリーを通

じて存在することは疑問の余地がない。高い理想を掲げるわれわれの組織の如き団体は、いやしくもわれわれの理念に合致しない事柄に対しては、集団として立ち向かう用意がなければならない。……」

このような同じ調子の所論はさらに続いた。

地区ガバナー、フォスターは、「最初のプログラムではティマルのロータリアン、W・C・キャンベルが否定論を述べる予定であったが、急に出席ができなくなった。オークランドのロータリアン、ハロルド・トーマスがその穴を埋めることになった。」と発表した。

否定論を述べるに当って私は驚くべき幸運に恵まれた。その日の朝刊はその前日行なわれたオークランド商業会議所の会合で、関税によって地方産業を保護する問題についての激しい討議が行なわれたことを報じた。オークランド・ロータリークラブの会員達もこの討議に加わっていた。その中のある者は賛成論、ある者は反対論であった。そしてその中のある者はこの日のロータリーの討論会で私の演説を聞く聴衆の中にもいた。前日の出来事を利用するのはベテンのようにも思えたが、しかしそれは善い目的のためだと割り切った。

勿論私は、この種の討論はすべてプラスである、ビジネス界であると否とを問わず、地域社会生活にとって不可決のものであると指摘した。商業会議所は数多くの適切な討論の場の一つを提供したのであって、そこで時には感情が過熱することがあ

っても、当該特定団体がその会員達の支持する目的を逸脱して運営されない限り、何ら害はないのである。そして、ロータリーは、ロータリー自体の目的を持っていたのである。非政治的目的という目的を。

「他人の事には干渉するな」という方針を堅持することによってロータリーは既に顕著な業績の記録を持っていた。そして、われわれがロータリーの原理をわれわれ一人ひとりの日常生活の上に実践する用意がある限り、今後ますます多くを期待できるのである。

もし仮に私が前日当地の商業会議所で討議された問題について、ここでわれわれの集団的態度を決定するように働きかけるとしたら、この地区大会を分裂させるのにこれほど確実な方法はほかにないであろう……という意見を述べた。

口頭による報告には、二人の主要スピーカーの発言の中にも、これに続いて行なわれた討議の発言者の発言の中にも、原理に関しては何も新しいものは見られなかったと報告された。ロータリーとして効果的たらしめとするならば、ロータリーはロータリーアンの集団的意見を支援する団体的行動をとる用意がなくてはならないと信ずる人達がいた。一口に言えば、組織体としてのロータリーは、政治的であろうと宗教的であろうと、ロータリーの理想に合致する公共問題については毅然と立ち上がり、頼りにさるべきだというのである。そして一方には、私もその一人だが、このような方針を採用することはロータリーを破滅に導く最も確かな、最も早い近道であると確信する

人達があった。

この時用いられた論法は、肯定論も否定論ともに、これより二十年前、一九一〇年代の国際大会記録に記されているところと全く同じであることがわかる。オークランドにおけるこの討論は恐らく、他の数十にも及ぶロータリー地域で行なわれていた討論の典型的のものであったであろう。ここでこれを述べたのは、全世界のロータリーアンに受け入れられる方針確立への進化の道はまだまだ前途遼遠であったということを示すためである。

明瞭化—單純化

私のロータリーへの関心が次第に深まってきたことと、その結果クラブ活動への参加が始まったことは他の会員達の眼に留まったに相違ない。一九三七年私はわがクラブの会長になることを要請された。この招請はすばらしい名誉として感謝をもって受諾した。

ロータリーのプログラムへの関心と、そのプログラムへの積極的参加すら、もはや充分ではなくなった。指導者としての責任はロータリーのすべてを明確に理解することとを必須の要件とした。

この問題を勉強すれば勉強するほど、それは結局一つの單純な本質的事実に歸すこ

ることを確信するようになった。最初の意図がどんなであったにせよ、ポール・ハリスとその友人達はまず第一に、昔からあったビジネスと友情との間の溝に橋渡しをすることに成功したのだ。この溝に橋渡しをしたことこそ何よりも肝心なことだったのだ。これこそロータリーの貢献を比喩なきものとしたただ一つの重要な事実である。四つの奉仕部門全部にわたる実際活動の全分野を包含するロータリーのプログラムはこの最初の企てに成功したことに端を発しているのだ。

燃え切った冷たい灰をひっかきまわすのは決して楽しい仕事ではないが、古い時代の記録を探してみると、そこには灰の中にまだ燃えている石炭がたくさんあるのを発見するのに驚くのである。ロータリーのプログラムは進化した。今もお進んでいるのだ。新しく発生する必要と常に変化する状況に対応するためには、絶えず進化を続けなければならないのだ。しかしロータリーが打ち建てられた基礎となった原理はいつまでも変えることはないであろう。

かくして、私がオークランド・ロータリークラブで、会長として行なったスピーチの中に次のようなものがある。

「もしわれわれがロータリーの中に潜在する力を少しでも發揮させようとするならば、何よりもまずロータリアンの中にロータリーに対する真の理解を普及徹底させなければならぬ。そして、この真の理解を普及徹底させるためには、ロータリーについての考え方をもっと明確にし、もっと単純化しなければならない。このような理解

は、ロータリーというものを、もっと多くの、より良き友情を築き上げるために組織された友情であると考え始める時、始めてわれわれの身につくであろう。これは実に単純極まることである。われわれはまずその手始めとして、どのクラブもどのクラブもみんな友情の溢れるクラブにすべきである。ビジターとしてクラブを訪れた人達が、当日のスピーカーとその題目や当日の料理のことなど忘れてしまった後までも、当日差し伸べられた歓迎の暖かさと、会員が示してくれた友情の暖かさを忘れることができない……そのようなクラブ。あなたのクラブを友情溢れるクラブにするために自分の持ち分をはたすこと——これがクラブ奉仕なのだ。」

「会員の一人ひとりが、その従事する生業の全面的改善のために各々その役割を果たすクラブ。あなたの生業を、友情溢れるような生業にするために自分の持ち分を果たすこと——これが職業奉仕なのだ。」

「会員の一人ひとりが、各々その地域社会における自分の責任を自覚して、良き隣人であり良き市民である……という、そのようなクラブ。あなたの地域社会を友情溢れる地域社会にするために自分の持ち分を果たすこと——これが社会奉仕なのだ。」

「会員の一人ひとりが、ロータリーは国際ロータリーなのだということを自覚するクラブ。自分の属する国に対するゆるぎなき忠誠はロータリーの会員となるための前提条件であるが、ロータリアンたるものは、それと同時により広い人類同胞の一員であることを認識しなければならない。この世界を友情溢れる世界にするためにその分

を尽くすこと。これが国際奉仕なのだ。」

国際ロータリーの会長として、全世界のロータリアンに対して、もっと友情溢れる、もっと親しみやすい世界にするために、友情の架け橋を築こうと呼びかけたのはそれから三十年近く経ってからであった。言葉は違ったが、その根底にある考え方は全く同じであった。

私のクラブ会長時代に、私が誰かを納得させることができたかどうか知らない。しかし少なくとも私自身は、ロータリーというものがあらゆる人間関係の面において友情の橋を築くものとして無限の可能性を秘めていること、そして、一九三七年にわれわれの周囲に起りつつあった全世界の出来事を考えると、ロータリーの持つ可能性は第一級の重要性を持っているということを、確信するに至ったのであった。この確信はその後年月を経るに従ってますます強められたのであった。

このロータリーの分析を過度の単純化だと考える人達に対しては私はただ、そのような批判を受けても私は決して後悔はしないと答えるだけだ。私の傾向が単純化の方向に向かっていることは、私自身充分にこれを認める。しかしそれは、考え方、話し方および書き表わし方の過度の複雑化が人間関係の分野にもたらす弊害は、過度の単純化がもたらし得る弊害に比べれば、遙かに大きいという根深い確信からきているのである。

各国の人々の長い間のいろいろの経験は、この信念の確かさを立証している。人間

のふるまいのこの特殊の分野においては、当然のことのように複雑さと困難さを持つ外側の方から物を考え、事を論じ始める人々があつて、この人達は中心にある単純さについてはこれを二次的重要さしかないと見ているようである。そして、一方には、それと同様に当然のことのように日常生活の単純な教訓から始めて、そこから外側に向かつて、いやしくも人間の協調的行動には必ず付随する複雑さや困難に眼を向ける人達がある。この人達は、単純から始めて、そこから複雑に向かつて入っていく方が良いと考えるのだ。たまたま私はこの後者に属するのだが、私はこのような心構えはロータリーの傾向にもかなうものだと言信している。

ロータリアンとして私が最も満足に思つた時の一つは、一九六五年一月号の『ザ・ロータリアン』で、『世界の模範、ロータリー』と題する、マルコム・マクドナルド氏の一文を読んだ時であつた。当時マクドナルド氏はケニア総督であつた。同氏はその生涯の大部分を発展途上国にあつて英国歴代の政府を代表して同じような任務のために捧げて、人種問題その他類似の問題と取り組んだ。この一文はロータリーの目的とその可能性に関して稀に見る理解の深さを示したものであつたが、その中でマクドナルド氏は次のように言っている。

「人間は矛盾した生きものである。彼等は自然界の不思議を解明するために巧緻の極みを發揮して成功する。また信じ難いほどの驚くべき科学的器具を發明する。素晴らしい芸術を創造する。……しかしながら、人間はいまだにその最も基本的問題の解

明に成功していないのだ——自分達の間にはずかしくない、平和な、友好的な関係を樹立することを——。彼等の激しい論争は人類そのものの破壊にさえ導きかねないのだ。問題に対する答は簡単である。それはロータリーの答だ。二十世紀の今日では、われわれはもはや互いに敵対する余裕はないのだ。全人類は、ロータリーが説きそして実践する国際友好を見習わなければならない。そうすることによってのみわれわれは、全人類が相携えて喜々として仕事に励む世界平和と協調の至上目的を達成することができるとだ。」

その間の消息を知りつくしているこの人の書いたこの一文に勝るロータリーへの賛辞はないであろう。

しかし、マクドナルド氏が指摘するように「人間は矛盾の生きものである。答は簡単である。しかし自分の常識が、自分自身のためにも、世界平和と協調のためにも、こうすべきであると教えることを、その通りにせよと人々を説得することは決して簡単なことではない。しかし、なぜロータリアンは、このような問題のすべてに向かつて、どうすれば一番良いかを究めるために、でき得る限りのことをたゆまず続けていかなければならないかという理由はここにあるのだ。

一九三〇年代の後半に入ると、ヒットラーの怒号はますます高まり、ムッソリーニの示威はいよいよ脅威を加えた。かくして戦争回避の可能性はますます遠のいたのであった。

第一次大戦がいかに空しい無駄な戦いであったかの記憶が生々しく脳裡に残っていたわれわれの世代の人々にとっては、あのばかばかしい大騒動が再び繰り返されて家族ぐるみその中に巻き込まれなければならないかもしれないなどということとは、考えてみるだけでも実に痛ましい運命であった。それは、暗い、憂うつな毎日であった。

私はかねがねロータリーの目的を考える時、われわれはある特定の時点におけるわれわれの生活環境について、何がしかの責任を負うことから逃れる道はないという確信を持っていたのだが、この確信を持っていたが故に当時の不幸な状況は私にとってますます苛酷なものとなったのであった。

世界情勢の前途がいかに暗いものであろうとも、それは全世界の人々がその世界情勢について考えているよりも、より以上暗いものでもないし、またより明るいものでもないのだ。人々の集团的考え方如何によってその時々々の状態がきまるのである。そ

して私自身もその人々の中の一人なのだ。私はこれらの事実を切実に感じていたのであったが、これに対して私自身どうしたらよいのか、私はこの問題の解決のために小指の先ほどの寄与も行なうすべを知らなかった。

一九三九年になると、私の親しい、非常に尊敬する友人から、彼が最近読み終った一冊の書物のことを聞いた。それはクラレンス・ストレイトの『今こそ連合を』と題する本であった。その友人はオー克蘭ド市の市長であったが、ストレイトのテーマについては徹底的に反対であったが、しかし彼がストレイトの考えと異なる彼自身の考えを説明するのを聞いているうちに、私は私の持っている反骨的興味をそそられたのであった。私はその本を買い求め、もしも眠る必要がなかったとしたら不眠で読み続けたであろうと思うほど読み耽ったのであった。

それよりほど二十年前にシェルドンは、それまで長い間とぎされていた雨戸をあけて日の光を差し入れ、ビジネスの世界に金銭的考慮を越えた信念と有用な目的意識の新時代を導き入れた。

クラレンス・ストレイトのテーマは他の分野における、これに劣らない革命的テーマであった。彼は、一国の市民としての忠誠心と愛国心と調和する国際的考え方と行動とに導く理知的な方途を示した。一は他の延長であるといえる。すべての予言者と同様に、ストレイトは時代に一步先んじていたが、彼は向かうべき道を指し示したのである。

クラレンス・ストレイトは、『今こそ連合を』の中で、彼の提案の基礎を四つの主要テーマに置いた。第一は、「人類が生き残るためには人類は結局何らかの形の国際政府を作ることによって一致しなければならない」。第二は、「国家主権に何らかの制限を設けることに全世界の人々が一致するまでは、安定した平和を樹立することはできない」。第三は、「自由とデモクラシーの下で実行可能な、そしてこれと両立する国際政府の唯一の形態は連邦連合である」。第四は、「この連邦連合は、全世界がこれに参加する用意が整うまで待たないで、現存の民主主義諸国の一部をもってまず組織すべきである」。

ここに、世界問題に関する積極的考え方が遂に現われたのであった。これこそ道理になかった考え方である。ストレイトの提案は、頭上に戦雲のただよう時、疑心と混乱と絶望に瀕する大海原に燈台のあかりのように輝いたのである。

ストレイトの書物は、さらに他の書物を漁ることを促した。私はありとあらゆる書物——賛成論も反対論も、いやしくもこの問題に関係のある限り——を手当たり次第貪り読んだ。そして、これらの書物を読み進むに従って私は、地域社会において、或いは一国内において、法と秩序と平和を維持しようとする場合にわれわれが直面する問題は、われわれが国家群の社会において平和を樹立しようと努力する場合に直面する問題と原則的には同じであることが次第に明らかになってきた。

私の友人達は当時、今日世界中の人達が言っているのと同じように、いやしくも国

家間を統べる連合政府である以上、いかなる形のものであろうと、それが効果的に機能されるためには、まず人間の心の改造が達成されることが前提とならなければならぬと言っていた。人間の性質は変わるものではない、人間は所詮心の中までけんかずきな、無分別な、闘争的動物であると聞かされている。

この人達は、それだからこそ文明諸国のどこでも法を施行するために法律を作り、裁判所を作り警察を持つ必要があるのだということは見落しているようである。人の心の改造が極めて望ましいことであることは私も同感である。このような心の改造が究極的には達成されるであらうと思う。既にそれがその緒につきつつあるという兆候が見えると思え思う。しかし、もし人間の性質を一晚で変えてしまうことができないとすれば、その間われわれは少なくとも人間のふるまいを制御する手段を講ずることができないはずだ。

もしも家庭の平和を楽しみたいならば、人間の性質ではなく、人間のふるまいを制御しなければならぬ。家庭には秩序がなければならぬ。もしも国家が平和に安住することを望むならば、国家にも同様に秩序がなければならぬ。

私の心にはいささかの疑いもない――原則としてクラレンス・ストレイトは正しい。われわれが平和よりもっと大切だと考えるものと両立する平和を求めるためには集団保障が唯一無二の道だ、と主張したノーマン・エンジェルは正しかった。戦争の原因は国家主権だ。それは人類というものを、共通の憲法や共通の法律を拒否する

全く利己的な自分のことしか考えない個々の集団に分割してしまうのだ」と言った、当時ワシントン駐留の英国大使であったロージアン卿は正しかった。国際連合のチャーターの前文を書いたスマッツ將軍は、「それ故われわれは必要な権限と実力を備えた中央組織を持つ、国家の集団を作ろうと企てているのである」と言ったが、彼は正しかった。これらの人々に劣らず世界的に有名な人々の中にも、原則としてクラレンス・ストレイトのテーマに賛成の人達がたくさんあるが、この人達も皆正しいのだ。これらのことはすべてこの問題に対する理知的取り組み方の変化を示している。そして、このことは少なくとも心の改造と同じ程度の重要性がある。国際問題の実際面ではひょっとすると心の改造以上の重要性があるかもしれない。

これらの問題に没頭したことは、決して私のロータリーに対する関心の増大をにぶらせることにはならなかった。それどころか、この研究と活動の全分野には、ロータリーの中にある、或いはわれわれ個々の中にある最高のものにふさわしい平和のために捧げる個人としての奉仕、個人としての参加、および個人としての貢献の機会が無限に存在していることが明らかなのだ。

ロータリアンは、奉仕の理想に結ばれたビジネスマンと専門職業人の広く全世界にわたる同志愛によって、国際理解と善意と平和を培うべく誓いを立てているのだ。これは明らかに行動の義務を伴う。しかし提案された行動について考え、さらにそれについてもう一度考え直すべき理由があったのだ。

ロータリーは既に九十以上の国々に根をおろしている。このことは、この組織の中は九十の別々の国家に対する忠誠心が代表されていることを意味する。

国際ロータリーは、ロータリアンの第一の義務は自分の国の忠実な、国に報ずる市民たることであると声明するのに些かのためらいもなかった。これは、どこの国のクラブであろうと、常にロータリークラブの会員となるための前提条件であり、従来からも常にそうであった。

もしもロータリアンが、自分の国に対する忠誠とロータリーに対する忠誠との間にいずれか一方を選ばなければならない立場に立たされたとしたら、答はただ一つしかない。国際ロータリーはその時点で分解するのである。

ロータリーは自ら課した制約の範囲内で機能しなければならなかった。ロータリーのつとめる役割がいかに重要であろうとも、自分の及びもつかないプレーをしようと企てるゴルフヤーのようにプレーそのものまで全くできなくしてしまうことのないように、これらの制約の範囲内でその役割をつとめなければならないのだ。

次第次第に謎はおのずと解け始めた。もしも自国内で他の人々との間の関係が自然に政治的と非政治的の二派に分かれたとしたら、他国の人々との間の関係について、同じことが同じようにいえるに相違ない。

この角度から眺めて見た時、国家間の友好的な平和な関係の増進と維持のためには二つの別々の活動分野は同時に開発されなければならないことがわかった。その中の

一つは、条約その他公式の合意によって定められた通り政府間の公式関係によって処理さるべきものである。これは政府の活動分野であって、他のいかなる機関によっても処理できないものである。

もう一つの分野は、各関係国の良識ある世論に基づく相互理解と善意の健全な雰囲気を作成することに関するものである。これは人と人との相互活動だ。これこそ世界問題のジグソーパズルの中の最も肝心な箇所。ロータリーがびったり当てはまるところなのだ。これが国際奉仕の分野でロータリーに打ってつけの、最も稔り多き活動分野なのだ。

ロータリーは世界を匡正することはできない。しかしロータリーは、理解と善意と相互尊敬の雰囲気を生み出すために手を貸すことによって、最も貴重な貢献をすることができる。このような雰囲気があって始めて政府はわれわれみんなが住む世界をより良くするために力強く前進することができるのだ。

とうとう謎が解けて私はロータリーにおける自分の道を見出したのだった。私は自分の立っている位置を知り、どこへ向かって進みつつあるかを知り、そして自分が貢献するためには何をすべきかを知った。そして私にはそれを確言する用意ができたのであった。

ところが、一九三九年九月にとうとう戦争が勃発して、これらの問題はすべて脇へ押しやられてしまったのであった。われわれは情勢の残酷な現実と直面しなければなら

らなかった。唯一の考慮は戦争に勝つことであつた。ノーマン・エンジェルの言葉を借りれば、「われわれはただ、われわれにとって平和そのものよりもっと尊く思っているものと両立し得る平和だけを望んでいるのだ」。ノーマン・エンジェルの考えの明確さとその表現とは、それに続く年月、私にとって大きな助けとなつたのであつた。

方針と手続きの進歩

創設から第一次、第二次、第三次の発展に至る興味尽きない初期の時代に続いて、一九三〇年代の困難な時期にロータリーは完全に成人に達したのであつた。

幾多の困難にもかかわらずロータリーは引き続き拡大した。新しい国々、新しい人、新しい民族集団、新しい言葉、新しい宗教、新しい人生哲学、これらがすべて組み合はさつて新しい衝撃となつた。元々ロータリーは多様性をもつて形成されたのであつたが、この多様性はますます深まつた。

膨張の結果、地域的、国家のおよび国際的レベルにおいて、それぞれ新しい様相を呈するようになった。地域社会には今までなかつた新しい必要と奉仕の機会があることが明らかになった。そしてその結果ロータリーの目的、方針、プログラムについて考え方を変えることが必要になつてきた。かくして新しい技法と技術が生まれることになつたのである。

しかしロータリーとして新しく活動を始めた新威力の中でも最も重要なものは、逆境の時代から生まれた代償的恩恵であった。ロータリーが世界的大不況とヒットラーその他の独裁者仲間の仮借なき攻勢との二重の圧迫を蒙ったお蔭で成熟を遂げたのである。

「禍を転じて福とするのは楽しいことだ」とシェークスピアは言った。エマーソンはもっと現実的にこう言った、「不遇な境遇には科学的価値がある。常に学ぶことを怠らない者はこの機会を決して逃がさない」と。ロータリアンは一九三〇年代に多くを学んだのであった。

頓挫が起ったのは一九三〇年代の始めの頃だった。不況がもたらした状態の結果一九三一年には十八のクラブが消え去った。これは一年間に失われたクラブの数としてはその時までの最高の数字だった。続いて一九三二年は、新しくできたクラブの数より、失ったクラブの数の方が多いという初めての年となった。二十七のクラブがチャーターを返上して、会員を失った数は二千を越えたのであった。

プラスの面では、方針とプログラムの上に後世まで残る重要な進展が相次いで行なわれた。この傾向は、一九四〇年キューバのハバナで開催された国際大会において、参加三十二カ国の代議員達が「人権尊重」決議を採択した時にその頂点に達した。この大会ではまた、剰余資金を赤十字を通じて直接戦災救援と、戦争によるロータリアンとその家族の苦難を救恤するために充当することを決定した。

シカゴの若い実業家ハーバート・J・テイラーが四つのテストを作ったのは一九三三年のことであった。曰く、

一、それは真実かどうか？

二、それは関係者すべてに公正か？

三、それは善意と友誼を築くか？

四、それは関係者すべてのためになるか？

ハーブ・テイラーはその管理下にあった企業の基本政策としてこのテストを実施して驚異的成果を収めた。このテストはロータリーに採用されて、全世界にわたってロータリーのプログラムを発展させる上に計り知れない重要な役割を果たしたのであった。

四つのテストは学校でも、いろいろ異なった方法によって大いに役立てられた。また同テストはほとんどすべての近代語に残らず翻訳されたといつてよい。ロータリーでは職業奉仕を助ける基本的道具の一つになった。そしてハーブ・テイラーが国際ロータリーの会長をつとめた一九五四―五五年度には、彼はその版權をその所有者であった彼の会社の名において国際ロータリーに贈った。

ハーブ・テイラーの名は余にも密接に四つのテストと結びついて人々の脳裡に刻まれていたために、ハーブがロータリーのために、教会のために、地域社会のために、さらには全世界の人類社会のために捧げた個人的奉仕による多くの優れた他の貢

献についてはとかく忘れられがちであった。

一九三三年には、当時全ニュージールランドを包含していた第三九地区の大会がニュージーマスで開催された。地区ガバナーとして「最適の人物の奉仕」を確保するため、現任地区ガバナーと地区バスターガバナーから構成される地区指名委員会制度を設ける決議がこの大会で採択された。それ以来この手続きは、人的構成に多少の修正はあったが、今日に至るまで何ら支障なく円滑に運用されている。

この決議を検討しこれを採択した代議員の人達はこの決定が将来ロータリーにおける未曾有の激しい論争の種になるうとは、神ならぬ身の知る由もなかったのである。

その後ニュージールランドを訪れて地区大会に出席する人達—その中には国際ロータリーの役員もあつた—は、この指名委員会手続きの好結果に深い感銘を受けて、これを他の地域にも導入したいと考えたのであつた。

しかしこの案は、ある一部の地域では、非民主的であり派閥支配に導く元となるとして強い反対を受け、非難された。頑固一徹の人達にとつてはこのような仕組みは、およそロータリーらしくない、ロータリーとしてあつてはならない姿だと思われたのである。しかしながら、この指名委員会の仕組みは、逐次支持者が増え、今ではロータリークラブや地区の役員および国際ロータリーの理事の選挙についてもこの方法がその手続きの一部となつて用いられている。そして、一九三九年以降はこの仕組みが、多少の変更を加えてではあつたが、国際ロータリー会長の指名と選挙にも用いら

れている。

一九三三年にこの制度が始めて用いられて以来ずっと観察してきたところに照らしても、また一九五二年のメキシコシティ大会におけるあの荒れに荒れた激しい討論に身をもつて参加した体験から考えても、私の感触は、若干不完全なところはあるけれども、この指名委員会手続きは、われわれがこれを用いている特定の目的に関する限り、われわれの知っている他のいかなる手続き方法にも勝るものと考ええる。

米国テネシー州、ナッシュビル・ロータリークラブがスポンサーとなって「国際問題研究会」が開催されたのは一九三四年のことであった。これはその後多くの国々でロータリークラブがスポンサーとなって開催された幾千という同じような国際理解の研究会の先駆者であった。これはロータリーのプログラムの中における国際奉仕の進化過程の一大躍進であった。一九四七―四八年度には国際ロータリー理事会は、経済的の理由と能率上の理由の両面からこの研究会は当時の形態で続けることをやめて、以後はこの国際奉仕の重要な分野はロータリー財団の開発プログラムの一部として肩替りすべきであることを決定した。

国際大会に出席する代議員の数が逐次増大を続けたことが主たる原因であったが、それとともに審議さるべき制定案の数も次第に増加したこともあって、制定案の処理に関する複雑な問題は遂に制度の変更を余儀なくせしめるに至った。かくて、一九三四年に第一回規定審議会が国際大会の一部として開催されることになったのである。

その後規定審議会の構成について若干の変更があったが、一九七〇年のアトラント大会において手続き上の重要な改正が行なわれた。しかし差し当り、一九四六年版の手続要覧から引用した次の一節を見れば、規定審議会の構成とその機能に関してその背後にあった考え方の意図の全貌を知ることができると思う。

「国際大会の一部として会合する規定審議会は代議制度である。規定審議会は提案された制定案の全部を審議した上でその推奨意見を国際大会に報告して、そこで代議員がきめる最終決定に委ねるのである。規定審議会のメンバーは、ガバナー、特別議員、理事会メンバー、RIBI会長、地域諮問委員会委員長、その他である。」

このロータリーの規定手続きの問題の解決は決して容易なことではない。もしも伝統的民主主義的手続きを堅持するとすれば、最終決定権はクラブの手に残さなければならぬ。ところが一五〇カ国に散在する五千を超えるクラブがある。これだけいえばあとはいわなくても、コンセンサスに到着するためには、はてしなく複雑な問題が立ちはだかっていることがわかるであろう。

これらの問題が一九三四年に規定審議会が発足したことによって解決されたとは義理にもいえない。しかし前進の大きな一步を踏み出したということはできる。そして参加したロータリアン達が審議会と大会で示した善意と協調の精神とが、三十六年間にわたってこの厄介な機構が曲りなりにも満足に近い効果をあげることが可能にしたのであった。しかし、筆を進めるにつれて明らかになるように、この機構はさらに改

正を要する運命にあったのである。さればこそ一九七〇年アトランタ大会における大変革がもたらされたのである。

一九三四年のデトロイト大会において国際ロータリー理事会は、明確化と単純化への一步として、ロータリーの六つの目的を書き改めてその数を四つに減らすことを目的とする制定案を提案した。同大会はこの提案を理事会に差し戻して、さらに検討することを求めた。そこで理事会は全世界のクラブに対して、来るべき地区大会でこの問題を討議するよう要請した。

当時ニュージーランドはまだ一地区であり、地区大会はティマルで開催された。討議は要請の通り上程された。後に地区ガバナーとなったティマルのウィル・トーマスが肯定論を担当し、私が心ならずも自分の信念に反して反対論を担当することになった。

ウィル・トーマスは改正を要するという論旨を次のようにまとめた。

一、単純化が望ましいこと。

二、ロータリーの目的を、運営の目的と目標の四部門と合致させる方が賢明であること。

三、異なる国語に翻訳しやすい言い回しにすることが望ましいこと。

これに対して私の提言の要点は次の要約に示すように言い表わした。

「私は、ロータリーの驚くべき生長の主たる原因の一つであり、恐らく現在のロー

タリーの威力のかなめとなっているものは、その適応性であり、その融通性であり、そしてあらゆる儀礼的やかたくるしい形式主義にとらわれないその性格であると、終始確信していた。言葉の意味のニュアンスについて、極めて些細なことをあげつらうこの論争は儀礼的、形式的に過ぎる嫌いがあって、ロータリーの精神とは異質のものである。もしわれわれがロータリーの六つの目的の形を変えるべきだとすれば、むしろわれわれは完全な単純さを目指して、目的の数を四つに減らすのではなくて、一つにすべきである。」

ご参考までに申し上げるが、この基本的問題に対する私の考えは今日までこの時の主張といささかも変わっていない。

われわれの地区大会がロータリーの目的を四つに減らす改正案に賛成する決定をしたことは大多数の感觸を反映していたとみて、この年のメキシコシティの国際大会はロータリーの目的を旧来の六つから四つに「改訂した」。この改訂のことを、一九三〇年代の推移を物語っているこの際に取り上げたのは、そのこと自体が特別の重要性を持っているからではなくて、それがその頃の一般の考え方の一部を示すものだからである。ロータリアン達はロータリーの目的と方針に関する声明を明確にし、単純化することの必要に目覚め始めていたのだ。彼等はロータリーそのものをより良く理解することを求めていたので、これこそ何にも勝る重要なことだったのである。

私がインヴァーカークのフレッド・ホールジョーンズに初めて会ったのは、この

ティマルの大会の時であった。そしてこれが、ロータリー関係にあってすら私にとって最もありがたい交友の一つと思っている交わりの始まりであった。フレッドはニュージールランドの全クラブがまだ単一地区にまとめられていた一九三七―三八年度に地区ガバナーを勤めた。そして、その年度のオークランド・クラブの会長として私は彼のロータリーに対する深い信念と、より多くのロータリアンと、さらにさらに多くの地域社会に、ロータリーを頒ち与えようとする彼の熱意との影響を受けたのであった。

通常の手順を踏むことが困難であった戦時下の事情のためにフレッド・ホールジョーンズは一九四二―四三年度に再度地区ガバナーを勤めた。あの戦時下に、音にきこえたガス発生器付きの自動車で、幾多の困難を乗り越えてニュージールランド中を廻らなければならなかったにもかかわらず、彼はロータリーのあらゆる面で再び非常に貴重な貢献をしたのであったが、とりわけロータリーの拡大に関する彼の業績はすばらしかった。フレッドはそのガバナー在任の二年間に十四の新クラブを結成したのであった。

フレッドはまた多くの著作を物したが、その中には幾つかのロータリーに関するパンフレットとニュージールランドにおけるロータリー史二巻がある。このうち一巻は一九五五年に出版され、次の一巻はまだ新しく一九七一年の出版である。これらの記念すべき努力の結果、ニュージールランドにおける初期のロータリーとその後の発達の物

語は、今日の世代の人々のために役立つのみならず、これに続く世代の人々のためにも役立つものである。

思想家と運動家の特性が一人の人間に兼ね備わる例は稀であるが、この両特性は疑いなくフレッド・ホールジョーンズの性格の眼目であった。ニュージールランドのロータリー界において、彼が無限の尊敬と愛情をもって遇せられているのうべなるかなである。

戦争

一九三九年、とうとう欧州で戦争が勃発するや、国際ロータリー理事会はウォールター・D・ヘッド会長の下に、その集团的理知と勇氣とを徹底的に試される難局に立たされたのであったが、彼等はいくその試練に応えた。戦争勃発以来最初の理事会で「世界の戦乱の中のロータリー」と題する声明書が発せられた。この声明書は同年度キューバのハバナで開催された国際大会によって承認された。

当時の急迫した情勢と、これに対して全世界のロータリーがいかに冷静に、確信をもって対処したかは次の抜萃によく表われている。

「ロータリアンに対して、各自の所属する国の国民としての義務について指図することは、国際ロータリーの権限外である。しかしながら、理事会は、国際ロータリー

はその国際大会によって、ロータリアンは懇篤な国際理解のために協力すると同時に各自の宗教的、道徳的信念にあくまでも忠実であり、またその所属する国のより高い利益にあくまでも忠実であるべきであると表明していることを指摘しておく。」

「今日のこの激動の秋^{とき}に当って理事会は全世界のロータリアンに対して次のことを改めて強調する必要があると考える。それは、ロータリーは奉仕の理想に基礎を置くが故に、自由、正義、真実、誓約の尊厳および人権尊重の存在しない所にはロータリーは生存することもできないしその理想が普及することもできないということである。ロータリーにとって不可決のこれらの原則は国際間の平和と秩序を維持するためにも肝要であり、人類の進歩にとっても肝要である。

故に理事会は、これらの原則に対して加えられるあらゆる攻撃を非難し、各ロータリアンに対して、ロータリアンはこれらの原則を擁護し、国際間の紛争を解決する手段として戦争に訴える必要のなくなる時を一日も早く招来するようその力を注ぐことを要請する。」

この声明書は一九四二年トム・J・デービス会長の時、カナダのトロントで開催された大会において再確認され、さらに拡大敷衍された。フランクリン・D・ルーズベルト大統領が一九四一年一月六日米国議会に送った国情報告のメッセージ（いわゆる、大統領の年頭教書）の中で大統領が始めて定義づけた「四つの自由」は、この時の声明書の中の適切な箇所に挿入されたのであった。

「戦乱の世界におけるロータリー」と題されたこの新しい声明書の内容は、次の抜粋の中に明らかに示されている。

「理事会は、ロータリーの奉仕の理想を完全に達成することは、個人の自由、思想・言論および集会の自由、信教の自由、迫害と侵犯からの自由、および困窮と恐怖からの自由の实在する国々においてのみ可能であるという信念を堅持する。この自由の存在しない所ではロータリーは生存することはできない。」

「全世界のロータリーアンに対し、彼等自らは勿論、彼等の居住する地域社会の人々をも語らって、迫害と復讐に汚されない戦後の世界再建計画を打ち建てるために各その分を尽くす心構えを持つべきことを、ここに強く要望する。」

右の抜粋の中、とりわけ最後の一節は、極度に困難な時期に当ってロータリーの運命を導くべき衝に当たった人々の優れた考え方を表わしている。そして、全世界のロータリアンが如何にこの指導に応えたかは、枢軸諸国において失われたクラブの損失はその他の諸国における新クラブの加盟によって償われて余りあったという事実によって証明される。ロータリーは休みなく前進を続けていたのであった。

一九四〇—一九五〇年

第二次世界大戦の結果、国際問題に関する方針を早急に明確化する必要に迫られた。

第二次世界大戦に関する事実は周知である。ここではただ、この大戦の続く限り、家庭生活も、事業活動も、その他あらゆる個人的責任は悉く、われわれは戦争をしているのだという事実と結びつけなければ焦点を合わすことはできなかったとだけいっておこう。他の事柄は悉くこのひとつの冷酷な事実によって支配されたのであった。私自身の場合は、家族の利害と事業の利害とは、今日よりも大戦中の方がより密接にからみ合わされていた。

何事によらず相当な事業を経営するのはあたかも綱渡りをするようなものである。充分なバランスを保つには一刻の油断もできないのだ。しかし、戦時中の政府が綱の一端をつかんでいる間は、常に困難であった事柄は、ひと目見ただけで不可能とも思えたのである。われわれの価値観——その上にこそすべての事業は成り立ち、維持されるのだが——そのわれわれの価値観は放棄するほかはなかった。世論——われわれの考えも世論を形成する一要素なのだが——その世論に支持されている政府は、個々の事業に及ぼす影響がどうであろうとも戦争は戦われそして勝たねばならないのだと要求するのだ。そしてこの状態は否応なしに受け入れなければならないのだ。

このような情勢下にあるにもかかわらず、個々の事業に責任を負っている人達は、

与えられた条件の下にできるだけの最善を尽くさなければならぬという至上命令に直面したのである。株主に対する責任がある。得意先に対する責任がある。従業員に対する責任がある。いつの日か従業員達は戻ってくるであろう。彼等が一人残らず戻ってくることをわれわれは待ち望んだのであった。そしてわれわれはこの人達一人ひとりに対して、その職場は常にこの人達のためにあけておく約束したのであった。

家具商の仕事は非重要の範疇に属するものであった。われわれの抱えていた要員は、軍務や重要産業や重要任務に徴用された。いやしくも軍用に供し得る自動車類は徴発された。そして一時はわれわれの所有する下町の倉庫も危うく徴発されて軍用に供せられるところであった。価格統制、その他これに類する統制等に関連する高度に複雑な問題を含む政府の規制は、関係各種事業界、産業界の内部に特別の体制を樹立することを必要とした。家具商の業界もその例外ではなかった。

われわれの業界の全国的管理に当る三人委員会が任命されて、これが家具小売商を代表して政府の関係当局と折衝し、協調することになった。

私はほとんど戦争の全期間を通じてこの委員会の委員長を勤めたのであった。そして偶然にもこの委員会の二人の同僚は共にロータリアンであった。われわれの委員会は、他の多くの商業界、産業界、専門職業界で行なわれているところと軌を一にしていることは問い糺してみるまでもないことであった。ロータリーが職業奉仕の分野でかくあるべしとしているところに従って、われわれはここでもロータリーの理念を実

践したのであった。

その間戦争はその破壊活動を続け、そしてそれによって当然われわれの考え方とわれわれ一般活動を壟断したのであった。しかしわれわれが逐次これらの新しい生活の態様にある程度慣れてき、戦争の最初のショックを耐えぬくにつれて、地方的、国家的、および国際的の、あらゆるレベルにおいて、戦争の結果がいったいどういうことになるであろうかということについて討議が始まるようになった。

いったいわれわれは何を獲得することができるのだろうか？ 将来再び同じあやまちを繰り返すことはないだろうか？ この二つがこれらの討論に参加した人達の頭に浮んだ疑問の最たるものであった。われわれはみんなかわりがあるのだ——世界的水準の指導者もわれわれの如き一般人も共に。

第一次世界大戦はわれわれの完勝をもって一九一八年に終った。われわれは民主主義と自由を守るために戦ったのであったが、勝利に続いた平和の段階においてそのいずれをも確保することができなかった。一九三九年にわれわれは再び民主主義と自由のために戦うことになった。いったい今度は勝利の後に何を期待できるのであるのか。

私の所属するオークランド・ロータリークラブで話をしてもらいたいという招待状が届いた。私は聴衆の少なからざる部分は私の考えには同調しないであろうことを知っていたが、あれこれ熟考の末、私は背水の陣を布いて、前章に述べたような話をす

ることを決心した。

私は、愛国心というものはすべての人々にとって共通の感情であり、それは自然かつ正しい感情ではあるけれども、われわれは愛国心を乗り越えて世界の市民としての責任もある程度認識しなければならないこと、そして勝利を乗り越えてクラレンス・ストレイトが提案したように、国家の主権の力をもっと弱めて何らかの形の集団保障を目指すことの必要を強調したのであった。

今日このような主張をしたならば、それが誰か世界的権威者によってなされでもない限り、恐らく陳腐だとか、それはもう聞きあきたとかいわれるかもしれない。しかし三十年前にはそうでなかった。このような見解は当時にあつては決して喝采を博するものではなかった。事実、今日ならば笑止と思われるかもしれないが、わがクラブの会員の一人は私がこのような話をしたことについて私の勇気を称えて祝意を表する手紙を寄越したほどであった。

私は当時このような話をする決心をしたことを今でも後悔していない。私の信念はその後のいささかの変わりもないばかりか、その後の経験によってさらに強められ補強されたのである。顧みて当時このような話を自分のクラブで行なったことを、私の長い行路における一つの主要な一里塚であつたと思つてゐる。

私がクラブでこの話をしたあと、私と同じ考えの人で、それを口にするのを憚らない二人のクラブ会員とそのほか会員以外の人が何人か私に話しかけてきた。既にオ

ークランドにも一つの協会ができて、米国ワシントンのフェデラル・ユニオン・インコーポレイテッドと英国ロンドンの関連協会とも連絡を取っていることがわかった。この二つの協会はクラレンス・ストレイトがその著『今こそ連合を』の中で主張した提案を積極的に推進していた。米国の協会はストレイト自身が主宰していた。

私はオークランドの仲間に加わって、ニュージーランド国内各地に支部を持ち、ワシントンとロンドンの協会とも連繋を持つフェデラル・ユニオン(N・Z)・インコーポレイテッド(N・Z) Ⅱニュージーランドの略称)の結成に参加した。そして、常に世間に対して主張を述べる人間が運命づけられているように、私はその委員長に祭り上げられたのであった。

全ニュージーランドを通じて、この協会の要衝を占める人達のほとんど全部がロータリアンであったけれども、ロータリー自体としては、われわれの協会の結成には何らの関係もなく、また協会の会員の表明する見解についても全く無関係であった。

ロータリアンとしてのわれわれの第一の義務は、われわれ自身の国家に対する忠実な、奉仕する市民であることであった。われわれはこの義務をわれわれの承知し理解するところに従って履行していた。もしロータリーにおける国際奉仕に対するわれわれの寄与が、啓発された、実情をわきまえた世論の示すところに従って行なわれるべきものであるとすれば、われわれはこの点でもまた正しい方向に向かって最善を尽くしていたのであった。われわれはわれわれ自身を啓蒙しようと努めていた。われわれは

自己啓発をもって、他の人々をして世界問題の全分野に關する建設的心構えを持たせるようにその関心を誘い、でき得ればこれを説得するための第一歩としてこれを求めていたのであった。

その後さらに三十年に及ぶあらゆるレベルでのロータリー活動の経験を積んだ今となって振り返ってみると、私は当時われわれの中にわれわれのやっていることの意義を完全に理解していた者がはたしてあったかどうか、真剣に疑うのである。実際われわれは、ロータリーはどんな活動をしようにしているのか、ロータリーはどのように活動体制を整えられているのか、そして最高責任は政府に帰せられている奉仕分野においてロータリーが活動することが、どうすれば可能なのかについて第一級のデモンストレーションを行っていたのである。

これは個人の奉仕であった。これは個人としての参加であった。個々のロータリアンが各自自分の燈火を掲げて、私は個人としてより友好的な、われわれみんなが住むのにより秩序ある世界を望んでいるのだと宣言していたのである。そして彼はその宣言通りのことを何か実行していたのだ。この型の行動こそ、私の考えでは行動ロータリーの最善の姿なのである。

ロータリークラブで話をして欲しいという招待状は所々方々からきた。そして戦時中の事情が許す限り時と所とを問わずすべて受諾した。各地のロータリークラブは公開集会を催した——多くの場合市町村当局の後援の下に。そんな訳で私は戦争が続き

ている間、国中を遊説して廻ることになった。

戦時中の諸制約のために諸種の困難を冒して強行しなければならぬ旅行が多かった。しかし一人で旅行することは稀であった。ほとんどすべての場合、喜んで行を共にし、或いは求めて行を共にする良き友が同行してくれた——ある時はただ静かに話に聞き入り、またある時は討論に参加したり、クイズ・セッションに参加したりもした。それは極めて気分の引き立つ旅行であり、戦時中でなかったとしたら面白い愉快な旅行であつたろうとさえ思える。

個々のランプに火がともされた

福祉国家の樹立に必要な法制に対する賛否の論戦は依然としてたけなわであったが、異とするには当らない。

われわれの居住する地域社会における生活条件のほとんどすべての面が新しい法制の影響を受けた。海外市場におけるわれわれの輸出品の処理を含む商取引の伝統的慣行手続きは、ひっくり返えされないまでも、ばらばらにされてしまった。

住宅、医療、育児など、これまではすべて各市民の関心事と考えられていた事柄に関する責任の一部は大いに政府に責任があると考えられるようになっていた。

同様に、これまでも常に個々の地域社会担当者または地域社会の諸機関によって処

理されていた地域社会の責任は、中央政府の諸官庁に肩代りされようとしていた。

ロータリーにおける職業奉仕と社会奉仕に関する重大な疑問が当然表面に出てきた。これらの疑問はわれわれのクラブで特にこの問題のために催された特別会で会員達によって討議された。また炉辺会合においても熱心な少数会員によって討議された。

この小グループでは興味が極めて真剣、極めて実際的になって、この討議活動はその範囲を拡張、ロータリアン以外の人達をも含めて行なったらもっと効果的であろうということになった。フェデラル・ユニオン（N.Z.）の場合と同じように、やがて幾許も経たないうちにロータリーとは全く無関係な別個の集団ができたのだ。だが、そのメンバーは主としてロータリアンから成り立っていた。しかし、この試みをオークランド以外にまで拡張しようとする企ては行なわれなかった。

この会の目的声明の中に次の一節がある。

「この運動の形成に関心を持つ人々の基本的目的は、本会の会員は、現在わが国に影響を与えている、或いは近い将来に影響を与えるであろう政治的、社会的、および経済的諸問題のうち、一つまたは幾つかについての慎重な研究或いは探索の道に進まなければならないということである。」

「全世界の思想家達は、文字通り革命の名こそ冠せられてはいないが、最も革命的タイプの変革がわれわれの眼の前で起りつつある、或いはまさに起ろうとしつつある

ことを指摘し続けている。そしてこれらの事実とこれらの警告に対して、これについて研究したり、建設的提案を示したりすることもなく、ほとんど無視されているのは驚くべきことである。」

「しかしながら、われわれの間では、順応するか然らざれば滅亡するか、二者択一であることを知っている。これは常に変転してやまないこの世界の不変の鉄則であり、万古不易の鉄則である。」

「この冷厳な事実に直面した時、専門職業において、産業において、そして商業において、各界のリーダーと見做される人々の間に自ら認める不安と困惑の状態が余りにもしばしば認められるのである。われわれは暗中模索している——平明な日本語でいえば、われわれは道に迷ったのだ（平明な英語でいうならわれわれは道を見失ったのだ）——道を見失った結果われわれは自信を失い、信念を失ったのだ。」

「今までわれわれが自信をもって立っていた古くからよく知っている基盤の大部分は永久に消え去った。それならば、分別ある人間としてわれわれは、われわれが国家の安寧という大義のために寄与貢献を捧げるのに自信ある確乎たる立場を取り得る新しい基盤を求めようではないか。」

もしわれわれが真剣の度が過ぎるように見えるとすれば、当時政府は既に第二回総選挙に勝って、その綱領第一条に生産と分配と交換の手段は国有とするという大胆な声明を掲げる政策を施行することを誓ったということを思い起して頂きたい。政府は

真剣にその声明の通り実行する意図を持っていることを信ずべき充分の理由があった。複雑な統制の網の目は最後の政府移管を容易にするために計画されたものと思えたのだが、この網の目は日を逐って拡げられていった。事態は重大であった。そして当然われわれもそれについて真剣に考えたのであった。

委員長としての私自身の態度は、用心深く言葉を選んで書かれた声明書によって極めて明確にされた。用心深く言葉を選んだのは、この声明書は主旨において仲間の支持を得なければならぬからであった。もし支持を得られなければ別の委員長が選ばれたに相違なかったであろう。その後の事態の推移を振り返って考えてみると、この時の声明書は今日読んでみても興味深いと思う。簡単に要約してみるとだいたい次のようなものであった。

「われわれは、この問題全体に対して全く新しい角度から取り組むことが必要である。一般政治家、とりわけ特に一部の政治家に対する破壊的批判や罵詈の合唱の声を大きくする手伝いをするをやめて、われわれは分別ある人間として、政治家達の多くは個人として理的で善意の市民であることを認めようではないか。そしてこの人達と協力することを申し出ようではないか。」

「私の見るところでは、われわれの立場は簡単な言葉で綴る簡単な声明によって明白にすることができる。基本的問題は、民主主義と民主主義政府を、一般に認められている、近代国家における経済計画の必要に適応させるという問題である。世界中ど

こに行っても、政府の統制を持つべきか否かということとはや問題ではない。問題はどんな種類の統制を、どのくらい多く持つべきかということである。われわれは、一部の計画主義者がいつているかに思える最大限の量の統制を持つべきであろうか？ それとも、目的を達するために必要な最少限を持つべきであろうか？ 私個人としては、最少限に賛成する。そして、その程度の統制すら、他の人々に統制を施すことに喜びを感じるような人でない人々によって施行されることを念願したい……」

「われわれは、自由について語る時、それは決して社会的制度や経済統制や国の福祉に対する考慮などを排除するような峻厳冷酷な個人主義を意味するのではないことを明らかにすべきである。また、われわれは資本主義と社会主義の両原理が必然的に相互に破壊し合うものと考えてはいないことを明らかにすべきである。それどころか、この両者は互いに相補足修正し合うことによって有利に導き得るものである。私自身の信念は、究極的にはこれらの線に沿って常識が勝利を占めると考えている。」

最初から最後までこのグループの委員長であった者として私はこの努力を振り返ってみて少なからざる誇りを感じるのである。このグループに属していた人達の顔を顧み、この良き友人達の個人としての人柄を回想する時特にそう思うのである。それから幾年も経たないうちにその中の一人は国際連合総会の会長を勤め、三人は最高裁判所の判事に任命され、一人は下院議長になり、そしてもう一人は産業通商に対する顕著な貢献の故をもってナイトの称号を授けられたのであった。さらに他の二十人

に及ぶ人達は、今述べた人達ほどめざましくはないかもしれないが、それぞれ国家のために重要な貢献をしている。この人達こそはニュージーランド国民としてふさわしい責任感を備えた人達であった。

私はこれらの優れた人達に感謝している。そしてまた、われわれの活動に参加して私のために尽くしてくれたそのほかの人達にも感謝している。これらの円熟した、實際的考えを持った人達とともに仕事をしたことは私自身の考え方を培い、これを明確にする上に極めて大きな助けになった。

究極の成り行きは最初からほとんど不可避的に定まっていた。われわれが相寄って研究し討議を続けていた諸問題は、われわれグループの人達の中のかんりの部分が積極的に関係していた国の政治と密接に結び合っていたので、われわれは次第次第に政治の舞台に引きつけられざるを得なかった。

やがて、当時戦時連合内閣の閣僚であったニュージーランドの元首相がわれわれの会合の一つに出席する時がきた。この時私は危難が迫っている前兆を見たのであった。われわれはそれまで、ロータリーとしては決して政治的論争に巻き込まれないように、入念に注意をしていたのであった。しかし私には、私自らが、自分が望んだよりも——或いは自分が考えていたよりも——遙かに深く巻き込まれつつあることがよくわかっていた。国會議員候補者の被指名候補の一人として或る政党の地方支部に私の名を提出することを承諾せよという正式の要請を受けることによって、事態は焦点

に合わせられることになったのであった。指名は確實と見えたし、その議席はニュー
ジーランドでも最も安全な議席の一つであった。

私はたった一人に過ぎない

まず私が明白にしておかなければならないと考えた大切なことの一つは、私が生来
政党政治に積極的に参加するような性格ではないという簡単な事実の認識であった。
主としてこの理由から私はこの勧誘を断わった。

政治的生涯にたずさわって活動している人達によって捧げられている奉仕を私は全
面的にありがたく思っているつもりである。われわれの住む社会の幸福が依存してい
るありとあらゆる活動分野において、最終の責任は政府にあるのだという認識の上に
立ってロータリーは常に協役をもって甘んじなければならぬと公言することを私は
ためらったことはなかった。しかし、それは決して、個々のロータリアンの役割が、
個々の政治家の役割ほど重要でないということではない。ロータリアンの役割は政治
家の役割ほどめざましくはないかもしれない。世間から政治家同様の喝采を受けるこ
とはないかもしれない。また政治家同様の現実的報酬も褒美もないかもしれない。し
かしそれでもなお最高の重要性を持つ役割なのだ。

ポール・ハリスが、普通の市井人も奇蹟を行なう力を持っていると言った時、その

胸中にはこのような考えがあったのだ。セント・ローレント氏がカナダの首相の地位にあった時に「ロータリーは政府の力を凌ぐ力を持っている」と言ったのも、その胸中に同じ考えがあったからである。後に英国の首相になったアンソニー・イーデン氏も、「ロータリーはいかなる外務大臣も及ばないほど平和の推進に寄与することができる」と言ったのも、同じ考えが胸中にあったからだ。そして、ニュージーランド首相、サー・キース・ホリヨークは、「世界はロータリーを必要とする」と言った。

主として私がフェデラル・ユニオン(N.Z.)、および私が委員長を勤めていた他の協会の仕事をしていたために、私は人間関係のあらゆる面においてロータリーの持つ潜在能力は理解を超越するとはいえないまでも、計り知ることのできないほど大きいのだという考えを次第に抱き始めるようになった。しかしながら、ロータリー自体の内側では、この潜在能力を開発し実現化するについてはロータリーは個々のロータリアンの積極的活動参加に全面的に依存しているという点で制約されているのである。いいかえれば、制約を加える要素は個々のロータリアン自身だということである。そして、私自身それから個々のロータリアンの一人なのだ。

古い控えや綴じ込みを調べてみると、爾来今日に至るまで私の考えの基本になり、ありとあらゆる場合に私の演説を書きおろす際の基本になった或る引用句を偶然見つけたのはちょうどこの頃であったようである。その引用句というのはこうだ。「私はたった一人に過ぎない。然り、一人なのだ。私は何もかもすることはできないが、何か

することができる。だから、神のお力添えによって、その私にできることを断固行なうのだ。」

人生においてしばしば起ることなのだが、私個人の問題はとかく問題自体が解決に導いてくれることが多かった。一九四四年に私は友人達から地区ガバナーの役目を引き受けるように迫られた——これは始めてのことではなかった。友人達の要請は極めて強かったので私は真剣にこれを考慮せざるを得なかった。いろいろ考慮しなければならぬ新しい要素もあった。

あらゆる徴候から戦争は終結近しと思われた。勝利は間近だった。時は移りつつあった。否、事実戦争中の最も暗い、最も陰うつな日々は既に過ぎ去っていた。徴兵当局も、より協力的態度を取り得るようになった。従って事業も、より有能な人達の手にゆだねることができるようになった。

明らかに決定を下すべき時であった。私は妻と家族と話し合った。事業の同僚達とも話し合った。フェデラル・ユニオンと「学習および研究協会」の人達とも話し合った。かくして私は地区ガバナーの指名を受諾したのであった。

個人としてわれわれはそれぞれ適性を持っている。われわれはそれぞれ好みを持っている。正しいか間違っているか知らないが、私としては私の持っている適性は、ロータリーの中で、私の役割をつとめることによって私にできる最も有益な貢献をすることができると信じていた。そして同時にそのような役割を勤めることが私にとって

一番しあわせだと信じていた。

地区ガバナーの役目が手始めになって、その後二十年以上もの間ほとんど間断なく国際レベルでのロータリー活動にたずさわることになるうとは全く知る由もなかったことは、私にとって幸いであつた——この二十余年に及ぶ国際レベルのロータリー活動は空の旅だけでも百万マイル以上に及び、その間、とびとびに数年度にわたって私の時間の少なくとも半分以上をこれに費やし、そしてその間の十六カ月の一期間は私の時間のすべてをこれに捧げたのであつた。

「知る由もなかったことは幸いであつた」といったが、それはあらかじめそれがわかつていたとしたら、そのようなプログラムを引き受けることは不可能でもあつたろうし、實際的でもなかったであろうと思うからである。しかし、時の事情がこれを求める時、その都度一つずつ受諾の決定をすることによって、新しく負わされる責任を一つずつ引き受けることは、實際的でもあり可能でもあつたのだ。その間、最初の決定を後悔する理由はただの一瞬といえどもなかった。私はこの二十余年の期間は私にとって最も幸福な、最も満足な、そして私の一生のうち最も有益な期間であつたと、衷心から思っている。

戦時中の旅行制限のために、国際ロータリー本部と北アメリカ以外のクラブや地区との間の個人的接触は、数年間にわたってほとんどなかった。だから私は、一九四四年五月のシカゴにおける国際大会にはあらゆる努力を尽くして出席するようにと求められた。最初は会期に間に合うように赴くことは到底不可能かに思えた。

諸官庁の協力を得て、結局もし適当な時にオークランドを出港する米国の輸送船があるならば私はその船で旅行するということに手配ができた。かなり長い不安な期間を過した後、ある晩九時に私に電話があつて、もし翌朝九時までに乗船することができるならば、負傷兵と回復期の病人とを米国に運ぶ輸送船に乗せてやるという知らせがあつた。輸送船のいろいろの条件をくれぐれも承知の上でと念を押された。

この船に乗せてもらう三人の非軍人船客の中で私は一番先に軍人達にまじってタラップをのぼる列に並んだ。船に乗り込む人達の名前をチェックしていた若い中尉は、私が船客であることをけげんに思っていたようだった。しかし私の名前をリストの中に発見して、明らかに意外に思つたらしいが、私の船室はステイトルーム六号室だと教えてくれた。これはいささか意外だったが嬉しかった。なんといつてもわれわれの持っている英語の語感では「ステイトルーム」といえばなんとなく軍隊輸送船とはか

け離れたものだった。しかし、私の嬉しい驚きはかりその夢に過ぎなかった。

ステイトルーム六号室は喫水線の下にあった。その部屋には一列三段ずつになった寝棚が八列ぎっしり並べてあった。寝棚の間には手荷物の山が乱雑に所狭しと放り出されていた。これらの手荷物から、私のルームメイト達の多くは陸軍中佐と海軍少佐で、その中に陸軍少佐が少しまじっていることがわかった。部屋に入ったのは私が一番先だったので、一番風通しの良さそうな寝棚の上に私の手荷物を置いて、あとは運まかせと割り切った。

私は、これらの軍人達より恐らくかなり年上だろうと思われる私のような民間人が、この人達にはたしてこころよく受け入れられるかどうか、心もとなかった。しかしそれは私の杞憂であったことがあとでわかった。彼等は私を歓迎してくれたばかりか、航海中終始好意ある尊敬の念をもって私を遇してくれた。しかし、陸軍と海軍と陸戦隊の混成である彼等相互の間には互いに尊敬の念もなければ、いわんや親愛の念など全く現われていなかった。私は局外者として彼等相互の間に交わされる言葉や軽口のやりとりを、それが誰に有利に展開しようが、全く頓着なしにエンジョイすることができたのだった。

私自身第一次世界大戦の時母国に向かう軍隊輸送船で航海した経験を持つ者として、船が金門橋に近づき、やがてこれをくぐり抜ける時、船内に展開された感動的興奮の雰囲気はわかり過ぎるほどよく理解することができた。私はサンフランシスコで

上陸したのも嬉しかったが、太平洋を横断したあの異例の旅を経験したこともまた喜びの種であった。他の人々への理解を深めるためには、個人的接触や直接の経験に代る有効な手段はないからである。

上陸後の最初の一時間に私は友人達の笑いを誘う多くの話題を提供したが、当時はこれらの話題は笑いごとではなかったのだ。

私は国際ロータリーの事務局から、国際大会終了後、もし時間の都合がつかずならば「国際理解協会」の主催の下に、私のために講演旅行が計画されるであろうという予告を受けていた。その目的は、ロータリアンおよびその他の人々のためにニュージーランドとニュージーランド国民について話をするためであって、その究極の目的とするところは、国民と国民との相互理解の増進であった。

ほかに何もすることのない退屈な軍用船の長い航海中、私はこの講演旅行がひよつとすると実現するかもしれないという考えから、その時に使える資料を、ごく大雑把にメモし始めて退屈を防ぐことができたのであった。このメモの中には事実や数字に関するものもあった。また、ニュージーランドで現に討論されていた政治問題に関するものや、それらの政治問題についての私の個人的見解もあった。その他戦争と、今後いつか到来する平和に関するものもあった。これらに加えて、資本主義、社会主義、共産主義、ナチズム、ファシズムその他これらのイズムのありとあらゆる変形についてのいろいろの考え方を、手当りしだい書き記した。

アメリカ合衆国から私に届いた一般的のニュースや情報から察すると、福祉国家という考え方は、それがどんな形であろうとも、米国で私が今後会うであろうと思われる人々からは大いに疑惑の眼をもって見られるであろうことは、私の心中にいさかの疑いの余地もなかった。そして、ニュージーランドはその当時、そのような方向に向かう傾向を持つ国として最悪の実例だと考えられていた。忠実なるニュージーランド人として私の書いたメモは、少なくとも私がわれわれの立場を弁護するにやぶさかでなく、場合によっては防禦の手段として反対論に攻撃を加える気配すら示していたのは当然であった。

やがて私は、私自身の用に供するために書き留めておいた資料の中には、危険思想の侵入に警戒の眼を光らせることをその職務としている人達によって、容易に「危険思想」の烙印を押されかねないようなものもあることを思い知らされる破目になったのであった。しかし、私はサンフランシスコの波止場で携帯品の検閲を受けるまでは、そんなことになろうとは思ひ及ばなかった。

私のかばんを調べていた税関検査官は、私の書いたメモの束までくると手を止めて、数頁拾い読みした。彼は静かにその場を離れたと思うとまもなくもう一人の役人を連れて来たが、この人は明らかに関税よりも安全保障の方により深い関心を持っているようであった。

長い訊問の間に私は、前に記したような、寄せ集めメモの由来を述べた。その時私

が、無事に波止場を離れることができたのは全く私の述べた一部始終の中のロータリーに関する部分のお蔭であったと、今でも固く信じている。私のメモの入った鞆は、旅券とともに召し上げられた――察するに安全保障のために。しかし三日の後、嚴重に封印が施されて私の手に返ってきた。とかくするうちに、サンフランシスコのロータリアン達の友情は波止場でのいささか冷たい歓迎を償って余りがあつた。

第一の障害は乗り越えた。しかし、国内的たると国際的たるとを問わず、政治との関連についての国際ロータリーの方針に関する討議の渦中に私が巻き込まれることになるのはこれからの話である。

一九四三―四四年の国際ロータリー会長は、サンフランシスコ・ロータリークラブの会員、チャールズ・L・ホイラーであつた。ニュージーランドを出る前から既に私は、チャーターが、国際キワニス、米国商業会議所、およびアメリカン・リージョンの各会長（或いは会頭）とともに、それぞれの組織体の会員達に対して、戦争が終つたならば戦時中の政府統制の撤廃と自由企業体制の復活とに向かって努力することを強く要請する共同声明に署名したことを知っていた。

国際ロータリー会長のこの行動は激しい論争を捲き起したが、とりとけGBI（グレートブリテンおよびアイルランド）のロータリアン達の間に白熱化した。ある場合には抗議する人達のグループが会長の行動を非難する決議を採択した例も幾つかあつた――これはロータリーの世界においては極めて異例の出来事である。

サンフランシスコに到着した翌日私はサンフランシスコ・ロータリークラブの例会に出席した。チャーリー・ホイラーが進んで自らを紹介して、当時戦時中の状況が会長の活動に影響を及ぼすのに対処するために国際ロータリーがサンフランシスコに設置していた事務所で語り合おうと申し出たのは、私にとって誠に嬉しい驚きであった。

チャーリー・ホイラーとの初対面から得た私の印象は、後になって十分に確認された。チャーリーは海運界における活動的な極めて有能な経営者であった。彼はまた、親しみやすい、友好的な、真摯なロータリアンであった。彼の第一の関心は、私が何を望むか、どこに行きたいか、何を見たいか、を知りたいということであった。チャーリーは、私の望みはそんなに厄介なものではないと言った。私はロータリー、ロータリアン、ロータリアン以外の一般の人達、そしてそのほかにはアリゾナのグランドキャニオンと、ただそれだけが見たいのであった。

チャーリーはさらに語を継いで、他国——それも特にニュージーランド——を代表してやって来たロータリアンとしての私から、私が政府統制と自由企業に関連して彼の取った立場についてどのように感じているかを、腹藏なく私の口から聞きたいのだということを明らかにした。チャーリーは私に率直に話して欲しいと求め、私はこれを受諾した。

勿論私は、熱意に燃える、国際ロータリーのために忠実に役に立つ仕事をしたいと

張り切っている次期地区ガバナーとして、初めて会長に会った時、会長とまっこうから対立する自分自身を発見して立たされている私の困惑の立場を訴えた。

私はまた、ニュージーランドでは、チャーリーが国際ロータリーの会長として宣言をしたあの共同声明の対象となった論争点を中心として総選挙は戦われ、勝敗が決せられたということも話した。この問題が米国でも論争的になっている政治問題だといきえることはできなかった。しかし、ニュージーランドではこれが実情であったことは疑いをいれなかった。そして私には、英国、豪州その他恐らくデモクラシーと認められている国々では、どこでもそうであったと信ずる理由があった。

一九七三年になると、ニュージーランドの事業経営者は、“生産、分配および交易手段の国有化”という社会主義の政策を全関係者が都合良く忘れてしまったといったような政治的背景の下に事業を運営するようになっていたのであった。それは今日の労働党政治家達に話すのが気がひけるほどのありさまであった。ともすれば政治思想の主要な二大潮流の間に明確な分岐線を画することがむずかしいほど、今日では両者はこれらの問題すべてについて合意に近づいているのである。勿論、そこにはまだ論争的政党政治にまき込まれることなしに自由討議のできる余地が多分に残っているのはあるが……。

このような情勢下にあつては、現代の事業経営者達が、当時彼等の父や祖父達が、健全な伝統的事業のやり方や慣行に対する政府の不当な干渉だと考えて政府の政策と

闘った闘志の深刻さを理解することは、不可能ではないまでも極めて困難であるに相違ない。このような考え方は世界中のどこよりも米国の実業界において最も深刻であり、最も顕著に認められた。しかも私が、ロータリーが、自由企業に対する政府の干渉という問題に関してロータリーという組織としての意見を表明することの是非についてチャーリー・ホイーラーと討論したのは一九七三年ではなくて、一九四四年のことなのだ。

チャーリーとの会見はかなり長時間にわたり、その間チャーリーは私に質問し、私はそれに対して最善を尽くして回答を提供した。彼は興味を示してくれたし、鄭重でもあり忍耐強くもあった。しかし彼は、政治的信念の何たるを問わず、いやしくも民主主義を信奉する者ならば受け入れなければならない、そして尊重しなければならない基本的自由の一つだと彼が考えているものを彼の政治的考慮の対象とすることは到底できないことを明らかにした。彼はしかし、この課題はすべて来るべきシカゴの国際大会において討議の対象として取り上げるであろうことを確約してくれた。

民主主義と民主主義者

サンタフェ鉄道でシカゴに行ったので、私の一生の願いであったアリゾナ州のグランドキャニオン観光の目的を達することができたのは幸いであった。それ以来私は世

界の驚異といわれていた観光地を、全部とはいえないまでも、大部分訪れたのだが、グランドキャニオンを見た私の第一印象は少しも変ることがなかった。畏敬の念をさえ起させるような壮嚴と美の絶景として、グランドキャニオンは他の何物にもまさる、そして何物にも凌駕することを許さない最大の絶景である。それから二十年の後私は妻を伴って彼地を訪れたが、二度目の訪れであったにもかかわらず、実に接した時の感激は予期した所を遙かに上まわるものがあつた。それは私の記憶が頭に描いていた所に優るものだった。私はこの絶景を見ることができたことをありがたく思っている。

シカゴに着くと、豪州バースのシンクレア・マックギボンの逝去によって生じた空席を埋めるために国際ロータリー理事会入りがきまっていたニュージールランド、ウェリントン・ロータリークラブ会員ジョン・アイロット（後のサー・ジョン）が迎えに来ていた。既に他の章で述べたように、その晩私達二人は地元のロータリアンの家で開かれた炉辺討論会に出席した。チェス・ベリーもその討論に参加していた。

私はその時以来、チャーリー・ホイラーがチェスに、ニュージールランドから来た急進的な次期ガバナーのことを知らせてやったのかしらといぶかしく思うことがしばしばある。この会合はほかの目的のために開かれたのであつたが、討議はほとんど始まるやいなやニュージールランドにおける福祉国家の樹立の問題に移り、さらにその他の地域でも見られる同様の傾向およびこれらの傾向がロータリーに及ぼすかもしれない

い、或いは恐らく及ぼすであろうと思われる影響についての討議に移行していったのであった。

言葉、意味論、言葉の意味の問題がすぐに論議の的になった。米国の友人達にとっては福祉国家とは社会主義国家のことであった。そして、このような意味では福祉国家は自由ないしは私企業の基礎の上に成り立つ経済に依存する国家に対して正反対のものであった。

ジョン・アイロットは米国流の「殴り倒して引きずり出す」式の討論を、その晩のホスト達の誰にも劣らず楽しむことができた。しかし、社会主義国家の考え方は、ホストの人達や私に気に食わないと同様に彼にとっても気に食わなかった。しかし彼も私も、福祉国家は社会主義と同じものではなくて、自由または私企業に基礎を置くことのできるものであり、またそうであるべきものだと考えていたのだ。

約三時間にわたって討論は続いた。その間何をいおうと一切おかまいなし、全くの自由発言であった。一人の地元のロータリアンが、彼にとっては何をいっても自由が第一であって、その中には、自分の商売を自分流儀にやって財産をすっ飛ばす自由も含まれているといったのをよく覚えていた。しかし彼は米国がきちがいじみた社会主義の計画経済政策のために破産するのを見るのはまっぴらだというのだ。この言葉はすぐさま他の一人をしてこう言わしめた。「もう既にわれわれは政府のおせっかいをいやというほど味あわされた。しかしわれわれがそのための費用を税金で召し上げ

られている額を考えれば、まだまだ政府のおせっかいは少ないことを神様に感謝しなければならぬ」。

私はこの二人の言葉を合わせた中に含まれている考え方ほど当時の米国における実業界の人々の態度を的確に表わした表現を聞いたことがないと、本気で思っている。

私はまた誰かが私に、私の考えは共産主義とどう違うのか説明して欲しいと詰め寄ったのを覚えている。それに対して私は次のように答えた。

「私がニュージーランドでやっている仕事は私一人の個人事業として始めたのだ。私が今ニュージーランドでもう一つ同じような仕事を始めようと仮定した場合、いつでもどこでそれを始めようとこれを妨げるものは何もない。また、政府の提案に反対して私が何をいおうと、或いは、政府を政権の座に残すかそれとも政府を倒して自分の選ぶ政党をその後がまに選ぶかの問題について私が自分の選ぶ方に投票しようとして、これを妨げるものは何もない、等々と」。

勿論この討論は友好的な和気あいあいたるもので、われわれは数においては圧倒されたにもかかわらず、この会合が散会した時、ニュージーランド方はまだ戦闘を続けていた。

「戦後の世界におけるロータリアンの役割」を課題とする国際ロータリーの委員会が、ルサー・ホッジスを委員長として国際大会の前に開催されることになっていったが、戦時下の困難な交通事情のためにこの委員会のメンバーは北アメリカのロータリ

アンに限られた。恐らくそのためであろうか、たまたま他に何の役目も持っていないかったこともあって私はこの委員会に出席するように招待を受けた。

この委員会の主たる関心事は「ワーク・パイル・プロジェクト」(訳者注―職業準備計画とでも訳すべきか)として知られる構想であった。これは、ロータリークラブは、戦争が終結した時市民生活に戻ってくる兵士達のために適切な雇傭を提供できるように、今直ちに行動を開始すべきことを、それぞれその所在する地域社会において率先提唱すべきであるという考え方であった。戦争終結後当然やらなければならない仕事で、個人や企業体が手がけるであろうと思われる仕事を、各地域社会ごとに調査してそのリストを作るべきだということが提案された。

私がこの委員会に加わった時委員長は、北アメリカではこの計画は既に大いに進歩しているが、北米以外の地域ではこの計画への関心を充分に喚起することが困難であると言った。委員長は、なぜ北米以外の地域ではそれが困難なのか、私からその説明が聞けるのではあるまいかという希望を述べた。

最初に私の頭に浮んだことは、この計画が或る一定の国において人々の間に喚起する関心の度合いは、その国の政府が帰還兵士の社会復帰についてどの程度責任を取るかの度合いを反映するのではあるまいかという考えであった。かくて私は、たちまち再び政府の責任はどこで始まりどこで終るかの討論に巻き込まれることになったのである。

私は委員会に対して、ニュージーランドの雇主達は、戦争が終った時帰ってくる兵士達を再び受け入れて原職に復帰させるために、人間としてできる限りのことをするであろうと断言した。しかし全体的な責任は政府に属する。そして、ニュージーランド以外でも、かなり多くの国々で、程度の差こそあろうが同様の状況が認められるのではあるまいかとも言った。この委員会における討論の結果、何らの意見も委員会の記録としては残されなかったが、私の見るところでは、各委員は皆それぞれ、いったい実業にたずさわる人達が政府に対する関係においてこのような事情が発生するほど惑わされることがどうして起り得るかといふかっていたことがよくわかった。

戦時中の国際大会

私は、委員会が私をそのメンバーとしてその会合に招待してくれたことを多とした。またその会合中私に示された幾多の好意を多とした。それはいろいろの意味で、興味深いそして教えられるところのある経験であった。それは、国を異にする人々の間には、一様に各々の考えに従って民主主義制度を守るために命を賭けて戦うことを厭わなかった人達でありながら、当時における前途の見通しについては如何に大きな相違があったかを示す証左であったということである。

一九四四年以来国際ロータリー大会は数多く開催された。しかし私に関する限りこ

の年の大会のような大会は二度となかった。参加者総数は僅か四〇三名に過ぎなかった。そしてそのうち、南北アメリカ以外の国々から来た者はたった二十五人であった。公式発表によれば、豪州から一人、南アフリカから一人、ニュージーランドから二人、英国から一人……その他であった。

国際大会それ自体と国際協議会、それに規定審議会を加えた全日程は、全部で五日間に組まれていた。私にとっては始めての経験だったので、三つの中のどれが今行なわれているのか見当がつかないことがあった。ある時この三者の混乱について会長が詫びを述べたのを耳にするまでは、私が並はずれて鈍感なのだと思い込んでいた。会長は、この日程は「三つの興行場で同時に行なうサーカス」のようなものだったと言った。

反面、そこには償いもあった。参加者が少ないために、その場の雰囲気は個人的であり、親近感に満ちていた。ポール・ハリスも出席していて、特に海外から来た連中を探し求めて、これらの人々と友誼的な、くだけた会話や論議を交わすことを喜んでいるように思えた。

チャーリー・ホイラーは、その会長演説で次のように述べた。

「私が受け取ったたくさんの手紙——およびたくさんの方のロータリアンと語り合ったところ——から考えると、ロータリーは全世界にわたって起りつつある政治的および経済的变化を感じ取っているに相違ないと思う。過去においてわれわれは、ある幾つ

かの地域で、結局ロータリーを排除することに成功した政府の経済体型と哲学とにさらされたのであった。われわれの中の一部の者は、組織としての国際ロータリーにとって極めて重大な危険をもたらす情勢に向かって時代は推移しつつあるという歴然たる証左を認めている——それどころか、われわれが今日まで死力を尽くして守り続けてきた原理と理想をすら危殆に陥れるような情勢に向かって動きつつあることを見抜いているのだ。」

「ロータリーを党派的政治問題に追い込むような計画を、何か考え出すか主唱するかすべきだというようなことは、私にとって思いもよらないことである——しかし、同時に私は、今日世界で起りつつある事実——そして将来も世界で起るかも知れない事実——については、われわれは現実的でなければならぬと衷心から思うのである。頭を砂の中に突っ込んで、われわれの周囲で起りつつあることはわれわれの知ったことではないという態度をとることは、何ら得るところがないのみか、元も子もなくしてしまうことになるのだ。」

「もしもわれわれが、ロータリーは主としてフェローシップのために——或いは心身障害児童救済のために——或いはまた、われわれが従事しているその他の人道的活動のために組織されているのだというとなれば、われわれは現実的であるとはいえない。人類に対するこれらの望ましい恩恵をいささかも滅殺することなしに、われわれがロータリーと名づけるこの組織はこれらの活動を可能にする手段であることを悟ら

なければならぬ。もしも、一方においてこれらロータリーの通常の有益な活動に専念しながら、その組織自体の存立を危うくするような事態が生ずるのを腕をこまねいて傍観するとしたら——いったいわれわれは何をしでかしたことになるだろうか。」

「私はロータリーに対して——或いはロータリアンの集団に対して——或いは個人としてのロータリアンの誰に対して——私自身の好む計画や理論を受け入れることを求めているのではない——私自身の政治的考えに同調することすら求めているのではない。しかし私は全世界のロータリークラブに対して、拡大すると縮小すると、或いは完全に除去するを問わず、いやしくもそれに変更を加えたとしたら、「ロータリーの四つの目的」(訳者注『當時は「ロータリーの目的(綱領)」は一つでなく四つであった)の究極的達成をぶちこわしてしまうような基本理念を、堂々と自由に研究し討論することを求めることができる——否、強く促すことができる——とさえ信じている。そして次に私は全ロータリアンに対して、それに対する答を自分の心の中に求めて欲しいと訴える——そして、その答を自分の心の中に見つけたならば、衷心から、良心的に正しいと信ずることのために、その持てる限りの精力を傾けて戦うことを求める。」

「たとえわれわれすべてが上述の通り実行したとしても、われわれの考えがただ一つにまとまろうとは決して思っていない。われわれの考え方はそれぞれその住んでいる地理的環境によって影響されるし——職業の種類にも関係があらうし——その他普通の人間が影響を受けるあらゆる要素の影響を受ける。しかし私はロータリアン達

の心に、理性に、そして良心に信頼している。私は、われわれがロータリーにおいて長い間語り続けてきた原理そのものをこれらの問題に適用しさえすれば、われわれは皆同じ目標に向かって進むことになるに相違ないと信じている——たとえば、時として、同じ目的に達するために辿る道が多少違うように見えることがあるとしても。私はまた、このような問題についての論議がロータリー全体にみなぎっているすばらしい善意と理解とに水をさすことを許すには、ロータリアンのロータリーの目的に対する忠誠心は余りにも強固であることを信じている。」

「最近ロータリーの内外を問わず、自由な私企業制度保善についての論議が盛んである。約一年前国際ロータリーの理事会は、『私企業が富の生産と分配の基礎とされている地域にあつては、ロータリアンとロータリークラブはこれを改善し、持続させるためにあらゆる努力を傾倒すべきである』という趣旨の決定を記録に残している。」

「去る十二月に私は他の組織体の首脳者達とともに一つの声明書に署名をしたが、その声明書の中には、私としては『暴政、奴隷制度、弾圧の諸悪から解放された世界経済実現のために努力して、何者によっても搾取される懸念なしに計画し、働き、そして生活し得る個人の自由を維持するために尽くすよう、——そして『私企業制度を育成しこれを強化するために、戦争終結と同時に戦時中の統制を、秩序をもって、しかし全面的に撤廃させるために、尽力するよう』、ロータリークラブを激励するとう声明が含まれていた。」

「これらの声明は二つとも、一般にロータリアンに好感をもって迎えられた。しかし、これらの声明の意図が明瞭に了解されなかったと思われる例も二、三あった。」

「“エレベーター”に乗ろうと“リフト”に乗ろうと——或いは“市街鉄道”に乗ろうと“トラム”に乗ろうと、何ら相違はなかった——事故さえなければ、われわれの目指す目的地に到達することは間違いなかった。しかし、無形の分野となると、一つの言葉がある地域で理解される意味と他の地域で理解される意味との間に大きな相違があることに對して常に警戒を怠ることができない。昨日の理事会で一つの決議が制定されたがこの決議は、四つのサービスタグの首脳者達によって起草され発表された挑戦——或いは声明——の解釈をめぐって引き起された誤解を完全に払拭すること間違いなしと私は信じていることを本大会で報告することを喜びとするものである。」

「私は世界各地のロータリアンに對して、自分達の社会的、經濟的、或いは政治的見解を他の国のロータリアン達に押しつけようとするような意図や傾向を、少しでも持っているようなロータリアンのグループは、私の知る限り、どこの国にもいないと確言することができる。われわれは、ある人々が彼等の“システム”を他人に押しつけることができると考えたからこそ、今日この龐大な、世界を挙げての大戦争を戦っているのだ。ロータリーの世界においては、そのような態度は許されないのだ。ロータリークラブ或いは地区がその資格において、かくかくの社会經濟、社会制度、或いは社会秩序に、賛成するとか或いは反對するとかいう決議や陳情を採択することには、

私は賛成することはできない。われわれが行なう討議の目的は情報提供的であり、教育的であるべきであって、その目的とするところは常に世界各地のロータリアンがそれぞれその生業においてその責任をより効果的に果たすことができるようにするにある。」

「社会的、経済的政策は——良かれ悪しかれ——大体において世論の所産である。もしも、われわれが自認する通り、ロータリアンは各国における実業人と専門職業人の考え方の粋を代表するものであるならば、われわれのクラブにおいてこれらの問題を公正に討議することを怠って、世論の造成に寄与する任務を放擲してよいものだろうか？ 私は断じてそうは思わない。」

チャーリーの深い関心、そして、勿論理事会の関心も、上述の言葉の中に明らかに示されている。それは、この時までに造成されていた情勢に対処するすばらしい腕の冴えであった。それは、今後ますます国際ロータリーの方針について、より明確な決定を迫るであろう幾多の困難な問題が次々に増えてきたことを、大会参加者の脳裡に鋭く刻みつけたのであった。われわれは皆、全世界——少なくともその大部分に適用できるような法律を作ることとは容易なことではないということを学び始めていたのであった——たとえば、みんながそれに協力的であったとしても。

米国に在って、母国に在ると同様のくつろぎを味わった

国際大会が終るとわれわれ海外から来ていた者はどうして国に帰るかの問題にぶつかった。船舶の動静は厳重な秘密事項であった。われわれにできることはただ母国行き船舶を申請して、あとはただ通知と指図の来るのを待つだけだった。

船便が取れた場合はいつでも旅程の残りの部分は取り消してもよろしいという了解の下に私はロータリークラブ歴訪の講演旅行に出発するように取りきめられた。

最初の会合はオハイオ州、フィンドレイであったが、そこで私は記念すべき新しい経験をした。食事とクラブ・ビジネスは型通り行なわれたが、さてこれから私が話をする時間になると、会員の夫人、家族、親戚の人々に加えて、私の話に特別の関心を持つ人達で会場はいっぱいになった。

ロータリークラブの会合にこのような異例の関心が示されたのについては単純な理由があった。当時米国軍はニュージージランドを太平洋戦線の基地の一つとしていたので、これらの人々は公式発表で知らされるよりもっと個人的な消息を聞かせてもらえ人からの情報を渴望していたのであった。

私は、米国軍隊を運ぶ最初の船団がオークランドに到着した時にニュージージランド全土を覆った安堵の気持をこの人達に伝えることができた。ニュージージランド自身の

軍隊は遠く北半球の戦闘に従事していたので、母国は敵の侵略に対して全く無防備であつたのみならず、われわれは敵の侵入を予期していたのであつた。

私はニュージールランド人として米国に対する感謝の念を表明し、さらに私自身の家庭に彼等の子弟達——彼等自身の子弟でなかったら、彼等自身の子弟と同じような、他の親達の子弟——を迎え入れた経験を話した。

米国民と、英語を国語とするその他の国々の国民との間に、でき得る限り緊密な協力を打ち建てるのが急務であるという私の持論が、当然私の話の中に浮び出てきた。

閉会の時間がきた時会長は私に、もし聴衆の中にあとに残って質問をしたいと望む人達があつたらあなたも残って質問に答えてくれるだろうかと尋ねた。勿論私に異存はなかった。ただし、残る義務があるように思う人があつては困る、ロータリーの会合は時間通り終るべきだから、と付言した。散会しようということになったのはそれから一時間半の後だったが、聴衆のほとんど全部は残っていた。

ニュージールランドの歴史、地理、および人民に関するありとあらゆる質問が矢つぎばやに出された。私は母国で何語を話しているかと聞かれた。また、ニュージールランドでは、アメリカに移住した人々が独立戦争前やっていたと同様に、英国に対して税を納めているのかという質問もあつた。英国からニュージールランドに入ってくる商品に対してわれわれは輸入税を課するのだと私が答えると、両国の間の憲法上の關係を説明して欲しいと求められた。等々等々。

私にとっては記憶すべき会合であったばかりでなく、忘れることのできない会合でもあった。これらの良き人々の中に混じって完全にくつろいだ気持ちになったことは私にとって大きな歎びであった。一種の一体感がこれによって醸成されたが、この一体感はその後三十年以上に及ぶ米国五十州のほとんどすべてにおける同じような経験を通じて私の頭から離れることはなかった。そして他国の人々との間のこの友情に対する信頼は何物にも替えがたい宝である。

フィンドレイ・ロータリークラブの会員としてこの会合に出席していた、地元の石油会社の社長が、同じ日の午後開催された年次株主総会に招待してくれた。私は喜んでこの招待を受諾したが、その議事の模様は非常に興味深いものであった。彼は、その晩私が乗車することになっていた鉄道の社長をも兼ねていた。彼は私をその停車場に連れて行ってくれたが、驚いたことに彼はいつのまにか自分の専用客室を私の旅行のために提供する手配をしてくれていたのであった。

これは私にとって、アメリカの商工業の最高幹部の人達は勿論、その他米国における職業の最高幹部の人達の間に見られる、友誼的心やささと気前の良さを示された最初の経験であった。オハイオ州フィンドレイのロータリアン達と過したこの日の記憶が、二十九年前でなくて二十九日前のことであったかのように生々しく、鮮明に残っているのも不思議ではあるまい。

その後いろいろの中心地で多くの会合に出たが、これらは皆大体において同じ型の

行事であつた。しかしペンシルベニア州フェニックスでの会合に出るに至つて、私の記憶にはもう一つ忘れ難いものが刻みつけられた。ロータリークラブの会長が私を停車場に出迎えてくれて、二時間ほど時間の余裕があるから、ヴァレー・フォージを訪れてはどうかと勧めてくれた。彼は目もとにユーモラスなおもちをただよわせながら、「もし英国のお方がヴァレー・フォージに近づくのはまっぴらだと仰るなら、そのお気持はよくわかります」とつけ加えた。(訳者注①)

私がそれに答えて、歴史的興味の旧跡の中でヴァレー・フォージほど私に魅力ある所はめつたにありませんと答えた時、舞台の準備はととのつた。ヴァレー・フォージでは、彼がいろいろ興味ある旧跡の意義について説明をしてくれて、われわれは愉快的な時を共に過した。

会合に戻る道すがら、私は急に思いついて一つの決断をしたのだが、その後三十年の経験を積んだ今日だったら、同じような決断をすることは容易にできなかったであろうと思う。私は、それまで他のクラブで話をする時に使っていたメモを捨てて、この日の会合では、ジョージ・ワシントンをニュージーランドではどう思っているかについて話したのであつた。英国陸軍に対して米国陸軍を指揮している米国の將軍としてではなく、百年前にクロムウェルがもっと激越な方法でやつたと同じように、頑迷な國王とさらにそれよりも頑迷な英国政府に反抗して、移住民仲間を指揮して戦つた英国からの移住民として、ニュージーランドの人達はワシントンを見ていると話し

た。

ワシントンは正しかった。彼は他国に移住した英国民が二度と再び繰り返さなくて済むような仕事をやってのけたのだ。われわれはそのことに対して感謝しているのだ。講演者というものは、その講演がある時はうまくいき、またある時はうまくいかないことを、いろいろにがい経験をしながら悟るものなのだが、フェニックスにおける会合は、最初から終りまでうまくいったものの一つであった。

丁度この頃、私はニューヨークに行つて、指図があり次第いつでも乗船できるように待機せよとの通告を受けた。当局は、時の事情が許す限り極めて協力的であつて、数日の後には、私はワシントンに行つて、そこで数日間滞在して連絡を待つように取り計らってもらつた。このことは私にとって大きな喜びであつた。というのは、クラレンス・ストレイト（訳者注②）が既に手紙と電話で私に連絡をとつて、自分の家に泊まるように招いてくれたからである。

それから既に三十年過ぎたが、クラレンス・ストレイトと過した数日の印象と記憶は、昨日のことのようにはつきり残っている。一面予言者であり、一面詩人でありながら、他の一般世界の実際活動家達とのつきあいにおいては実際的な人であつたクラレンス・ストレイトは完全な改革運動の戦士であつた。間然するところなき、多才の人であり、すばらしい人であつた。

始めてワシントンに來た私には、クラレンスはワシントンで知っていなければな

らないようなことはなんでも知っているように思えた。彼は私を多勢の興味ある人達に紹介してくれた。また私をルーズベルト大統領に個人的に会わせるために、わざわざ記者会見の会合に私を連れて行ってくれる取りきめさえもしてくれた。しかし、この記者会見が行なわれる前の日に私がニューヨークに呼び戻されることになったのは返すがえすも残念であった。

クラレンス・ストレイトに会い、彼の家で彼等夫婦と数日を過ごし、そして「今こそ国家連合を」運動を共にする夫婦の友人達や同志達と会って共通の関心事について夜遅くまで論を闘わした事など、いずれも容易に得難い恩典であった。私の米国における経験と米国で会った人々を知り得た経験とに最後の仕上げを施すものとして、これほど嬉しい、ありがたいものはあり得なかったであろう。

私が辞去する前、クラレンスは『今こそ国家連合を』の初版百冊を私にくれた。これらの本は、私が宝として特別金庫の中に納めている品々とともに常に秘蔵されている。

ニューヨークで私は、ロンドンから母国に向かう汽船リムタカに乗船した。船客名簿はほとんど軍人ばかりで満たされていた。ある者は傷病兵、ある者は特別任務を帯びてニュージールランドに帰る人々、そしてその他の人々の中には少数の政府関係の役人達があった。

われわれは四十隻以上の船団を組んで、敵の潜水艦攻撃に備える軍艦に守られなが

ら、まずキューバのグアンタナマに向かった。そこからわれわれは、より小さな船団となってパナマに向かったが、パナマから先は単船航海で太平洋を横切った。

訳者注(1) ウァレレー・フォージは米国独立戦争の激戦地で、英国軍が惨敗を喫した所。

訳者注(2) 前出(一三三頁)。一五六頁)。、世界連邦主義者。

地区ガバナー

ロータリーにかかわりを持つ者が持ち得る、もっともすばらしい個人的経験の一つは地区ガバナーの仕事である。第一に、この役目に指名されることは、彼を最もよく知る人々、即ち彼の属する地区内のロータリークラブとロータリアン達によって直接個人ロータリアンに与えられる最高の榮譽である。

第二に、地区ガバナーという役目は、ロータリークラブと個人ロータリアン達とが力を合わせて捧げる努力の集積を、直接に参与することによって観察し得る最も広範な立場を提供してくれる。

一つのクラブの会員としてそのクラブの日々の動静と活動に参加していることによって、ガバナーは当然五十ばかりの地区内クラブのあり方と活動について責任を感じることになるが、これらのクラブはある面では皆同じような共通点を持ち、他の面ではクラブ一つ一つが皆異なるものを持っているのである。

地区ガバナーは国際ロータリーの役員である。彼は理事会と彼の地区内クラブとの間をつなぐ連結桿である。情報と指導は彼を通してクラブに伝えられる。しかしこのことは一面を語るに過ぎない。彼はその地区内クラブの活動についての情報を理事会に伝える責任がある。特に重要なことは、新しい考え方、新しい構想、新しいプログラム、或いは現存の構想やプログラムを地方の条件に適応させること等について、理事会は常に熟知させられていなければならないということである。三百人の地区ガバナーが七十五万人のロータリアンの活動を見守っているということは、国際ロータリー理事会のメンバー十七人にとって非常な助けになるのである。

これに匹敵するような機能を持つ役割をつとめるところは、ロータリーでは他にないのである。ガバナーという役目の重要さはある程度、国際ロータリー細則の中にガバナーの任務がいかに入念に規定されているかによっても窺える。国際ロータリー会長の任務については一パラグラフ、国際ロータリー理事の任務についても一パラグラフしか費やされていないのに、地区ガバナーの任務を概説するために十一パラグラフを費やしているのだ。全世界にわたってロータリーを管理する上にガバナーの占める地位は最も重要とされているのである。

私が地区ガバナーの地位についていた一年間、私はその任務遂行上あらゆる面において戦時中の旅行制限のために多大の不便不都合を蒙ったのであった。シカゴに赴くための往復旅行に關して私が経験した困難は、その第一歩に過ぎない。長距離の自動

車旅行はガソリンの配給制度のために問題外であったし、航空便の利用は政府および軍部の専用とされていた。

四十三クラブへの公式訪問、二つの島で別々に行なわれる二度の地区協議会、および九つの新クラブ結成のための旅行日程を組まなければならなかったが、このような日程を鉄道とバスを頼りに計画することは、例会日を喜んで変更してくれる各クラブの協力なくしては到底不可能であった。たといクラブ側の協力があつたとしても、決して容易なことではなかった。ある時は、二週間の期間に十クラブを訪問したことすらあつた。

そのほかに米国でもやっている、数クラブが連合して開催するクラブ連合会合や一般人を交える公開会合もあつた。これらの会合におけるプログラムは、米国で行なわれていたところと全く同じで、ただそれを裏返しにしたに過ぎなかった。即ち私は、戦時下の米国における私の観察と経験とをニュージーランドの人々に話したのであつた。

ある時このような公開会合の一つで私は、私の実生活の中で経験したいろいろのおかしい経験の中でもとりわけおかしい経験をした。その会合は大都市から約二十マイル離れた、比較的小さな田舎町のロータリークラブが計画したものであつた。その大都市のクラブ会長と幹事が、夕食後私のホテルに迎えに来て、その田舎町の会合に連れて行ってくれることになっていた。

二人がホテルに着いた時はどしゃ降りの雨だったが、このような時に普通誰でもやるように、誰かが車の内側からドアを開けてくれた。で、私は一瞬のためらいもなく、すばやく車に乗り込んだ。車の中には会長と幹事のほかにもう一人うしろの座席に座っているのに気がついたが、誰も紹介してくれなかったもので、誰か私の知っている人だろうと思って、そのまま気にも留めなかった。

われわれがその田舎町に着いた時、どしゃ降りの雨は依然として降りつづいていたが、会合の場所がどこなのか確かに知っている者はいなかった。一、二度探してみたが見つからなかった時、うしろの座席に座っていた人が初めて口を開いた。彼は、「こないやな晩に出かけて来るのがそもそも間違いなだから、みんな家に帰ろうではないか」と言った。そしてさらに続けて、「もし会合の場所を探し出したとしても、われわれは、どこの誰だか知らないが、われわれにはなんの興味もないことをひとりよがりになしやべくるのを聞かされるのが落ちなのだろうから……。」と言った

車を運転していた会長は、たまたま音に聞こえたユーモリストであった。彼は車を止めて後部席のこの男に、私が誰であるか知っているかと尋ねた。その男の答は、「いや、知らない。君は紹介してくれなかったもの」であった。そこで会長が言った、「これが今晚しゃべることになっている。どこの誰か知らない」男なのだよ」。

詫びごとと、言い訳がそれに続いた。私も、ロータリアンとして当然すべきであった自己紹介を怠ったことを詫びた。それは正に間違いの喜劇であった。このジョーク

を楽しむことができなかったのはこの「後部席のわが友」だけだった。彼以外の者にとっては、実話にしては余りにもよくでき過ぎていると思えるほどだが、これはほんとうにあった話なのだ。私は、三十年経った今でも、思い出しては、笑いが止まらないのである。

地区ガバナーが予備訓練を受ける国際協議会では、ガバナーはロータリーの国際性の現実にとさらされる。彼は個人として自分の地区の管理と安寧とに責任を負う一方、全世界のロータリーを代表する会長を頂点とする国際ロータリーの三百に近い役員のチームの一員であることを学ぶのである。彼はまた、それはチーム精神を持つ、本当のチームであることを学ぶのだ——「すべては各個のためにあり、各個はすべてのためにある」というチーム精神を。

そこには新しい天地が開けるのだ。彼のロータリーについての考え方と理解とに、新しい次元が加えられるのだ。それまでロータリークラブによって捧げられる寄与貢献という見地から考えていたのが、国際ロータリーの地区の寄与貢献という見地から考えるように変えるということは、ロータリーの可能性と業績を国家的、国際的水準において考える方向に向かって一歩歩を進めることになるのだ。そして、そこには新しい天地に焦点を合わせた新しい展望が開けてくるのである。

しかし——これはいささか逆説的なのだが——焦点の中心点は変っていないのだ。そんな訳で、私のファイルに眼を通して見ても、地区ガバナーとして私が地区のロー

タリアン達に訴えたことは、七年前私がクラブ会長としてオークランド・クラブの会員達に訴えたところの継続であった。

次に示すのは、戦争がまだ終わっていないかった頃私が地区ガバナーとして行なった主要演説からの抜萃である。「われわれはロータリーについてのわれわれの考え方を、単純化し明確化しなければならない。ロータリーは、人は友達を必要とする、そして、親睦と善意の雰囲気の中において最もよく働き、最もよく遊び、そして最もよく生活する」という単純な事実の上にその根拠をおいている。」

「将来の平和構想が成功を収めるためには、世界中の国家は、たとい一国としていかに強大であろうとも、すべて友を必要とするという事実の上に築かれなければならない。」

正しかったか間違っていたかは別として、私はロータリーにおいて私の進むべき道を見出していた。そしてその道を歩み続けていた。私が国際ロータリー会長として出席した、一九五九年レイクブラシッドの国際協議会において、私は次期地区ガバナー達に、私自身が地区ガバナーであった時に学んだ重要な教訓の幾つかを伝えたいと思つて、次のように話した。

「私が国際ロータリーの会長を勤める光栄を持つ年、そしてあなた方が實際社会においてロータリーのプログラムを推進する重要な役割を担う年であるこの一九五九―六〇年度の役員諸君にお話するのは今が初めてであります。そして、あなた方と私

とがこうして一堂に会して、私の年でもなくあなた方の年でもなく、われわれ共同の年として今年度を考え、今年度を語り合うのもこれが初めてであります。」

「あなた方のグループリーダー達は、ロータリーの管理について、あらゆる分野にわたってその仕組みと技法の大綱をあます所なく伝授するであります。これらの仕組みと技法は大切なことです。国際ロータリーの如き巨大な、複雑な組織体を管理することは勿論、一つのロータリークラブを管理することすら、仕組みと技法の助けを借りずに行なうことは不可能であります。もし仕組みがどうしても必要であるならば、最上の仕組みを持たなければならない。しかし、同時にわれわれは、ロータリーの仕組みは、それ自体が目的なのではなく、それは目的を達するための手段に過ぎないのだということを理解することも大切なことです。われわれはロータリーをより良いロータリーにし、ロータリアンをより良いロータリアンにするために仕組みを利用するに過ぎないのです。」

「われわれ一人ひとり、今年度チームの中のどんな地位を占めていようとも、皆有能な能率的な仕事をしたいと願うに相違ありません。しかし、われわれがどんなに有能であろうとも、またどんなに能率的であろうとも、ロータリーにはそれより遙かに大切なものがあります。国際ロータリー役員として、われわれの任務はロータリーのプログラムを促進し、推進するにあります。そしてロータリーのプログラムはもっぱら人間関係——人間関係のあらゆる面にかかわるものです。能率はそれらの面の一

つではありませんが、ただその一つに過ぎないのです。」

「われわれが学ばなければならない最も重要な教訓の一つは、いつ、どこでも、ロータリーの聴衆を形成する人々の才幹、貫録に対して正しい尊敬の念を持つということです。私は敢えて諸君にお勧めするが、ロータリーの聴衆を前に話をする時は、まず最初に、そこにいる人々は、その時たまたまりーダーの立場に立っている人（即ち今話をしようとしている自分）よりも、事と次第によってはより多くの知識を持っているということをも自分自身に言ってお聞かせることです（現に私はそうしているので）。多くのことについて私より遙かに多くのことを知っている人がたくさんいるでしょう。私のたった一つの頼みは、ロータリーについては私の方がほんの少しばかり多く知っているかもしれないということです。しかしそれすら、いつでも必ずそうだとは限らないのです。」

「ロータリアンはすべて成熟した人達であることを忘れてはなりません。彼等は指図を受けることより、与えることの方が多く人達です。彼等は皆自主的な人達で、リーダーシップには従うが、命令には従わない人達です。」

「私のガバナー時代に私は一つの技法を編み出したのですが、これはあなたの方の中にもガバナーとして役立てて頂ける方があるかと思います。あなたの方の仕事は、およそその九十八パーセントが特典と楽しみであって、純然たる義務の部分は二パーセントに過ぎないことを、やがて発見されると思います。私は敢えて予言しますが、諸君

の地区内のどこかのクラブで、あなたがこの二バーセントの義務として立ち向かわなければならぬような事態にぶつかることなしに、ガバナーの任期を勤めおせる人は諸君の中に恐らく一人もあるまいと思います。もしこのような事態にぶつかったとしたら、あなたはそうでなかった場合よりも遙かに大きな満足をもってその任期を勤めおせることでしょう。このような、二バーセントの義務の機会をあなたに提供したクラブに対して、あなたはただ次のように説明すればよいのです。即ち、『私はガバナーとして、その特典と楽しみである九十八バーセントをそっくり頂戴して、残りの二バーセントの義務をごめん蒙ることはいさぎよしとしません』と。あなたのロータリアン仲間達は物のわかる人達です、あなたを失望させるようなことは決してありません。』

「ロータリーの最高の姿は、良き働きと、良き清らかな楽しみとの、当を得た混合です。われわれの楽しみを常に清らかなものにするよう、お互いに気を配ろうではありませんか。われわれはロータリーの品位というものに健全な尊敬の念を持たなければならぬのです。そしてわれわれが個人的影響力を持つクラブにおいてまず、このような基準を打ち建てるためにできるだけのことをしなければなりません。」

「私は『挑戦』という言葉を用いることをわざと避けました。私は朝から晩まで挑戦を受けるのはいやです。あなた方もきっと同じだと思います。どうか皆さん、今年度は友情の橋を築くことに最善を尽くして下さい。そしてその橋は、今後いつまでも

両方向に通ずる通路となり得るものに作り上げて下さい。」

以上は私が地区ガバナーとして勤めた年度の経験から学んだ教訓の一端であった。そのほかにも私にとって満足すべきものが数多くあった。年度中に九つの新クラブを作った喜びもその一つである。ロータリーに加わってまだ間もない頃私は国際ロータリー元会長の一人が、そのロータリー生活の全部を振り返ってみた時、新しいロータリークラブの誕生に自分が果たすことのできた役割を回想する満足感にまざるものはなかったと語ったのを聞いたことがある。

長年の間私の記憶に残るほど深い印象を与えたのは、或いは「意外」という要素があったからかもしれない。しかし今日ではそこには「意外」という要素は全くないのだ。それは、九つのロータリークラブが九つの異なる地域社会にもたらした寄与貢献がどんなものだったかということ、そしてこれらのクラブの会員になるということが、何百という異なった種類の意味を——もたらしたであろうかということ、を考えてみさえすれば、「意外」は一瞬にして「納得」に変るに相違ない。このクラブ作りを成功させるために私に協力して下さった人々に対して、そしてまた、その年ロータリーの拡大のために尽くし得る機会が与えられたことに対して、私は永遠に感謝を忘れないであろう。

そこには教訓があった。満足もあった。そして明らかに恩恵もあった。私の地区の

全クラブと共に仕事をした結果として私個人にもたらされた恩恵の最も大きなものの一つは、ロータリー活動というものについての認識を新たにしたこと、ロータリーとロータリアンとの現実に活動している姿についての認識を新たにしたことであつた。

ロータリーは如何に機能すべきものか、ロータリーは機能するために如何に組織されているか、そして、どこで、どんな場合にロータリーは最も効果的に機能することができるかということについて新しい理解があつた。

ロータリーが種々雑多な様相の下に機能する姿を見るにつけて、ロータリーを認識する新たな能力ができた。いいかえると、ロータリーそのものをより深く理解する新しい認識が生じたということだ。良いパンを見分けることと、パンを焼く過程において酵母の演ずる役割を知りそれを理解することは全く異なる二つの事柄なのだ。

ただ見ることで理解することとの間には著しい相違がある。われわれが友人の庭で新しい花を見せられ、名前は勿論庭師が知っていなければならない一応の知識を与えられたとする。その日から後は到る所の庭でその花を見るが、それはその花を見た時「ああ、あの花だな」とわかるからにほかならない。

何か読んでいる時、誰しも新しい言葉に出くわすことがある。そこでその意味を調べる。それ以後その言葉にひっきりなしにぶつかる。それはただわれわれがその言葉を見た時、或いは聞いた時、直ちにそれを理解するからにほかならない。

ロータリーについても同じことがいえる。知識と理解さえ持っていれば、われわれは到る所でロータリアンが活動している姿を見ることができるのだ。或いはその事務所で、或いは商売や専門職業の組合に指導力を発揮することによって、或いは地域社会や国の諸機関において、或いはまた国際機関の地方支部や世界会議において、等々。われわれがしばしば見落すのは、これらの人々の多くがその最初のインスピレーションをロータリーによって与えられているという事実なのだ。

国際奉仕の機会

一九四五年、戦争は枢軸国側の全面降伏をもって終りを告げた。戦争自体は終わったが、その余波はまだ始まったばかりだった。国民感情は依然として興奮の極にあった。戦争が常にもたらすありとあらゆる災厄の中の一つの犠牲になった数百万の人々の胸には、そして脳裡には極度の憎しみがあった。そして、これらすべての結果として感情的な考え方がはびこったが、無理もないことであった。

しかしながら、何らかの形の、安定した世界秩序の見通しは、これまでにないほど明るく見えた。今度の場合、戦勝国側は戦争の終結を待たずして、既に戦争中に築き上げられていた一致和合の継続を確保すべく計画が進められていたのであった。このことは少なくともこのような継続が絶対に必要だという要請が実現されたものと考え

てよい。

今度は、大国と小国が手を携えて、個々の国としても或いは集団としても、国際連合のメンバーとしてこれに参加し、平和の維持に協力することを誓ったのであった。今や戦争が終った以上、建設的考え方と建設的行動のための舞台は整ったということは一般的に認められた事実であった。

世界的指導者達の中には新しい型の考え方が芽生え始めていた。この人達は、友好と相互扶助の条約は政治家の頭脳から生まれたが、これらの条約を忠実に守ろうとする意欲は、これらの政治家達が代表した国々の国民達の考え方と心情とにまつほかないのだということを言ったのである。

このことは、このほかにもあったたくさん理由と相俟って、ロータリアンとしての責任を真剣に考える人達の耳に音楽と聞こえた。これらの事実がいかにも自明のことであったにもせよ、世界の人々に耳をかたむけさせる力を持った人々がこのような声明を行なう気になったという事実は人々に新しい希望をもたらしたのである。

ロータリーにとって奉仕の機会に事欠くようなことはかつてなかったが、しかし、これは全く種類を異にする新しい機会であった。世界の最大の要請は友情と理解であった。そしてこれはロータリーにとって打ってつけの精進の場なのだ。このことはロータリーとその全世界にわたる組織について少しでも理解している人達ならば、誰も疑いを入れないことであった。

四十年間に及ぶ準備と組織作り——その間に厖大な、良く計画された、有能な機関が世界的規模をもって造り上げられたのだが——の後、今やこの機関が真剣にその機能を發揮すべき機会がやってきたのだ。ロータリーが活躍するための地ならしは完了したのだ。ロータリーの国際奉仕の機会は、現実にロータリアンの頭数だけあったのだ。

次に掲げる、ロータリーと国際連合との関係を極めて要約して示した記述は『ロータリー——奉仕の五十年』から引用したものである。

「ロータリーが誕生して以来の五十年間に二回勃発した世界大戦の悲惨な衝撃は、多くの指導者達の考えを、流血に訴えることなしに国際問題を解決できる方法を何か見つけ出さねばならぬという、長年の懸案に向かわしめることになった。一九四二年の初めにロンドンで開催されたロータリーの協議会はこのような関心のあらわれであった。この協議会は、戦争終結後厖大な教育および文化交流のための組織を考究するために、二十一カ国の教育担当大臣およびオブザーバー——その中には当時ロンドンに亡命していた人もかなりいたが——を集めることに成功した。その後これらの人々は、同じ年のうちにユネスコを創設する計画を練り始めたのであった。」

「国際ロータリーは『永続的世界秩序の要件』と題する二冊の小冊子を出版して、『ダンバートン・オークス提案』を解説する論説を発表した。その主要目的は各国のロータリアンをして新たに提案されている世界組織についての討議を促すためであった。」

『サンフランシスコおよびブレトンウッズ提案の方式』と題する二冊のパンフレットも全クラブに郵送されたが、その結果これらの提案は広く討議されたのであった。」

「一九四五年サンフランシスコで開催された国際連合の結成総会には、米国代表団は国際ロータリーに対して顧問を任命するよう要請した。十一人の著名なロータリアンがその任務に就いて、国際連合憲章の中の人間関係の面に少なからぬ影響を与えた。とりわけ、国際連合憲章第七十一条はこの影響を明らかに示している。」

「経済社会理事会は、その権限内にある事項に関係のある民間団体と協議するために、適当な取りきめを行なうことができる……」

その結果、国際ロータリーは顧問の資格を与えられ、爾来著名なロータリアン達が諸種の重要な会合にオブザーバーの役を勤めたのであった。しかし、国際ロータリーは特定の問題に関して全ロータリアンの意見を承知している訳ではないので、提案を行なう権利は行使されることはなかった。極めて有効に行使された主たる役割は、国際連合に関する情報を広く散布することであった。

「国際連合が完全に確立される以前においてすらロータリーの会長T・A・ウォレンは一九四五年十月中の一週間を「国際連合週間」と宣言して全世界のロータリークラブをしてこれに同調させ、これによって国連の知識を広めようとした。この慣例は毎年続けられ、年ごとに拡大強化された。一九五三年にはこの名称は「ロータリー・サービスの世界親睦週間」と改称されたが、今日では国際連合の総会によって定めら

れた十月二十四日の国連デーがその週間に含まれるようになった。」

「多種多様の行事がこの慣例を特徴づけた。即ち晩餐会、学校集会、公開討論会、論文コンテスト、パレード、展示会、民族と映画の祭典、印刷物の配布、およびその週間中に行なわれるロータリークラブ例会における特別プログラム等である。ちょっと変ったのは、無数のロータリークラブが行なった他の国々のクラブとの間の文通による結びつきであった。この龐大な文通からは、相互の問題に対する同情ある理解が生まれたのはいうまでもないとして、多くの収獲がもたらされた。」

『『ロータリアン』誌は長年にわたって、著名な代表者達による批判的な、説明的な、多くの記事を提供した。『これから後』と題する一二四頁の国際連合憲章批判は連続七版を重ね合計二十五万部に近い部数をさばいた。」

「ユネスコを扱った小冊子『人間の心の中で』はユネスコの理事長代理によって、当時の定款に対する最高の注釈書であると称賛された。その続版である『機能する世界』は多くの学校当局者によって同様の称賛を受けた。地方の学校における国連に関する教導を激励することは、ロータリークラブの好んで行なう、広く普及した企画となった。『国際ロータリーによる国連についての報告』は、一九四七年から一九五二年に至る五年間、毎月発行された。それは偏見のない、主要な出来事の客観的記録で、英、仏、伊の各国語版合計五万の発行部数に達した。」

「最も効果的な企画の一つは、今でもそうだが、ロータリーのスポンサーで行なわ

れる地方の学校における擬似国連会議であった。学生がメンバー国の代表になり代って、時の問題を真剣に討議するのだ。国際ロータリーによって準備されたこの企画に関する文献は他の種類の文献とともに、他の組織体からもその需要があとを絶たなかった。」

「国際ロータリーはカーネギー財団と経費を分担して、五十人の学生——その中には多くのロータリー財団フェローが含まれているが——を八週間にわたって国連本部に送って国連の仕事についての知識を体験によって身につけさせようとした。この企画はその後二年間継続された。」

「米国とカナダのロータリークラブは各地方のラジオ放送局の協力を得て、国連を中心題材とした多くのラジオ番組をスポンサーした。これらのプログラムは大部分バネル・デイスカッション形式で行なわれたが、その台本は国際ロータリーが提供した。題目は、知識と物資の国際交換、軍備縮少、未開発国援助、その他広く人間関係にわたる多くの題目を含んでいた。放送局は公共奉仕として時間を提供したが、これらの討論放送に多くの著名人が参加したこと——顕著な一例を挙げると、大僧正、大都市の日刊新聞の主筆および大学総長が一堂に会したこともあった——は数百万の聴取者を確保したのであった。」

『『方針の声明』——国際ロータリー理事会が一九五二年に採択し、一九五四年に確認した国際連合に関する方針声明は次の通りである。』

「国際ロータリーは国際連合憲章の規定に全面的賛成はしないが拒みもしない。また国際連合の決定や設定についても同様であるが、国際ロータリーは、世界平和の促進のために行なわれる国際連合の活動については、ロータリアンが常にこれを見守ることを奨励する。」

「事務長に指示して、世界平和促進のための国際連合憲章およびその活動に関連して、プログラムに役立つような情報やその他の資料をロータリークラブの参考に供させる。」

「国際連合およびその専門部門代行機関の会合に出席する国際ロータリーのオブザーバー達の報告は常に公表する。」

「国際連合またはその専門部門代行機関に関して提案を行ないたいロータリアンは、それぞれその所属国政府の然るべき筋を通してこれを行なわなければならない。」

「これは国際連合とロータリーの関係のすべてを物語るものではない。すべてを語ることは不可能である——なぜなら、それには国連憲章が最初に作られている時、数多くの討議に参加して指導力を示した各種代表団のメンバーとなっていた多くのロータリアンの隠れた影響がそれに絡んでいるからである。例えば長年ブリュッセル・ロータリークラブの名誉会員であって、国連総会の議長を勤めたベルギーのポール・ヘンリ・スバーク。或いはダマスカス・ロータリークラブの創立者であって、シリアを

代表して憲章に署名した中の一人であり、現在は国連の国際法委員会のメンバーであるシリアのファリス・エル・コウリ等。」

「さらにはまた、その郷里であるバーモント州バーリントン町のロータリークラブの創立会員であり初代会長であって、長年国連における米国代表団の主班として名を知られたウォレン・R・オースチンの名も忘れてはならない。」

「もう一人の憲章署名者は国際ロータリーの元副会長、フィリピンのカルロス・P・ロミューロであるが、彼は長年マニラ・ロータリークラブの会員であり、また国連総会の議長をも勤めた。」

「彼が国連においてこの重要な任務に服していた時に彼のクラブに送ったメッセージは、地球上到る所の人々のために法と秩序と正義を守るための、この世界機構に対するロータリーの寄与貢献の物語に最後の締めくくりを与えるものとしてふさわしいものであろう。」

「善意——それはロータリアンがその地域社会に対して捧げる奉仕の核心をなすものである——は国家の連合体にとって最も肝要な要素の一つである。善意なくしてはいかなる国際間の合意も不可能である。この目的のために私は、ロータリーにおいて知られている善意の伝統に従って、私の現在の役目に付随する、微妙な、多種多様の任務を遂行しようと思う。私は、ロータリーの影響が私の国際観と人間に対する理解とを豊富にし、それによってこの困難な責任に対する私の心

の準備を助けてくれたのだということを、広く世間に告白する。」

「私は、諸君が信念と樂觀をもって前進を続けることを確信して、心からなる『メブハイ』（「幸あれかし」）を贈る。詩人が言ったように、私はあなた方にたいまつを渡す、願わくはそれを高く掲げられよ。」

一九四五年サンフランシスコで開催された四十六の「連合国家群」の結成総会には、総数四十九人ものロータリアンが、代表者として、顧問として、或いは相談相手として参加したことが記録に示されている。なお、前述の報告が書かれた後、一九五七年にニュージーランド、オークランド・ロータリークラブの会員、サー・レスリー・マンローが国際連合総会の議長に選任されたことも付言しておかなければならない。

戦争の爪跡の治癒

ロータリーが演ずべく運命づけられている役割の重要性に関する私の確信は日を逐うて深まった。このことは、一九四七年十月オークランド・クラブで行なったスピーチの中に明らかにされている。

この日の私のテーマは二重の目的を持っていた。それは、一つには、私のクラブ会員仲間に対して、各自その責任に立ち向かって欲しいという訴えであった。同時にまた、クラブ自体に対して、国際ロータリーの会員クラブとしてその責任に立ち向かっ

て欲しいという訴えでもあった。

このスピーチの要点は次に引用した中に含まれている。

「国際奉仕に関する国際ロータリーの方針声明の基礎になっている基本観念は次のバラグラフの中に示されている。」

「国際奉仕においては、ロータリークラブはその精力を、考え方の鼓舞激励と各ロータリアンを正しい心構えを持つように訓練することとに注ぐべきであって、国際ロータリーやロータリークラブの団体的行動によって政府を動かそうとしたり、国際問題に影響を与えたり、国際警察を動かそうとしたりすべきではない。」

「勿論望むところは、この正しい心構えがわれわれの家庭において、われわれの職業において、或いは一般社会において、酵母として働いて、その結果健全な公論を形成するのに役立ち、さらにこれが政府と政府の政策に影響を与え、ひょっとすると政府と政府の政策をすら支配する結果にもなることである。」

「この考え方は全く正しいが、しかしすべては一つの要素にかかっている。即ち、個々のロータリアンの考えが正しくなければならないということと、それがどの程度正しいかということである。」

「諸君は国際ロータリーが、職業奉仕における四つのテストと呼ばれるものを採用したことをご承知であろう。私は、同じようなテストを国際奉仕におけるわれわれの心構えについても適用すべきだということを提案したい。」

「私のテストは次の通りである。

国際奉仕における国際ロータリーの方針を推進するについて、即ち、考え方の鼓舞
激励と各ロータリアンを正しい心構えを持つように訓練するについて。(a)愛国心はす
べての人間に共通の感情であるのは当然のことであり、間違っていないが、私は愛
国心を乗り越えてその先を見ているだろうか、そして自分を世界の市民として見てい
るだろうか？ (b)私は少しでも国家的ないしは人種的優越感をもつものを考えよう
とする傾向を押さえようとしているだろうか？ (c)私は他国の人達との間に共通の立
場を探して合意に達しようと、真剣に努めているだろうか？ (d)私は地球上の平和と
いうものは善意の人々の上にのみもたらされるものだということを信じているだろう
か？ そして私の考えと行動はそれに背いてはいないだろうか？ このクラブが、こ
のテスト―或いはこれをさらに改善したテスト―を国際ロータリーの国際奉仕に関す
る文献の中に含まれるようにする努力をされることを、私は願ってやまない。」

このような考え方を表明することは、一九四七年当時依然としてはびこっていた感
情的考えに対してあたかも流れに逆らって舟を漕ぐようなものであったけれども、オ
ークランド・ロータリークラブはこのスピーチを印刷して諸方に配布した。アンガス
・ミッチェルから祝いの手紙を貰ったことは、私にとって特に嬉しいことであった。

一九四八年にアンガスは国際ロータリーの会長に指名されたが、会長選挙の行なわ
れる国際大会に赴く途中オークランドに立ち寄って、私の家に数日間滞在した。彼と

私は、国際ロータリーの運営の上で当面するであろう数々の問題について、幾度も討議を重ねたのであった。

その中の最も重要な問題は、大戦前、或いは大戦中に枢軸諸国政府によって解散を命ぜられて姿を消したロータリークラブの所属した国々に、再びロータリーを再建する問題であった。連続三人の国際ロータリー会長、即ち一九四五―四六年度のT・A・ウォレン、一九四六―四七年度のリチャード・C・ヘドケ、および一九四七―四八年度のS・ケンドリック・ガーンジーの指導の下にかなりの進捗が既に見られていた。一九四五年の終りまでに、欧州ではベルギー、オランダおよびノルウェー、そして東半球ではグアムとフィリピンに、合計六十六のクラブが復帰を認められていた。一九四六年になると復帰運動はさらに勢いを増し、一九四七年には元枢軸国最初の国としてイタリアがロータリーの仲間入りを認められてこの運動はその頂点に達した。

ドイツと日本のロータリーについても当然討議が行なわれた。しかしこの両国のクラブを早急に復帰させることについては、一部に強い反対があったので国際ロータリー理事会は、心ならずも決定を延ばして、冷却期間をおくことにした。困難な情勢に対処した理事会の態度はよくわかるが、反対論者をも含めて、誰しも結局どういふことになるかは予測できたに相違ない。問題は、すべてのことを考慮して、理事会がいふ決断を下すべきかということであった。

アンガス・ミッチェルは、ドイツと日本では強権によってクラブが閉鎖させられこ

そしたが、これらのクラブの元会員の大部分の心の中と脳裡にはロータリーの精神が依然として生きていることを確信していた。戦争中の悪感情の残滓は、ひとたび道が開かれさえすれば、ロータリーのフェローシップによってほとんど例外なくたちまち雲散霧消してしまうことを確信していた。彼はまた、ロータリーの再建は、一旦手がかりができさえすれば、広く一般の人々の間に平和な友好的関係の増進に向かって重要な前進となることを疑わなかった。これらの考えの下に彼はその国際ロータリー会長としての任期中にこの問題をなんとかしようと決意したのであった。

アンガスは、私と討議を交わす以前から、彼のこの決意は私にとって最高のニュースであることを知っていた。戦争の余波のこの一面に対する私の態度は主として歴史の基本的教訓に基づいていた。次に掲げる、私の自叙伝の中の学校生活を述べた章から引用した一節を見れば私の立場がわかって頂けると思う。

「われわれが教えられた僅かばかりの歴史は、その大部分は王と女王と、彼等が戦争と戦いに勝つことに没頭したことにもつわる事柄であった。何年か前に私はユーモリストとして国際的に知られているある高名の豪州人の話を聞いたことがあるが、この人はこのような教え方の値打ちに対する彼の自信がいかに無残にぶちこわされたかを聴衆に話した。彼は学校で、前触れなしに誰がバノックバーンの戦いに勝利を収めたかと質問された、そして答ができなかったためにひどく罰せられたと言った。彼は、その質問は極めて重要な事柄に違いないと思ったので、その答を調べてみた。そ

の後誰もその同じ質問をする人はなかった。」

「この話は、ユーモアの要素が全然なくて、幻滅感いっぱいなの、私自身の経験を思い起させた。私がまだ少年の頃、しかし既に自分の好きな読み物を選び始めていた頃、私の好きな著者はコナン・ドイルだった。私は彼の書いた歴史小説や史伝を何度も繰り返し返して読んだ。そして晩年になって再びこれらの本をすべて読んだ。しかし、学校では、『ブリュッヒャーの指揮するロシア軍がウォータールーの戦場に到着して、ウェリントンの勝利に祝福を述べるのに間に合った』と教わったのに、コナン・ドイルによれば事実は、『ウォータールーの戦いにおけるロシア軍の損害はわが軍の損害に比べても劣らないくらい大きなものだったのだ。英国の歴史家達の書いた歴史を読んでも諸君はこの事実を知ることとはできない』ということを私が学んだのはドイルが書物のことを書いた『魔法の扉を通して』という本によってであった。彼は、ドイツの歴史家の書いた本を読んでも英軍の果たした役割を知ることとはできないと言ってさらに語を継いで、『不偏の見解を知るためにはフランス人、オンスアイユを読まなければならぬ』と言った。」

「この幻滅感の印象は、爾来私の考え方の中心的要素の一つとして私の脳裡に刻まれているのである。長い生涯から私の学んだことはすべて、世界が最も必要とするものは理解と善意と信頼、いいかえれば、人と人との間、国民と国民との間に友情の橋をかけ渡すことであるという確信を私に与えた。この必要は今なお極めて急を要する

ものとしてわれわれの前にある。そしてその原因の一部は、全世界を通じて学童達に教える歴史が欺瞞に充ちているからだ、ということもまた同様に私は確信する。」

戦争の歴史を教える教育がいかに信頼を置けないものであらうとも、明白な教訓が一つある。古代史であらうと近世史であらうと、歴史というものは、戦争から戦争にかけて——時には戦争の途中において——味方と敵とが入れかわる記録である。そして、恒に変わらない敵は、戦争そのものである。

かつての敵国の人々と交誼を結ぶのを拒むことは、われわれ自らを友達に恵まれることの少ない生涯におとし入れることになるだろう。われわれの中に、このニュージーランドにおいてさえ、自分の記憶にある、かつて敵国であった国の名前を、曲りなりにも列挙することのできる人がはたしてあるかどうか疑わしい。

例外はいつでもある。われわれは誰でも、戦争中の経験を忘れかねているかと思えるような人々がいるのを知っているが、一般的に言えば戦時中の憎しみや敵意は日ならずして消え失せて、気にならなくなるものなのだ。それならば、われわれ自身の心の平安と知的安穩のためにだけでも、これらの憎しみや敵意は、忘れてしまうのが早ければ早いほど、かかわりのあるすべての人々のためにベターであるに違いない。

記録によれば、アンガスは彼自身のプログラムを遂行した。ロータリーはドイツと日本で再建されたのだ。そして記録はまたアンガスが正しかったことを示している。さらに一步を進めて、この決定の正しかったことは極めて明らかであって、当時この

プログラムを遂行するためには多大の勇氣と多大の決意を要したことを、二十五年後の今日、真に理解することは困難であるといふことができる。

一九四九―五〇年度に、バーシー・ホッジス会長とその理事会によって、和解プログラムが実施された。そして、かつて欧州において相敵対した諸国のロータリアンの間に親睦と善意を復活させるために特別の関心が払われたのであった。

方針決定と管理の技法

RI会長に選ばれてから、アングスは私に国際問題委員会の委員長を引き受けることを要請し、同時にその資格の下に目的および目標委員会の一員になることを求めた。国際問題委員会は戦争中に考えられて発足したものだ。その職務規定によれば、この委員会は、なかならず「経済的、政治的、および社会的問題についての見解の相違を確かめて、これを解決するように努める」任務を持っていた。目的および目標委員会は、現在の企画委員会の前身であった。

これは私にとって、国際ロータリーの方針決定中枢に関与する最初の任務であった。そして私は今でもこの任命を、これまで私に与えられたあらゆる任務の中で最も重要なものの一つであったと思っている。アングスは、この委員会のメンバーとして経験豊かな、献身的ロータリアンから成るすばらしいチームを与えてくれた。その中

には前年度の委員長も含まれていた。

国際ロータリーの委員会がはたす重要な役割を理解することは、方針とプログラムの発展の過程を理解する上に不可欠である。一九四八―四九年度には七つの常設委員会があった。即ち、目的および目標委員会、定款細則委員会、国際大会委員会、地区編成委員会、財務委員会、雑誌委員会、および国際問題委員会である。そして、理事会の執行委員会とロータリー財団の管理委員会を別にして、ほかに八つの委員会があつて、プログラムのいろいろの面を担当していた。例えば、青少年奉仕の如きである。

百人以上のロータリアンがこれらの委員会の一つか、二つ以上の委員会のメンバーになっていた。そしてその中には、かつて国際ロータリーの会長を勤めた人と、その後会長になった人を合わせて十六人いた。理事会は年度中にこれらの委員会から報告や進言を受けるが、理事会はいちいちこれらの報告や進言を他のすべての報告や進言と照らし合わせて後、理事会としての方針決定を行なうのである。同じ方法が毎年毎年繰り返されて、各委員会の各メンバーはそれぞれ方針とプログラムの発展に個人的貢献を行ない、かくしてロータリー・モザイクのパターンが作られていくのである。

発展過程の持続という点で頗る重要な要素がもう一つある。それは国際ロータリー事務局の機能である。一九六一年のレイクプラシッドにおける国際協議会で私は「国際ロータリーの主要資源の一つとしてのR I事務局」という題目の下に、本会議で話をする役目を与えられた。その後今日に至るまでの間に、若干の事実、特に若干の数

字の変遷はあったが、しかしそれにもかかわらず、今言おうとしていることの目的を達するためには、その時の私のスピーチの内容を利用するのが一番いいと考える。以下は、事実と数字がまだ私の脳裡にまざまざと刻まれていた時に準備した、その時のスピーチの内容である。

「この本会議では地区ガバナーが利用し得るあらゆる分野の資源を取り上げることになっているが、私の受け持ちはこれらの資源の中の一つである事務局について話すことである。」

「まず私が最初に考えることは、たくさん違った国々の代表であるこの聴衆に向かって話をするには、われわれが△資源▽という場合にどんな意味で言っているのかということについて、共通の理解を持つことから手をつけるのが賢明であろうということである。」

「ウェブスターの辞書によると、資源とは、『何たるを問わず、何かがそこから出てくる源泉をいう。そして人々がそれに訴え或いはそれをたよりにするような、そのような源泉である。即ち、技能、実際の常識、いつでも役に立つこと等。』」

「仮にウェブスターが、国際ロータリーの事務局について簡単な記述をしてもらいたいと求められたとしても、彼が△資源▽という語の定義として書いた上述の記述をそのまま答とするのにまさるより良い答はできまいと思う。」

「この定義に従えば国際ロータリー事務局は、私の長い間の極めて近しい個人的接

触を通じて知る限り、資源というものがいかにあるべきかということを示す最高の適例であることに疑いを入れない。」

「国際ロータリーの元会長がなぜ事務局について諸君に話をするように求められたかについては明白な理由がある。毎日毎日、毎週毎週、来る月も来る月も、そして来る年もまた来る年も、事務局においてどのようなことが行なわれているかということ、元会長が知っているほどよく知っている者はほとんどない。」

「会長がその任期中常に事務局から提供される供給と支援に頼ることなしにその任務を全うすることは、たとい最少限度においてすら、絶対に不可能であることを知るの、会長以外にはあり得ないのだ。」

「国際ロータリーの会長は、定款が国際ロータリーの目的を次のように表明していることを忘れることはできない。

a あまねく全世界で、ロータリーを激励し、推進し、拡大し、そして管理すること。

b 国際ロータリーの活動を調整し、全般的にこれを指導すること。」

「世界の全ロータリークラブの連合体としての国際ロータリーが、これらの目的を達するために必要な機能を行なうためには、ある程度の中央集権なくしては不可能であることと、いくらかでも中央集権を行なうためにはR I事務局が不可欠であるということを国際ロータリー会長は直ちに了解するに至るのだ。」

「R I事務局は主として、会員クラブとそれら会員クラブの役員と委員会にサービ
スを提供するために存在する奉仕機関である。国際レベルにおいては、R I事務局は
国際ロータリーの地区ガバナーその他の役員、元役員、理事会、および会長にサービ
スを提供するために存在しているのだ。」

国際ロータリーはある程度の中央集権なくしては機能を続けることができないとい
う点をさらに強調するために、国際ロータリー理事会はロータリーが樹立されている
すべての国々のための理事会であるということを思い出して頂きたい。すべての理事
会決定とそれに関して公布され施行される文書は、全世界のロータリーを反映し、こ
れを拘束するのであって、単に一部のロータリーを反映しこれを拘束するものではな
いのだ。R I事務局の機能は、これらの決定を履行し、或いはこれを説明するためで
あって、これらの決定を行なうものではない。その任務は奉仕することであって命令
することではない。

「R I事務局のことを考える時、大部分のロータリアンの頭にまず浮ぶのはエバン
ストンにある本部の建物かもしれない。あの美しく設計された構築物とそのすばらし
いただしまいにはわれわれが誇りに思うものがたくさんある。しかし、今われわれが
考えているのはその建物の中にいる局員達と、彼等が日に日に従事している活動のこ
とである。」

「天文学的数字は天文学者以外の者にとってはほとんど何らの意味を持たない。し

かし、われわれの仲間は誰でも、この組織の厖大さと複雑さ、事務設備、有能な局員、毎日到着する一、五〇〇通の郵便物、毎日四、〇〇〇通にのぼる發送郵便物、財務局が扱う四十四種類の通貨と四十一カ国に及ぶ銀行取引、一カ月平均およそ一万二千口に及ぶ雑誌『ザ・ロータリアン』郵送先名簿の書込み、抹消、および変更、中央事務局で四十万、チューリヒ事務局で六万三千に上る会員カードをアップ・ツッ・デイトに維持する仕事、これらすべてを処理するために不可欠な熱心な仕事と高能率等々を、高く評価することはできるに違いない。」

「これらすべてに加えて、その年度の国際大会——今年は東京大会だが——およびそれに続く、既に準備中の他の五つの大会に関連する仕事は常に行なわれているということ、ロータリー財団と国際ロータリー会長のオフィスに関するR I事務局の仕事がある等々の事実を併せて考えなければならぬのである。この、永久に終ることのない活動の流れを捌くために、中央事務局とチューリヒ事務局とを合わせて合計一九五名の、合計八カ国の言葉を駆使する人達を雇傭している。組織は、最大限の能率を確保するために、当然幾つかの局と部に分けられている……。」

「R I事務局は国際大会と理事会が作る規則を解説する。R I事務局は規則を作ることはしない。また地方的に見て特別の場合、特別の事情、ないしは特別の問題だと思える場合に対処するためにも規則を変更することは許されない。」

「R I事務局は、さまざまな人から、いろいろの場合に、“交換所”、“発電所”、“貯

水池”、“給油所”その他似通った、恐らく一ダースにも達する数の描写的表現で言い表わされてきた。事実、R I事務局はこれらの表現のいずれにも当るが、いずれの場合でも、ただそれだけでなく、もっとほかの要素をも備えているのだ。」

「R I事務局は、世界中のロータリークラブが、手形でなくて、経験とアイデアの交換を求める交換所なのだ。しかし、アイデアはすべて入念に仕分けされ、他のすべてのアイデアと比較検討されるという点で、単なる交換所以上のものである。新しいアイデアは仕分けされる。或いは検討を加えられたアイデアの新しい組み合わせが仕分けされる。この過程を通せば必ずある程度の交雑（交配）が起る。その結果、より良いアイデアが生まれる。それは正に独特の交換所であって、そこから各自の提供するアイデアの総合計にまさる何物かが生み出されるのである。」

「R I事務局は、全世界のロータリークラブがエネルギーと支援の供給を仰ぐ発電所でもある。しかし同時にR I事務局はこれらのクラブからの供給と支援に依存するのだ。相互作用によって供給と支援は両方向に流れて、双方を益するのだ。」

「R I事務局はまた、五十六年の長い期間にわたる、国際ロータリー加盟全クラブの考えと実際経験の組み合わせと積み重ねの結果として集積された、経験と知恵の貯水池である。あたかも、貯水池が大小の河川から水の供給を受け、大小の河川は多くの小川と無数の湧き水に頼るのと同じように、R I事務局もまた、国際ロータリー理事会の指示・指令、国際大会および地区大会、地区ガバナー、国際ロータリーの各委

員会、ロータリークラブ、それらのクラブの委員会、さらにはこれら上述の諸活動の進行に参画した個々のロータリアンの寄与、等々から材料を引き出すのである。」

「この材料の大貯蔵庫から吐き出されるものは、R I事務局の諸部課を通して、これを最も良く利用し得る人々に供給されるのである。諸君は挙つてこの共同の貯蔵庫に、それぞれの寄与を行なうことを忘れてはならない。」

「R I事務局をガソリン・ステーションになぞらえる人達には自動車を運転したり飛行機を利用したりする場合と同じことが、地区ガバナーにもあてはまるがよくわかるのだろう。激しく働けば働くほど彼等は、より頻繁に供給と支援を受けるためにガソリン・ステーションに行かねばならないからだ。」

「R I事務局を交換所と考えようと、発電所と考えようと、或いは貯水池やガソリン・ステーションと考えようと、忘れてならない肝心なことは、提供されるサービスは常に与えたり与えられたりの相互関係を基本としていうことである。払い出しの前には必ず受け入れがなければならないということだ。」

「国際ロータリーの中にわれわれが持っている資産の中で最大のものの一つは事務局の局員達であるということは疑いの余地がない。R I事務局局員が、最高水準の高能率を堅持するばかりでなく、ロータリーの理想とロータリーの計画を全世界に推進することに對して、それに劣らぬ高度の献身的感覚を身につけているということがなかつたとしたら、恐らく国際ロータリーは要請通りの、期待通りの機能を發揮するこ

とはできないであろうということは明らかであり、基本的重要性を持つ事実である。」

「この能率と献身との結びつきは、諸君がこのレイクブラシッドにある間、毎日、毎時間、諸君すべての眼に明白に映ずるであろう。そして、諸君の任期中、日を逐うてますますそれが明白になるであろう。」

「われわれは事務総長として、ロータリー以外のどんな基準に照らしても特別優れた才幹を持ち、ロータリー内部においてはわれわれ共通の使命に対する献身において何人にも譲らないジョージ・ミーンズを有している。これらの資質からくる当然の結果として、ジョージによって示された基準は、彼の主催する機関の職員の末端まで浸透している。」

「これらのことはすべて、当然しかあるべきことながら——そして、ジョージとその同僚達はまっ先にこの見解に同意するであろうが——そうだからといって、われわれがこれらの立派な人々に対して感謝を表明し、その労を謝する気持はいささかも減じはしない。」

「ウェブスターの示した資源の定義をもう一度思い出して頂きたい。『資源とは、何たるを問わず、何かがそこから出て来る源泉をいう。そして人々がそれに訴え或いはそれをたよりにするような、そのような源泉である。即ち、技能、実際の常識、いつでも役に立つこと等。』」

「RI事務局は、いつでも諸君に供給し、諸君を支援すべく——常に——待機して

いるのである。」

これにつけ加えて、私は次のことを言っておかなければならない。即ち事務総長は、すべての委員会に彼自身出席してその幹事を勤めるか、さもなければ自分の代りに局員の一人を指名してこれに当らせる。そのほか、委員会の審議中に、他の局員達と呼ばれて審議の助手を勤めることも決して珍しくない。

国際ロータリーの委員会では、委員は誰も一人でどんな切り回すことを期待されてはいない。彼はチームの中の一人なのだ。そして、そのチームはさらにもっと大きなチームの一つなのだ。レスリー・ピジョンの引用したキップリングの言葉に、「群れの力が狼であり、群れが狼の力である」というのがあるが、これはロータリーにおいては、国際ロータリーの委員会が機能する場合に最もよく当てはまる——そして、これから述べる私の諸種委員会の仕事に参加した経験に関する記述の一語一語はすべてこの考えを第一に頭に置いて書いたものである。ただ、前にも言ったように、他の人達の参加の詳細について詳しく書く資格は私にないことを残念に思う。

ロータリーにおいては国際問題なのか、それとも国際奉仕なのか？

国際問題委員会の第一回会合において、われわれは審議未了になった案件ときまらきった案件との長い日程をもってスタートを切った。国際連合に関する国際ロータリ

の方針と、その方針の範囲内で行なう實際活動についての問題が、この時の会合で審議された最も重要な議題の中に含まれていた。

この頃はまだ国際連合が誕生後もない頃で、国際ロータリーは全世界のロータリアンに、少なくとも国連の構造とその目的について、個人として十分な知識を身につける程度の関心を持つように説得するためにできるだけのことをしていたという時代であった。

ロータリーは国連機構の中の経済および社会審議会 (Economic and Social Council) 関係の顧問という資格を与えられた。この顧問の資格を与えるに当って国連はロータリーを「主として世論の形成と情報の散布に関心を持つ団体」であるとして名指ししたのである。他人の眼に映る自分の姿をそのまま自分に当てはめてこれほど愉快に思えることは滅多にあるものではない。われわれの委員会は、もし世界中のロータリアンをこの国連の見方と同じ見方を納得するように説得することができたとしたら、われわれは長足の進歩を遂げることになるだろうに……と感じたことであった。

われわれの前途は長いが、結果は現われ始めていた。国連に派遣されている米国代表団の主班、ウォレン・オースチンは、雑誌『ザ・ロータリアン』に寄稿した一文の中で、彼はロータリーの文献を自分の仕事の上で教科書として使ったが、それはこれらの文献が彼の目的のために最高に役立ったからだと言った。

当時英国の国務大臣であったノーエル・ベーカー氏は、英国におけるロータリーの

大会で行なった演説の中で、彼の考えでは国際問題を扱ったロータリーの文献は、集団教育の目的のためには、自分の知っている限りの団体による出版物の中では最高のものであると言った。

委員会の審議を待っていた案件をまず片づけてから委員会は、個々のメンバーから持ち出された案件の審議に取りかかった。私が提起した四つのテストの背後にある考え方と、国際奉仕に関して国際ロータリーが発表している方針声明との関連について私の提案が投げかけた諸々の疑問点について詳細な討議が行なわれた。

この構想は、この委員会の任期中、委員会が機能するための、考え方の基礎として採用された。しかし、私の提案が国際ロータリー理事会や全世界のロータリアンに受け入れられるだろうという結論に達するまでにはなお、あらゆる研究、調査と討議が必要であろうということになった。われわれは個々にさらに必要な研究をした上で、後日さらに会合することを合意した。

米国に赴く途中、私はロンドンで数日を過したが、妻と娘はまだロンドンにいた。

私がロンドンに引き返したのは、単に彼女達に合流するためだけでなしに、第二回委員会会合の準備のために、宿題と取り組むスタートを切るためでもあった。以前短期間滞在した時、私は二人の著名な世界連邦運動者と会見したことがあった。豪州シドニーの出身であるW・G・マッケー氏はロンドンで弁護士をしていた。彼はまた、ハルを選挙区とする労働党の国会議員でもあった。彼は、大英王国は連邦憲法に基づく

欧州連邦の樹立を助成するためにあらゆる手段を尽くすべきであるという趣旨の書物を少なくとも二冊著わしていた。私は、マッケー氏が戦争の始めの頃豪州に赴く途中ニュージーランドを訪れた時に始めて会ったのであった。

もう一人はビバリッジ卿であったが、彼は恐らく当時大英王国に福祉国家を建設する設計者として最もよく知られていたであろう。彼の活動と関心事は数多くあるが、ビバリッジ卿は世界連邦運動の熱烈な支持者であった。連邦主義の原理について彼と私が同じ考えを持っていたということは、一九四七年に彼がニュージーランドを訪れた時に二人を結びつけたのであった。

マッケー氏は私のために何人かの連邦運動の同志に会う手配をしてくれたが、これらの人々の大部分は国会議員であった。この人達は皆一九四八年九月五日から十一日までスイスのインターラーケンで開催されることになっていたヨーロッパ国会議員会議に深い関心を持っていた。この会議はマーシャル援助を受けていたヨーロッパ十四カ国の議員代表者達の集まりであって「西部連合」を討議するという特定の目的をもって招集されたものであった。

マッケー氏は英国代表団のチェアマンとして出席することになっていたが、私に私的オブザーバーとして同行しないかと誘ってくれた時には少なからず驚かされた。これは私が心に描いていた私自身の宿題として打ってつけのことであったので、私は即座にこの勧誘に応じた。

最初に勧誘を受けた時にびっくりしたが、「ハロルド・トーマス、M. P.」（訳者注）M. P. は国会議員の略語」と書き込まれた必要書類と旅行書が郵送されてきた時にはさらに驚いた。勿論私は、誤記と思われる記載を指摘したが、それに対してはただ「厄介な質問はしないで下さい」と言われた。このことを三十年後の今言っても私が厄介なことをしでかしてはいないことを祈るばかりだ。M. P. としての臨時の資格の下に私は全会議中を通して英国代表团と同じ席につくことができたが、勿論私は本会議中沈黙を守り通した。

このインターラークンでの経験は、大戦直後のヨーロッパの混乱と政治的不安定の内幕をのぞかせるものと評するのが最も当てていると思われる。この会議の印象を数語で言い表わすとすれば私は代議員達は二つの主要範疇に分けることができたといいたい。一方には、ヨーロッパ各国間の調和を最少限にでもたらそうとすれば必ずぶつかなければならなかった、古くから常にあった難関の先までは考えることのできない人々がいた。そして他の一方には、問題の極度の緊急性とその結果当然起る、これらの困難に敢然と立ち向かってこれを克服することが必要だと考えた人達がいた。もし私が現実には会議の参加者であつたら後者のグループに属していたであろうことは申すまでもない。

招待を受けて私は非公式の討論の間英国の連中と行動を共にした。そしてこの機会を逸せず、困難だけしか眼に映らない人々に対してはスイスが身をもって最上の回答

を示しているのではないかと指摘した。

私はスイスとそのすばらしい国の国民に対してかねてから常に強い魅力を感じていた。そして今その国に来てみて、私はやっとその理由がわかり始めた。美しい湖と溪谷の上にそそり立つ白雪を戴く峰々や氷河群の美しさは、わがニュージーランドに大変似ている。そして人々は私が心に描き、かくあれかしと願っていた通りであったのだ。

この時インターレーケンに滞在していた期間中、私の主たる関心はスイスの自然の魅力や美しさではなくて政治的背景にあった。そしてそこには、他の世界各国が熟考すべき如何に貴重な教訓があることか！そこには活力と清純のデモクラシーがある、しかも五百万の人口は幾つかの国民グループを結合させているのだ。三百万のスイス人はドイツ語を話し、百万人はフランス語を話し、二十五万人はイタリア語を話し、そして四万五千人ばかりが古代ローマの方言を話す。

ヨーロッパを背景に持つこの混成人口は、一九四八年は絶えず混乱と言ひ争いと戦いの中に身を置いたであろうことは九分九厘間違ひはなさそうな筈である。ところがこの国の人達はスイス国の市民として、この国は世界中で最もよく治められている国の一つだと考えられなければならないほど、見事に生活し、働き、そして考えているのである。そして、ヨーロッパのまった中でこんなことができたのは、この国の政府が施政の拠点としてゐる連邦憲法のお蔭である。

闖入者ではないまでも私的オブザーバーとして、また局外者としての私には、このインターラーケンに集まった代議員達は、彼等がかくまで熱心に討議していた問題に対する回答が得たければ、ただ会議場から外に眼をやりさえすれば回答はそこにあると思えたのである。

インターラーケンから私は、その時世界連邦運動の人達が会議をしていたルクセンブルクに直行した。ビバリッジ卿が私のために出席できるように手配してくれたのだ——この時も私的オブザーバーとして。この会議中に彼は、私が特に会って話をしたいと考えていた人々の中の幾人かと直接連絡できるようにしてくれた。

この会合は熱狂者の集まりであった。ある者は完全に狂人であった。そのために議事は、極めて興味深いものではあったが、インターラーケンの時ほど實際的ではなかった。

この人達は間違っていないなかった。勿論彼等は正しかった。すべて人間の作った問題に対する回答は単純であるが、ただ一つだけ例外がある。それは、彼の常識が彼自身の利益のためにかくすべきだと教えることを実行するように自分自身を説得する問題である。

ロンドン、インターラーケンおよびルクセンブルクにおけるこれらの経験が、仮に国際ロータリーの国際問題委員会の任務について私の考えを明確にする目的をもってあつらえられたものであったとしても、これ以上この目的に役立つことはできなかった。

たであろう。私が見たり聞いたりしたことはすべて、国際問題は本質的に各国政府が実際の国際政治の舞台において討議し行動すべき事柄であるという事実を実証して見せるものばかりであった。これは正に一つの国際政治における単純な事実である。

その反面、もしもロータリーが命脈を保って天下の大義のために寄与貢献を行なうべきだとすれば、そこにはまたロータリーとして直面しなければならない別の事実がある。当時ロータリーには全世界を通じて既に九十を越える忠実な国々が代表されていたことを他の章で述べた。もしもロータリアン達が自分の政治的信念と自分の所属するクラブの表明する正反対の信念との間に二者択一を迫られる立場に立たされるとしたら、或いは自国に対する忠誠と国際ロータリーへの忠誠との間に選択を迫られるとしたら、国際ロータリーは一夜にして崩壊し始めるであろうことは誰の眼にも明らかであるはずだ。

これらの事実は国際ロータリーにおいて指導者の責任を担っている人達の大部分が既に認めているところである。ロータリーはただ国民とだけかわりを持つべきものであって政治とかかわりを持つべきでないこと、人と人との間の個人的関係にかかわりを持つべきものであって政府と政府の間の関係にかかわりを持つべきものでないこと、人類の良心と人々が胸中に抱く平和への意欲にかかわりを持つべきものであって平和のからくりやかかけ引きにかかわりを持つべきものではないという中心的事実は既に広く一般に認められていることであった。

しかしながら、これと矛盾する事実にわれわれは直面したのだ。即ち国際問題委員会は、経済的、政治的、社会的問題に関する種々異なる見解を解決するために努力すべしという任務規定をもって国際ロータリーの下に機能していたのである。そこで明らかに必要となるのは、国際ロータリーの方針を明確にする声明を発して、場所と場合とを問わずいやすくもロータリーの国際奉仕が国際問題との間に明らかに一線を画して討議の対象になる時に、誤解を招くおそれのないようにすることであつた。

個人的には私は委員会の第二回会合に対する準備が整っていた。第一回会合の時の討議の傾向から考えて、第二回会合で合意に達するであろうことにいささかの疑いも持たなかつた。

記録の示すところによると、委員会は完全な合意に達して、国際奉仕に関する方針声明を全面的に改訂することを提案する、国際ロータリー理事会への進言を決定して閉会したのであつた。その改訂案には「世界心を持つロータリアンの特質」と名づけた小見出しの下に、私の提案した四つのテストのさらに拡大され、改善されたものが含まれていた。

私がメンバーの一員となっていた目的および目標委員会は、国際問題委員会の進言に同意した。そして、この進言は国際ロータリー理事会によって採択され、その後今年に至る十八年の間に余り重要でない若干の修正はあつたが、今日なお方針声明として存続している。

仕事を共にした結果、わが委員会のメンバー達は、国際ロータリーの国際問題委員会という考え方は根本において正しくないという意見に全員一致した。それは国際ロータリーを危険なまでに国際政治の舞台に近づけた。それはクラブにおいて、また個人のロータリアンの心の中に混乱を招いた。自分の国の市民として国際問題に積極的関心を持つこととロータリーの国際奉仕に積極的に参加することとの間に、あまりにもしばしば不一致が起ったのだ。このこと自体既に国際ロータリーの方針にそぐわないのだ。われわれが委員会として国際ロータリー理事会に進言をしたことによって、この不一致はさらに一層厳しいものになったのである。

そこでわれわれはさらに、国際ロータリーの国際問題委員会は廃止すべきであつて、理事会の決定する新しい取りきめによって国際奉仕のための規定を作るべきであるという進言をした。理事会はこの二度目の進言を一九四九年のニューヨークにおける国際大会に提出したが、若干の反対と多くの討論を経てこの提案は同大会によって採択された。

われわれがニューヨーク大会で切腹するまでの間に国際問題委員会が成就した実績については、それを伝えることによって国際ロータリーの方針がどのようにして作られるかを良く説明することができるので、ある程度詳細にこれを述べた。しかし、その重要な部分についてはこれから述べなければならない。

この委員会は、他のどんな委員会でも同様だが、方針声明というものはただそれだ

けではなんの役にも立たないということを充分に承知の上で仕事をした。この委員会は、いわば手始めに過ぎなかった。それは、目的と方向の感覚を提供し、目的を指示し、そして全世界のロータリアンにその目的に到達するための方法手段を示唆するように設計されているのだ。

このような方針声明は考え方としては正しいであろう。しかし、収め得べき成功の度合いは、どの程度個々のロータリアンの想像力を把握して彼等をして当面するプログラムの実際の適用に立ち向かわしめることができるか、その度合い如何に正比例する。そしてそれは、個人として、或いは団体的に活動するこれらのロータリアンの心と頭脳と手足とによってのみ達成できるのである。国際ロータリーの委員会が彼等に代ってなし得ることではないのだ。

一九四〇年代に別れを告げる前に、述べておかなければならないことがある。それは、一九四七年に始められたロータリー財団奨学生プログラムは、たまたま国際理解増進に対する愛着をもって知られたポール・ハリスの逝去に際会して、ロータリー財団に対する寄付はポール・ハリスの生涯とその業績の記念として俄然急増したのであった。二百万ドルという目標額はたちまち実現されたのである。

七カ国から十八人の奨学生をもって始まったのが、その後年を逐って急増し、現金の寄付はまもなく年間百万ドルに達した。爾来二十年間にわたる驚異的發展の確固たる基礎はかくして打ち建てられたのである。

一九五〇—一九六〇年

鋭く対立する諸思想から起る困難や緊張にもかかわらずロータリーの親睦と奉仕の本流は妨げられることなしに流れ続けた。内に包蔵するロータリーの力は、万人の眼にさらされたのである。

比較的最近まで国際ロータリー理事会は、理事の中五人を米国、カナダおよび英国以外から選んでいた。一九五〇年に私はこれら五人のノミニーの中に選ばれ、その年のデトロイト大会で理事に選挙された。それと同時に国際ロータリー会長に選挙されたカナダ、ケベックのアーサー・レグーは国際ロータリーの国際問題委員会のメンバーを勤めたことがあった。そんな訳で彼と私は一緒に仕事をした経験を持つ、既に親しい友人であった。そしてこのことは彼の会長の下に理事を勤めることを一層喜ばしいものにした。

アーサーは「ロータリーの理想は確実な根拠のあるものである」という信念に身を捧げていた。彼はまた、親しみやすい、快活な性格に恵まれていたので、たちまち理事会の人達の心を捉えたばかりでなく、世界中のロータリアンに親しまれた。会長の任期を終えると間もなく襲った彼の死はロータリーにとって誠に悲しむべき損失であった。

国際ロータリー理事会の新しいメンバーの大部分は、その考え方を新しい責任になうように調整し、方向づけるために、意識的に努力する必要を感じた。そして、国際問題委員会のメンバーとして得たロータリーの国際的分野における経験にもかかわ

らず、私もその例外ではなかった。

理事会のメンバーの多様性は、毎年特定のゾーンや地域から選ぶことによって確保される。しかし理事は自分の地域、ゾーン、国等の代表として理事会のメンバーになっているのではない。彼は特別の利益や特別の地域のために弁護したり、嘆願したりする特別弁護人ではない。彼は全世界のロータリークラブから、単一の利害を持つ単一の組織の管理主体のメンバーとして選挙されているのである。

勿論各理事は、自分の最もよく知っている背景の下におけるロータリー活動の観察と経験から得たものを理事会の審議にかけるべく持ち寄ることを期待されている。この方法によって世界各地からもたらされたアイデアは、相互対比して評価することができる。当然そこには交雑、交配が起る。新しい、時にはより良いアイデアが討議の結果現われ、そして、「全世界を通じてロータリーのために最も良いのは何か？」という中心課題にぶつけてみて評価されるのだ。

時間の許す限り討議は常に最大限自由に行なわれる。激論がたたかわされることも決して珍しくない。しかしそのために重大な分裂が起ったためしは、私の知る限り一度もなかった。これに反して、理事会の会合、その一つのチームのメンバーとしての理事の集まりにおいて楽しんだフェローシップの経験は、私の理事としての全経験の中で最もすばらしいものの一つであった。

国際協議会という会合がある。この会合は毎年開催されるが、その目的は役員と委

員会委員長が国際ロータリーとその加盟クラブの次年度における仕事と活動について相諮ってその計画を立てることと、協議会参加者、特に次年度地区ガバナーに対してロータリー教育と管理任務についての教導、およびフェローシップの機会を与えるにある。

元理事の大部分は、過去数年間にわたってニューヨーク州レイクプラシッドで開催されたこの会合に、ロータリー世界のあらゆる地域から集まる、恐らく一千人にも達すると思われる人々の参加は国際フェローシップの極限であるという見方に同感であろう。一九六〇年五月には私はレイクプラシッドにおいてこの会合を主宰する光栄に浴した。本会議において私の行なったスピーチの中から引用した次の二つの抜萃は、私自身の考えを要約している。まず開会のアドレスの方から。

「ようこそレイクプラシッドに！　ここはかつてここに来たことのあるわれわれにとって数々の懐かしい思い出のある土地であります。そして、始めてここに来られた諸君にとっては大きな期待の土地であります。しかし、われわれすべてにとってこの土地は、世界各地のロータリーを代表するロータリアン達が、われわれ古顔がその長い経験から、あらゆるロータリーの会合の中で最も楽しい、そして最も稔り多き会合であると確信している会合を期待して集まる場所なのであります。」

「来る年も来る年もこの場所には新しい名前、新しい顔、新しい人々が、新しい熱意と新しいアイデアを友誼と親睦と理解の共同の貯水池に運んで来るのです。それに

もかわらずわれわれは、それらの新しいものがわれわれにとって最も大切な事柄にもたらす結果は不変であることを、毎年ここに来る前から知っているのであります。」

そして、次に掲げるのは閉会のアドレスからの抜萃である。

「かくて、われわれの多くにとって生涯の最も忙しかった、しかし同時に最も気持ちを引立てられるような一週間ではなかったかと思うのですが、その一週間もやがて終ろうとしています。やらなければならぬ仕事は山ほどありましたが、楽しいこともまた山ほどありました。」

「この国際協議会を主宰し、共に仕事をし、共に楽しみ、そして再びレイクブラシッドの年ごとの奇蹟を眼のあたりに見ることができたのは大きな喜びでありました。その奇蹟というのは、希望に満ちた、しかし個々別々の人達の一群を、密に結ばれた良き友のチームに変貌させたことを指すのです。」

「年々歳々この国際協議会は、それ自体は単純な事実であります、しかし今日全世界の人々が直面している問題に関連して考えれば計り知れない重大意義を持つ事実を立証しているのであります。」

「来る年も来る年もここに参集する人達は、諸君が今自分の眼で見られたと同じように、ここではあらゆる人種、あらゆる皮膚の色、あらゆる信仰の人々を、恐れもなく、疑いも存在しない雰囲気の中に引き入れることができるということ、ここでは支配的な衝動は得ることではなくて与えることであり、そして人々は直ちに友情とフェ

ローシップ、善意、そして誠意の気持で答えてくれるということを親しく自分の眼で見ているのであります。」

元理事の人達は皆、国際ロータリーの理事となって奉仕する特典に浴し得る人は極めて少数のロータリアンに限られているという現実を残念に思っていることを疑わない。これほど素晴らしい経験が、理事となる十分な資格を備えている人達は常に大勢いるのに、その中のほんの僅かな人達にしか与えられないというのは本当に残念なことである。

しかしながら、これはロータリーの世界における事実の一つである。そしてこの事実はあらゆるレベルにおいて常にぶつかる中心的問題の一つである。即ち、貯水池から溢れる高級人的資源を最大限に利用する問題である。

これに対する一つの解決法は国際ロータリー理事会の定数を増やせばよいと考える人達の意見に私は賛成することはできない。長い間の経験から私は、現在の理事会構成は、理事会に十分な多様性を与えるに十分な大きさであり、かつ限られた時間で理事会の仕事をしおおせるために大き過ぎもしない適当な規模であると考えている。

適度の均衡は常にこれら二つの要素に対して均等に考慮を払うことによって保たれるのである。ロータリーの基礎となっているいろいろの要素の間にこのような均衡点を見出そうとする時、正直な人々の間に正直な意見の相違があるのは避け難いことである。そしてこれらの人々がその意見を述べるのに正直であればあるほど意見の相違

は多くなるであろう。測定することのできない無形のものから起る問題に対してわれわれの集団的经验や判断を当てはめる場合には、われわれはただベストを尽くすだけである。

私の理事としての任期中、国際ロータリー理事会のメンバー二人は二カ年の任期をもって選任された。それは年度から年度にある程度の継続性を保つためであった。これら二人の中の一人は米国の五つのゾーンの中の一つから選ばれた。もう一人は米国以外の地域から選ばれた。私はその米国以外から選ばれた一人であった。

一九五一年のアトランティックシティー大会でフランク・スペインが国際ロータリー会長に選挙され、新理事会の第一回会合において私は第一副会長に選ばれる光栄に浴した。

ある方面における不満

フランク・スペインが会長の任に就いた時彼は、決定と施行を必要とする異常に困難な幾つかの問題にぶつかると知っていた。彼はこれらの問題のいずれに対しても称賛すべき勇氣と責任とをもって立ち向かい、彼自身の心の平和を犠牲にすることのために躊躇するそぶりはいささかも見せなかった。

事務局を収容する本部建物を造って国際ロータリーの本部とする問題は既に数年間

真剣に討議されていた。この問題はあらゆるレベルで研究され討議されていた。その提案は二度も国際大会に出されたが決定されるに至らなかった。討議が激化したことも一再ならずあった。討論が過熱したと考えた人々もあったかもしれない。意見は鋭く対立した。特に米国内のどこに本部を作るべきかについて意見が分かれたのであった。

一九五二年になると理事会は、当時シカゴのループ区域（今でもシカゴの中心部を走っている環状高架電鉄の区域）に借りていた国際ロータリー本部の家屋を、甚だしく増額された家賃で借家契約を更新する問題に直面した。この家屋は明らかにわれわれの目的にかなわないものであり、また新しい借家条件は、予めある程度の見当をつけ得るにも程遠い不明瞭なものであった。理事会は、シカゴに近いエバンストンにある土地を購入して、われわれの目的にかなうように設計されたビルディングをその国際ロータリー所有地に建設すべきであると、メキシコシティーの国際大会に進言することを決定した。この提言に対する反対は直ちに一部の地域に現われたのであった。

歴代の国際ロータリー財務委員会は相次いで人頭分担金増額の必要を示唆した。これについてもまた、いかなる人頭分担金の増額にも強く反対する空気が一部にあったことはよく知られている。理事会は、この問題に敢えて立ち向かうことをきめて、国際大会に対して四ドル五十セントないし六ドルの増額を提案する制定案を準備した。

米国内の一部のクラブは数年前から国際ロータリー理事会の機能について次第につ

のる不満を表明していた。ある場合には経験豊かな、信望の高い国際ロータリーの元役員から、国際ロータリー理事会は、一般に認められている民主的手続きの範囲を越えて力と権威と影響力を行使したと思われるのである。そしてこの批判は主として国際ロータリー会長指名委員会の構成と機能に向けられていたのである——指名委員会では理事会の影響力が絶大だという主張である。

原則においてはこれと同じ問題が既に一九一〇年の第一回大会で論議されたのであった。その時これら十六のクラブは、自分達のために一つの別の団体を結成したのであった。この問題はいやしくも民主的手続きによる管理に立脚している組織体であるならば、どんな団体においても避けることのできない問題である。

最初から個々のロータリークラブがこの組織体における主権単位として認められていた。最終の権限は終始クラブに置かれていた。しかし、この組織体を機能せしめるためにはクラブの権限はある程度選挙によって選ばれた管理主体に委任することが必要であった。問題の中心は、どんな民主制にあっても常に、管理主体が委任されて行使すべき権限は、どの程度まで許さるべきかという点にあった。そしてこれは今でも変っていないし、今後も変えることはないであろう。

今ここで私が取り上げているロータリー史上のこの段階における不満——少なくとも口に出して表明された不満——は、理論は別として、実際にはこの論争点だけに限られていた。国際ロータリー理事会は権力を行使し過ぎると思う人達がいる。これに

対して他の一方には、理事会は選挙によって選ばれた役職に付随する仕事を全世界のロータリーの最善の利益のために遂行しているだけだと信ずる人々がいる。そして勿論大多数のロータリアンはロータリーそのものが正しいことを確信するが故に、管理もまた同様に正しさに違いないと確信しているのである。

後に「草の根グループ」の名をもって知られるようになった運動が、定款改正論者の人達によって始められた。そして、一九五一年のアトランティックシティ大会において、ミシシッピ州ローレル・ロータリークラブは、「国際ロータリー会長を指名し選挙するためにもっと民主的方法を規定する」制定案を提出したのである。

規定審議会と大会における討議の結果、次の通り決定された。

「制定案五一―七は撤回されたものと見做す。しかしその代り、次期国際ロータリー会長は七人のロータリアンから成る委員会を任命して国際ロータリー会長指名委員会をもっと代議制的なものとする計画を案出し、そして、採用の暁にはこの七人委員会の案出した推奨計画を実行に移せるような制定案を準備するものとする。」

フランク・スペインのリーダーシップの下にこのアトランティックシティ大会の指図は、文字通り実行された。しかしながら、理事会はその新しい制定案に盛られたような改正には反対であったので、万一メキシコシティ大会が現行制度を変えることに賛成する場合に備えて、右に替るべき代りの制定案を提出することにきめた。

理事会はまた国際ロータリー理事会全員の任期を二年とする制定案を提出すること

をきめた。これもまた議論の対象になる制定案である。理事会はこの提案に対する賛成論も反対論も共に充分な理由があることを認めながらも、その提案している改正の長所はその短所をも充分に補い得るものだと考えたのである。

大会で審議さるべき合計二十一の制定案の中にこれら四つの論争的になる案が含まれているので、討議は爆竹のように激しくはないとしても、火花を散らして激論されること間違いなしと予想された。

テネシー州ナッシュビルは不満の中心であると認められていた。それで、フランク・スベインが、大会の開かれる少し前にそのナッシュビル市で開催される地区大会に会長代理として私を任命した時、会長も私も共に、興味ある経験が私を待っていることを承知していた。私の旅行経験から私は、場所というものはそこに関連する人——それもしばしば特定の人——と結びついて考えられがちなものであることを教えられていた。そんな訳で、始めて行く所ではあるが、ナッシュビルは私にとって既にウィル・メーニアーであった。そして今でもそうである。真に偉大なロータリアンとしてのウィルに対する私の評価はそれほど強烈だったのである。

大会の始めから終りまでメイと私は、終始快くもてなされ、くつろいだ気持ちにさせてもらい、そしてテネシーのこれら良き人々と打ちとけることができた。これはロータリーが善意を創造する建設者であるという証左である。大会の討議では終始理事会の機能のあり方に対する強い批判の底流が明らかに認められた。しかし、私が現職の

第一副会長であつたにもかかわらず、私個人に対して不協和音が發せられたことは一度もなかった。

メイと私はイースター・サンデーを、ウィルとルスとともに彼等の家庭で過した。その雰囲気は典型的な米国南部のもてなしであつて、まず幾組かの地元ロータリアンの夫妻を陪賓に招いての朝食会に始まつた。南部の伝統に従つて「グリッツ」が食膳に運ばれた。夫人達はそれぞれの主人からは「ミス・ナンシー」とか「ミス・エリザベス」とかと呼ばれ、ご主人達はそれぞれその夫人から「ミスター何々」と呼ばれた。それは大変品位があり楽しいものであつたが、メイも私もこの風習を自分達の家庭に持ち込もうとは思わなかつた。

地元の人達が朝の教会の礼拝が終つて後それぞれ家路についた後も私共は残つて、メーニアー夫妻と楽しい一日をすごした。ウィルと私は、ロータリーファミリーの上に起つた不幸な分裂について夜遅くまで語り合つた。これは私がかねてから不安をもつて予知していたことであつた。ウィルほどのロータリー指導者が「理事会はロータリーにおいては望ましくないほど大きな権威を求め、これを行使している」ということを明らかに口にするのを聞いたのはこの時が始めてであつた。

ウィルのいうところを聞いているうちに、私の頭の中には二つの結論が浮んだ。過去へのあこがれがウィルの考え方と彼と同じように考える人達の考え方を形作る重要な要素であつたということを今でも確信している。ロータリーの「楽しかりしあの

頃”即ち、誰も彼もお互いによく知っていて、しかもトムはディックやハリーに投票するか、或いは両方に反対して両者を向こうに回して立候補するかした時代に対するあこがれがあった。

すべてが円滑に運んだ場合は、このような懐かしい”やっつけて引きずりおろす”選挙争いはまことにほほえましいものであった。即ち勝った者は敗れた者に「君は良く戦った」と言って握手し、何ら不快な感情を残さず職に就いたものであった。そして、選挙戦の間に用いられた戦術は必ずしも立派なものではなく、すべてがよく行なわれたとはいえなくても、過ぎたことを忘れ去ることは常に容易であった。

郷愁の気持はよくわかる。しかし、「榮しかりしあの頃”の、何事も自由な雰囲気

の長所を、九十カ国に拡がった今日の組織の中に如何にして保持し続けることができるのか。

ウィルの考え方の第二の、そしてさらに重要な要素は、権威——たといそれが委任を受けた権威であっても——に対する生来の、内在的な不信であった。このこともまた容易に理解することができる。古代の哲学者達からバートランド・ラッセルに至るまで、各時代の哲学者達は悉くこの点ではウィルの気持と同じである。しかし、権限の委任による以外に、どうして全世界にまたがる大組織の仕事を執り行なうことができるだろうか？

私が大会中に、権限は最終的にはクラブに帰属しなければならないという見解を明

らかにしたことを、ウィルは知っていた。しかし私は、国際ロータリーほどの規模と重要性を持つ組織の仕事を執り行なう責任を取ることを、これらの責任に見合う委任を受けている場合でなければ理事会にこれを求めるつもりはなかった。

この一線を越えては、理事会のメンバーとしての二年間私は、理事会の決定が「全世界のロータリーにとって最善である」ということ以外の理由に基づいてなされたことを一度も経験したことがない。これは紛うかたなき事実である。

ウィルは、すべての権力が最上部から下に向かって流れたヒットラーの原理の油断のならぬ影響を深く懸念していた。この原理に対する私の拒否は決して彼に劣るものではなかった。

二人はまたトーマス・ジェファーソンの有名な金言、「私は人民自身のほかに社会の最終権力の安全保管者を知らない。もしも人民が健全な思慮をもって支配力を行使するに充分なほど啓発されていないと考えるならば、その救済策はこれを彼等の手から取り上げることではなくて、教育によって彼等の思慮を満たすことである。」については完全に意見が一致していたのである。

二人は原則においては一致していたものの、特定の状況に対する原則の特定の適用については一致することができなかった。国際ロータリー理事会と会員クラブの間に、能う限りの良い平衡点を求めるためには喜んで協力するが、私の考えではこの時まで提示されていた提案はいずれも当時の情勢を改善するとは思われなかった。か

くして、国際大会において大多数が受け入れ得るような方式が出現するまでは、そつとしておくに限ると考えた。個人的に、二人は最高の友誼的感情をもって、意見の相違を認め合つたのであつた。

「非常に強力な賛成意見と、同様に強力な反対意見」

五十三カ国から七千人のロータリアンとその家族の人達が一九五二年の国際大会出席のためにメキシコシティに集まつた。この人達は、地元ロータリアンとその家族ばかりでなく、全市の人々が挙つて友好的スマイルと気まゑの良い歓待とをもってする歓迎に接した。友好の精神は決してロータリーバッジをつけている人々だけに限られたものではなかつた。

このような環境の下においては、言語は一つの問題ではあるが障壁ではない。友好的まなざしや温和なスマイルは、時としては話す言葉よりも雄弁である。

メイと私がアングス・ミッチェルと一人の日本人の友人とともにカフェにいた時、一人の小さなメキシコ人の少女が売り物の花束をお盆にのせて近づいて来た。アングスはその花束を一つメイのために買って、いかにもアングスらしく、英語が話せるかと尋ねた。彼女の答は完全にわれわれを驚かせた。「いいえ、アメリカ語だけしかできません」と、彼女は答えたのだつた。われわれが出合つた最も興味深い経験の中に

は、われわれの共通の言葉のアメリカ版に関するものが幾つかあるが、これはまた、英語と知らずに英語をしゃべるのを聞いた唯一無二の経験であった。

米国で、ある時聴衆の一人が個人的に感謝の言葉を述べようとしてやって来た。彼は私の珍しい「なまり」を聞かせてもらって大変楽しかったと私に言った。そして私がじょうずに英語をあやつるといってほめてくれた。この賛辞は、彼が続いて私に、私の国の学校では必修科目なのかと尋ねた時にはいささか逆の結果になったかと思えた。私は、たしかに必修科目に相違ないと答えた。そして私はさらに彼に、米国では英語を必修科目にするについては何か真剣な検討が加えられたことでもあるのでしようかと尋ねる誘惑を押さえることができなかった。

われわれは、同じテーマのもっと奇抜な変種にぶつかった。それはメインテーブルについていた婦人の中の一人がメイに、われわれは米国に来る前から英語を話していたのかと尋ねた時である。この時も私は、全聴衆に向かってそのような質問を受けたことを話し、そして、それに対する答は然りであってわれわれは二人ともこの国に来る前から英語を話していた、しかし、ニュージーランドに帰る時になってもまだ英語を話しているかどうか少し心配になってきたと告げる誘惑を押さえることができなかった。

このような事態は、逆の場合はそんなに興がってばかりもいられない。そしてそんな場合も決して珍しくないのだ。一九四八年に私は国際ロータリー会長から招請を受

けて、会長代理としてフィリピンの地区大会に出席した。私は言葉の障壁を慮って、それについて用心深い質問をした。それに対して返ってきた答は、フィリピンは英語に基づく教育を国の制度としている世界第三番目の人口を持っているということを聞かされて私は恥ずかしい思いをした。誰かがいみじくもいったように、このような経験はうぬぼれには痛棒を食らわすが、精神にはためになる。

アーサー・レグーが会長を勤めていた時、彼は困難を逆に有利に利用した。彼はフランス系のカナダ人であったが、完全に仏英両語を話した。しかしそれでも、時によると英語で自分の考えを言い表わすのが困難であるかのようなふりをする方が、人生を楽しい、ユーモラスなものと考えている彼にとって都合のよい場合があった。例えばミシシッピという土地の名前やスタティスティックスという言葉が四度も五度も発音しようと試みて聴衆を笑いこけさせることができた。

アーサーが好んで人に聞かせる話は、彼が国際ロータリー会長として、バリ・ロータリークラブを公式訪問した時の話である。彼はとうとうフランス語で思う存分しゃべることができることになったと言った。ところが、あいにく彼は、ちょうど英語でもアメリカでは幾分感じの異なった新しい意味を加える言葉があるように、フランス語でもカナダでは若干の変化を生じていたという事実を忘れていた。

アーサーは、演説の結びとして次の言葉で話を終るのを得意としていたと言った。

「神が、あなた方の一人一人を保全し（註、守護せられんことを）。ところがこれに

対する聴衆の反応があまりにも意外なのに彼は面食らったのであった。司会者は彼にこう言った、「アーサー、あなたがどんなつもりでああ言ったかはよくわかっているつもりです。しかしあなたが言ったことは、『神が、あなた方一人一人を漬物にして保存せられんことを』という意味になるのですよ」と。アーサー・レグーは、その余りにも短い、しかし情け深い生涯を通して多くの人々に歓呼としあわせをもたらした。（註。Preserve 保存するとか保全するという意味だが、同時に塩漬にするとか漬物にするとかいう意味もある。）

友好的な都市における、親睦と友情の全体的雰囲気にもかかわらず、立法の問題に關して反対派であるグループの代表者として行動しているわれわれの中の一部の人間にとっては緊迫した不安な時が幾度かあった。次に掲げる公式記録の抜萃はその間の消息を窺うに足るであろう。

「制定案五二―五（指名委員会）は討議の対象となった。総勢二十九人の審議会のメンバーがこの討議に参加した。これは審議会メンバーの多くが、賛成または反対の強い主張を持っていた案件であった。これらの人達は持てる限りの力を尽くしてその主張を述べた。しかし司会者の巧みな司会と、各メンバーのフェアプレーと正義の精神のお蔭で、一部の人々が懸念したような猛烈な爆発的論争は実現しなかった。これはロータリアン達は手続きについて意見を異にしても人身攻撃に走らず、ロータリーの高い水準を堅持することができるとを如実に示したものであった。」

兩派の見解を隔てる溝の実体は、ウィル・メーニアが、手続きの変更を要求するについて責任のある一団の代弁者を勤めることを承諾するに至って歴然としてきた。

ウィルの顕著な奉仕とその全生涯にわたるロータリーの大義に対する献身とは、この討議に参加する者すべてが等しく認め、尊敬しているところであった。

大会におけるウィルの演説の要点は、大会議事録から抜萃した次の一節に明らかに示されている。

「私はこのグループの一員ではないが、多分に哲学的な理由と、この特定の制定案そのものよりもっと遙かに基本的な原理に基づいて、このグループの人達を全面的に支持する者であります。私は、諸君の多くがご承知のように、全世界にはびこる全体主義の台頭に対して、他の何ものに対するよりも深い関心を持っているのであります。」

「何年か前、私が国際ロータリー会長であった時に私はヒットラーの『マイン・カンプ』を読みました。そしてその本の中で指導者原理に関する章を読み、彼が指導者原理をピラミッドの形で図示し、その頂点にフューラー、即ち指導者を置き、人民をその底辺に置いて、そしてこのピラミッドの底辺からは何一つ取り柄のあるものは出てこない——それは人民は自らの欲するものを知らないからだ、と述べるのを読みました。人民は非能率的である。すべて良きもの、効果的なものは頂点に立つ指導者から与えられなければならないと、彼はいうのです。」

「個人的には私は民主主義者であります。私は、良きものはすべてピラミッドの底

辺から来ると信じているのです。そしてわれわれが自由とその他すべてのものを保持するためには、私共は、民主主義を二部（二党）から成り立つようにしておく必要から起る非能率は辛抱しなければならないと信じております。」

「それ故に私は全体主義体制に向かうあらゆる傾向に反対するのであります。しかし、それでもなお、民主主義の国々においてすら、知らず知らずのうちにわれわれは全体主義的理念の衝撃の影響を蒙るのであります。」

ウィル・メーニアーは原理を説いた。他の発言者達（ミシシッピ州ローレルのアル・ブラシによって率いられた）は、メーニアーの主張を支持して、大会に提出されている立法案に関連してこの原理がどんな実際上の意味を持つかの詳細について各論を述べた。

ウィル・メーニアーとその支持者を向こうに回して反対したのは米国イリノイ州モリスのウェイン・グラームと英国セント・パンクラスのアーサー・モートイマーであって、二人とも理事会のメンバーであった。この二人に続く者の中にはウルグアイ国モンテビデオのホアキン・セラトサ・シビルスと米国オハイオ州クリーブランドのA・Z・ペーカーがいた。二人とも、元理事であり将来国際ロータリー会長になった人である。A・Z・ペーカーはその基調を次のように述べた。

「諸君の事業会社においては、ロータリーにおけると同様に、いわばそのメンバーである株主が取締役会（理事会）を選挙してこれに業務執行の責任を委ねます。諸君

の会社の取締役会は、個人的資格識見に基づいて社長を選挙するのであって、その人の政治的人望によって選挙するものではありません。」

「国際ロータリー理事はこの偉大な組織の会長を選ぶための指名委員会のメンバーを勤めるだけの、十分な信頼するに足る資格を備えていることは申すまでもありません。いわんや、指名委員会の選ぶ候補者以外の別の候補者を指名する権利が各個々のロータリークラブにも与えられることが明文をもって定められているにおいてをやであります。」

司会役員としてフランク・スペインは頗るきちようめんで、この提案に対して賛成であるとも反対であるともその意見を明らかにしなかった。しかし情報を提供するという意味で彼は大会の席上において、前回の国際大会によって指示された通り、七人委員会の報告は全世界のロータリークラブ宛に既に発送されたということを通達した。そして六つの回答がこれに対して寄せられた。コメントの必要は無用だった。クラブは挙って理事会反対に結束していると主張していた人々にとってそれは壊滅的打撃であった。

この討議に対する私自身の寄与は理事会側として討議に終止符を打ったものであったが、その内容はかつてウィル・メーニアーの家で彼と交わした会話の中で私が用いたのと同じ議論であったが、次に掲げる抜萃に見られるように、より広い論争点に触れたものであった。

「よく考えてみると、今回のこの討議において、理事会の権力については語られ過ぎ、理事会の義務については語られ足りなかったと思います。その義務というのは国際ロータリーの定款細則に明確に規定されておりますが、ロータリー独特の特色を保全することは理事会の主要義務の一つであります。」

「私が代議員諸君に訴えたいのは、今われわれの前に提起されている諸問題を、できる限り広い視野に立って検討しなければならないということです——国際ロータリーの見地から、或いは全世界のロータリーという見地から、さらには何がロータリーにとって最善であるかという視野に立って検討しなければならないということです。個人、クラブ、地区、或いは国際間の各レベルにおけるロータリーは、それぞれ独特の特色を持っております。しかし私の考えでは、これらいろいろの特色の中でも最も重要な、最も意味深い独特の特色は、全世界各国のロータリアンの脳裡に築き上げられた、真に国際的なこの組織に対する衷心からの忠誠であると思います。」

「ロータリーに身を置くためには、まずその人が自分の国の忠誠な、奉公の市民であることが前提とされています。しかし、ロータリーに対するこの忠誠心は、国に対する忠誠心にさらに加えられるべきものであります。それは国境を超越する忠誠心であります。国際理解、国際親善、国際信頼と国際協力を示している、この独特の実例を保全するために、人力の及ぶ限りの最善を尽くすことは理事会の、そして、私は敢えて申しますが、この大会にご参加の全代議員各位の、明らかな義務であります。」

す。私共は合意の範囲を拡げるように時間と努力を費やすべきであって、不一致の範囲を拡げるために時間と努力を浪費すべきではないと考えます……。」

「私は、国際ロータリーの会長指名の新しい方法として提案されているどの案についても、これを採用すればどんな利点があるかを説明した人は誰もなかったと申し上げたいのです。これ以上時間と努力を空費しないで、このすばらしい国際集会によって与えられた、われわれみんながわれわれの既に持っているものを保全するために全力を尽くすこの絶好の機会を逸せず、建設的方向に思考を向け直すことにしてはいかがでしょうか？ われわれはロータリーのプログラムを推進することに向かって思考をこらすべきであります。とりわけ奉仕の第四部門によって、即ち、国際理解と善意と平和の推進であります。われわれがこの絶好の機会を持っている今、ここでこれをやろうではありませんか」

立法手続きの欠陥が強調された

本大会において議せられた立法案件は二十一件であったが、規定審議会においても、大会の議場においても、討議はもっぱら理事会の機能、とりわけ国際ロータリー会長の指名と選挙に関する問題を中心に行なわれたのであった。この問題に関心を持つすべての人々の間には、この問題を一種のテストケースだと考える暗黙の諒解ともい

えるものがあつた。大会の議場における討論は七時間二十五分続けられた。これは當時においては本会議における長時間継続審議の記録としてロータリー史上最高であつた。

猛烈な花火的爆発こそなかったものの、地下に隠れた熱気というものは相当なものであつたことが時々あらわに認められた。私は、理事会に関して活発な討論が行なわれていたある時、フランク・スペインがこう言ったのを覚えてゐる。「鉦澤が燃え尽くして真理の純金が出現することを期待できるのはひとえに討論の熱気によるのだ」と。メキシコシティにおけるこの立法会議の時私はフランクに、「今日の金の生産高は平均以上に違ひないよ」と言つた。

さもあらばあれ、理事会の出した提案や理事会が賛成した提案は、細目に至るまで悉く大会によつて採択された。ロータリーにおいては当然のことではあるが、理事会に反対した人々もこの結果をいさぎよく受け入れた。実際、手続きの点で反対各派の間に協力と妥協がなかったとしたら、膨大な量の立法案件を限られた時間内に処理しおおせることは物理的に不可能であつたであらうといわなければならない。

立法手続きに内在する多くの欠陥が、これに参加した人達にも、また単に傍觀し傍聴していた人達にも認められた。公式記録はこの立法会議が次のようにして閉会したと記している。

「ハスペイン会長、諸君、もし司会者が諸君の眼に少々強情に映るか或いは氣短に

見えるとしたら、どうか許して頂きたい。司会者にとって大変な仕事でした。私は重ねて諸君に申し上げますが、われわれはぜひともロータリーの立法手続きをなんとかしてもっと単純化しなければなりません——諸君が会長を二、三人殺すのがいやならば……………」

第一副会長として私はフランク・スペインがそう言った時全く彼と同感であった。そしてその後私自身同じ茨の道を歩いた者として、私は二十年後の今日でも依然として同じ考えである。

国際ロータリー会長としてフランク・スペインは全世界のロータリークラブに公式報告を提出した。次に示す簡単な抜萃は特別の重要性を持っている。

「会長は今年管理上の仕事を一つ行なった……………常設委員会および事務局職員の助力を得て、会長は過去数年間その草案作成のため苦心されてきた立法案を全部処理しようと努めた。理事会はその中の十件を承認してこれを規定審議会の議事日程に載せた……………その中のあるものはここに掲げてなく、廃棄さるべきものである。またあるものは大会の議にかけられるであろう。かくして国際ロータリーの如き大組織においては、このようにしてその方針が發展して行くのである……………総じていえば、それは国際ロータリー会長がリードする特典を賦与されている膨大な数の献身的人々によって行なわれた、除草、耕作、施肥の一カ年であった」。

この会長の報告は事務長のフィリップ・ラブジョイの公式報告によって敷衍補足さ

れた。彼は一九四二年チェス・ペリーが隠退した時にその跡を嗣いだ人である。この報告は、理事会、事務局、常設・特別・その他の国際ロータリー委員会、新クラブ承認、ロータリー財団、『ザ・ロータリアン』その他の雑誌、地区大会等々のレベルにおける管理について述べたものである。勿論ロータリークラブの活動にも触れていた。ロータリークラブの活動という標題の下に事務長は次のように報告した。

「優れたクラブ活動は引き続き各国のロータリークラブから報告されている。これらの活動は特定の国の必要や習慣によって種々異なるが、しかし、地理的所在場所や地方的習慣の相違にもかかわらず、ある一国で成功するロータリークラブの活動は、地球の反対側の地域社会においても同様に成功する場合が多いということは驚くべきことである。一般的に言えば、クラブは皆一つのパターンに従う。即ち、彼等はまず、欠けている仕事、為さねばならぬ仕事を探し求める。そしてその仕事を手がける。そして、多くの場合、その仕事が試験済みの、成功間違いないプログラムになった後これを地方当局や他の団体の手に引き渡すのである。」

「紙面の余裕がないので今年クラブから報告された幾千という立派な活動のほんの一部を簡単に記述することすらできない。以下ここに記すのは、種々の方面から報告されたものの中からアットランダムに取り出されたものである——教育の各段階にある学生達のために職業に関する情報を提供した、数限りない尊い目的のために資金を集めた、麻酔剤使用に反対する運動を展開した、癌と闘う連盟を組織した、貧しい母

親達に新生児用品を贈った、ボーイスカウトとガールスカウトを助成した、農村の青少年グループに種々のサービスを提供した、遊園地設備を提供した、老人の必要を充たすために奉仕した、身体障害児童を遠足に連れていき、或いは整形手術その他のサービスを施した、他国の困窮者達に食糧小包を贈った、少年少女週間を祝った、国際接触と友好を増進するために他国のクラブに書信を送った、栄養不十分な子供達に食糧を贈り、また「泳ぎを習おうクラブ」をスポンサーした、帰還兵士達の就職斡旋をした。闇市撲滅のために四つのテストの普及を計った、インターシティー・ゼネラルフォーラムに出席し、或いはこれをスポンサーした、地域社会に健康サービスを提供した」

この報告は、既に第一章で取り上げたことをさらに強調するために掲げたのである。即ち、方針に対して常に注意を怠らないことがいかに重要であろうとも、ロータリーの真の姿は、方針を理解しこれを地域社会と全世界の人類社会に対する奉仕の上に適用するロータリークラブの活動と、一人一人のロータリアンの行なう仕事の中にあるということを、重ねて強調したのである。

一九五七―五八年度の国際ロータリー会長で、ロータリーの最も賢明な指導者の一人であるチャールズ・G・(バズ) テネントは次のように言ったことがある。

「ロータリーには、長い間にいろいろのスピーカーによって描かれたたくさん絵がある——これらのスピーカーはそれぞれの信ずるところに従って重点を置いた——

しかし、それらを全部ひくくめて合成した絵——即ちわれわれがロータリアンと呼ぶ人物は、くっきりと浮彫になって前面に現われる——なぜなら、これが即ちロータリーを生きなければならぬ人だからである」と。

不満なお消えやらず

国際ロータリー理事としての私の二年間の任期は一九五二年六月に終っていた。およそ二十五年ばかり前に私が自分の家庭とビジネスを確立した短い期間を別にすれば、理事会に列していた二カ年は、恐らくその時までの私の生涯にとって最も元気づけられ最も満足できるものであろう。しかし、さらにそれにも勝る良き年が近づきつつあったのだ。二十年後の今日から振り返ってみると、その時までで起った数々の出来事は、それ以後十年間に起るべきことの準備とも、或いは序幕ともいえるものであった。

ロータリーの国際性が遺憾なく發揮されるのを眼のあたりに見る熱心な期待に燃える七千人の人達がメキシコシティーの大会に赴いた。彼等はその最高の望みを満足させられて家路に着いた。鄭重なもてなしと惜しみなき歓待とがふんだんにふりまかれた、はなやかな友好的な町に、五十二カ国から参集した友情豊かな人々の楽しい記憶を胸に抱いて帰って行った。

われわれは皆これらの楽しい記憶を共にした。しかしながら、理事会メンバーの中のある人々と、それ以外の人々で大会中理事会の提案を積極的に支持するか或いは積極的に反対するかした人々の中には、これと性質を異にする記憶と考えとがあった。大会では極めて激しい論争の的となった幾つかの案件が討議され、決定が下された。しかし、これらの問題の中には最終的に処理されたとはいえないものがあったという感じが広まっていた。

国際ロータリー理事会の通常会合では家事問題とでも分類したらよさそうな案件にかなりの時間が費やされる。つまり、日常のきまりきった管理の仕事である。そしてこれは定められた期限内に処理し終らなければならない。メキシコシティで討議されたような問題に対して満足すべき解決を見出すためにはどうしても必要な思慮深い勉強や労を惜しまない研究をするための時間はほとんど残らないのである。

このような状態の下に理事会のメンバーとして仕事をしたわれわれは、大会の前にも大会中にも、最善を尽くしたのであった。しかし、少なくともわれわれの中の一部の者は、まだやらなければならない仕事が残っていることを感じたのである。われわれがメキシコシティで成し遂げたことは、せいぜい不安をはらむ休戦に過ぎなかった。そして、どんな休戦でも休戦と名のつくものはロータリーにとって満足すべきものではあり得ない。効果的であるためには、ロータリーはロータリー自体が平和でなければならぬ。そしてそのためには、単に表面に論争がないというだけでは足りない

いのである。もしもロータリーが水平に保たれて、全世界にわたって前進を続けようとするならば、多様性の中に絶対的調和があることが不可欠なのである。

もしもこの問題を正しい釣合で眺めようとするならば、大多数のロータリアンは満足しており、今までも常にその時々的情勢に満足していたことを認めなければならぬ。国際ロータリー理事会が発した重要な通信に対して、僅か六クラブしか回答しなかったのはそのためである。また、それだからこそあらゆるレベルにおいて、ロータリーのプログラムにもっと大きな個人的関心を持ち、これに身をもって参加することを推進しようとして、多くの時間と努力を傾倒しているのである。

不活動、自己満足、現状満足等はすべて、有機体としてロータリーは発展し続けなければならぬと悟り、また組織体としてロータリーはまだ若いと考えている人々にとって憂慮に堪えない徴候である。それ故不満、とりわけそれが経験豊かな、情報に明るいそして真剣なロータリアンの間に見られる時、それはロータリーの繁栄のために生氣と氣力と関心とを示すものとして歓迎されるべきものである。すべて進歩というもの、どこかに不満があるところから起るものである。メキシコシティにおいて進歩が始まった。さらにこれに続く進歩は必至である。

「草の根」グループはその活動が続けていた。私は彼等が全ロータリークラブに送った二つの印刷した報告書をここに持っている。

これら二つのパンフレットの中、最初に来た方の最初のパラグラフには次のように

書いてある。

「ロータリーが繁栄をもたらすためには中央集権がこれ以上進展することを阻止して、クラブと地区に行動の発議権を返還するのが最善の策である。これは一九五三年三月二十八、二十九両日シカゴにおいて行なわれた「草の根」大会で、五十九クラブから集まった八十五人のロータリアンによって到達された結論である。」

そして、あとの方に次のように書いてある。

「引退した国際ロータリー事務長、チェスリー・R・ペリーは、満場一致の要請に応じてこの会合のモデレーターを勤めることを承諾した。」

二回目のバンフレットの第一バングラフには次のように書いてある。

「第二回目のロータリアンの特別大会は、一九五三年九月十二日と十三日に、ミズーリ州セントルイスで会合し、一九五三年三月二十八日と二十九日にシカゴで開かれた第一回ロータリアン特別大会で決定された案件のうちのあるものは、決議と制定案の形にして、一九五四年六月六―十日シアトルで開催される国際ロータリー大会に提出さるべきことを決定した。」

そして、あとの方に次のように書いてある。

「国際ロータリー元会長、オントリオ州フォートウィリアムのクロフ・オード・C・マッカロフは、先の要請に従って、この会合の委員長を勤めることを承諾し、そしてミシシッピ州ローレルの国際ロータリー元理事、アル・C・ブラシュは幹事を勤め

ることを承諾した。」

仮に私が納得させられる必要がある場合であったとしたら、クローフォード・マツカロフがその会合の委員長を受諾したということは、討議の対象になっている基本問題には少なくとも両面があることを私に納得させたであろうが、そんなことを納得させられる必要などなかったのであった。私は、クローフォードはロータリーの方針決定者の中でもトップグループに属する人だと常に考えていた。そして、クローフォードの貢献のすべてを知る者ならば、誰一人として私と違う意見を示すのを私は聞いたことがない。

一九五三年五月のバリ大会で、指名委員会の選んだノミニニーであったホアキン・セラトサ・シビルスが、対立候補を破って国際ロータリー会長に選ばれた。これは一九三八年に指名委員会方式が採択されて以来始めての選挙戦であったが、これは指名委員会の構成と機能に対する執拗な不満の証左であると一般に考えられたのであった。

和解

セラトサ・シビルス会長の指導の下に国際ロータリー新理事会は、その第一回会合において、「会員クラブと国際ロータリー理事会との間の関係を明確にし、かつ改善す

るための特別委員会」として知られる長い名前の委員会を任命することに同意した。

この名称はこの委員会の機能を説明している。委員長は国際ロータリー元会長、リチャード・C・ヘドケ。私は五人のメンバーの一人であった。

ヘドケ委員長はメンバー全員に手紙を書いて、既に脳裡に描いている考えがあったらそれを書面にして、委員会の開催前に提出して欲しいと要請した。それによって委員長ができるだけ事前の準備をしたいからということであった。

私はヘドケ委員長に手紙を書いて、私の考えではロータリークラブは、個人ロータリーアンに激励と援助を与えて、すべてのロータリアンが、個人的にも集団的にもより良いロータリアンになり得るようにするために存在するのだと言った。最初のロータリークラブもこの目的のために数人の個人によってこの世に生まれたのであったし、国際ロータリーも個々のロータリークラブに援助と激励を与えて、クラブが世界中の他のクラブとの交わりを通じてより良きクラブになれるようにするために存在するのだし——国際ロータリーはこの目的のためにクラブ自身が結成したものである。そんな訳だから、われわれはできる限りの手を尽くして、ロータリアンが、クラブが国際ロータリーに所属するのだと考えないで、国際ロータリーがクラブに所属するのだと考えるように仕向けなければならないと考える旨申し送った。

私はさらに委員会のために次のような四つの要項を提案した。(a)重要度第一位はロータリーの綱領である。(b)国際ロータリーの管理は、会員クラブと個々のロータリア

ンをして奉仕の理想を適用せしめることによってロータリーの綱領を推進する限りに
おいてのみ重要である。(c) 国際ロータリーの管理の基礎となっている基本原則は会員
ロータリークラブの自治である。(d) 管理の上に加えられる定款細則による制限と手続
き上の制限は、ロータリー独特の特色を保全するために必要な最少限に限られるべき
ものである。この規定の範囲内においては、国際ロータリーの方針の解決と履行は特
に地方や土着のレベルにおいて最大限の融通性が認めらるべきである。

ヘドケ委員長は、原則として私の提案に賛成であると答え、委員会はその第一回会
合で、上述の私の提案に盛られた原則を、委員会の方針の基礎として採用することを
きめ、今後委員会の討議はすべてこの原則に基づいて行なわれ、委員会の決定はすべ
てこの原則に基づいて下されるべきことを決定した。

国際ロータリーの各委員会の会合において通例行なわれている手順は、まず最初に
委員長を始め各メンバーが、かわるがわる短い発言を行なって、その委員会がロータ
リーのために執り行なうことを要請されている任務に対して各自が取ろうとしている
姿勢、態度を表明することによって始められる。

前述の第一回会合の冒頭に私が行なった姿勢表明は、要約すれば次のようなもので
あった。

「まず最初に申し上げたいことは、私は常々機会あるごとに申し上げていることが
一つあるということです。それは、米国以外にあるクラブは、米国のロータリアン各

位が国際ロータリーの発展に対して示された高邁な、寛大な態度に対して深く感謝すべきだということであります。米国のロータリアン諸君は、単に米国以外の世界各国にロータリーを与えて下さっただけではありません。この人達は国際ロータリーの管理についての支配力の大きな分け前をも、進んでわれわれに与えて下さいました。このことは実にすばらしいことでありまして、米国以外から来ているわれわれが決して忘れてはならないことであります。」

「われわれがこれから対処すべき重要な案件の一つは、国際ロータリー会長指名委員会における米国クラブの代表権の問題であります。これに対する私自身の考えは、この問題は第一に米国のクラブ自身の間で充分に検討を加えらるべき問題だということとであります。私は常々この考えを持っておりましたが、今でもこの考えは変わっていません。もしも米国内のクラブの大部分の希望が米国内クラブから指名委員会に送る代表者はゾーン別に出する権利を持ちたいということであるならば、この権利は与えらるべきものだと、私は考えます。また、もし彼等が、定款・細則の趣旨に反しない、他の何らかの方法によってその代表者を選ぶことを望むことが判ったならば、私はそれに賛成するであります。」

「われわれに決定を委ねられているその他の諸問題——それは非常にたくさんあるのですが——これらの問題については、私は人々と事柄に関する私の経験から次のように申し上げたいのであります。即ち、円熟した、理性のある人々が、共に関心を

持つ問題について相反する立場を取るとすれば、多くの場合相反する双方の意見と結論の中間に真理が見出されるのだと私は信じています。」

委員会のメンバー相互の間にかわされた手紙のほかに、個人やロータリークラブから寄せられた仲裁付託書が百十六通あった。テキサス州サンアントニオの国際ロータリー元会長、ハリー・H・ロージャースによって率いられる「草の根グループ」の代表者が四人、ある本会議に出席した。また、チェス・ペリーも、彼自身の要請によって他の本会議に出席した。

委員会の決定と勧告は十九の主要題目の下に仕分けされた。十九の所見と意見が第一の主要題目の中に掲げられた。各案件とも委員会メンバーの全員がその審議に参加した。一人のロータリアンの脳裡にロータリーの考え方の発展というテーマを刻みつけるために、私自身の示唆も述べられた。

私が明確な感触をもって受け止めたもう一つの問題は「ゾーン別諮問委員会」、「地域管理」、および「地域単位方式の管理」に関するものであった。一九四九年ニューヨークで開催された国際大会において、一つの提案が英国のロンドン・ロータリークラブから提出された。この提案の目的は、地域管理の問題に対する関心を深めるにあったが、これには国際ロータリーの管理を地方分権化する問題も含まれていた。

国際ロータリーの国際問題委員会委員長としての私は、規定審議会議長から、同審議会においてスピーチを行なうように要請された。その時行なった私のスピーチは、

要約すれば次のようなものであった。

「国際理解、善意および平和の理想を推進するためには、全世界の会員クラブ間の国際的フェローシップを保全し増進することが最も肝要であることが広く一般に認識されることが不可欠であります。そして、この全世界の会員クラブ間の国際的フェローシップというのは、国家的或いは地域的なクラブのグループに基礎を置くものではなくて、会員クラブの国際ロータリーに対する直接のつながりと、共同責任との上にその基礎を置くべきものであります」。

私はさらに、国際レベルにおいてはデモクラシーが立派に実践される例は極めて稀なのだが、国際ロータリーにおいてわれわれは、それが見事に成功した少なくとも一つの実例を見ることができるといふ私の見解を述べた。これは世界にとって貴重な実例であって、ロータリーのプログラムを推進することによってさらにこれを保全し増進すべきものである。換言すれば、私は国際ロータリーの地方分権論に反対したのである。私は一つの国際ロータリーを支持する――二つも三つもの国際ロータリーを支持することはできないのだ。結局、この提案は国際大会によって「撤回されたものと見做す」として葬り去られたのであった。

このような主張を私が堅持したために、後日論争の中心に立たされ、その結果一九五九年から一九六六年に至るまでの間、間断なくこの問題に巻き込まれることになるうとは、一九四九年には私の夢にも考え及ばないことであった。私がこの論争を誠に

遺憾に思ったことは間違いないが、さりとて、私が一九四九年にあの立場を堅持し、爾来引き続きこの立場を取り続けていることを、私は一瞬たりとも後悔したことはなかった。「……明確にする委員会」(この節の冒頭参照)は報告書の中にニューヨークにおいてなされた決定を支持する声明を含めることを、全員一致をもってきめた。

国際ロータリー理事会に報告を提出するに当って委員会全員が挙って考えたことは、多くの誠実なロータリアンの間に一部の問題について意見の相違があり、これは解決できることであり、かつ友好裡に解決されなければならないこと、そして、理事会の参考に供すべき勧告案は、もしそのまま放置すれば由々しき問題になってロータリーの進歩発展とその奉仕プログラムを甚だしく妨げられると思われる不一致や軋轢を除くするようなものでなければならないということであった。

委員会報告は、委員会の全審議の基礎となり、全決定もこれに基づいて行なわれた四つの原則(これについては既に述べた)を、その前文に掲げた。

委員会の観察と見解として列記された項目の中の最初の項目は次のような簡単な記述であった。

「ロータリーの効果はすべて一人一人のロータリアンの双肩にかかっている。問題は、各ロータリアンをいかに督励して自らを適切に教育させるかにある。」

そのあとには、もっぱらいかにしてロータリーに関する知識と理解を、この特定の目的のために設計されたクラブ活動を通じて個々のロータリアンの脳裡に培い、これ

を周知徹底せしめるかということに関連する十四の項目が掲げられていた。

このリストの中には二つの、中心的重要な持つ項目が含まれていた。

「理事会の責任と任務については、国際ロータリー細則と手続要覧の中に明確かつ適切に示されている。」

そして、

「本委員会は、事務局の機能に改変を加える勧告を行なう理由は、何ら認めることはできない。」

国際ロータリー会長指名委員会という題目（これは誰もが待望していた題目であった）の下に、次のような観察と見解が記録されていた。

「米国からのメンバーを選出する方法を定めた部分は、今では代議制度にふさわしいものとはいえない。」

「国際ロータリー会長指名委員会のメンバーを選出する方法を改めて、これをもつと代議制度にふさわしいものにするのが、国際ロータリーのために最も望ましいことである。」

「米国からの指名委員会メンバーは米国内のクラブによって選ばれるべきだとする、米国内クラブが示した感情は正当なものである。」

この記述の次には、この報告を効力あらしめるための推奨制定案が掲げられている。そして、報告書のこの一節は次のように結んであった。

「本委員会は、米国外からの意見をつまびらかにしないので、単に経済上の理由と便宜上の考慮だけから、総体的勧告を行なうことは差し控える。」

「本委員会は、国際ロータリー元理事が指名委員会委員を勤めるといふ問題については、それが予算の枠内で可能であるという条件の下に、理事会がさらに研究されるよう進言する。」

意見が鋭く対立したもう一つの問題は、規定審議会の構成と機能の問題であった。

この題目の下に報告書は、なканずく、次のように書いている。

「ロータリーが数量的に膨張するに従って、立法問題を国際大会のような龐大な集団で処理することは次第に厄介なことになってくることが考えられる。そして、全世界のロータリークラブは結局規定審議會を最終の立法機関として認めることになるであらうと思われるので、理事会は次の各項が得策であるか否かについてさらに研究すべきである。」

a 最終の立法機関としての規定審議會を規定する規則の策定（クラブの容認する方法による一般投票によって最終決定を行なう余地を残す）

b 審議會は隔年に開催する

c 国際ロータリーは隔年に開催される審議會のメンバーに対して実費を支払う。
報告書は広範囲にわたるものであった。それはあらゆる事柄を含んでいた。それはクラブとの関係における各ロータリアンの立場にも触れた。また、地区との関係にお

けるクラブ、国際ロータリーとの関係におけるクラブと地区の立場についても触れた。国際年次大会、副会長の選挙、および任期満了の国際ロータリー会長の地位のような事柄についても、観察、見解および勧告を述べた。

国際ロータリー理事会はこの報告書を無修正で受理した。そして勧告に従って、それに伴う立法案を一九五四年のシアトル大会に提出した。ただ一つの修正——それも単なる機械的修正——を行なっただけで、規定審議会はこの理事会提案を採択するよう大会に進言した。メキシコ大会の時とは打って違って、理事会提案は大会の議場において、ほとんど最小限の討論があっただけで採択された。

それは多くのロータリアンにとって、一時的仲たがいの不幸な一こまの後に戻ってきた楽しい寄り合いであった。二十年の年月を経た今日、往復文書や報告書のファイルを拾い読みしながら、ある著名のロータリアン達が自分達とその支援者達を忠誠な人々と呼び、それに反対する人々を反逆者と呼んだほど感情が緊迫していたことを回顧することは容易ではない。そして反逆者と呼ばれた人々は、ただ自分達の責任と任務を、その理解するところに従ってひたむきに執行しているに過ぎない真摯なロータリアン達の中には全体主義的傾向があると非難していたのである。

しかしながら、これらの思い出のあとには安堵感が伴う。ロータリーにおいては常にそうなのだが、これらの同じファイルの中に、どの頁もどの頁も、クロウフォード・マッカロフ、アンガス・ミッチェル、バズ・テネント、ケン・ガーンジー、A・Z・

ベーカー等々という、彼等が例外なくロータリーの基本であり、全体にわたる目的だと考えていた、善意とフェロシップと友情の保全と一層の増進をその最大の関心事だとしていた、第一級のロータリー指導者達の素朴な知恵があふれ出ているのである。

例えば、英国ウォルバランプトンの国際ロータリー元会長、トム・ウォレンの、いつに変わらぬ明朗闊達と楽しくなるような友情とがあった。そして、ロータリーのような全世界にわたる、高度に多様化された組織の管理において、最も望ましいと思われることと、可能なこととの間に均衡点を見つけ出そうと、静かに、黙々と努めている、その他多勢の人達がいたのだ。

それはロータリーがその進歩の過程において経験した幾つかの逆境期の一つであった。そして、この時もまた、ロータリーはその経験によって強化補強されたのであった。この逆境の期間によってもたらされた恩恵は現実的なものであった。その証拠は至るところに現われているのだ。

新しい責任―新しい機会

メキシコシティの大会でH・J・ブルニエ（ブルー）が国際ロータリーの会長に選ばれた。そして彼が私に、彼の代理として日本の二つの地区の大会に赴くことを求

めた時、私は喜んでこの任務を受諾した。ついながら、一九五二年当時日本には二つの地区しかなかったのに、今では二十もあるということは興味深いことである。

日本、日本の人々、および日本のロータリーの思い出は、私共の持っている数々の思い出の中で、最もはなはだしい、最高の思い出に属するものである。戦雲次第に急を告げ始めた頃政府の布告によって解散を令ぜられて後、再建されたロータリーとその活動の姿とを私が見たのはこの時が初めてであった。この経験を与えられたことに對して私は終生感謝を忘れることができない。組織としてロータリーは戦時中および戦後の短期間全く姿を消したが、アンガス・ミッチェルが確信をもって見透していたように、ロータリーの精神は、再び地元ロータリークラブにおけるフェローシップとさらに広い国際ロータリーのフェローシップとを再び楽しむことができるようになってきたこれらのロータリアンの心の中と脳裡に残っていて、ますますその力を強めていたのであった。

良き健康に恵まれていることは、一時的にもせよ、永久的にもせよ、それが失われるまでは充分にそのありがたさを知ることにはできないということは、人生の一つの事実として一般にいわれていることである。この考えは私共が日本のロータリアンとその夫人達と共に過した数週間の間、絶えず私の脳裡にあった。これらの人々は、再びロータリー家族に仲間入りしたことを狂喜していた。彼等は熱意に燃えていた。そして、熱意というものはロータリーにおいてはかけ替えのないものなのだ。これらの人

人は、日本のロータリーを、少なくとも他の国々の最高級のロータリーに負けない立派なものにしたいと、ひたむきに励んでいた。

これらのことはさておき、いなかの風物の美しさ、古いものに新しいものを混ぜ合わせる著しい才能と、地位や階層のいかんを問わず、いやしくも自分の為すべき任務に立ち向かう態度としてすべての人に共通していると思える、黙々としてその能力を発揮する姿に、メイと私はすっかり魅せられたのである。

日本のロータリーは今後ますます躍進を続けて、ロータリーの世界に対して第一級の貴重な貢献をするに違いないという確信を得て日本を去ったのであった。メイと私は日本で、一生変ることのない友情を築いたと思ったが、その後年月を重ねて、それが正しかったことを知った。私共はもう一度日本を訪れたいと願ったが、この願いは一九六一年東京大会に出席した時にかなえられた。

年月は平穩に來たり、また去った。人生は快適であった。これほど多くの喜ぶべき要素が認められたことは私にとって始めてのことであった。ロータリーに対する関心はいささかも減退することはなかった。それどころか関心はますます深まった。熟慮、瞑想、探求する時があった。私のロータリーに対する理解をもっと簡明にし、もっと明確にしたいという意識的努力をもって、読んだり書いたりすることもあった。そして、仕事をする材料には事欠かなかった。

二年連続して国際ロータリー理事会に連なり、国際ロータリーの各種委員会に連な

り、また事務局の上級職員達とともに仕事をし、国際会合において世界各地から参集するロータリアン達と交わり、また、各国の地方レベルにおけるロータリアンの活動を観察したりした経験は、ロータリーとその国際機構に対する私の知識と理解を限りなく拡大してくれた。ロータリーの正しさと、その可能性と、そしてその運命に対する私の信念はますます深められた。しかし、重要度において第一位に位するものは、一人ひとりのロータリアンによるロータリーのプログラムの推進であるという私の信念はいささかも変わることはなかった。

ロータリーの中に秘められている可能性を開発してその天命を全うするか否かは、ただ一つの要素にかかっている——それは、一人ひとりのロータリアンが、あらゆる人間関係、とりわけ国際関係における人間関係の、あらゆる面を通じて、直接或いは間接の個人的接触の場合常により友好的雰囲気を醸成するために積極的に、個人的に参加することである——ということ、従来にも増して確信しているのである。国際関係においては、それがどんなレベルにおいてであろうとも、個人と個人との接触と活動においてこれに代り得るものはあり得ないのである。

ただこのことだけによって直ちに世界を正道に載せることができるなどといったのではない。ロータリーの明確化と単純化を求めるわれわれの中にも、他のあらゆる場合と同様に、あほうに類する単純さの出る幕はないのである。不完全な世界に住む不完全な人間として、われわれは常に複雑極まりない問題を惹き起すのである。そ

れ故に政府は、国際関係の實際問題に対する實際的解決を求めようとする時、時には乗り越え難いとも見える障害にぶつかるのである。

しかし、これらの障害の性質上から、政府の指導者達は幾度となくわれわれに、ロータリーが果たすべき重要な役割があることを告げているのである。同意書や条約の中にどのように書き込もうとも、結局最も肝要なことは正確な情報に基づいた、啓発された世論に反映される平和への意欲とそれに関係する人々の正直な意図とであるというのだ。ロータリーが当然効果的に登場してくるのはこの段階、即ちこのような、正確な情報に基づく、啓発された世論が形成される段階においてなのである。

ここに好ましい世論、或いは世界の世論として脳裡に描かれているのは、時と所とを問わず、いつでもでも、可能な限り常に友好的処理方法を支持する世論、国際問題と国際的責務については常に平明な正直さを支持する世論、情報と宣伝との区別ができ、かつ敢然とこれを区別する世論、国の見解を表明する人々が正直にこれを表明しているか否かにもっぱら関心を示すような世論なのだ。

ロータリーの登場が要望されるのはここなのだ。われわれが實際上の機会の全分野を見つげるためには、これ以上先を探す必要はない。これらの機会はわれわれの生涯を通じて毎日のようにそこにあるのだ。われわれが自らそれを意識すると否とにかかわらず、われわれは毎日のようにそれらの機会を或いは正しく使い、或いは誤って使っているのだ。家庭においても、職場においても、社会生活のあらゆる面においても、

われわれは皆毎日貢献をしているのだ——貸し方の貢献もあろうし、借り方の貢献もあろう。プラスの貢献もあろうし、マイナスの貢献もあろうが——とにかく、他国の人々に向かって、われわれの個人的態度や意中を表わすことによって、国際親善と平和に対して、或いはプラス、或いはマイナスの貢献をしているのだ。

一九五六年にはシドニーにおいて国際ロータリーの汎太平洋会議が開催された。私は会議委員会のメンバーとなったが、主要演説の一つを準備するに当って私はこの章に使用した材料の大部分をその中に取り入れた。それは当時の私の考えを明らかにしたものであった。

一九五七年にはレイクブラシッドで行なわれた国際協議会とスイスのルサーンで開催された国際大会への出席があった。帰路はイタリア、フランス、英国および米国籍によった。妻と私にとってこれらの機会は、全行程を通じて、旧友と旧交を暖める楽しい再会であった。

園芸の時もあった。私の諸計画の中に占める園芸の重要度は、一九六〇年に私が主宰したマイアミの国際ロータリー大会において私が行なった主要演説の最後の一節が園芸に関する話で結ばれたという事実からも判断できるであろう。その時私の述べたことは次の通りである。

「国際協力に関連して私の知っている最も印象的な例の一つは、世界中から集められた植物や灌木や樹木が、すばらしい調和と美観をもって並んで繁茂し、花を咲かせ、

そうしてすべてがいっしょになって一つの雰囲気を作り出しているということであり
ます——その雰囲気とは、人間は最も神に近いものだとい一般に考えられていますが、
それに最もふさわしい雰囲気なのです。」

「庭園の中には学ぶべき多くの知恵がたくさん秘められています。そのような知恵
の始まりは、あらゆる最終の結果は土壤の適切な準備にかかっているという事実を知
ることです。土壤を準備し、種を播き、作物を取り入れる。そうすれば収穫は
あなたの実直な土地作業と一致するということを忘れてはなりません。」

「ロータリーにおいてもこれと同様です。われわれが収穫になぞらえているのは世
界平和と安定、みんなが友達として、また隣人として安住することのできるような、
友好的な、隣りづき合いのできるような世界です。播かるべき種はフェローシップと
友情、理解、そして、他の何物にも増して信頼であります。土壤、即ち個々のロータ
リアンの心と考え方あります。そして重要度の順序からいえば、その第一にくるの
は土壤の準備であります。」

一九五八年の終り頃、当時国際ロータリーの理事を勤めていた小林雅一は、東京ロ
ータリークラブが私の名前を国際ロータリー会長指名委員会の選考の対象として推薦
したいと望んでいることを私に伝えた。私は国際ロータリーの会長の何人かと親しく
していたので、この申し出に対する諾否の決定については、夫妻の間の完全な意見一
致の基礎の上に立って対応さるべきものであることを知っていた。任務は極めて重く、

夫妻のパートナーシップによってのみ遂行し得るものである。この基礎の上に立ってわれわれは、私の名前が一九五九年一月十九日に米国エバンストンにおいて会合することになっていた指名委員会に提出されることに同意した。

クライストチャーチのチャールズ・テイラーは、二十年間にわたって私の最も親しい友達であった。彼は私より先に地区ガバナーになったが、ガバナー指名を受諾するように私を説得した主役は彼であった。一九五八―五九年と一九五九―六〇年の二度にわたって彼は国際ロータリー理事として指名委員会のメンバーであった。そして、エバンストンから電話がかかってきた時、電話口で委員会に代って、一九五九―六〇年度の国際ロータリー会長指名を受諾するように要請したのは彼であった。それは誠にしあわせな偶然であり、しあわせなできごとであった。そしてそれは、一九五九―六〇年度にはチャールズはまだ理事会のメンバーであるという事実によって一層しあわせなできごとになったのであった。

このような電話は、毎年ただ一人のロータリアンにしか掛かってこないものであるが、それがその当人にとってどんな意味を持つかということは、そのような電話を受けたことのある人々でなければ想像もつかないことである。私自身の場合、ロータリーと国際ロータリーに対する私の気持と敬愛の念とは、私の人生にとって圧倒的に支配的な要素であったので、私は誠心誠意、他の如何なる栄誉も私にとって今回の栄誉の半分の意味もあり得ないと答えることができた。その後十四年経った今日でも私は、

同様の誠心誠意をもって、同じ声明を繰り返すであらう。

他の指名の中出で期限は三月二十日であったが、期限までにそのような指名が行なわれなかったので、私は六月にニューヨークで開催される国際大会で会長に選挙され、一九五九年七月一日にその任を引き継ぐことになった。

この年新しく採択された手続きに従って、エド・マクロフリンが同時に一九六〇—六一年度の国際ロータリー会長として選挙されることになった。これは、彼が向こう一カ年間で、理事会メンバーとして、会長の重責に対する準備をすることを意味する。つまり私は短期間の予告をもって就任する最後の会長となることになった。それはまことに短か過ぎる期間であった。その間、なすべきことは山ほどあった。

ロータリーに入った始めの頃夢想だになかった責任と重大な機会に直面した時、かつて二十年前にオークランド・ロータリークラブの会長時代にも、またその後いろいろなレベルの役目に就いた時にも、私が擁護した方針とプログラムは、今でも少しも変わっていないことが判ったのはほとんど天啓ともいふべきものであった。

時の推移、ニードの変化、或いは奉仕の機会の変遷にともなうつけ加えられるもの、取り入れるもの、或いは修正されるものはあろうが、基本的考え方にはいさかも変更はないのだ。かくて、計画とプログラムの策定に没頭すること三カ月の後、国際ロータリー会長としての私の公式メッセージの基調は次のように決定された。

「わがチームに今年度の共通目的を与えるために、そしてわれわれの考え方と活動

を、われわれの生活している新時代に適応させるための第一歩として私は、みんな力をあわせてわれわれのロータリーにおけるサービスに生気を与え、これを人格化し、もっと親しみやすい世界にするために友情の橋をかけることを提唱する。」

「劇的に、突然われわれの世界は、お互いが近隣である状態にまで圧縮された。しかし、この近隣状態は、良き人々が相会して良き友達になれるようにあちらこちらにもっともっと多くの友情の橋をかけ渡す、さし迫った必要にせまられている。人類が生き延びて世界平和と進歩のより高いレベルに到達するためには、それ以外に道はないのだ。友情の橋を築くことはロータリーにおけるわれわれの仕事である。」

一九六〇—一九七〇年

国際ロータリー組織および手続委員会の報告は幾つかの主要な変更をもたらした。

方針とプログラムは調整され、拡大された。

国際ロータリーほどの規模と複雑さを持った組織ともなれば、毎年のように決定を要する大きな問題が出てくるのは避け難いことである。進化の過程の一部として、方針と管理手続きに、何らかの、いろいろの傾向が生じてくる。そのほかに、新しい考え方と、クラブ、地区および国際レベルにおける新しい活動プログラムの中にも他のいろいろの傾向が生まれてくる。これらの傾向はすべて次から次に評価されて、取り入れるべきか、発展さすべきか、そしてロータリーの構造の中にはめ込むべきか否かを決定しなければならない。或いはまた、これらの傾向を匡正すべきか、修正すべきか、それとも排除すべきか否か、決定を迫られるのである。

そんな訳で毎年理事会の連中は、何か特別の問題、或いはいくつかの問題が、理事会の特別の配慮ときっぱりした決定とを待ち設けていることを期待しながらその任に就くのである。

一九五九―六〇年度に、このような案件の一つについて下された決定の結果、国際ロータリー組織および手続委員会と称する特別委員会が任命されて、個々のロータリアン、ロータリークラブ、ロータリー地区および国際ロータリーの機能に影響を及ぼす、組織と手続きのあらゆる面を考察することになった。

最も広範にわたる任務規定の下に、この委員会は「今日の世界におけるロータリーの効力を強化するとともに明日の世界においても引き続きその効力を維持するための方法手段を考察する」ことを求められた。国際ロータリー会長として、また同時にこの委員会の一員として私は、この委員会任命の背後にある理由とその目的とについての私自身の考えの概要を示す陳述書を用意した。次に記すこの陳述書の抜萃はその要点を示している。

「一九五〇—五一年と一九五一—五二年に理事会に列して以来私は、毎年理事会を去っていくメンバー達は、あまりにも制限された事情の下に理事としての任務を遂行しなければならなかったことの故に、失望と落胆の氣持をもって去っていくということとを固く信じていた。そこには理事会はあまりにも日常の管理に関する事柄にその時間を奪われて、探求したり反省したりする時間はほとんどない、という感情——時としては確信——がある。私の考えでは、探求と反省とは、ロータリーが前進するにつれてこれを転覆しないように水平に保つためには、欠くことのできないものである。」

「全世界のロータリーのために計画したり反省したりすることは理事会の義務であると主張することもできよう。それに相違ない。しかし、現実的には、理事会はさまざまな、広範囲にわたるその責任を遂行する必要のために、私の考えているような考察を行なう時間もなければ雰囲気にも恵まれていないという事実を認めなければならぬ。」

「既に以上のことを明らかにした以上、次のことも言っておかなければならない。即ち、それは、国際ロータリー理事会の任務の中から国際ロータリーの管理についての責任を、たとえその一部たりともはずすべきだなどという考えを抱いてはならないということである。勿論私自身そのような考えは毛頭持っていない。既に任命されている委員会はこのことを理事会に報告するであらう。」

「もしもこの委員会がロータリーの基本的特徴を探求するに際して、ロータリーの綱領とは明確に区別してロータリーの目標の問題を考察する必要に迫られることがあったとしても、私は驚かないであらう。これと同様の範疇において会員についての職業分類の原則、会員簿保持の要件としての規則的例会出席、その他これらの基本的原則から派生するありとあらゆる問題は悉く考慮の対象とさるべきものである。」

「国際ロータリー管理に関する基本方針は主要考察の対象である。私は常にロータリーを単純に保つ主張に組してきた。私は技術や技法や機構にとらわれることを避けようとつとめる。しかし、もしもロータリーを単純に保とうとするならば、技術や技法や機構はすべてこの目標を念頭に置いて設計されなければならない。そして随時これを点検することが必要であらう。」

「ロータリー財団は世界中のロータリアンから誇りをもって見られているといってもおそらく間違いはあるまい。しかし、国際ロータリーのプログラムを履行する助けとしての財団の役割については、とうの昔に明確にされていなければならないのに

いまだ明確にはされていない。一方においてロータリー財団管理委員会、他方において国際ロータリー理事会、この両者の各別の責任は既に明確にされていなければならないのに、まだ明確化されていないのである。」

「ロータリー財団の運用、特にロータリー財団フェロシッブ・プログラムに関するわれわれの経験からくる重要な問題がある。この種のプログラムは大学卒業生に対する授与に限定さるべきものであろうか？ それとも、必ずしも大学卒業生とは限らない将来の潜在ロータリアンを含むように拡大さるべきものであろうか？」

「ロータリーは、交通と通信の主要手段が馬であり、蒸気機関が主たるエネルギー源であった時代から今日に至るまでの期間に、生まれ、育って、今日の状態に到達したのである。今提案されていることは、R.I.O.P.C.(国際ロータリー組織および手続委員会)は、全世界のロータリーが現在の繁栄を続け今後さらに発展することを確実にするために望ましい、或いは必要だと思われる変革について国際ロータリー理事会に報告してもらいたいということである。われわれが最も深い関心を持っていることは、ロータリーを単純であると同時に効果的であらしめるためには、われわれはどんな組織を持ち、どんな手続き方法を持つべきであるかということである。」

会長を今までのように、任期満了後一年間直前会長として理事会のメンバーとしないうで、就任の一年前に理事会のメンバーとするように変えた新しい方法は、一九六二年までは完全実施にはならない訳であった。このことは、私の前任者、米国ミルウォ

キーのクリフォード・A・ランドールは、私が会長を勤めた年度中理事会のメンバーに残ったことを意味する。クリフはR.I.O.P.C.委員会の委員長として打ってつけの人ではあったけれども、会長として勤めた激務の一年に続いてこのような過酷な任務を引き受けることを辞退したとしても、誰も無理とは思わなかったであろう。しかし、クリフは、ロータリー運動に対する彼の典型的愛着をもってこの任務を快く引き受けたのであった。そして、彼の指導の下にもたらされた実り多きこの企ての結果は、ロータリー史の一部を飾るものである。しかしそれは国際レベルにおけるクリフ・ランドールの貢献の物語の一章に過ぎない。もしその物語のすべてが語られたとしたら、多年にわたってクリフの尽くした偉大な仕事は、全世界のロータリーに対して捧げられた個人的貢献として不滅のものの一つであることが明らかにされるに相違ない。

一九六二年三月、R.I.O.P.C.は二十四の主要勧告と、一九八四年までに国際ロータリーが達成し得る、或いは恐らく達成するであろう発展の計画案とを含む広範な報告を理事会に提出した。勧告案のあるものは、委員会がびっくりするほど速やかに理事会によって取り入れられた——例えば、全世界のロータリー管理における基本的特色と国際ロータリーの基本方針とに関する全面的再声明の如きである。

勧告のあるものは、引き続き理事会およびロータリー財団管理委員会の審議を経てのち実を結んだ。ロータリー財団に関する委員会の勧告がそれである。

勸告案第二十三号は次のように述べている。

「本委員会は、ロータリー財団およびロータリー財団フェローシップに関し次のような決定を行なうよう勧告する。

(a) 理事会はロータリー財団フェローシップ・プログラムの基本的目的を再定義して、その目的が国際理解と善意の増進にあることを明確に強調すること。

(b) フェローシップを受けるためにはその申請者は修士課程の学生でなければなら
ないとする条件を撤廃して、フェローシップは修士課程の学生だけでなく、大
学課程の学生と技術専門学校やカレッジの学生にも与えるようにすること。

(c) 理事会とロータリー財団管理委員会は、ロータリー財団の目的の枠内で国際奉
仕の企画を企てるクラブや地区に対して、財団から補助金を出して財政的援助
を与えるプログラムを真剣に考慮すること。」

新しい、拡大された財団のプログラムはこの勸告案のフォロースルーであることが
容易にうなずけるであろう。クリフ・ランドールと私は二人とも、R.I.O.P.C.
が任命された時に理事会のメンバーであった。二人は、クリフが委員長を勤めていた
時にもこの委員会のメンバーであった。そして、われわれは、この新しいプログラム
を立案していた当時二人とも財団管理委員会のメンバーであった。クリフに尋ねてみ
るまでもなく、われわれ二人にとってそれは初めから終りまで、喜ばしい仕事であっ
たことに彼も同感であるに相違ない。また、財団の方針を貫く上により広範囲の責任

を担う拡大された管理委員会の仕組みと理事会とのより緊密な連絡の下に、財団のプログラムは、われわれの最も楽観的な希望さえも越える発展と拡大が続けていることを知るのは、それに劣らず喜ばしいことである。それから十年の後に、管理委員長の R I 元会長ルサー・H・ホッジスがヒューストン大会で次のように報告することができようとは、一九六二年にはわれわれの中で誰一人として夢想だにするものはなかった。

「今年もまた生長と成就の年でありました。

今年もまたわれわれは新しいプログラムを始め、古くからのプログラムを拡大して、全世界の青年達に七百を超える供与を行いました。そしてロータリー財団に対する寄付金はこれまでの最高に達したことを報告できることを誇りと致します。私は管理委員会とロータリーに代って皆さんに感謝します。そして、全世界の皆さんと皆さんの協力者達に、皆さんのなさったことに対する感謝を捧げます。」

「この会計年度中にわれわれは、三百万ドルを超える寄付金を財団のために受け取ったことを報告致します。(拍手) この三百万ドルの中には、一人当り一千ドルのポール・ハリス・フェロー一千人を含んでおります。これは合計百万ドルになります。(拍手) これは誠にすばらしい一言に尽きます。そしてわれわれは嬉しくてたまらないのであります。」

「今から五十五年前に米国ミズーリ州キャンザシティ・ロータリークラブの寄

付した米貨二十六ドル五十セントが、百四十九カ国の一万五千を超えるロータリークラブの支援によって数千万ドルの投資にふくれあがったことは、ほとんど信じ難いこととであります。」

「ロータリー財団は毎年、各国の人々の間に理解と友好的関係を増進することに関心を持つ若者達に対して、国際的に勉学するための学資供与を行なっております。」

「財団が現在行なっているプログラムの一つ一つに対して一瞥を加えて見たいと思います。」

「まず修士課程フェローシップ——一九四七年以来ほとんど三千二百人の男女がこのプログラムの下に外国で勉強致しました。技術訓練供与——このプログラムは一九六四年に始められて、今日に至るまでに二百六十七人の若い職人と技術者がそれぞれその勉学分野で訓練を受けました。これは特に開発途上国からの技術者その他に適したものであります。」

「ロータリー財団の五十周年に当る一九六七年には、大学課程の奨学生プログラムが発足しました。年齢制限、教育資格、および婚姻関係を除けば大学院課程のプログラムとほとんど同様で、既に二百九十名の男女に供与が与えられております。」

「全世界のロータリー地区はすべて、以上三種類の供与の中のどれか一つを割り当てられる資格があります。これに加えて財団管理委員会は、特にめざましい貢献を行なった地区に対して追加割当てを与えることを過去三年間実施して参りました。今年

は全世界で一〇八のロータリー地区が、合計一六四の追加教育供与の割当てを受けました。皆さんの地区もこれを受けられたことを祈っております。この追加割当ては、寄付額が増加するに従って増加するのであります。」

「大いに喝采を博したもう一つの財団プログラムは研究グループ交換プログラムであります。このプログラムでは、一つの国のロータリー地区から五人の実業人または専門職業人が研究を目的として他の国のロータリー地区に派遣されるのであります。次の年には、前の年にホストを勤めた国が今度は自分の方の研究グループ交換チームを、相手方の国に派遣するのであります。一九六四年以来、一七〇〇人以上の人がこの活動に参加しております。米国内には外国に在るわれわれの組み合わせ地区の数より多くの地区があります。それ故、私は、皆さんがこのことを念頭に置いて、このプログラムがもっと盛んになるようにして頂きたいと願う次第であります。このプログラムは実に効果の多いプログラムなのであります。」

「財団の特別補助金は、クラブまたは地区がスポンサーとしてその費用の一部を負担した、教育のおよび慈善的企画に対して与えられます。今年供与されたこの種の補助金の典型的なものは、セントヘレナ島から英国に行って、そこで英国の農場で働きながら農業の知識を身につけようとする二人の少年の渡航費用を支弁した一例であります。この企画をスポンサーしたのは英国の第一一七地区であります。」

「今年初めて、財団は心身障害者教育に従事する人達に対して二十五件の供与を行

ないましたが、私共はこの新しいプログラムが育っていくことを祈っております。」

上述の研究グループ交換プログラムはアイデアの「異花受精」の興味深い例である。このプログラムは最初にニュージーランドの第二九二地区で、一九五五年の五十年祝賀の一環として始められたものであった。地元ではROTA、即ちロータリーの海外旅行アワードと呼ばれて、財団の拡大プログラムの一環として採用される以前から既に実際面で充分に立証済のプログラムであった。

インターアクトとロータリーアクト

インターアクトは一九五九―六〇年に初めて生まれた、もう一つの大きな進展である。一九七四―七五年の国際ロータリー会長、ウィリアム・R・ロビンズは当時第一副会長であった。彼は理事会の席上で、米国フロリダ州で活動していたホイールクラブについて一度ならず、極めて熱心に話したことがあった。このクラブは、ロータリークラブがスポンサーして指導していた、高等学校の少年達を会員とするサービスクラブであった。私は、私自身それと同一ような考えが浮んでそれが脳裡にこびりついているから、この年度中にそれに似たような企画をロータリーのプログラムの一部として取り上げることの可能性について、真剣に考えてみることにしようとした。

多少ぼんやりしていたアイデアと意見は、世界各地のロータリークラブやロータリ

アンに接し、彼等の活躍に接するにつれて、やがてはつきりしてきて、確信となった。

第三回目の理事会会合の時私は、アインシュタインが「われわれが生活しているこの新時代では、もしも人類が生き残って、平和と進歩のより高いレベルに上ろうとするならば、われわれは全く新しい型の考え方をしなければならぬ」と言ったのは正しかったということに、今まで以上に納得がいくようになったと言明することができた。

私は、この新しい型の考え方は恐らく、それぞれその国の市民としての新しい責任に向かって育っていく若い人達の中から出てくるであろうということに、ロータリアンの人々も同感であろうと思った。言い換えると、われわれは若い人達の中に将来に對する人類の唯一の希望を認めるのである。

同時に私は、ロータリーの中にも、何か全世界のロータリーに適應させ得るような特殊のプログラムがどうしてもなくてはならないと確信したのであった。——世界中のロータリアンの想像力を捉えることのできるようなプログラム、一万二千のクラブと五十万のロータリアンの中にみんなが渾然一体となろうとする意欲と共通の目的を育て上げることのできるようなプログラム、そして、ロータリーの最初の十字軍的精神のようなものを復活させることによってわれわれの運動に新しい原動力を与えることのできるようなプログラムが——。

かくして、この段階から先は、われわれが、青少年とロータリーの双方に相互的にたてになるような、青少年奉仕と国際奉仕の組み合わせという見地から考え始めたのは、自然の展開であった。

理事会は原則としてこれを承認し、特別委員会を任命して必要な研究を行なって理事會に報告させることになった。この委員会は五人から成り、チャールズ・テイラーを委員長として、広く全世界の代表者達が選ばれた。唯一の制限は、もしこの委員会が何らかの企画を立案して理事會にその採用を勧告する場合、その案はロータリークラブの存在する所ならばこの地域社会にも適用できるようなものでなければならぬということと、青少年との提携協力という考え方に立脚するものでなければならぬということであった。

手続要覧から引用した次の二小節によってこの案の成り行きがわかるであろう。

「理事會（一九六一—六二）は『ロータリークラブはその自由意思に基づいて青少年クラブを結成してこれをスポンサーしてもよろしい』というプランを採択した。このプランはインターアクトとして知られている。」

「インターアクト・クラブは、大学課程に進む直前の四年間に在学中の学生をもつて構成される。このクラブ結成の目的は若人達に、奉仕と国際理解のために捧げる全世界のフェローシップに手を携えて参加する機会を与えるにある。」

方針決定の結果この企画は、外部から圧力を加えるのでなく、内部からの盛り上が

りに待つために、ことさらに「ローギア」で発足した。青少年のための奉仕ではなくて、青少年との提携協力という考え方は新しいものであった。プログラムは本質的に実験的なものであった。そしてロータリーにおいては基本として認められている限界の中で自分達自身の考え方を啓発することを奨励された場合に若人達がどのような反響を示すか、われわれ一同は興味をもって見守ったのである。

この方針が賢明であったことは、まもなく明らかになった。それから五年しかたないうちに事務総長は次のように報告した。「インターアクトは一九六六―六七年に力強く拡がった。一九六七年三月には、五十八カ国二百十五のロータリー地区に、千七百二十一のインターアクト・クラブの四万二千を超える会員がいた。十一月には六十二の新しいインターアクト・クラブが結成された——これは一九六二年十月にこのプログラムが発足して以来、一カ月間の結成数の最高である。「各インターアクト・クラブの目標は、学校と地域社会に奉仕し、全世界のフェローシップの絆を固めるために、バランスのとれた活動プログラムを企てるにある。」そしてさらに、「一九六七―六八年度中に採用されたインターアクト・プログラムの重要な新機軸は、インターアクト・クラブに少女の入会を認める規定に関するものであった。」

インターアクトから派生したもう一つの極めて重要な新機軸はロータリーアクトの創設であった。学窓を去るインターアクトー達は、サービスクラブの会員として獲得した新しい関心事を失うことを好まなかった。彼等は他の年齢階層につなぐことを提案

した。そして一九六七―六八年に「理事会は、ロータリークラブはその自由意思をもって若い成年層のクラブを結成してこれをスポンサーしてもよろしいというプランを採択した。このプランはロータリーアクトの名をもって知られているものである。」

ロータリーアクトの目的は、地域社会に対する奉仕を通して指導者としての資質と責任ある市民としての資質を養成し、国際理解と平和の大義を推進し、高い道徳的基準を認識しこれを身につけることが指導者の要件であり職業上の責任であるとしてこれを推進することにある。

このプログラムは逐次勢いを増し続けた。一九七三年二月現在では、七十カ国二百六十八のロータリー地区に、総計およそ六七、三二〇人の会員を持つ三、〇六〇のインターアクトクラブと、五十九カ国百九十八地区に総計三一、〇六〇人の会員を持つ一、五五三ロータリーアクトクラブがあった。

われわれがこれらの若人達に信頼を置いたことは決して間違いではなかった。ロータリーにおける私の数多い嬉しい経験の中でも、最も嬉しかった経験の一つは、インターアクトとロータリーアクトが、ロータリーと若人達の間の力強い提携をもって活躍している姿を見ることがである。

理事会の議事日程の中に、いつの会合でも最も多くの時間を費やさなければならぬ項目が一つあった——ひよっとすると、他のどの項目の組み合わせよりも多くの時間を——。それはGBI（グレートブリテンおよびアイルランド）のロータリークラ

プが国際ロータリーに支払うべき人頭分担金の負担額の問題と、この問題から起る国際ロータリーとR.I.B.I.(グレートブリテンおよびアイルランド内の国際ロータリー)として知られる地域単位との間の関係の全域にわたる問題であった。

この問題はクリフ・ランドール会長の時の一九五八―五九年度理事によって友好的に解決されたものと考えられる充分な理由があった。しかし、事実はそうではなかった。一九五九―六〇年度に、われわれはもっと激化された形でこの問題を継承し、残念ながらさらにこれを一九六〇―六一年度のわれわれの後継者に引き継いだのであった。

私は、既に他の章の中で述べたように、一九四九年のニューヨークにおける大会で、この問題の中に含まれている原則についての私の立場を初めて明らかにしたことがあった。私の立場は、一九五三年の「明確にする委員会」の全員一致の報告書の中でも、次の引用が示すように、再び明らかにされている。「本委員会は、国際間の理解と善意と平和の理想を推進するためには、世界中の会員クラブが、一国内の或いは一地域内のクラブのグループとしてではなく、会員クラブの国際ロータリーに対する直接の関係と責任とに基づいて、全世界の会員クラブの国際的フェローシップを保全しこれを増進することが極めて重要であるということが、広く一般に認識されなければならぬと信じている。」

私が委員の一員に加わっていたR.I.O.P.C.委員会は、それから十年後にこの

意見に賛成して、この趣旨の声明を国際ロータリーの基本方針の中に明記すべきであるということ、理事会に進言したのであった。そしてこの進言の通り実現した。

私は、既に述べたいろいろの役目にたずさわったほかに、特にこの問題を研究して報告するために国際ロータリーが任命した四つの委員会のメンバーとなった。それらすべての結果、私は一九四九年以来原則として取り続けてきた立場を、今日も取っているのである。しかし私は自分自身の意見として次のことを付け加えたいと思う。それは、国際ロータリーの基本方針声明はできる限り弾力性——特に地方レベルにおいて——を認めることを明らかに示しているが、この規定に背かない範囲内で、あらゆる原則上の事柄については、どこにあるとを問わずすべてのロータリークラブは、クラブ相互間の関係においても、国際ロータリーとの関係においても、すべて同じ権利、同じ特典、同じ責任、そして同じ義務を持つべきであるということを私は固く信じているということである。

七年の間ほとんど間断なく続けられた論争は、私の理解する限り、前述の各委員会声明や進言等の中に示された諸原則にのっとって合意に達し、基本方針声明の中に書き加えられたのである。これはまことにめでたい終結である。

全世界のロータリーのために何が最善であるかという単純なテストに照らすならば、われわれは、既に教訓を学んだのだ、このような誤解が二度と再び国際ロータリーの管理の上にかかることのないように祈らざるを得ないのである。

ロータリー財団の活動プログラムの拡大と時を同じくして他の活動分野においてもプログラムの数がめざましく増えた。どの程度、一方が他方を刺戟したかということ、人によって意見が異なるであろう。しかし、この両者が相携えてそのプログラムが拡大を続け複雑さを増して行ったことは、今日ロータリー全機構の中に見られる最も顕著な傾向の一つであることは疑いをいれない。

インターアクトおよびロータリーアクト以外に最近ロータリーのプログラムに加えられた典型的なものとしては世界社会奉仕、その他青少年指導者賞、青少年研究会、青少年功績賞、ロータリー青少年交換、学生交換、およびRYLA（訳者注：青少年指導者養成プログラム）等の名称を持つ種々の企画がある。

新しい、拡大されたプログラムの創設に責任を持つ人達は、これらの追加された活動の一つ一つが皆、個人ロータリアン達がクラブや地区の活動に身をもって参加する、新しい、拡大されたレベルを必要としていることを十分に承知しているのである。実に、個人的参加こそは常にロータリーにおけるあらゆる活動プログラムの眼目であったのである。これによって初めてロータリークラブの会員はロータリアンとなる望みが持てるのである。勿論プログラムは、周囲の事情の変化、必要の変化、およ

び新しい、種類のちがう奉仕の機会等と歩調を合わせて行かなければならない。

これらはすべて読んで字の如く理解してよい。しかし、これらの新しい展開によって必要となる組織や手続きの変改に対しては入念な注意を怠ってはならない。一九四四―四五年に私が地区ガバナーを勤めていた時、「ロータリーで使われる語彙と熟語」の用語解に地区の定義として掲げてあったのは、「その域内でクラブの集団が管理目的のために連合体を形成する、そのような限られた一定の区域に対して与えられる名称である」というのであった。その当時以来、この定義の表現には、たった一カ所、ほとんど気がつかないくらい些細な変更が加えられただけで、あとは全く同じである。即ち、クラブは今では「国際ロータリーの管理目的のために連合体を形成する」と変っただけである。しかし、現実の事実においては、地区の目的と機能の変化は、恐らく管理の全分野を通じて起ったあらゆる変化の中で、もっともめざましい変化であつたであらう。

一九六〇―六一―六二年中に R. I. O. P. C. 委員会が行なった仕事の極めて大きな部分はこの発展情勢のために捧げられた。この委員会の報告の中には次のような一節がある。

「本委員会は、その討議を通して、地区は現在形成され機能しているように、単なる管理単位ではないと認めた。それは管理のための基礎であるばかりでなく、靈感、法制、地区企画および社会活動の基礎である。」

一九六二年以来、前述の一節の中に掲げられている傾向はますます加速し続けた。直接これにたずさわっていた者の中には、それは雪だるま式にふくれ上がり続けたように感じる者さえあるかもしれない。一九四〇年代にはまだ、地区ガバナーがほとんど事務手伝いなしにその任務をやりおおせることさえできた。それは一人仕事であった。ガバナーはそのようにしてその仕事をすることを期待されていた。そして、私の知る限りそれが当りまえであった。

今私がかいて書いている時、私の前には一九七一―七二年の第二九二地区の名簿がある。そしてこれらは他の地区でも使っている名簿の典型的なものであると思う。管理計画は十四の標題の下に仕分けられている。例えば、世界社会奉仕、拡大委員会、青少年委員会等々といったように。そこには個々の任務に就いている六十九人のロータリアンの名前が掲げてある。そしてこれらの人達は皆忙しいのだ。ある者は忙し過ぎると考えているに違いない。

これらの新しい事情の重大さを国際ロータリー理事会は決して見落している訳ではない。一九六五―六六年には理事会は次のような声明を出している。

「国際ロータリー理事が時々特に推奨する、理事会の定める方法によって構成されるカウンセラーを除き、どんな方法にもせよ、いやしくも歴代地区ガバナーの権限と責任を薄めるような恐れのある、継続的な役員、機関、或いは委員会を地区に設置してはならない。」

そして、一九六六―六七年には、

「理事会は、地区ガバナーが経験あるロータリアンを地区委員会の委員長に任命することに同意し、地区委員会組織は、地区ガバナーが地区内においてロータリーのプログラムを効果的に推進するために必要だと考える範囲内の規模にのみとどめるべきであることに同意する。」

ついでながら、カウンセラー・プログラムは、多くの場合地区ガバナーの「権限と責任を薄める」因となると考えられたことが――理由の大部分ではなかったかもしれないが――一部の理由となって、一九六〇年代に廃止されたのであったことを申し添えておきたい。

これらの展開は、発展過程が活動する、稀に見る興味深い例である。地区ガバナーの任務を一人仕事と考える観念はもはや過去の遺物である。われわれの常に拡大してやまないプログラムは旧来の観念が体に合わなくなるほど生長したのである。しかし、今や振子が他の方向に行き過ぎる可能性に対する危惧の念が明らかに現われてきたのである。

一九七〇年代が日を重ね始めるに従って、二つの組み合わせった傾向は明らかに認められるようになった。その一つは、ロータリーとロータリー財団のプログラムが余りにも多様化して、われわれの財源が余りにも広く撒き散らされて薄められ、その結果これを充分効果的に使うことができなくなりはいないかと危惧される傾向である。

そしてこのような多様化のために、地区レベルにおいて、不必要に複雑な管理機構の開発を余儀なくされるのではなからうかという、もう一つの傾向がある。

一九七〇年代

観察される若干の傾向

われわれ多くの者は憂慮に堪えないのであるが、ロータリーがその上に樹立されて今日の力と安定にまで築き上げられた、その基本的特質の二つが次第に稀薄に、さらにより稀薄にされる方向に向かう傾向がある。この二つとは、会員制度における職業分類の「原則」と、もう一つは例会への規則的出席である。

基本的特質と会員制度の職業分類の原則といえば、ロータリー哲学の最もわかりにくい一面を思い起させる。そして、われわれは、ロータリーを完成させた指導者達はこの哲学をロータリーそのものを理解するための第一歩だと考えていたということ、この人達は、いやしくも原則について討議する場合にはわれわれはロータリーの性格そのものを決定する価値の問題を取り扱っているのだということを異口同音に考えたであろうということを忘れてはならない。

紀元前四百年にプラトンが、価値の問題よりむしろかしい問題はないということをわれわれに告げたであろう。もしもこの問題が一九一〇年に討議されたとしたら——そして多分それは討議されたであろうが——改革運動家と呼ばれたアーサー・フレデリック・シェルドンなら恐らく、かかわりあいのある原則はただ一つ、即ちそれはサービスの原則であると論じたであろうと、人は本能的に感じる。また、哲学者ポール・

ハリスならば、プラトンの言葉に「原則として」は賛成したであろうが、しかしフェローシップと友情の基本的重要性に関する保留条件をつけたであろうと、人は感じるであろう。管理者チェス・ベリーならば、会員制度の職業分類の原則、出席の要件、人頭分担金の均等、等々について何か言ったであろうことも疑いなくであろう。一九四〇年代のディスカッション・グループだったら、アンガス・ミッチェルは満場の人々に、ロータリーの基本は精神的価値だということを忘れるなど言ったであろう。そして一九五二年ウィル・メーニアーなら、草の根グループの代表として、民主主義的手続きの重要度の順位を、第一位ではないとしても、それに近い所に置いたであろう。このようにして続けられとどまる所を知らないが、国際ロータリーの元役員ならば誰でもその人自身の考えを思考の要素として提供する種に事欠くことはないであろう。

このような討議をする場合にわれわれが忘れてならないことは、科学であろうと宗教であろうと、或いは政治であろうとその他何であろうと、文化的人生のあらゆる面には、各々この複雑な問いかけに対するそれ自体の特別の答があるということである。ロータリアンとしてわれわれが関心を持つのは、ロータリーと直接関係を持つ原理であり、価値であるのだ。そしてまた、人々と直接関係を持つロータリーの活動であるのだ。われわれはプラトンその他、古きも新しきも、すべての哲学者に脱帽しなければならぬ。しかし、われわれの特別の目的にとっては、ポール・ハリス、クロ

ーフォード・マッカルフ、アングス・ミッチェルその他過去および現在のロータリーの指導者の、記録に残っている見解、理念、および信念の総合計こそは今日のロータリアンにとっても、将来のロータリアンにとっても、われわれの求め得る最良の道しるべである。

ロータリーの多様性を考えると、このような極めて複雑な問題について、ロータリアンの考えが一つにまとまることを望むのは非現実的であろう。しかし、われわれ個々の感情や信念が如何に甚だしく相違しようとも、ロータリーのような運動には、その性格を決定する不変の原理というものがあるということをわれわれは知っている。そこには常に原理、特質、属性、価値、そして、規則と取りきめがあるのだ。しかし、他のすべてのものに抜きんでロータリーはそれ自身の独特の特質を持っているのである。その特質はこれら他の要素すべての混合物なのである。それは、ロータリーの創設この方ロータリーのためにそのすべてを捧げた改革運動家、哲学者、管理者、その他多数の人々の特質を集積した力を含んでいるのである。

人格は人間が誰でも持っている最も重要な属性である。そしてこれはロータリーという人間の集合体の性格についてもいえることである。それは限りなく貴いものである。われわれはエマーソンの言った次の言葉を決して忘れてはならない。「どんなに境遇が変わっても人格の欠陥を匡正することはできない。」

これに私がつけ加えたいのは、原理や価値を定義することがいかに困難であろうと

も、ロータリーの独特の人格の中に具現されている特質を認めてこれを理解することは、普通の知識のあるロータリアンにとって、それほどむずかしいことではないというのである。これらの特質は最も大切なものである。細心の注意をもって守護されるべきものである。断じて改変を許してはならないものである——私がしばしば引用した「何が全世界のロータリーのために最善であるか？」というテストに照らして、それを絶対必要とする場合に非ざる限り……。

このほかにもいろいろの傾向がたくさんある。国際ロータリー理事会もこのような事情を充分承知していることは、この年**ロータリーの将来委員会**が任命されたことでもわかる——しかし、この理事会の動きは、今日の緊迫した情勢が今始まったものであるとか、或いは異常なものであるとかということを意味するものでは決してない。

国際ロータリー理事会は「察知し得る傾向」とロータリーの将来については常に関心を持っていたし、今後もそうであろう。底流に隠れている問題は常にあった。将来も常にあるであろう。一九一四年のヒューストン大会で、ボール・ハリスは言っている。「ロータリーの将来は、予期される神秘に覆われている」と。

その大会において、その後今日までの六十年間にロータリーが収めた成果の、たとい極小部分たりとも期待し得た者はなかった。ロータリーには計測することのできない無形の要素が余りにも多い。しかし、われわれは、どの年もどの年も、それ以前のどの年に比べてもより大きな業績を挙げたということを確言できる。それ故、新しい

年度は常にさらに大きな前進が記録されるに違いないという期待をもって始まるのである。

一九一四年にロータリーの将来を覆った神秘は、実際の経験と業績のつぼの中で消失させられてしまった。われわれはもはやロータリーの可能性について空論や思わくや夢をもてあそんではいないのだ。一九六二年には R. I. O. P. C. 委員会の報告の一節に次のように記されている。

「この危機を孕んだ十年はロータリーの運命を浮彫りにした——半世紀かかって完成した運命を——そして、人類の福祉のために計り知れない貢献をなし得る運命を。この運命が今やわれわれの眼の前に横たわっているということは、ロータリーという有機体が、全世界の人々の間に理解と平和な関係を増進するためのより強力な力とならなければならぬことを意味する。」

「このような運命を全うする機会を持っている点でロータリーを凌ぐ組織はほとんどない。この方向に向けてロータリーほどはっきりと責任を指令する歴史と発展の記録を持つ組織はほかにはないのだ。」

国際ロータリーと、全世界一万一千の地域社会に根をおろすロータリークラブと五十万のロータリアンは、その個人生活、職業生活および社会生活を通じて、また、他国の人々との発展してやまない接触と連携によって、人々の間に平和的関係を増進するための効果的な、しかも直ちに利用できる媒体を提供することができるのである。」

「国際ロータリーはこの挑戦に応じ、前進してその天命を完成することを拒むことはできない、否、拒んではならないのだ。」

右の報告にいう十年は、今やロータリーの歴史の中の新しい一章である。さらに新しい成功と業績を記録する一章である。われわれは将来何が待ち設けているか知る由もない。しかしわれわれはただ確信をもって前進することができるということだけは、はっきりと知っている。

絶対要件の中の二つは、どんな場合でも、リーダーシップとチームワークであろう。一九一六年にレスリー・ビジョンが引用したキップリングの対句は完璧に近い指針を提供している。「狼は群れの力であり、群れは狼の力である」。もう一つ、同じ考えを表わした、素朴な対句がある。これは長い間私自身の考え方に重要な位置を占めていたものである。「それは個人でもなければ軍隊全体でもなくて、それは働き盛りの人間の尽きることないチームワークである」。両方ともその通りである。まさしくその通りである。しかしそれよりもさらに基本的なことは、狼の群れにはどの群れにもリーダーがいるということである。どのチームにも皆キャプテンがいるのだ。

ロータリーの歴史を見れば、個々のロータリアンでも、ロータリークラブの中で一団となったロータリアンでも、常にリーダーを用意して、然る後これに従い、忠実にその指導を支援していることがわかる。優れた人力を貯える貯水池は常に溢れているのだ。それだから、ロータリーがその天命に應えて前進を続けるに当って、リーダー

シップとチームワークは期して待つべきであると考えて間違いないのである。

国際ロータリーの基本方針声明は次の一節で始まっている。「重要順序の第一位に位するものは、一人一人のロータリアンがロータリーの綱領を推進することである。」そして、「ロータリーの研究がいかに多岐にわたらうとも、われわれは所詮この出発点に戻らざるを得ないのである。」

ロータリーの基本特質を述べた公式声明の冒頭の一節には、「ロータリーは、奉仕の理想の基盤の上に立って、全世界の人々の間に理解と善意と平和的關係を作り出し、激励し、育成することに関心を持つものである」と記されている。

ここにおいて、わが賢明な各ロータリアン諸君は、ロータリーはその創設の始めから、その関心は人々にあるのであって、政治にあつたのではないこと、人と人との個人的關係にあるのであって、政府との間の關係にあつたのではないこと、人間の良心と人々の心の中にある平和への意欲にあるのであって、平和の機構や技術や政略にあつたのではないことを想起されるであらう。

この活動の舞台には、われわれ一人一人が皆全力をふるう充分な余地があるのであってわれわれは、ロータリアンとして、母国の市民として、そして世界の市民として、その個人的貢献を捧げるのに誰一人として余分な者はいないのである。勿論、この厄介な世界で起る複雑な問題を悉く一人で解決することなど望むべくもないが、われわれは誰でも、少なくとも、問題の一部にならないで、解決の一部になろうと決心

することはできるはずである。そして、次に掲げる簡単な言葉を最初に言った人の精神にのっとり、どんな機会にどのようなにしてもよいから、まず手始めに何かを行動に移すことである。私はただの一人に過ぎない。しかし一人である。私はなにもかもすることはできないが、何かすることができ。その私のできることを、神の恩寵によつて、私は断固行なう。

ハロルド・T・トーマスのロータリー歴

ハロルド・T・トーマスは一九二三年にオークランド・ロータリークラブに入会した。一九三七年には同クラブ会長となり、一九四四年には地区ガバナーになった。さらに一九五〇―五一年度には国際ロータリー理事となり、翌一九五二―五三年度には第一副会長になった。そして一九五九―六〇年度に国際ロータリー会長に選ばれた。

ロータリーに奉仕する期間を通じて彼はロータリーの生成とその方針並びにプログラムの発展について独特の知識を身につけた。

本書の中には貴重なロータリー情報が豊富に盛りれており、彼はその巧みな話術によって、いかに幾多の困難が克服され、その中からロータリーの諸々の方針が生成発展したかという史実を背景として、これらの豊富なロータリー情報を読者の前に展開している。

本書の目的はロータリアンに対して、いかにしてロータリーが始められたか、そしてなぜロータリーの方針とそのプログラムが史実の示すような道を辿って、生成発展してきたかを説明しようとするにある。読者は魅惑に富む全篇を通じて、ロータリーの進化発展について重要な役割をはたした多くの人々の存在を知るのであろう。

(原著カバー表の折込みに記載)

ハロルド・T・トーマスの略歴

ハロルド・タハナ・トーマスは一九九一年ニュージーランドの北端に近い所で生まれた。彼は少年時代をフーホラ港の岸辺で過したが、そこで彼はや々と歩けるようになった頃から馬に乗ったりボートを操ったりした。彼の遊び場所は海と、まだ良く飼いが馴らされていない牛や馬を放牧している灌木で蔽われた丘陵であった。十六歳の時彼はオークランドに移って家具商を始めた。彼はいろいろのスポーツ活動にも活躍したし、第一次世界大戦には出征してフランスに赴いた。そしてその後メーブル家具商会と称するオークランドの小さな商社の支配人となったが、この商社は後にニュージーランド全域の諸都市に店舗を持つチェーンストアにまで発展した。

彼は一九二三年以来のロータリアンで、オークランドクラブの会長、地区ガバナー、国際ロータリー第一副会長、および会長を歴任した。

彼には本書の前に既に『すべては一生涯のうちに』および『遙か北の方』と名づける二つの著書がある。

(原著カバー裏の折込みに記載)

あとがき

ロータリー文庫運営委員会では、二〇〇〇年一〇月ハロルド・T・トーマス著「ロータリー・モザイク」松本兼二郎訳を復刻出版いたしましたがお蔭様で完売することが出来ました。その後も、依然として同著を求める声が多く寄せられ、このたび復刻版の増刷を行いご要望にお応えすることにいたしました。

ご高承の通り、ハロルド・T・トーマス氏は一八九一年ニュージーランドに生まれ、一九二三年オークランド・ロータリークラブに入会。会長、地区ガバナー、国際ロータリー理事を経て、一九五九〜六〇年度に国際ロータリー会長を務めました。

一九七四年（昭和四九年）「ロータリー・モザイク」をニュージーランドのロータリークラブが出版、日本では一九七七年（昭和五二年）九月一日、松本兼二郎氏の翻訳が上梓されています。

本書は、一九〇五年から一九七〇年代までのロータリー思想の移り変わりを、

各年代毎に詳細に解説しております。

ロータリーの生い立ちと、いかに幾多の難関を乗り越えて今日に至ったかと言うロータリー自体の進歩発展の物語であり、また、ロータリーの諸原則やプログラムが、何故そう決められたのか、その理由と生成発展の歴史的過程が説きあかされております。加えてロータリアンの質的成長を記録したもので、それに寄与した多くの先人の足跡が活写されております。

ロータリー文庫運営委員会といたしましては、本書の復刻版増刷にあたり一人でも多くの会員に読まれ、ロータリーの過去の歴史を学ぶ一助になれば、望外の幸せであります。

本書のご活用を切に願う次第です。

二〇〇六年一〇月吉日

ロータリー文庫運営委員会

委員長 高 窪 昭 雄

パストガバナー

出版者 ニュージーランド・ロータリークラブ。

ブ。

頒布者 G・W・ムーア株式会社、オークラ

ンド郵便局私書箱二六〇二二二号。

著者 H・T・トーマス、一九七四年

印刷者 ライト・アンド・カーマン株式会社

トレンタム、ニュージーランド。

(原著「扉」より)

訳者 松本兼二郎 略歴

一八九七年一月十六日生

一九二〇年 東京帝国大学経済学部経済科卒業

一九二〇～二二年 米国プリンストン大学留学

一九四四年 黒崎窯業株式会社長

一九五六年 八幡RC(福岡県)創立会員

一九六一～六二年度RI第三七〇地区(山口・九州)ガバナ

一九六七～六九年 RI理事

一九六九年 東京RC入会

現在 黒崎窯業株式会社 RI在日文献代行者

ロータリー・モザイク(復刻版)

二〇〇〇年一〇月一日(復刻初版発行)

二〇〇六年一〇月一日(復刻第二刷発行)

著者 ハロルド・T・トーマス

訳者 松本兼二郎

発行所 ロータリー文庫運営委員会

〒105-0011 東京都港区芝公園二丁目一十五

黒龍芝公園ビル三階

電話 〇三・三四三三・六四五六

FAX 〇三・三四五九・七五〇六

印刷 株式会社 石田大成社

Allen D. Albert U.S.A. 1915 - 1916	Arch C. Klumph U.S.A. 1916 - 1917	E. Leslie Pidgeon Canada 1917 - 1918	John Poole U.S.A. 1918 - 1919
Albert S. Adams U.S.A. 1919 - 1920	Estes Snedecor U.S.A. 1920 - 1921	Crawford C. McCullough Canada 1921 - 1922	Raymond M. Havens U.S.A. 1922 - 1923
Guy Gundaker U.S.A. 1923 - 1924	Everett W. Hill U.S.A. 1924 - 1925	Donald A. Adams U.S.A. 1925 - 1926	Harry H. Rogers U.S.A. 1926 - 1927
Arthur H. Sapp U.S.A. 1927 - 1928	I. B. Tom Sutton Mexico 1928 - 1929	M. Eugene Newsom U.S.A. 1929 - 1930	Almon E. Roth U.S.A. 1930 - 1931
Sydney W. Pascall England 1931 - 1932	Clinton P. Anderson U.S.A. 1932 - 1933	John Nelson Canada 1933 - 1934	Robert E. Lee Hill U.S.A. 1934 - 1935
Ed R. Johnson U.S.A. 1935 - 1936	Will R. Manier, Jr. U.S.A. 1936 - 1937	Maurice Duperrey France 1937 - 1938	George C. Hager U.S.A. 1938 - 1939
Walter D. Head U.S.A. 1939 - 1940	Armando de Arruda Pereira Brazil 1940 - 1941	Tom J. Davis U.S.A. 1941 - 1942	Fernando Carbajal Peru 1942 - 1943
Charles L. Wheeler U.S.A. 1943 - 1944	Richard H. Wells U.S.A. 1944 - 1945	T. A. Warren England 1945 - 1946	Richard C. Hedke U.S.A. 1946 - 1947
S. Kendrick Guernsey U.S.A. 1947 - 1948	Angus S. Mitchell Australia 1948 - 1949	Percy Hodgson U.S.A. 1949 - 1950	Arthur Lagueux Canada 1950 - 1951
Frank E. Spain U.S.A. 1951 - 1952	H. J. Brunner U.S.A. 1952 - 1953	Joaquin Serratos Cibilis Uruguay 1953 - 1954	Herbert J. Taylor U.S.A. 1954 - 1955